倉岳町文化財調査報告　第２集
（倉岳町史編纂事業）

棚底城跡Ⅱ

2006年

熊本県天草郡倉岳町教育委員会

発　刊　の　言　葉

背後に雄大な倉岳がそびえ、眼前の八代海に様々な形の島が浮かぶ我が天草郡倉岳町（あまくさぐんくらたけまち）は、近日中に町としての役割りを終え、新たに産声を上げる（新）天草市にバトンタッチされることになります。この大きな変革の時期にあたり、我が町の歴史を後世に伝えるために、平成13年度から５年間にわたり町史編纂事業に取り組んで参りました。

棚底城跡調査もその一環で、平成14年度から実施してきたものです。本書は、昨年度に刊行しました倉岳町文化財調査報告第１集の続編であります。Ⅰ郭に続き、今年度はⅡ郭を中心とする調査の結果報告で、特に関連調査として取り上げました城跡に隣接する大権寺比定地の石塔群は、取り分け南北朝時代の年号を持つ事で知られます。城跡の年代や城主を考える上でも貴重な金石資料であり、念入りな調査がなされました。阿蘇品保夫先生の文献からの調査も合わせ、大きな成果が上がった事を嬉しく思います。

本調査にあたっては、終始、御指導を賜った大田幸博先生を始め、調査検討委員会の諸先生方、熊本県労働雇用課など関係各位機関、地権者の方々、㈲大迫工業・㈲中村建設工業・㈱くらたけの各企業に厚くお礼を申し上げます。

平成18年３月24日

倉岳町長　稲　津　俊　徳

序　　文

棚底城跡は、平成14年度より町史編纂事業の一環として、倉岳町が調査を実施してきた天草地方を代表する中世城跡です。調査の進展とともに、岩盤を掘り込んで構築された建築遺構や全国的にも希少な茶の湯道具の石製「面取り風炉」などが発見され、史跡としての価値が高まりつつあります。

本書は、その貴重な調査成果を収めた発掘調査報告書の第２集です。同時に阿蘇品保夫先生による玉稿「大権寺遺跡と棚底城主試論」と、平成18年２月19日に行いました「棚底城跡歴史フォーラム」の記録集も収載しました。今後の史跡整備の基礎資料、あるいは天草地方の歴史研究における一助として広くご活用いただければ幸いに存じます。

二市八町による新生「天草市」の誕生を目前に控え、行政組織「倉岳町」として役目を終えようとするこの時期に、郷土教育の素材として本書を送り出すことに大いなる喜びと一抹の寂寥感を禁じえません。

最期になりましたが、本調査の実施にあたっては、調査検討委員会の諸先生方には多くの御指導・御助言を賜りました。また、地権者の皆様をはじめとする地元関係者各位に温かい御理解と御協力をいただきました。改めまして厚く感謝の意を表します。

平成18年３月24日

倉岳町教育長　蓮田　陽之介

目　　次

第Ⅰ章　調査の概要 …… 1
　第１節　調査の組織 …… 1
　第２節　調査の経緯 …… 1

第Ⅱ章　調査の成果 …… 5
　第１節　Ⅱ～Ⅷ郭のトレンチ調査 …… 5
　　〔考察１〕Ⅱ郭～Ⅷ郭の柱穴群について　　西島眞理子 …… 10
　第２節　城跡内の石垣について …… 19

第Ⅲ章　出土遺物 …… 23
　　〔考察２〕棚底城跡出土の陶磁器を見て　　大橋康二 …… 46

第Ⅳ章　大権寺比定地の石塔調査 …… 51
　第１節　調査の概要 …… 51
　第２節　石塔について …… 53

第Ⅴ章　ま と め …… 74

写真図版 …… 77

被熱した遺物について …… 95

天草の中世を探る　棚底城跡歴史フォーラム　記録集 …… 97

〔付論〕大権寺遺跡と棚底城主試論　　阿蘇品保夫 …… 巻末１

挿　図　目　次

第１図　熊本県天草郡倉岳町位置図　1
第２図　倉岳町大字棚底周辺地形図　2
第３図　棚底城跡と大権寺周辺地形図および字図　2
第４図　棚底城跡周辺地形図　3・4
第５図　Ⅱ郭トレンチ設定図　7
第６図　Ⅱ郭－aトレンチ柱穴実測図　8
第７図　Ⅱ郭－bトレンチ柱穴実測図　9
第８図　Ⅱ郭－aトレンチ建物復元ライン(推定)　10
第９図　Ⅱ郭－bトレンチ建物復元ライン(推定)　11
第10図　Ⅱ郭－aトレンチ柱穴検出状況　12
第11図　Ⅱ郭－a・bトレンチ柱穴検出状況　13
第12図　Ⅲ郭トレンチ設定図　14
第13図　Ⅳ郭トレンチ設定図　15
第14図　Ⅴ～Ⅶ郭トレンチ設定図　16
第15図　Ⅷ郭トレンチ設定図　17
第16図　Ⅶ郭柱穴実測図　18
第17図　Ⅷ郭（１トレンチ）柱穴実測図　18
第18図　Ⅳ郭平場からⅢ郭石垣を望む　19
第19図　Ⅲ郭石垣（地山産頁岩・割石）　20
第20図　富岡城跡　二の丸石垣　20
第21図　Ⅲ郭石垣実測図　21・22
第22図　富岡城跡二の丸・西側15面石垣実測図　21・22
第23図　Ⅱ郭出土遺物実測図①　25
第24図　Ⅱ郭出土遺物実測図②　28
第25図　Ⅱ郭出土遺物実測図③　30
第26図　Ⅲ郭出土遺物実測図　31
第27図　Ⅳ郭出土遺物実測図①　32
第28図　Ⅳ郭出土遺物実測図②　34
第29図　Ⅴ郭出土遺物実測図　37
第30図　Ⅵ郭出土遺物実測図　37

第31図　Ⅶ郭出土遺物実測図　37
第32図　Ⅷ郭出土遺物実測図　39
第33図　出土遺物実測図・ひき臼①　41
第34図　出土遺物実測図・ひき臼②　42
第35図　出土遺物実測図・ひき臼③　43
第36図　出土遺物実測図・ひき臼④　44
第37図　出土遺物実測図・砥石　45
第38図　棚底城跡周辺地形図　52
第39図　宝篋印塔〔相輪〕実測図　54
第40図　宝篋印塔〔相輪・蓋石・塔身〕実測図　55
第41図　宝篋印塔〔基礎座・銘文入り〕実測図　56
第42図　宝篋印塔〔基礎座〕実測図・宝塔実測図　57
第43図　五輪塔〔空風輪〕実測図　58
第44図　五輪塔〔火輪〕実測図①　59
第45図　五輪塔〔火輪〕実測図②　60
第46図　五輪塔〔火輪〕実測図③　61
第47図　五輪塔〔火輪〕実測図④　62
第48図　五輪塔〔火輪〕実測図⑤　63
第49図　五輪塔〔火輪〕実測図⑥　64
第50図　五輪塔〔水輪〕実測図①　65
第51図　五輪塔〔水輪〕実測図②　66
第52図　五輪塔〔水輪〕実測図③　67
第53図　五輪塔〔地輪〕実測図　68
第54図　宝篋印塔〔基礎座〕銘文拓本①　69
第55図　宝篋印塔〔基礎座〕銘文拓本②　70
第56図　宝篋印塔〔基礎座〕銘文拓本③　71
第57図　五輪塔〔地輪〕銘文拓本　72
第58図　宝篋印塔〔塔身〕銘文拓本　72
第59図　石塔実測図　73
第60図　板碑実測図　73

表　目　次

第１表　時期区分と出土磁器　23
第２表　出土遺物〔日用雑器〕一覧表　23
第３表　出土遺物〔陶磁器〕一覧表　24
第４表　Ⅱ郭出土遺物観察表①　26
第５表　Ⅱ郭出土遺物観察表②　27
第６表　Ⅱ郭出土遺物観察表③　29
第７表　Ⅱ郭出土遺物観察表④　30
第８表　Ⅲ郭出土遺物観察表　31
第９表　Ⅳ郭出土遺物観察表①　33
第10表　Ⅳ郭出土遺物観察表②　35
第11表　Ⅳ郭出土遺物観察表③　36
第12表　Ⅴ郭出土遺物観察表　36
第13表　Ⅵ郭出土遺物観察表　38
第14表　Ⅶ郭出土遺物観察表　38
第15表　Ⅷ郭出土遺物観察表①　38
第16表　Ⅷ郭出土遺物観察表②　40
第17表　出土遺物観察表・ひき臼　40
第18表　出土遺物観察表・砥石　45
第19表　Ⅰ郭出土遺物編年表　47・48
第20表　Ⅱ～Ⅷ郭出土遺物編年表　49・50
第21表　石塔分類表　53
第22表　銘文一覧表　53
第23表　県内中世城館跡の調査・整備状況　75
第24表　県内中近世城跡の調査状況　76

写　真　図　版

図版１　棚底城跡と大権寺比定地
倉岳山頂から望む　78
図版２　棚底城跡　航空写真　東→西　78
図版３　Ⅱ郭（トレンチ設定前）　79
図版４　Ⅱ郭トレンチ調査
（手前：Ⅱ郭－a　奥：Ⅱ郭－b）　79
図版５　Ⅱ郭－aトレンチ　80
図版６　Ⅱ郭－bトレンチ（拡張前）　80
図版７　Ⅳ郭平場からⅠ～Ⅲ郭を望む　81
図版８　Ⅲ郭石垣　南面　81
図版９　Ⅷ郭　東端部（１トレンチ）　82
図版10　Ⅷ郭　南下の帯曲輪　82
図版11　大権寺比定地（南→北）　83
図版12　大権寺比定地の石塔群　83

図版13　出土遺物〔磁器〕①　84
図版14　出土遺物〔磁器〕②　85
図版15　出土遺物〔磁器〕③　86
図版16　出土遺物〔日用雑器〕①　87
図版17　出土遺物〔日用雑器〕②　88
図版18　出土遺物〔ひき臼〕　89
図版19　出土遺物〔ひき臼・砥石〕　90
図版20　大権寺比定地　石塔群〔宝篋印塔〕　91
図版21　大権寺比定地　石塔群〔宝篋印塔・宝塔〕92
図版22　大権寺比定地　石塔群〔五輪塔〕①　93
図版23　大権寺比定地　石塔群〔五輪塔〕②　94
図版24　被熱した輸入磁器　96

〔付論〕「大権寺遺跡と棚底城主試論」　挿図・表　目次

第一図　棚底城跡位置図　3
第二図　倉岳町大字棚底・字図　3
第三図　蓮華寺跡・塔碑群配置図（移転前）　7
第四図　浄業寺境内石塔群配置図　8
第五図　大権寺比定地周辺図　9
第六図　棚底城跡と大権寺比定地周辺地形図　9
第七図　至徳元年　二見陣（南北朝末期の肥後情勢）12
第一表　天草の中世石造文化略表　4
第二表　熊本県下の南北朝期の年号銘を持つ石造物一覧表　5
第三表　天草の五輪塔・宝篋印塔の所在数一覧表　6
第四表　文書にみる天草郡諸氏の名乗り例　18
第五表－①　棚底抗争関係年表－『八代日記』－　20
第五表－②　棚底抗争関係年表－『八代日記』－　21
第五表－③　棚底抗争関係年表－『八代日記』－　22

例　言

1．本書は、平成14年度から16年度にかけて、天草郡倉岳町教育委員会が町史編纂事業の一環として発掘調査と測量を実施した中世城跡・棚底城跡の調査報告書第２集『棚底成跡Ⅱ』である。一貫して町の自主事業として取り組んだが、草木伐採や発掘調査の作業員の確保にあたり国の緊急雇用対策事業に乗った。
2．調査は、歳川喜三生が中心となって行ったが、終始、今村克彦氏（県文化財保護審議会委員）と大田幸博氏（県立鞠智城・温故創生館長）の指導を受けた。
3．出土遺物の整理は、教育委員会で行った。
4．遺構の実測、遺物の実測・拓本は、調査補助員の石工みゆきさんと溝口真由美さんの協力を得た。
5．文献調査は阿蘇品保夫氏（県文化財保護審議会委員）にお願いし、玉稿をいただいた。
6．検出された柱穴の推敲は、西島眞理子氏（県建築士会調査研究委員会副会長）に玉稿をいただいた。
7．出土遺物の輸入陶磁器については、大橋康二氏（佐賀県立陶磁文化館副館長）に指導を受け、玉稿をいただいた。
8．本書の執筆と編集は、歳川喜三生が中心となって今村氏と大田氏の指導を受けながら、石工さんと溝口さんの協力を得て行った。

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査の組織

調 査 主 体　倉岳町教育委員会
調査責任者　蓮田陽之介（教育長）
調査統括者　森田敏朗（教育課長）
調査担当者　歳川喜三生（教育委員会・文化財係長）
専門調査員　小野正敏（国立歴史民俗博物館助教授）　阿蘇品保夫（熊本県文化財保護審議会委員）
今村克彦（熊本県文化財保護審議会委員）　出宮徳尚（前・岡山市教育委員会文化財課長）
大橋康二（佐賀県立陶磁文化館副館長）　大田幸博（熊本県立鞠智城・温故創生館長）
西島眞理子（熊本県建築士会調査研究委員会副委員長）　高田尊徳（熊本県文化財保護指導員）
調査補助員　石工みゆき　溝口真由美
報告書作成　歳川喜三生　石工みゆき　溝口真由美
地 権 者　大手安喜　南川三昭　佐尾秀治　中田兼盛　稲田三男　木崎国夫　木崎一利　松本満盛
駒崎勝友　大手健三　村田喜昭　葉山勝人　垣田兵明　大手　暹　森内健二　永畑寅三
山崎只二　今森幾重　杉本一人　野首秀樹　藤本壽生　福永三千男　高田俊毅　稲田敏勝
作 業 員　山本　誠　田中孝一　葉山勝人　古野一政　高田暉尚　松本喜和　橋本彰則　稲津啓一
稲田豊人　平畑政勝　平井利和　藤本雄二　田中正敏　梅戸吉伸　山並美智子

第２節　調査の経緯

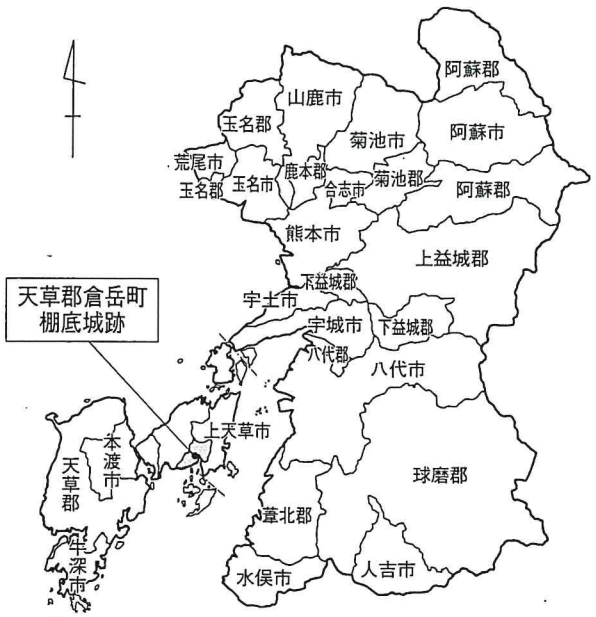
①平成14年度から16年度にかけて測量調査を実施しながら、Ⅰ郭を中心とした発掘調査を行った。その成果は、平成16年度末に倉岳町文化財調査報告第１集（倉岳町史編纂事業）『棚底城跡』で報告済みである。

②平成17年度は、城域の周辺部まで測量の手を広げると伴に、Ⅱ郭からⅧ郭まで実施したトレンチ調査の資料整理を行った。一方で、中世寺院跡と考えられる「大権寺（おおごんじ）」地区の石塔集中地を調査し、石塔の実測や石面に刻まれた年号や銘文の確認作業を行なった。

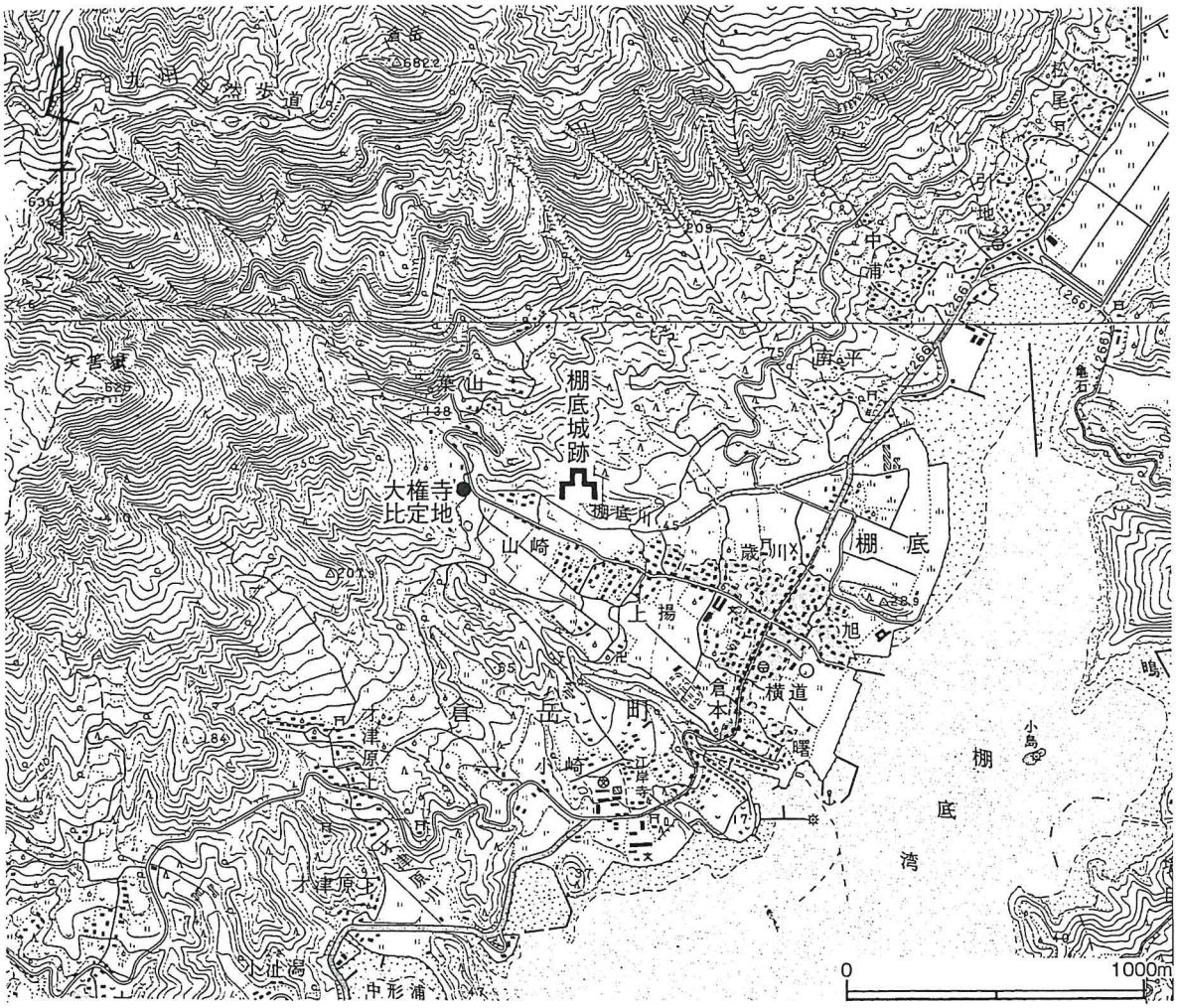
③平成18年２月19日(日)には、「棚底城跡歴史フォーラム」を倉岳町多目的研修集会施設で実施し、町内外から200名の参加があった。その内容については、本書に収録している。

④阿蘇品保夫氏からは、前年度に引き続いて「大権寺遺跡と棚底城主試論」の玉稿を賜った。

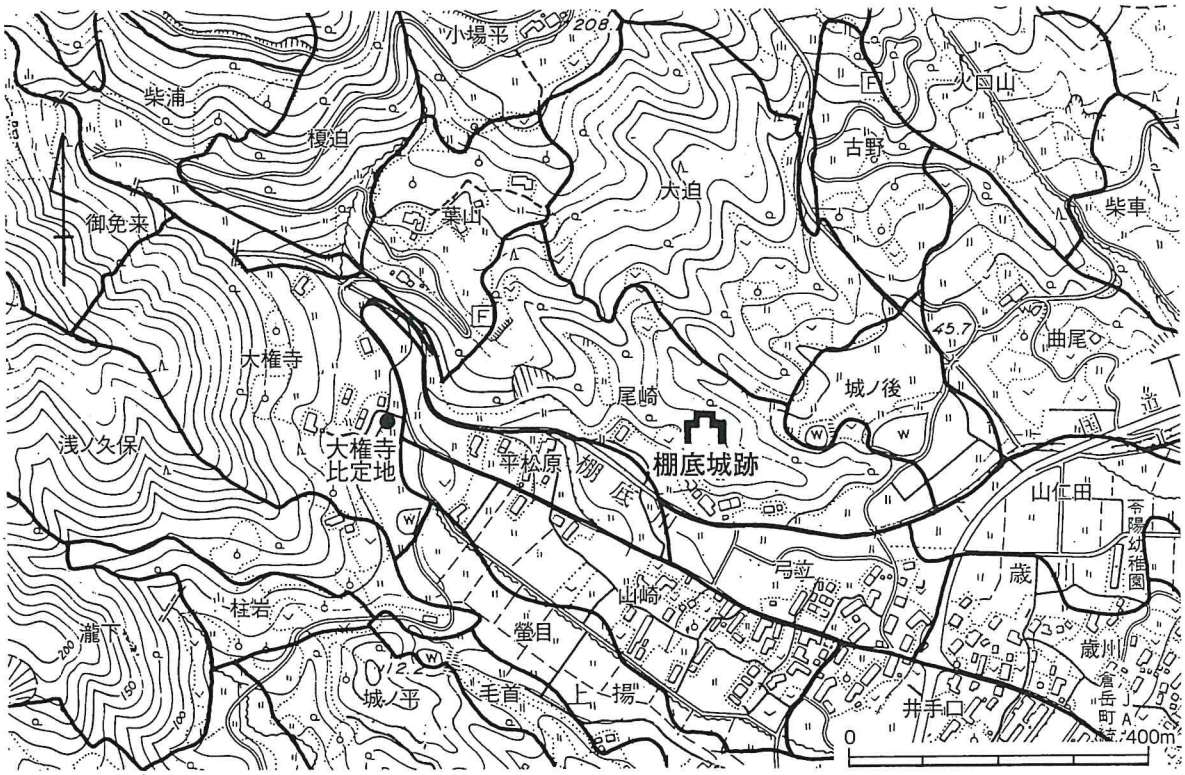
⑤建物跡の推敲は西島眞理子氏に、出土遺物は大橋康二氏に指導を受け、両氏からは玉稿をいただいた。



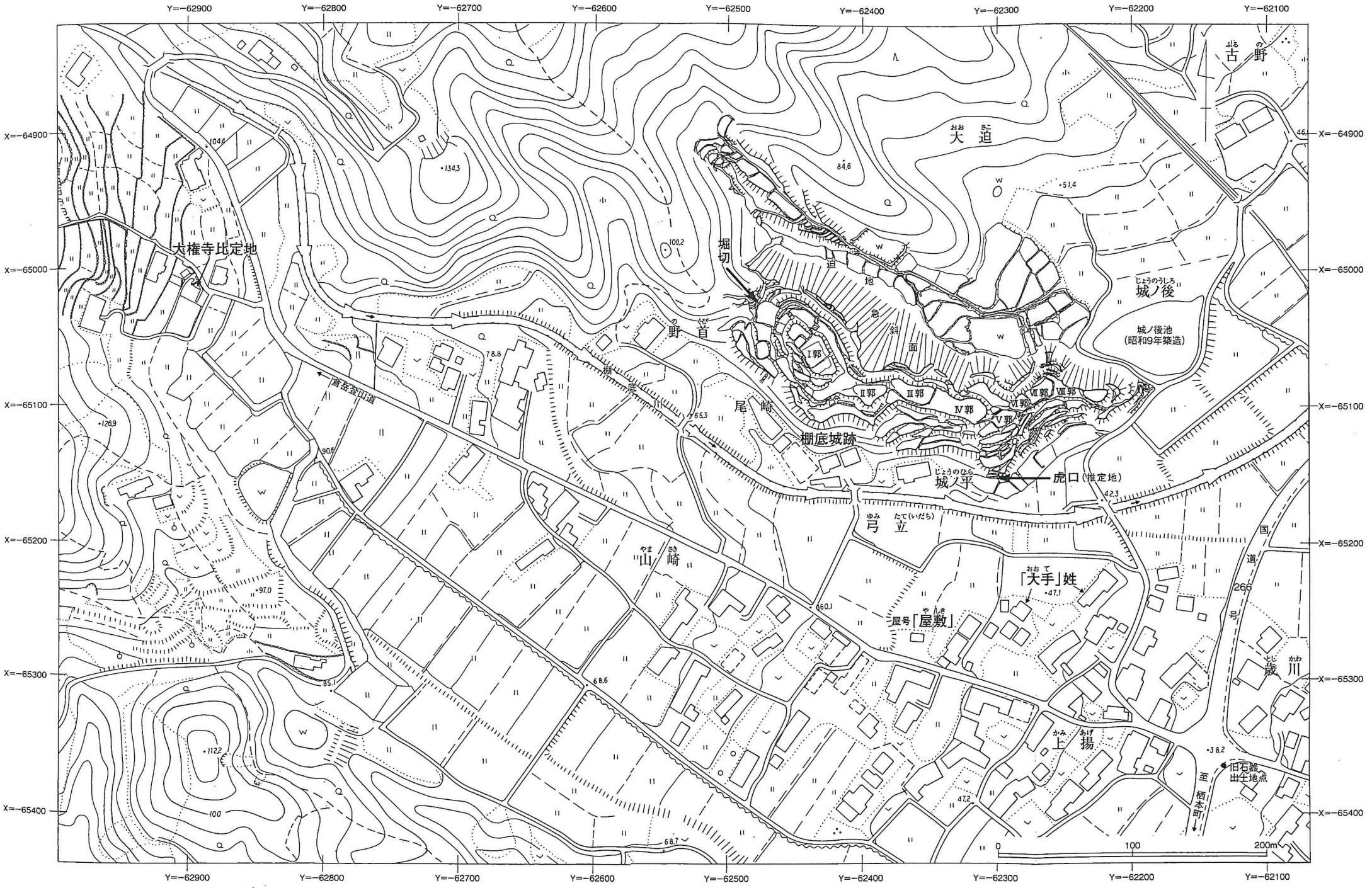
第１図　熊本県天草郡倉岳町位置図
（行政区割は、平成18年3月20日現在）



第２図　倉岳町大字棚底周辺地形図



第３図　棚底城跡と大権寺周辺地形図および字図



第4図　棚底城跡周辺地形図

第Ⅱ章　調査の成果

第１節　Ⅱ～Ⅷ郭のトレンチ調査

〔Ⅱ郭〕

①小規模なトレンチ調査から開始し、柱穴群の検出状況に応じて、徐々に調査面積を拡大した。建物復元については、調査員主導型の従前のやり方で第６・７図に見るような線引きができた。しかし、この図について建築学の西島眞理子氏は「全掘状態のⅠ郭と違い、Ⅱ郭からⅧ郭はトレンチ調査に留まっているので、判断が非常に難しい」との感想を洩らされ、10～11頁に見るような所見をまとめられた。

②Ⅱ郭－aを見る限り、柱穴群の形と密集度合いは、Ⅰ郭と全く遜色がなかった。一方で、Ⅰ郭と比較した場合、柱穴の仕上げの度合いが非常に丁寧であるとの印象を持った。特に柱穴の壁面は最後に強く横ナデされて、芸術作品のような仕上げになっているものもあった。

このことについて、調査現場では「石工集団の学習度合いの結果」ではないかと話し合った。つまり、建物の構築に際して、Ⅰ郭から工事に取り掛かり、作業の手順を進めてⅡ郭へ至ったために、岩盤に掘り込む技術が格段に進歩したという考えである。このことは、両郭の地山が、いずれも頁岩で岩質に違いがないこと、さらに両郭で技術能力の異なる個別の石工集団がⅠ郭とⅡ郭で作業を行ったとは考え難いこと、などから推察した。しかしながら、Ⅱ郭－b～Ⅷ郭の範囲から検出された柱穴は通常仕上げのもので、全般的な傾向にないとの矛盾もある。これについては、西島眞理子氏も指摘するように建物の構造の違いが主なる原因であろうと考える。つまり、Ⅰ郭とⅡ郭－aに限っては、それ相当のグレイドの高い建物を構築する目的で、同じ石工集団が、順に作業に従事していたという補充的な推論も成り立つ。その他の郭については、同集団であったが、倉庫などの建物であったために、通常の工事（柱穴の掘削）が行われたとの解釈である。ただし、建物のグレイドが柱穴の堀り方にも影響するか、という疑問点は残る。

③Ⅱ郭－aの平場面積はⅠ郭よりも狭いので、建物規模は劣るが、当然のこととして、類似の建物がⅡ郭－aで復元できるとの期待感を持った。しかし、現実は厳しく、復元線引きは非常に困難であった。

以下に記すことは、先述したように、調査員の手によって従前のやり方で試みたⅡ郭～Ⅷ郭での建物復元である。ここで、示した復元の建物や柱列は、あくまでも仮説で、参考資料である。

④Ⅱ郭－aでは、２棟の建物跡（SB01～02）の存在が考えられる。

SB01（柱穴No.1～６）：トレンチの北西隅にあって、部分的な検出に留まった。この一隅は地山が傾斜しており、柱穴の分布は疎の状態にある。桁行は２間で、長さ3.7m分。梁行は２間で、長さ2.4m分が検出された。柱間は桁行で1.7m＋2.0m、梁行は1.25m。柱穴は北側と西側に延びるものと推定される。ただし、地形的に西側への大きな広がりは考えられない。

SB02（柱穴No.７～20）：トレンチ調査であるが、この範囲では、主要な柱穴群が、ほぼ検出しつくされた感がある。桁行は３間で、長さ6.3m。梁行は２間半で、長さ4.9m。柱間は、桁行で均等割りの2.1m、梁行で2.3m＋1.9m＋0.7mとなる。さらに、内部には、本体建物と柱筋が揃う長方形状の柱穴列（柱穴No.21～28）を含んでいる。規模は、桁行側で長さ4.4m、梁行側で長さ2.0m、建物風に表現すれば桁行２間半、梁行１間となる。柱間は、桁行で1.5m＋2.1m＋0.8m。検出状況から、本体建物に付随した束柱の類と思われる。

なお、この事に加え、SB02－１（柱穴No.29～37）は、柱穴の並びから、本体建物（SB02）の玄関の様な張り出し区画と推定される。この箇所は、桁行で長さ3.0m、梁行で長さ1.8mを測る。柱間は、桁行で2.0m＋1.0m、梁行で0.6m＋1.2mとなる。

⑤Ⅱ郭－bからも柱穴群が検出されているので、２棟分を復元した。概して、柱穴の造りは小さく、分布密度もやや低くなる。

SB03（柱穴No.43～55）：柱筋は、大方、千鳥足の並びで、不自然さを免れないが、敢えて、復元ラインを引いた。桁行４間で長さ5.2m、梁行２間で長さ4.0m。柱間は、桁行で1.0m＋1.8m＋1.4m＋1.0m、梁行は2.0mの均等割りとなる。

さらに、内部にはSB02と同様に、束柱の類と思われる柱穴列（柱穴No.56～61）が含まれる。西側で長さ2.0m、幅1.8mの方形状のものと、これに連続する長さ1.8m、幅0.7mの長方形状の並びがそうである。

SB04（柱穴No.62～69）：柱穴の並びは、大方、千鳥足の状態にあり、桁行２間で長さ4.0m、梁行２間で長さ2.2mが復元可能である。柱間は、桁行南側で2.7m＋1.3m、北側2.4m＋1.6m。梁行西側で0.8m＋1.4m、東側で0.9m＋1.3mとなる。炉跡を連想させる中央部の1.0m幅の円形窪地との関連は不明である。ただし、窪地に火を受けた形跡はなかった。

なお、Ⅱ郭の東域は、柱穴の数も大幅に減少し、端部で疎の状態となる。この点で、柱穴群が全面に広がるⅠ郭とは、様相を大きく異にする。

〔Ⅲ郭〕

Ⅲ郭では、柱穴数が極端に疎の状態に転じる。おおよそ、建物が存在した状況にない。わずかに小規模な柱穴群と掘切の存在が伺われるにすぎない。南下の４トレンチからも小型の柱穴が検出されたが、これも形をなさなかった。建物不在の区画と受け取った。

〔Ⅳ郭〕

11箇所にトレンチを入れたが、西側で、やや、まとまった柱穴群が検出されたものの、中央から東域にかけて数を減じ、東端では、消滅の状態にあった。トレンチ調査に留まったこともあって、建物の復元はできなかったが、それでも柱穴自体は、岩盤をしっかり掘り込んでおり、倉庫もしくは小屋などの実用的な複数の建物が存在したものと思われる。なお、東域のトレンチでは、性格不明の小型の柱穴も目立った。

〔Ⅴ郭〕

小型の柱穴が９個検出されたが、形をなさなかった。郭も小さく、建物不在の区画である。

〔Ⅵ郭〕

Ⅴ郭と同様な状態であった。それでも何故、この様な小型の柱穴が疎の状態に掘り込まれるのか不可解である。建物はもちろんの事、杭列の類でも無いように思える。性格不明の柱穴である。

〔Ⅶ郭〕

尾根の長軸方向に柱穴列が検出された。いずれもトレンチ内での検出値で、A列は長さ5.7m。B列は長さ7.5m、５個の柱穴からなっており、柱間は、西側から東側へ1.8m＋1.8m＋1.5m＋2.4m。

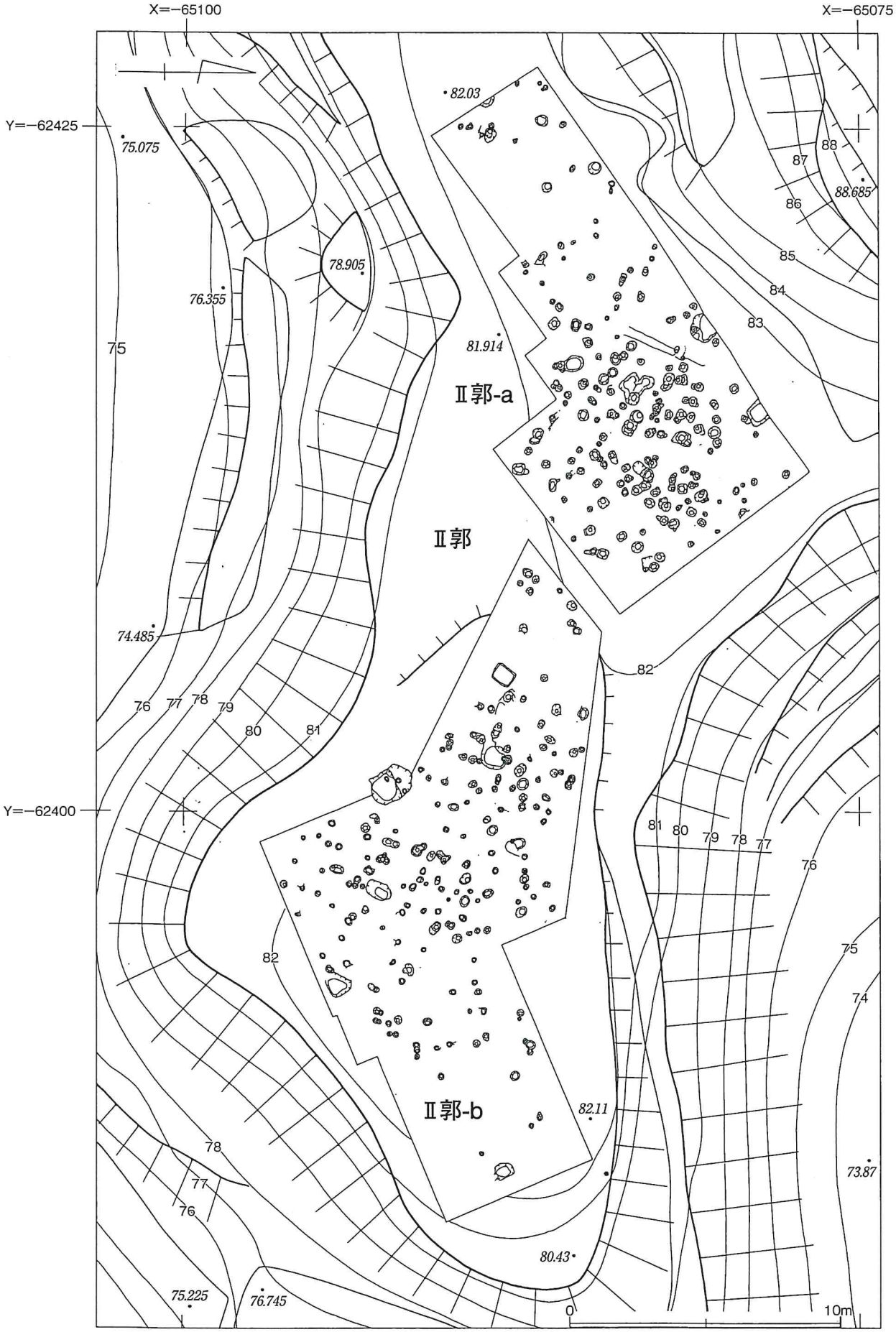
一方、短軸方向には３本の柱穴列を線引くことができた。西側のC列は、長さ1.8m分を検出した。２個の柱穴からなり、柱間は1.8m、南北両側に広がると思われる。東側のものは、近接状態で並列している。D列は長さ5.7m分を検出した。４個の柱穴からなり、柱間は北から南へ1.9m＋1.8m＋2.0m。E列は長さ4.0m分で、３個柱穴からなり、柱間は2.0mの均等割りとなる。

〔Ⅷ郭〕

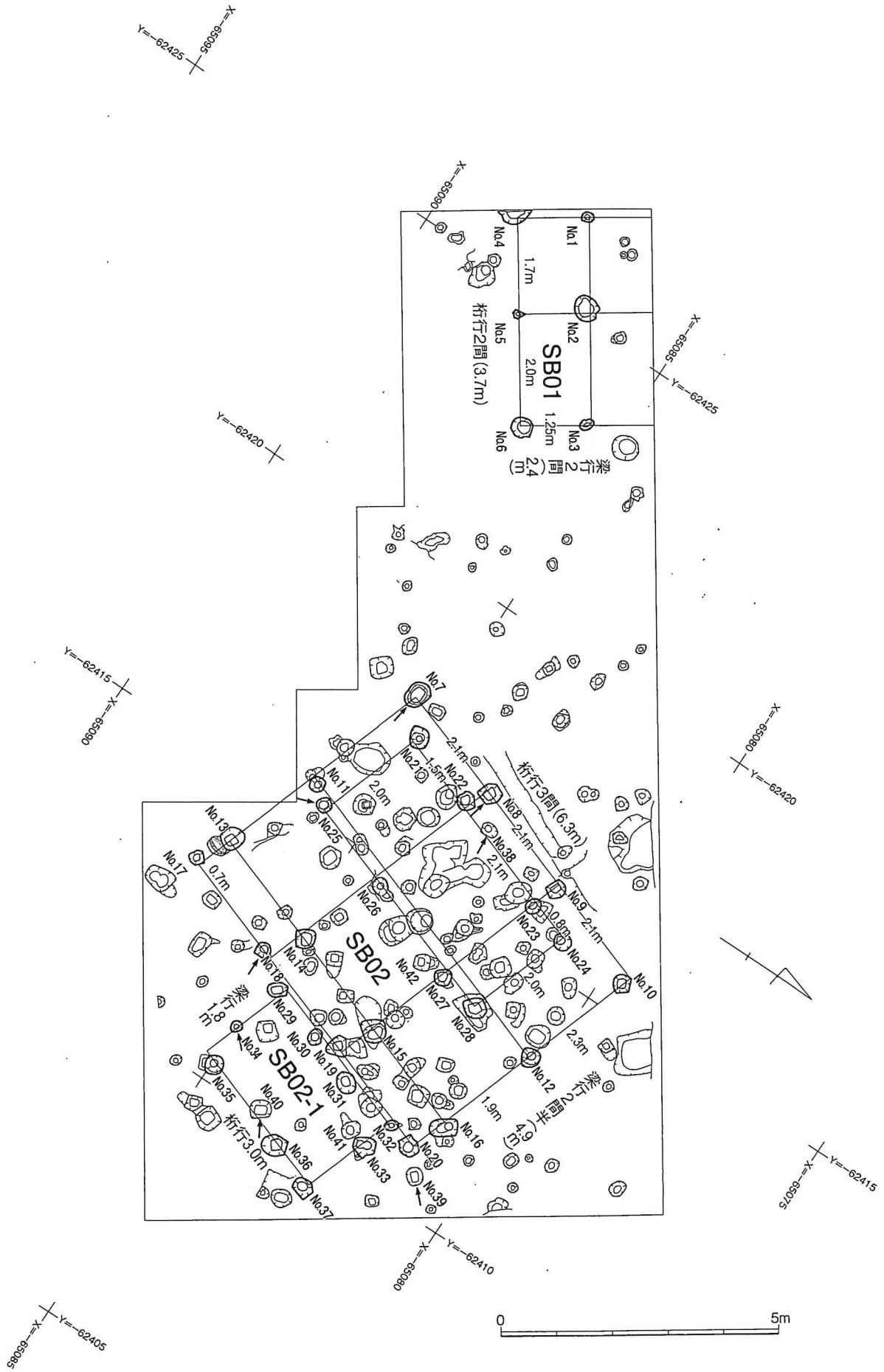
１トレンチの西端と東端から検出された。この郭は完掘に近い状態で、建物の復元が可能であった。

SB05：北西隅の柱穴を欠くが、桁行は２間で長さ3.7m、柱間は2.0m＋1.7m。梁行は南側で長さ2.7m、柱間は1.35mの均等割り。北側は予想される位置に中柱が存在しない。中央部に炉跡とも思える方形状の掘り込みがある。床面は赤化しているが、埋土に炭化物の混入は無い。長さ0.9m、幅0.5m。建物に付随した遺構であろう。

SB06：桁行2.0m、梁行1.8mの建物と推定される。方形に近い形状をなす。柱穴はしっかりした造りである。Ⅷ郭の東端にあるところから、地形的にも、SB06のこれ以上の規模の拡大は望めない。



第5図　Ⅱ郭トレンチ設定図



第6図　Ⅱ郭－aトレンチ柱穴実測図

第７図　Ⅱ郭－bトレンチ柱穴実測図

〔考察１〕 Ⅱ郭～Ⅷ郭の柱穴群について

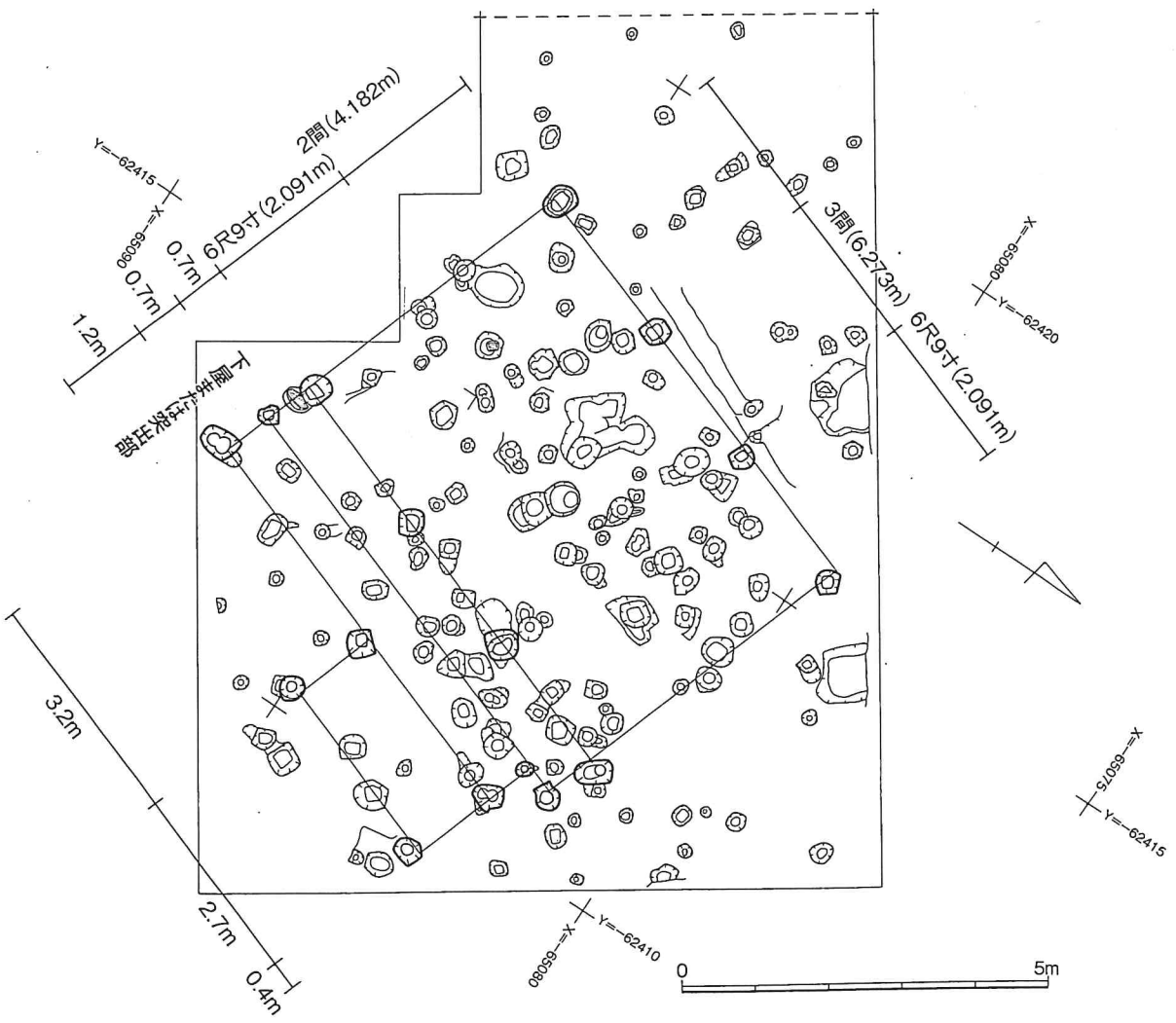
熊本県建築士会調査研究委員会副委員長　　西島眞理子

Ⅱ郭～Ⅷ郭にもⅠ郭と同様に柱穴群があり、建築物あるいは工作物が存在したと推定できる。また、Ⅱ郭～Ⅷ郭とも、青磁・白磁・染付けの碗・皿などと伴に、甕・火舎・灯火具・擂鉢など日用雑器が出土しており、生活の跡が伺える。しかし、部分的なトレンチの範囲での検出状況であるため、正確に全体を推定することが困難であるが、比較的、広範囲に掘られたⅡ郭とⅧ郭の柱穴群について推定できたことを述べる。

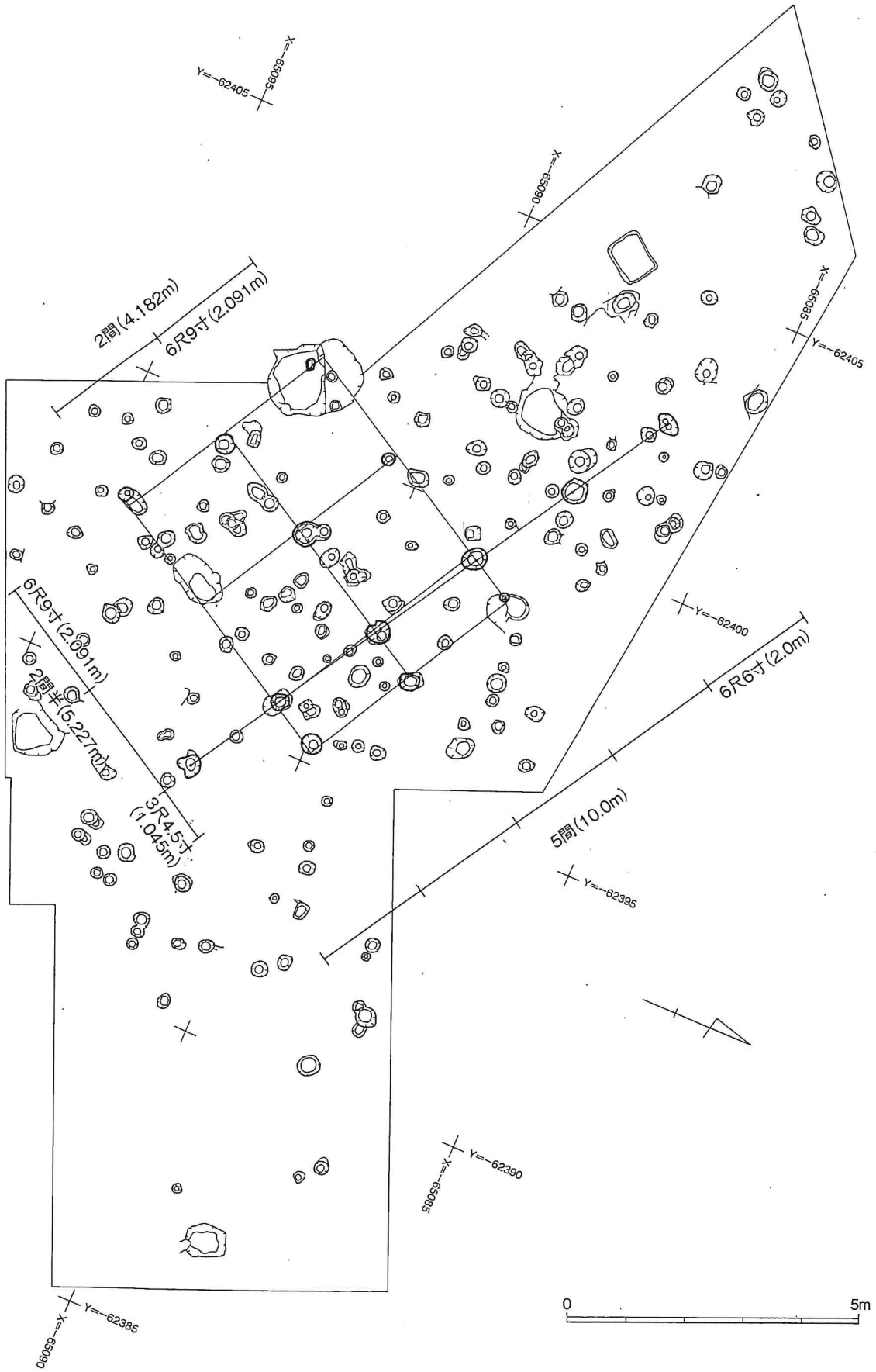
Ⅱ郭－aトレンチでは、柱穴群の中から２間×３間の建物が推定できる。この建物の１間の長さは、Ⅰ郭で推定された建物より長く、約６尺９寸（2,091㎜）である。この建物の東面には、下屋や突出部が取り付いていた可能性がある。

また、Ⅱ郭－bトレンチには、西北から東南に同巾（１間=約６尺６寸：2,000㎜）で５間分の柱穴が並ぶ。その柱穴列に対応する柱穴は確認されていないため柵列かと思えるが、発掘していない部分に対応する柱穴が存在する可能性はある。現時点では、Ⅱ郭－bトレンチ内で検出された柱穴のみで考えると、２間×２間半（１間=約６尺９寸）の建物が推定される。

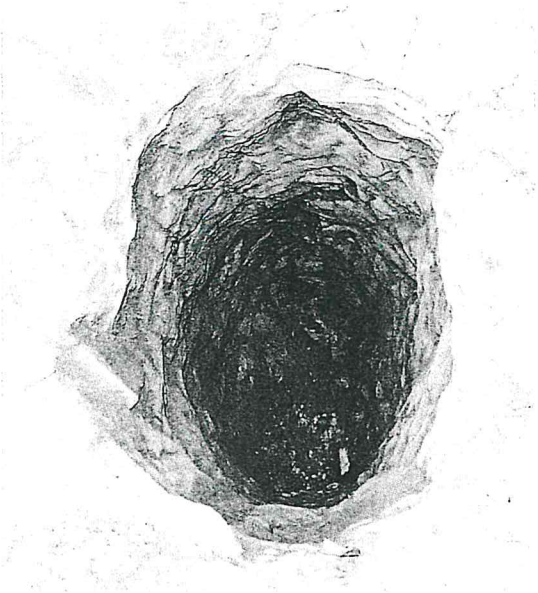
次に、Ⅷ郭の東端部には、１間（６尺６寸：2,000㎜）×１間（６尺：1,800㎜）の建物が推定できる。位置からすると門番所のようなものとも考えられる。しかし、このような小さな建物としては柱穴の直径が200㎜～350㎜と大きい。柱穴の断面を確認していないが、４つの穴の断面形が内転びであれば高い建物であると推定できる。高い建物とすると見張り台か狼煙台が考えられる。



第８図　Ⅱ郭－aトレンチ建物復元ライン（推定）



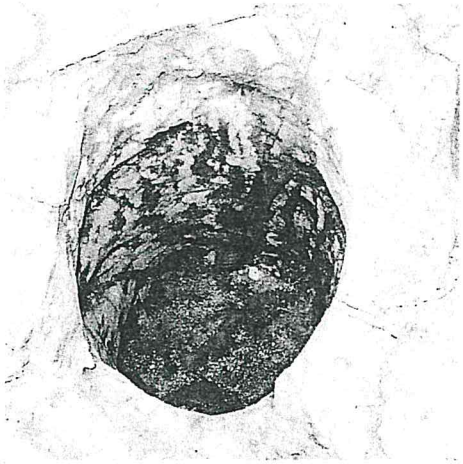
第９図　Ⅱ郭－bトレンチ建物復元ライン（推定）



Ⅱ郭ーa　・Pー No.7
〔長径50cm×短径37cm×深さ60cm〕

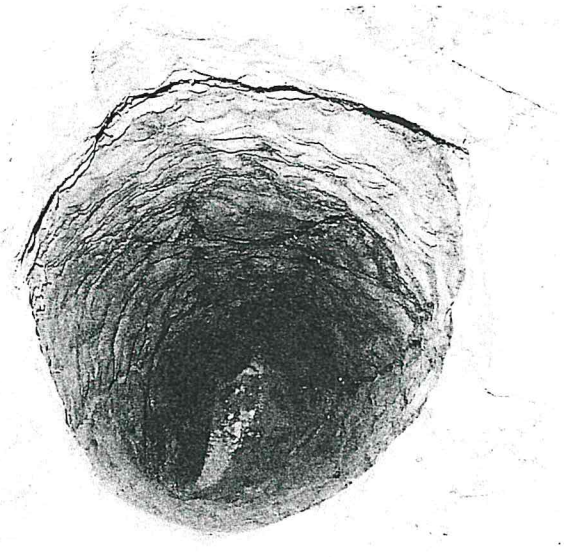
Ⅱ郭ーa　・Pー No.8
〔長径35cm×短径33cm×深さ56.5cm〕

Ⅱ郭ーa　・Pー No.18
〔長径26cm×短径25cm×深さ54cm〕



Ⅱ郭ーa　・Pー No.25
〔長径24cm×短径20cm×深さ26.5cm〕

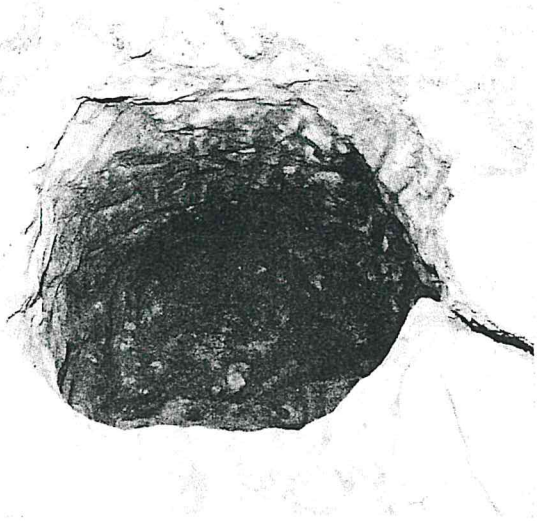
Ⅱ郭ーa　・Pー No.34
〔長径18cm×短径17cm×深さ22.5cm〕



Ⅱ郭ーa　・Pー No.38
〔長径30cm×短径25cm×深さ34cm〕

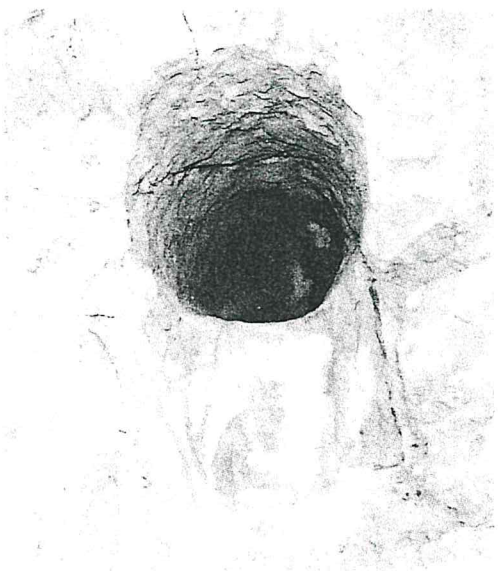
第10図　Ⅱ郭ーaトレンチ柱穴検出状況（柱穴の位置は、第6・7図を参照）

Ⅱ郭ーa　・Pー№.39
〔長径30cm×短径25cm×深さ46cm〕

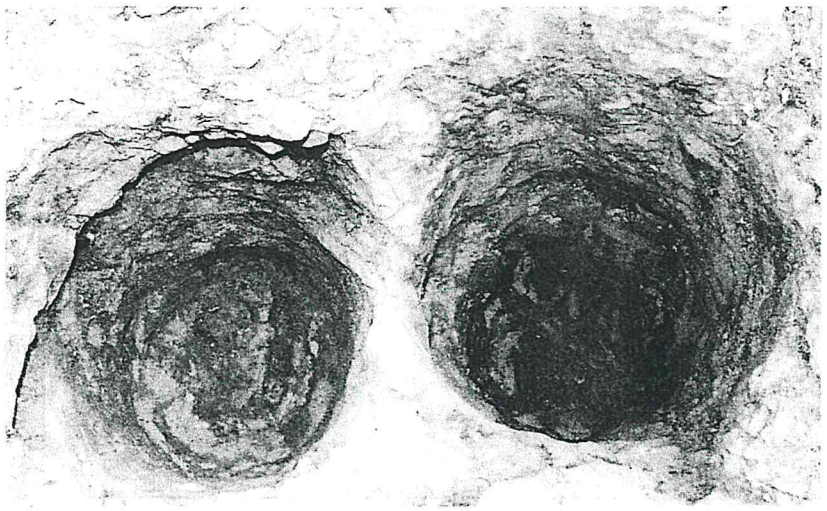


Ⅱ郭ーa　・Pー№.40
〔長径35cm×短径31cm×深さ40.5cm〕

Ⅱ郭ーb　・Pー№.55
〔長径32cm×短径31cm×深さ47cm〕



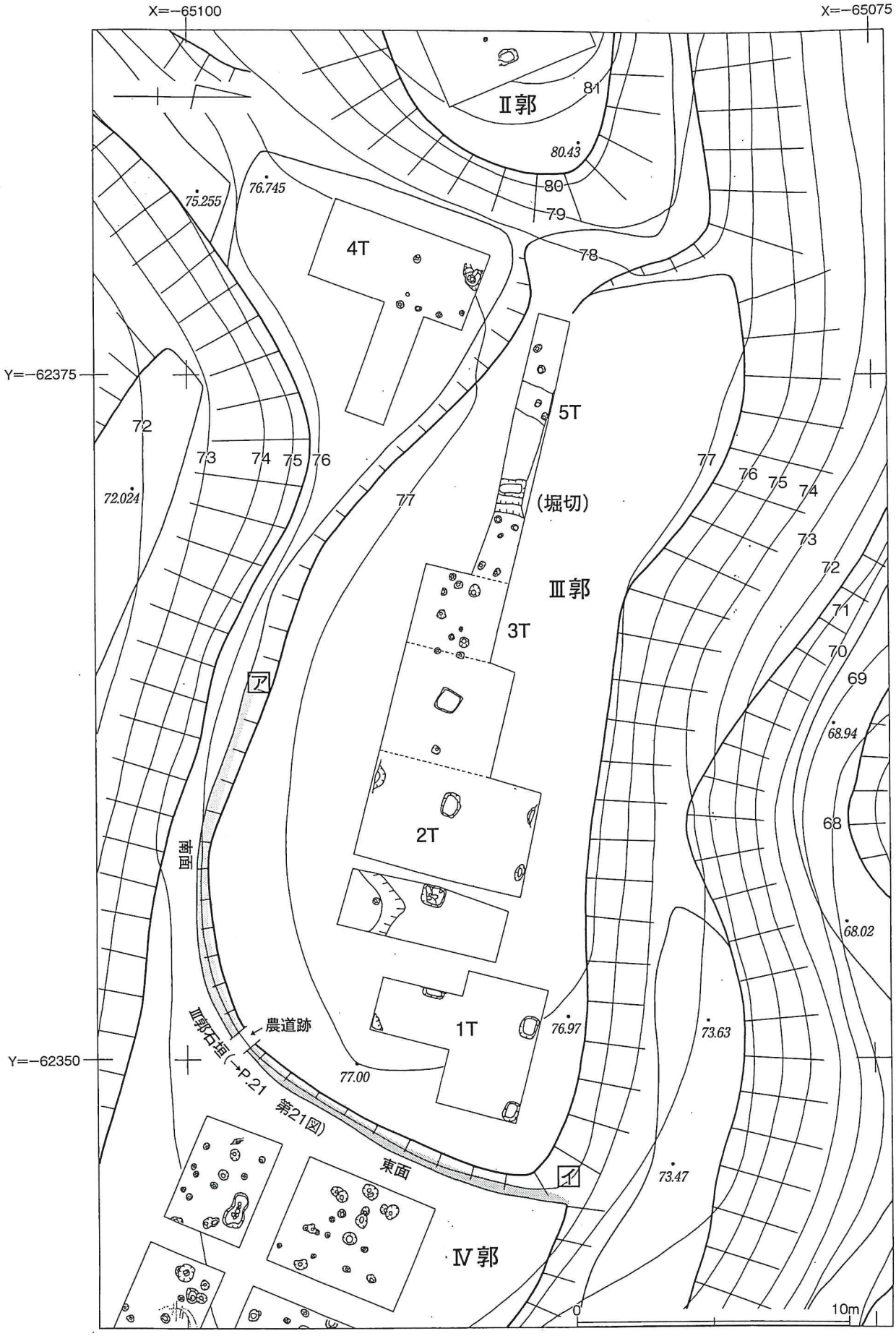
Ⅱ郭ーb　・Pー№.70
〔長径16cm×短径14cm×深さ34.0cm〕



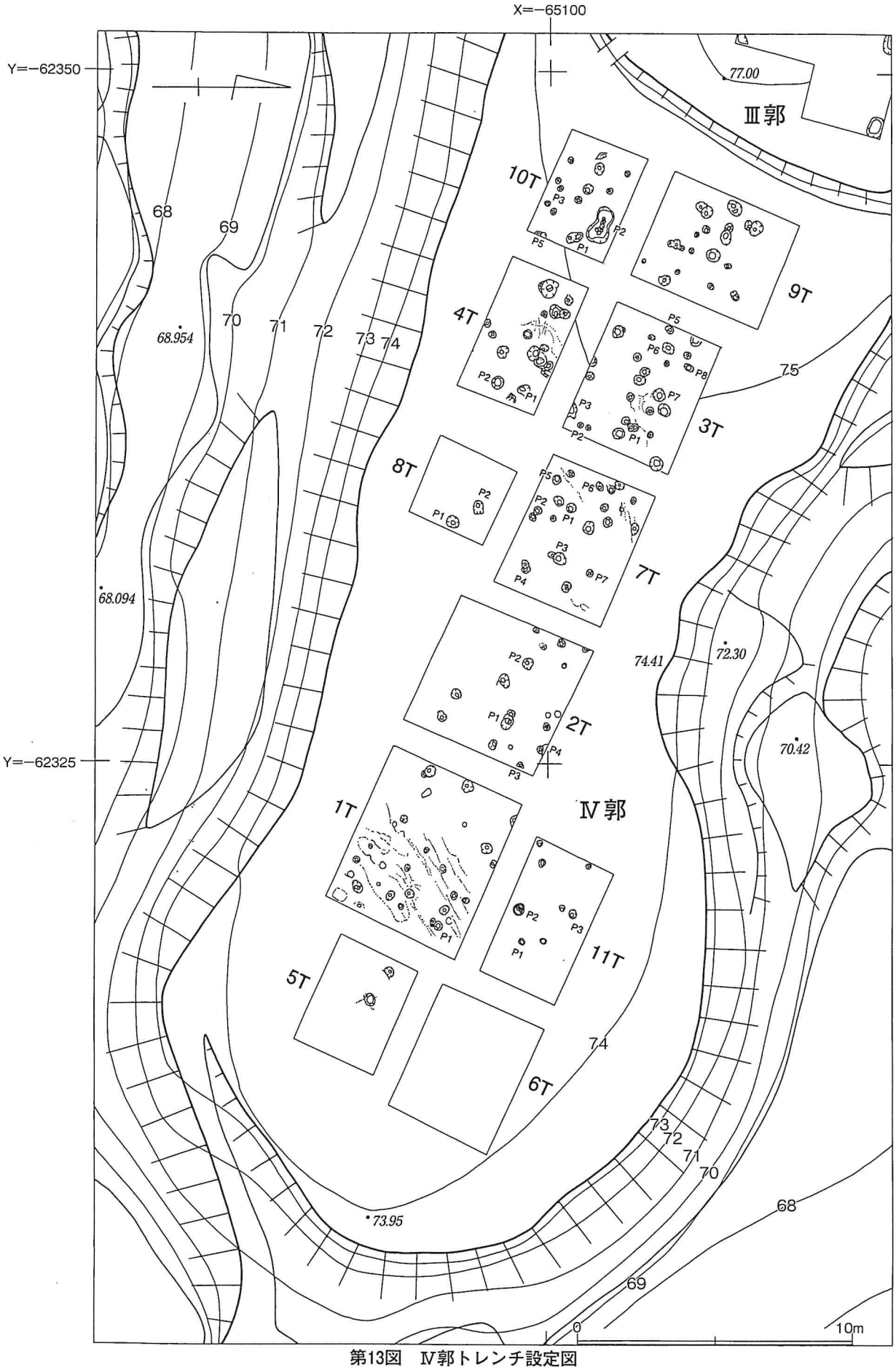
Ⅱ郭ーb　・Pー№.71
〔長径31cm×短径33cm×深さ47cm〕

Ⅱ郭ーb　・Pー№.47
〔長径35cm×短径34cm×深さ54cm〕

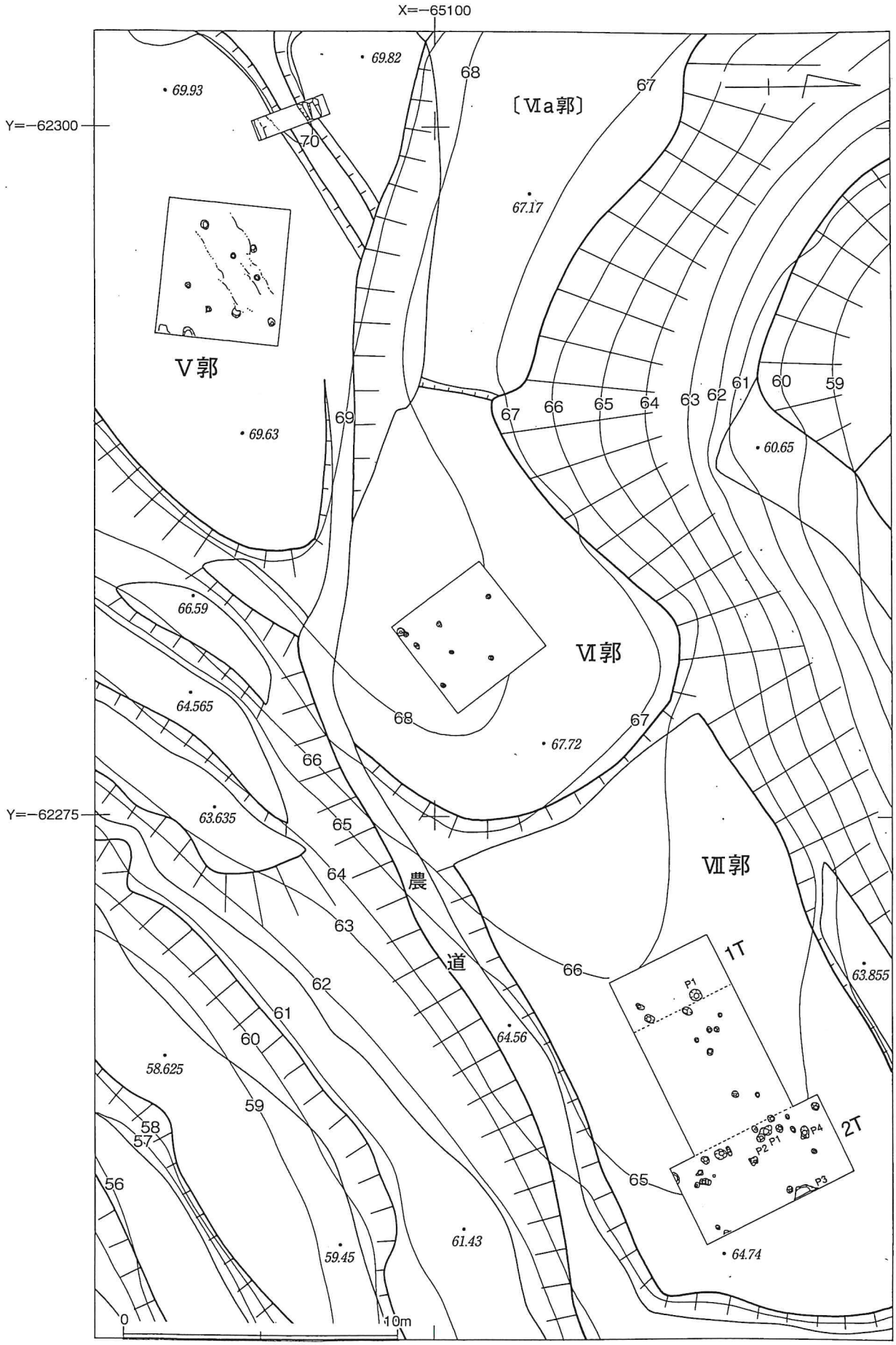
第11図　Ⅱ郭ーa・bトレンチ柱穴検出状況（柱穴の位置は、第6・7図を参照）



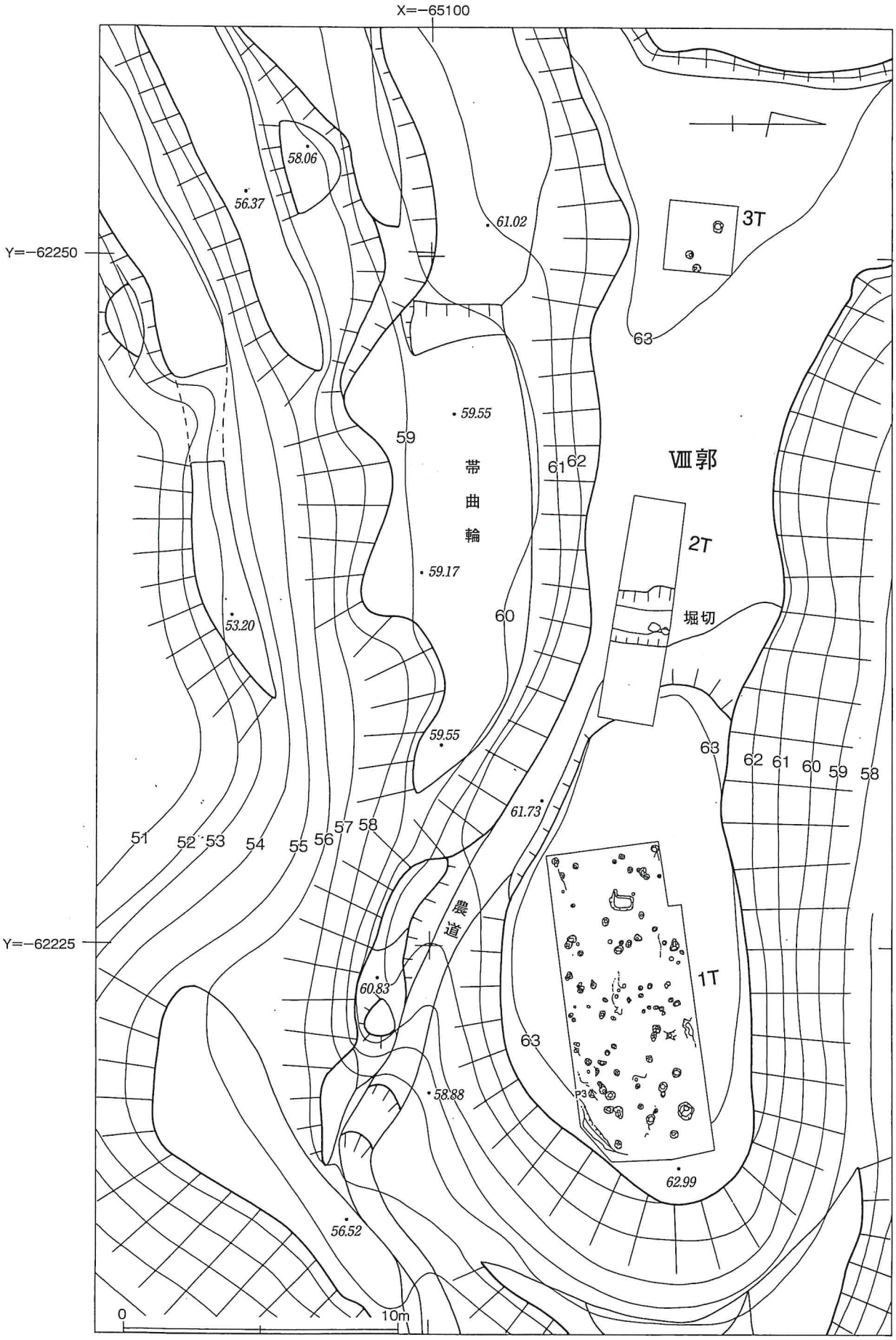
第12図　Ⅲ郭トレンチ設定図



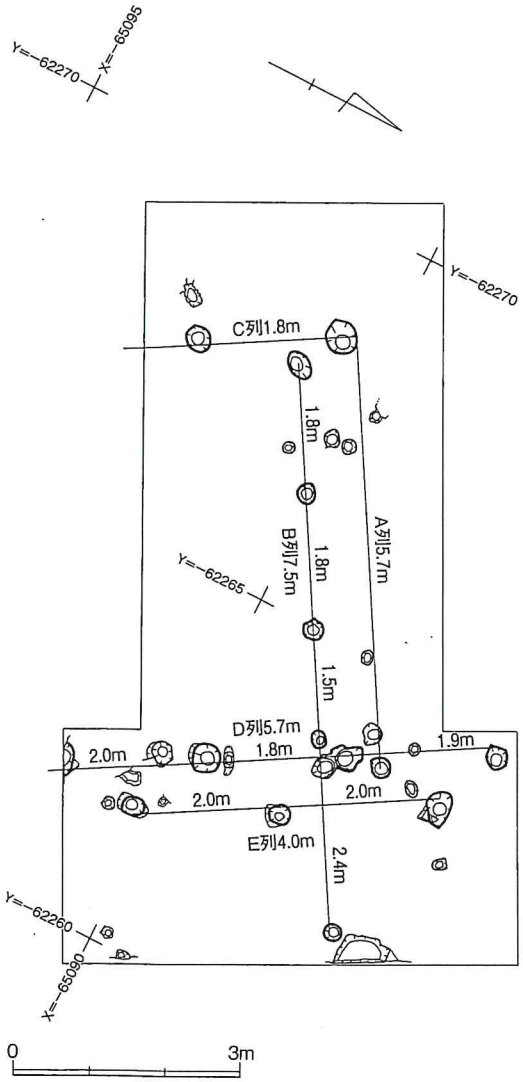
第13図　Ⅳ郭トレンチ設定図



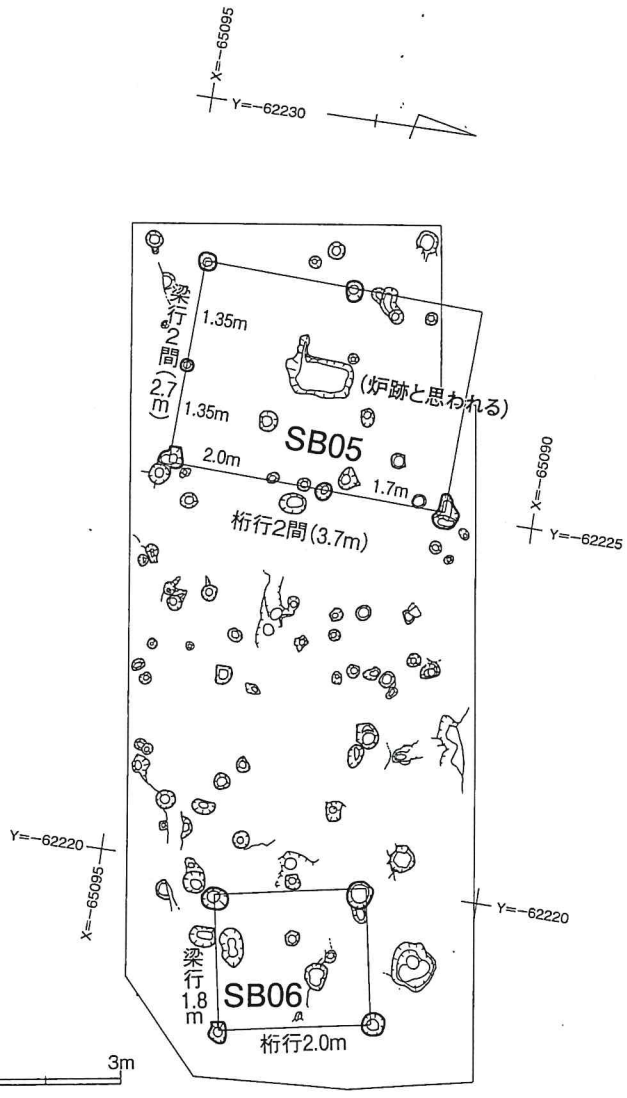
第14図　Ⅴ～Ⅶ郭トレンチ設定図



第15図　Ⅷ郭トレンチ設定図



第16図　Ⅶ郭柱穴実測図



第17図　Ⅷ郭（1トレンチ）柱穴実測図

第２節　城跡内の石垣について

①城跡の各段差面に、野面積みの石垣が残る。大方のものが、麓の畑地や水田の法面に積まれた石垣とは、形状的に全く異なる事を冒頭に明記しておきたい。この事は、現地を視察された小野正敏氏（国立歴史民俗博物館助教授）も指摘されている。本報告書では、資料整理の済んだ中から、典型的なⅢ郭石垣の実測図を掲載した。

Ⅲ郭の南面半分から東面を弧状に取り巻く石垣である。カーブ箇所となる石垣の南東隅を壊して農道が登っている（14頁・第12図に石垣ラインをスクリーントーンで表している）。

②東面は、写真中（第18図）の人物から右側と左側で、石材と残存度合いが異なる。左側は、地山産の頁岩を割ったもので、高さ 0.6m～1.4m。キッチリと積まれており、長さは農道による破壊箇所から北側へ5.5m。

一方、右側は、城跡麓の川原石（砂岩）が持ち込まれて積まれている。この部分の石垣は破損が大きく、根石ラインの残存に留まる。高さ0.5m前後、長さは7.5m。

石材の異なる石垣は、接点でピッタリ合わさっている。常識的には時期差が生じると思われるが、ここでは、そういう状況から決め手に欠ける。

③南面は、地山の傾斜度に合わせて積まれている。西側から東側へ漸次、石垣が高さを増し、前述のカーブ箇所で最大1.5mの高さとなる。最も低いのは、西側寄りで0.4m。石材は地山産の頁岩で、残存度合いは良好である。

④Ⅲ郭の石垣は、南面で、ほぼ原形を保ち、東面で大きく欠損する状況にある。但し、城の向きが南面にあるので、この石垣の破城の仕方は、東面と南面で逆となる。通常は、麓から見える南面を大きく壊す。

⑤割石の状態と野面積み状態は、富岡城跡（天草郡苓北町）の二の丸から検出された西側石垣に酷似する。富岡城は、県内に残る近世城の一つである。整備事業に伴う発掘調査で、平成10年に二の丸・西側の高石垣が、三列の複合石垣である事が判明した。従前の石垣を裏グリに利用しながら新しい石垣が構築されていた。

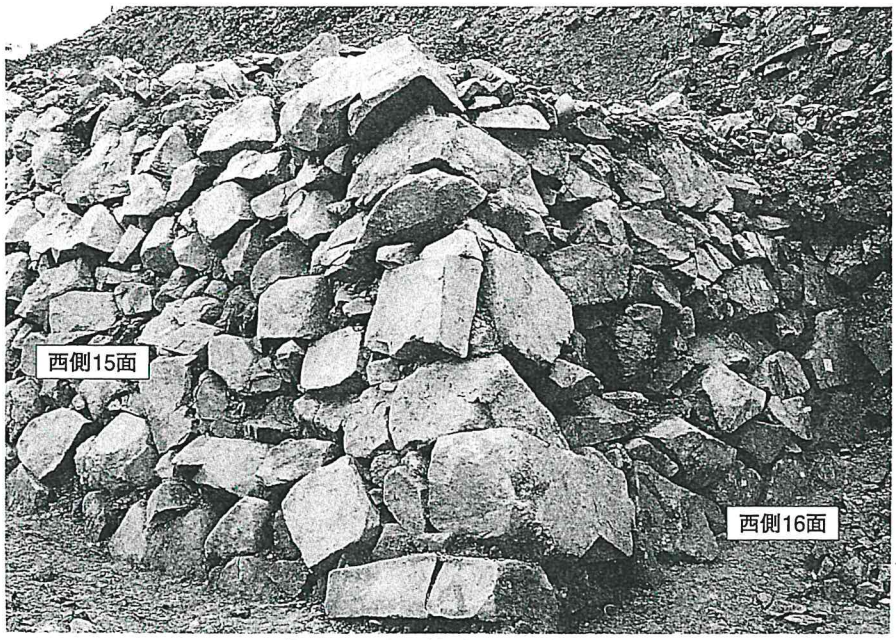
第22図の石垣は、その最奥から検出されたもので、富岡城の最古の石垣と見なされる。積み石は地山産の頁岩で、キッチリと野面積みされていた。時期的に中世末の石垣と考えられる。富岡城は、中世・志岐城の出城をリメイクしたとの見方がなされている。

【参考文献】『富岡城跡Ⅴ』苓北町文化財調査報告第８集　2002年

第18図　Ⅳ郭平場からⅢ郭石垣を望む

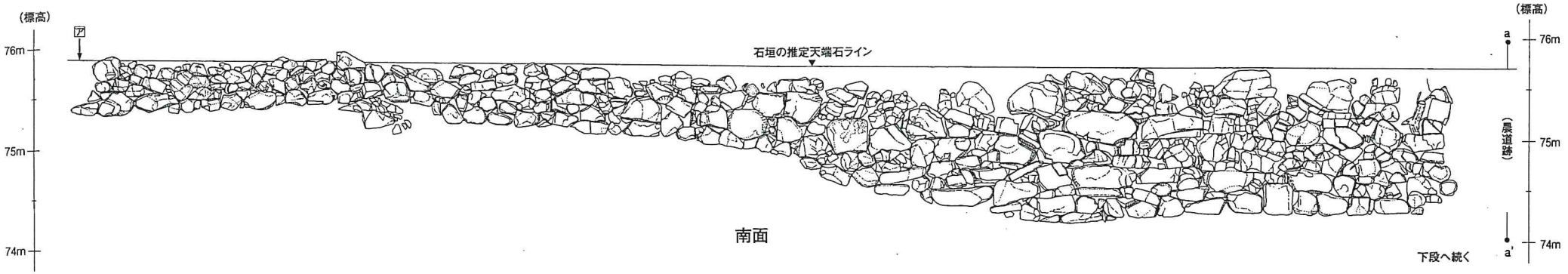
第19図　Ⅲ郭石垣（地山産頁岩・割石）

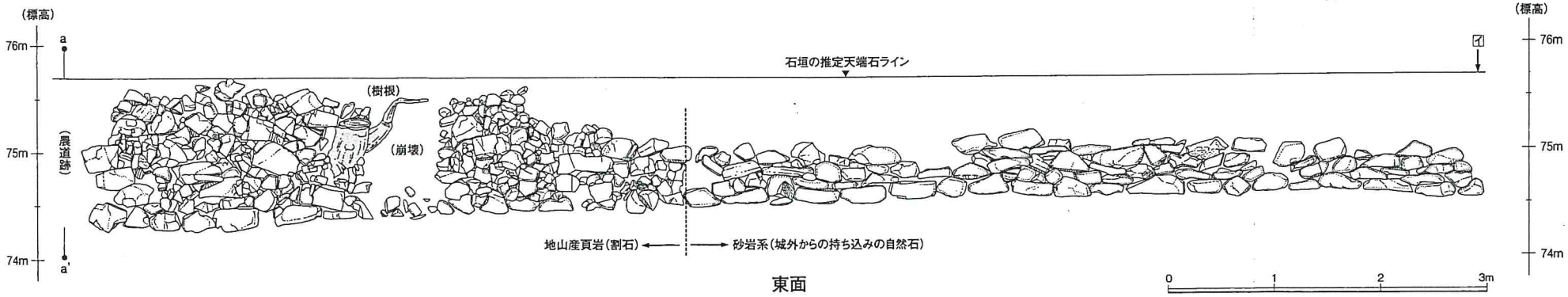
〔参考資料〕



第20図　富岡城跡　二の丸石垣

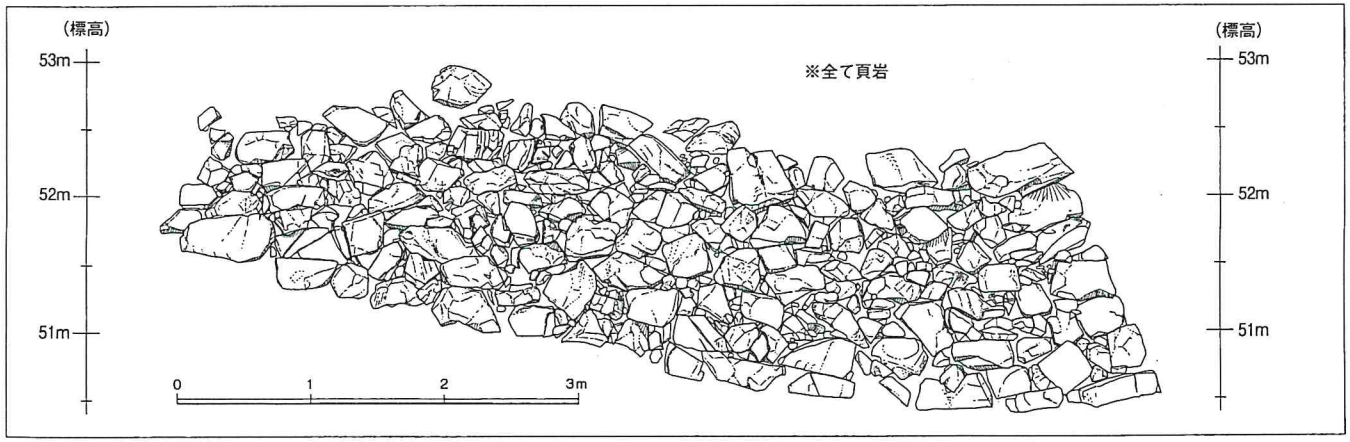
（近世石垣の裏込め部分に埋没していた中世末の石垣。地山産の頁岩を割ったもので、第19図に見る棚底城跡の石垣と形状が酷似する。）





第21図　Ⅲ郭石垣実測図

〔参考資料〕苓北町文化財調査報告第８集『富岡城跡Ⅴ』2002年掲載図面



第22図　富岡城跡二の丸・西側15面石垣実測図

第Ⅲ章　出土遺物

①今年度分の報告は、Ⅱ郭を中心にⅢ～Ⅷ郭のトレンチ調査で出土したものを扱うが、総合的な解釈のために昨年度に報告済みのⅠ郭から出土した分も含めて第３表にまとめた。なお、表中に記した棚底城の第１～第３期は、城跡の時期を、出土遺物を中心に、城歴や周辺遺跡（大権寺比定地の石塔群）との関連から三期に分けたものである。

〔第１期〕14世紀中葉～15世紀中葉

大権寺比定地の年号入り石塔群の時期に見合うものである。年号の上限は1358年で、下限は1440年。該当する石塔は６基で、いずれも北朝年号を有するのを特徴とする。14世紀中葉から15世紀中葉の時期設定となり、この時期、棚底城跡と大権寺（中世寺院）との関係が予想される。

〔第２期〕15世紀後半～16世紀前半

城歴が表舞台に出てこない時期である。文献に城名の記載が無く、棚底城の一帯では、比較的、安定した世情が続いたものと思われる。上限は大権寺が廃寺となったと推定される15世紀後半。下限は1532年の天文元年（享保五年）の『八代日記』に見る記事をあてるので、16世紀前半となる。同日記によれば、この年の６月・７月に天草・志岐・栖本・大矢野・長嶋の各氏が同心して、上津浦を攻め寄せている。これを契機に棚底城とその一帯でも、戦いが交えられていく事になる。

〔第３期〕16世紀中葉～16世紀後半

棚底城の争奪戦が繰り広げられた時期である。『八代日記』によれば、天文13年（1544）に上津浦親類が棚底城を下城する事件が発生しており、この時期の16世紀中葉を上限とする。その後、上津浦氏や栖本氏などの間で棚底城を巡る戦いが続いた。下限は、上津浦勢が棚底を攻撃した永禄３年（1560）頃で、16世紀後半とする。

②城跡の時期区分と出土した輸入磁器との関わりは、第１表の通りである（第３表の分析による）。

時　期	青　　磁	白　　磁	染　付　け
第１期	最も多い。器種は高級品の盤を中心に、小鉢・碗・皿。	少量。器種は皿。	少量。器種は碗。
第２期	多い。器種は碗と皿。	量が増す。器種は皿が中心。	量が増す。器種は碗と皿。
第３期	極少量。皿のみ。	少量。器種は皿。	量が多い。器種は碗・皿・小鉢。

＊第１期は青磁が中心で、第２期は染付けを中心として白磁も目立つ。第３期は染付けが中心となる。

第１表　時期区分と出土磁器

③日用雑器を主とするその他の出土遺物については、第２表の通りである。器種や量から判断すると、調査面積にもよるが、明らかにⅠ郭が生活の中心地で、次いでⅡ郭→Ⅳ郭→Ⅷ郭→Ⅵ郭の順となる。

	Ⅰ　郭	Ⅱ　郭	Ⅲ郭	Ⅳ郭	Ⅴ郭	Ⅵ郭	Ⅶ郭	Ⅷ郭
陶　器	天目碗　２点（１期：１点　３期：１点） 緑三彩　１点	１点（２期）						
土師器	32点　（小杯・大型杯・中型杯・皿）	３点（杯１点・皿２点）						
土　錘	3点	１点						
甕	15点　（備前を中心に常滑も混じる）	１点（瓦質）	１点	７点		１点		２点
瓦　器	1点							
擂　鉢	15点	３点	１点	８点		２点	１点	６点
火　舎	10点	４点	１点	５点		２点		３点
須恵器	6点	２点	１点	３点		１点		
土師質土器	4点	１点						
羽　釜	3点			１点				
鉢			１点				１点	
平　瓦	2点							
茶　臼	2点							
ひき臼	2点		１点	２点				１点
風　炉	1点							
砥　石		１点						１点
碁　石	154点							

第２表　出土遺物〔日用雑器〕一覧表

〔青磁〕

年　代	Ⅰ郭遺物番号	Ⅱ郭遺物番号	Ⅲ～Ⅷ郭遺物番号	備　考
12C～13C	1（碗）			歴史フォーラムで小野正敏助教授が指摘されたPre 1 期（→99頁）
13C～14C中葉	2（碗）			
13C～14C	3（蓋）			
14C～15C	4（碗）		70（皿）	棚底城の第１期に見合う遺物（大権寺比定地の金石年号と一致）
14C～15C中葉	5（碗）			
14C後半～15C前半		1（小鉢） 2（盤）	56・63（碗） 64（盤）	
14C後半～15C中葉	9～20（碗） 21・22（碗か鉢） 23・24（鉢） 25（皿か盤）	3・4（碗） 5・6（皿） 7（鉢）	65～68（碗） 69（皿）	
14C後半～15C	6・7（碗） 8（皿）	8（碗） 9（皿）		
14C後半～16C中葉		10（碗）		
15C	26（碗）	11（碗） 12（皿）	71・109・110（碗） 112（皿）	
15C～16C前半	27・28（碗） 29（皿）			棚底城の第２期に見合う遺物
15C中葉～16C前半	30（碗）	13（皿）	72（碗）	
15C後半～16C前半		14・15（碗）	73（碗）	
15C～16C		16（碗）	74（碗）	
16C			75（碗）	棚底城の第３期に見合う遺物
16C中葉～末	31（皿）			

〔白磁〕

年　代	Ⅰ郭遺物番号	Ⅱ郭遺物番号	Ⅲ～Ⅷ郭遺物番号	備　考
12C～14C	32（鉢？）			Pre 1 期
14C～15C			122（皿）	棚底城の第１期に見合う遺物（大権寺比定地の金石年号と一致）
14C後半～15C前半			76（皿）	
14C後半～15C中葉	33（皿）			
15C～16C中葉		17（皿）		棚底城の第２期に見合う遺物
16C	34（碗か皿） 35～40（皿）	18・19（皿）	57・77・111（皿）	
16C後半			78・79（皿）	棚底城の第３期（争奪戦）に見合う遺物
16C～17C初頭	41（皿）			
16C後半～17C初頭	42～44（皿）			

〔染付け〕

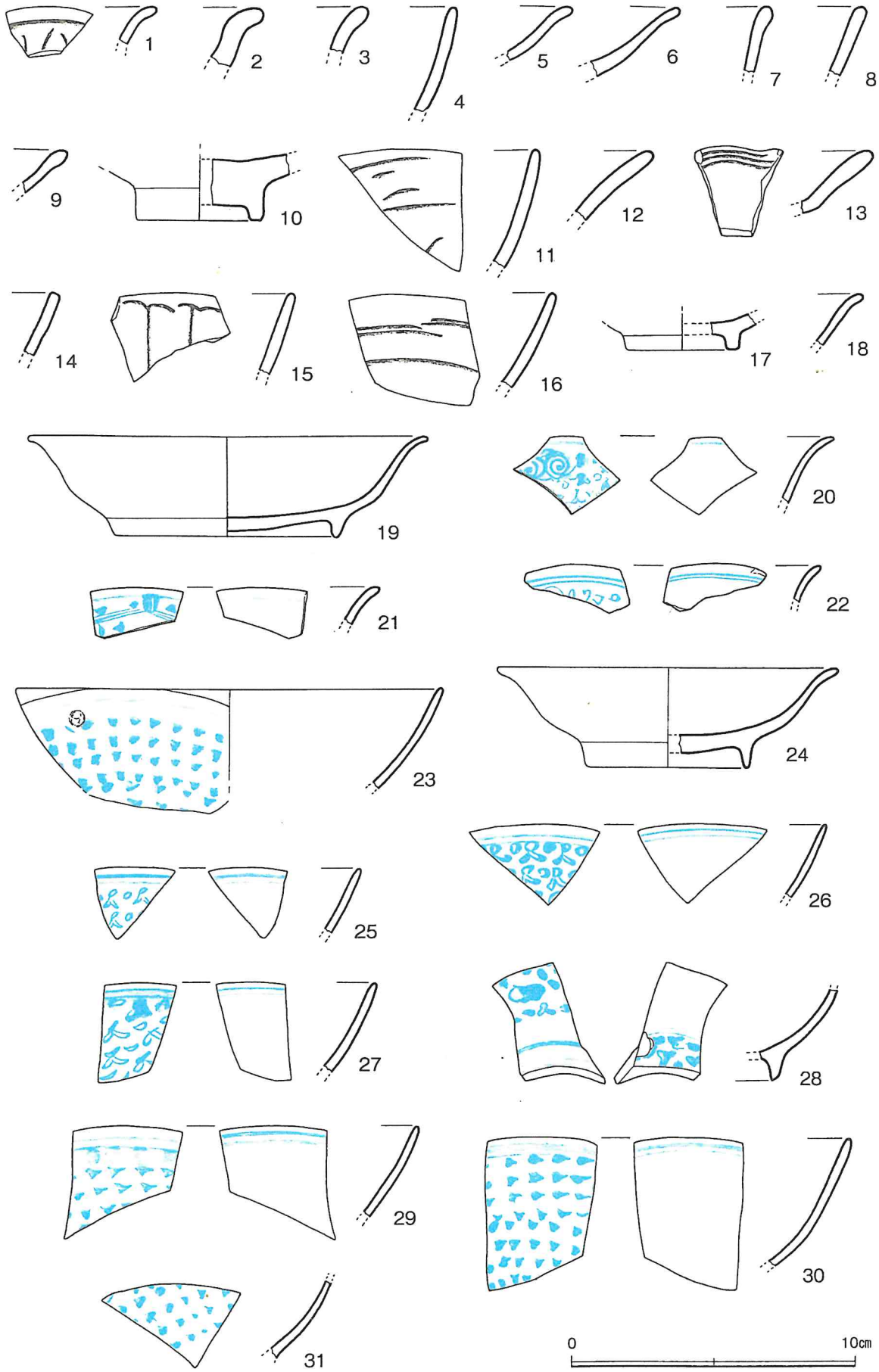
年　代	Ⅰ郭遺物番号	Ⅱ郭遺物番号	Ⅲ～Ⅷ郭遺物番号	備　考
14C後半～15C			80（碗）	棚底城の第１期に見合う遺物
15C後半～16C前半		20・21（碗）	81・82（碗）	棚底城の第２期に見合う遺物
15C末～16C前半	52（碗）			
15C末～16C中葉	53（皿）			
16C	54（碗）	22・23（碗） 24（皿）		
16C前半～中葉	55～60（碗） 61・62（皿）	25～34（碗）	83・119・123（碗） 124（皿）	
16C後半	63～65（碗） 66（小坏）	35（碗） 36・37（皿）	84・126（皿） 125（碗）	棚底城の第３期（争奪戦）に見合う遺物
16C末		38（碗）		
16C～17C初頭	67（碗）			
16C後半～17C初頭	68（碗） 69（皿）		127（碗）	

〔陶器〕

年　代	Ⅰ郭遺物番号	Ⅱ郭遺物番号	Ⅲ～Ⅷ郭遺物番号	備　考
13C～14C	77（盤）			Pre 1 期
14C～15C	78（天目碗）			棚底城の第１期に見合う遺物
16C	79（天目碗）			棚底城の第３期に見合う遺物
17C	81・82（茶入れ）			廃城後もしくは廃城直前

※Ⅰ郭遺物番号は、倉岳町文化財調査報告第１集『棚底城跡』所収の遺物番号と一致する。
※Ⅱ～Ⅷ郭遺物番号は、本書25～39頁の遺物番号と一致する。

第３表　出土遺物〔陶磁器〕一覧表



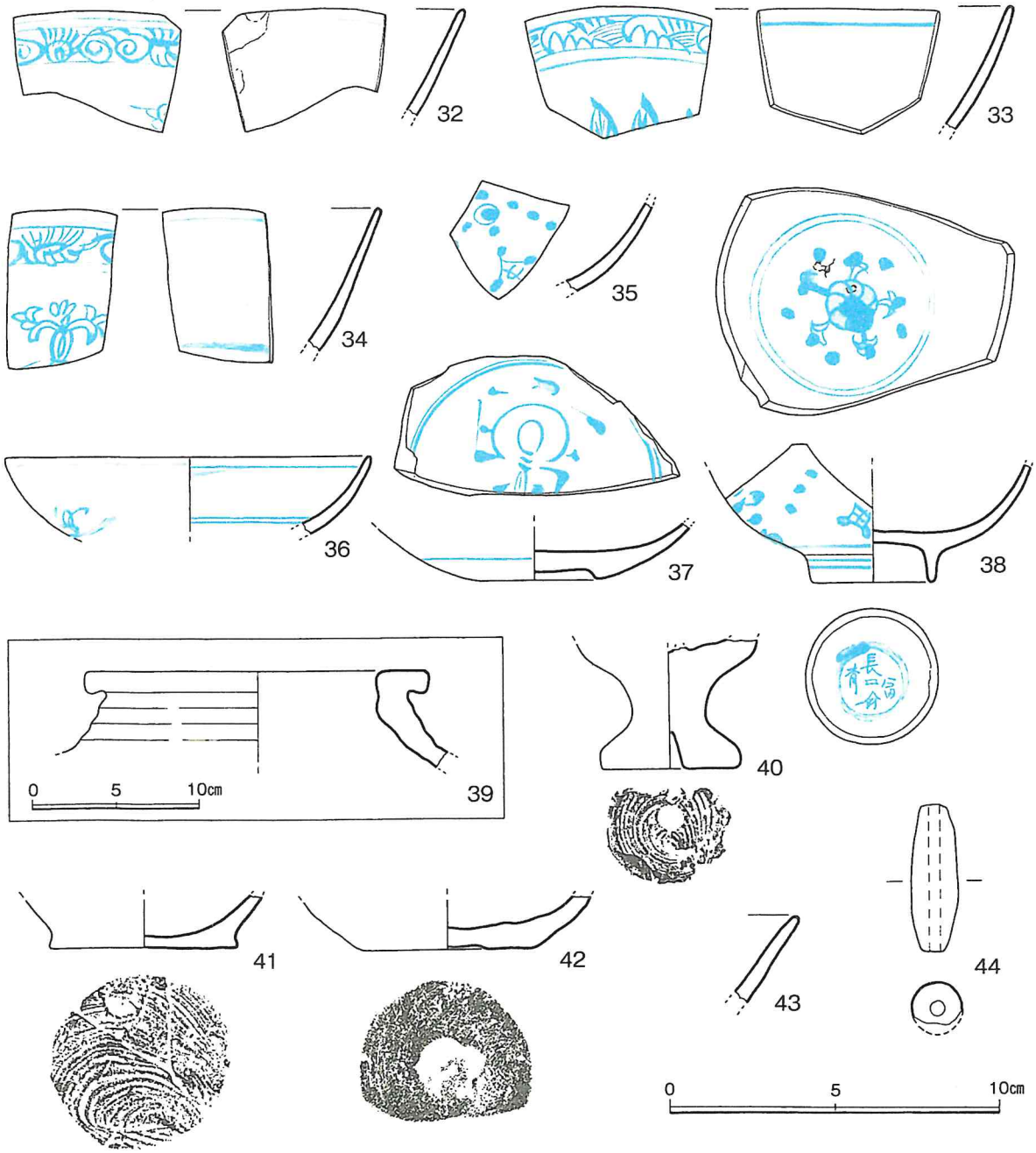
第23図　Ⅱ郭出土遺物実測図①

No	器　種	器　厚	形　　態	調整・文様	備　　考
1	青　磁 小鉢（?） 14C後半～ 15C前半	体部上位　3.0㎜ 中位　3.0㎜	口縁部で、大きく外弯する。	[外器面] 蓮弁文様	[産地] 中国・竜泉系 [釉色] 灰白緑色 [焼成] 良好 [出土] Ⅱ郭－a
2	青　磁 盤 14C後半～ 15C前半	体部上位　6.0㎜ 中位　7.0㎜	口縁部で屈曲する。	――――	[産地] 中国・竜泉系 [釉色] 灰緑色 [焼成] 良好 [出土] Ⅱ郭－a
3	青　磁 碗 14C後半～ 15C中葉	体部上位　6.0㎜ 中位　5.0㎜	口縁部で、やや外弯する。	――――	[産地] 中国 [釉色] 灰白褐色 [焼成] やや不良 [出土] Ⅱ郭
4	青　磁 碗 14C後半～ 15C中葉	体部上位　4.0㎜ 中位　4.5㎜	体部は、やや内弯する。	――――	[産地] 中国・竜泉系 [釉色] 灰白緑色 [焼成] 良好 [出土] Ⅱ郭－a
5	青　磁 皿 14C後半～ 15C中葉	体部上位　4.0㎜ 中位　3.0㎜	体部は、やや内弯し、口縁部で外弯する。	――――	[産地] 中国 [釉色] 灰白褐色 [焼成] 良好 [出土] Ⅱ郭－a
6	青　磁 皿 14C後半～ 15C中葉	体部上位　3.5㎜ 中位　5.5㎜	体部は、やや内弯し、口縁部で外弯する。	――――	[産地] 中国 [釉色] 灰茶緑色 [焼成] やや不良 [出土] Ⅱ郭－a
7	青　磁 鉢 14C後半～ 15C中葉	体部上位　5.0㎜ 中位　4.0㎜	体部は、やや外弯する。	――――	[産地] 中国 [釉色] 灰白緑色 [焼成] やや良好 [出土] Ⅱ郭－a
8	青　磁 碗 14C後半 ～15C	体部上位　5.0㎜ 中位　4.5㎜	口縁直口。	――――	[産地] 中国・竜泉系 [釉色] 灰茶緑色 [焼成] 良好 [出土] Ⅱ郭－a
9	青　磁 皿 14C後半 ～15C	体部上位　4.5㎜ 中位　3.0㎜	口縁部で肥厚する。	――――	[産地] 中国 [釉色] 灰白緑色 [焼成] やや良好 [出土] Ⅱ郭－a
10	青　磁 碗 14C後半～ 16C中葉	体部下位　8.0㎜ 底部中央 16.0㎜	復元底径　4.4cm 底部は肥厚する。	[見込み] 無釉 [外器面] 蓮弁文様	[産地] 中国・竜泉系 [釉色] 灰白緑色 [焼成] 被熱している [出土] Ⅱ郭
11	青　磁 碗 15C	体部上位　4.0㎜ 中位　4.0㎜	体部は内弯する。	[外器面] 線書き文様	[産地] 中国 [釉色] 灰白緑色 [焼成] やや良好 [出土] Ⅱ郭－b　P－No.72
12	青　磁 皿 15C	体部上位　6.0㎜ 中位　5.0㎜	稜花形。	――――	[産地] 中国・竜泉系 [釉色] 暗灰白緑色 [焼成] 良好 [出土] Ⅱ郭
13	青　磁 皿 15C中葉～ 16C前半	体部上位　5.0㎜ 中位　4.0㎜	稜花形。	[内器面] 口縁部に３本の沈線。	[産地] 中国 [釉色] 暗灰緑色 [焼成] 良好 [出土] Ⅱ郭－a
14	青　磁 碗 15C後半～ 16C前半	体部上位　4.0㎜ 中位　4.0㎜	口唇部は偏平。	[外器面] 剣先蓮弁文様	[産地] 中国 [釉色] 灰白緑色 [焼成] やや不良 [出土] Ⅱ郭－b
15	青　磁 碗 15C後半～ 16C前半	体部上位　4.0㎜ 中位　4.0㎜	口縁直口。	[外器面] 剣先蓮弁文様 [内外器面] 釉に透明感がある。	[産地] 中国 [釉色] 暗灰緑色 [焼成] 良好（貫入あり） [出土] Ⅱ郭－a
16	青　磁 碗 15C～16C	体部上位　4.0㎜ 中位　4.5㎜	体部は、やや内弯する。	[内器面] 上位に細い沈線。	[産地] 中国 [釉色] 薄白緑色 [焼成] 良好 [出土] Ⅱ郭
17	白　磁 皿 15C～ 16C中葉	体部下位　4.0㎜ 底部中央　5.0㎜	復元底径　4.0cm 切り高台。	[外底面] 無釉	[産地] 中国 [釉色] 白褐色 [焼成] やや良好 [出土] Ⅱ郭－a
18	白　磁 皿 16C	体部上位　3.0㎜ 中位　2.0㎜	口縁部は外弯する。	――――	[産地] 中国・景徳鎮系 [釉色] 白黄色 [焼成] やや不良 [出土] Ⅱ郭－a

第４表　Ⅱ郭出土遺物観察表①

No	器　種	器　厚	形　　態	調整・文様	備　　考
19	白　磁 皿 16C	体部上位　3.0mm 下位　3.0mm 底部中央　4.0mm	復元口径　14.0cm 復元底径　7.9cm 器高　3.5cm	[外底面] 畳付きのみ無釉。	[産地] 中国・景徳鎮系 [釉色] 明白灰色 [焼成] 良好 [出土] Ⅱ郭－a
20	染付け 碗 15C後半～ 16C前半	体部上位　2.5mm 中位　2.0mm	口縁部で、大きく外弯する。	[外器面] 植物文様 [内外器面] 口縁部に界線。	[産地] 中国・景徳鎮系 [釉色] 白青色 [呉須] 濃青色 [焼成] 良好 [出土] Ⅱ郭－b　P－No.59
21	染付け 碗 15C後半～ 16C前半	体部上位　3.0mm 中位　3.0mm	口縁部で、大きく外弯する。	[外器面] 文様 [内器面] 口縁部に一条の界線。	[産地] 中国・景徳鎮系 [釉色] 灰白青色 [呉須] 灰黒青色 [焼成] 良好 [出土] Ⅱ郭－b
22	染付け 碗 16C（?）	体部上位　3.0mm 中位　2.5mm	口縁部で、大きく外弯する。	[外器面] 植物文様 [内外器面] 口縁部に２条の界線。	[産地] 中国・景徳鎮系 [釉色] 明白青色 [呉須] 青黒色 [焼成] 良好 [出土] Ⅱ郭－a
23	染付け 碗 16C	体部上位　3.0mm 中位　3.0mm 下位　3.0mm	復元口径　15.0cm 体部はやや内弯する。	[外器面] 斑点散らし文様 [内外器面] 口縁部に２条の界線。 （消えかけている）	[産地] 中国・景徳鎮系 [釉色] 灰白青色 [呉須] 青黒色 [焼成] 良好 [出土] Ⅱ郭－a
24	染付け 皿 16C	体部上位　2.5mm 中位　3.0mm 下位　4.0mm 底部中央　6.0mm	復元口径　12.0cm 底径　5.9cm 器高　3.5cm	[外器面] 焼成不良のため、呉須は消えている。 [外底面] 高台内は無釉。	[産地] 中国・景徳鎮系 [釉色] 白灰褐色 [焼成] 不良 [出土] Ⅱ郭－b　P－No.72
25	染付け 碗 16C前半 ～中葉	体部上位　2.0mm 中位　3.0mm	体部はやや内弯する。	[外器面] 花散らし文様 [内外器面] 口縁部に２条の界線。	[産地] 中国・景徳鎮系 [器色] 灰白色 [呉須] 灰黒青色 [焼成] 良好 [出土] Ⅱ郭－a
26	染付け 碗 16C前半 ～中葉	体部上位　3.0mm 中位　2.5mm	体部は、やや内弯する。	[外器面] 花散らし文様 [内外器面] 口縁部に２条の界線。	[産地] 中国・景徳鎮系 [器色] 白青色 [呉須] 青黒色 [焼成] 良好 [出土] Ⅱ郭－a　P－No.41
27	染付け 碗 16C前半 ～中葉	体部上位　3.0mm 中位　3.0mm	体部は、やや内弯する。	[外器面] 花散らし文様 [内外器面] 口縁部に２条の界線。	[産地] 中国・景徳鎮系 [器色] 白青色 [呉須] 青黒色 [焼成] 良好 [出土] Ⅱ郭－b
28	染付け 碗 16C前半 ～中葉	体部中位　3.0mm 下位　3.5mm 底部端部　2.0mm	体部は、やや内弯する。	[外器面] 花散らし文様 [内器面] 見込みに２条の界線。	[産地] 中国・景徳鎮系 [器色] 白青色 [呉須] 青黒色 [焼成] 良好 [出土] Ⅱ郭－a
29	染付け 碗 16C前半 ～中葉	体部上位　3.0mm 中位　2.0mm	体部は、やや内弯する。 口縁部は施釉で肥厚。	[外器面] 花散らし文様	[産地] 中国・景徳鎮系 [器色] 灰白青色 [呉須] 青黒色 [焼成] 良好 [出土] Ⅱ郭－a　P－No.19
30	染付け 碗 16C後半 ～中葉	体部上位　3.0mm 中位　2.5mm	体部は中途で屈曲する。	[外器面] 植物文様 [内外器面] 口縁部に２条の界線。	[産地] 中国・景徳鎮系 [器色] 灰白色 [呉須] 青黒色 [焼成] 良好 [出土] Ⅱ郭－a
31	染付け 碗 16C前半 ～中葉	体部上位　2.5mm 下位　3.0mm	体部は、やや内弯する。	[外器面] 花散らし文様 [内器面] 見込みに文様	[産地] 中国・景徳鎮系 [器色] 灰白青色 [呉須] 青黒色 [焼成] 良好 [出土] Ⅱ郭－a　P－No.19
32	染付け 碗 16C前半 ～中葉	体部上位　3.0mm 下位　4.0mm	体部は、やや内弯する。	[外器面] 口縁部に文様 [内器面] 口縁部に界線	[産地] 中国・景徳鎮系 [器色] 灰白色 [呉須] 薄青黒色 [焼成] 良好 [出土] Ⅱ郭－b　P－No.73
33	染付け 碗 16C前半 ～中葉	体部上位　3.0mm 下位　3.0mm	体部は、やや内弯する。	[外器面] 口縁部に文様 体部に蓮弁文様 [内器面] 口縁部に界線	[産地] 中国・景徳鎮系 [器色] 灰白青色 [呉須] 青色 [焼成] 良好 [出土] Ⅱ郭

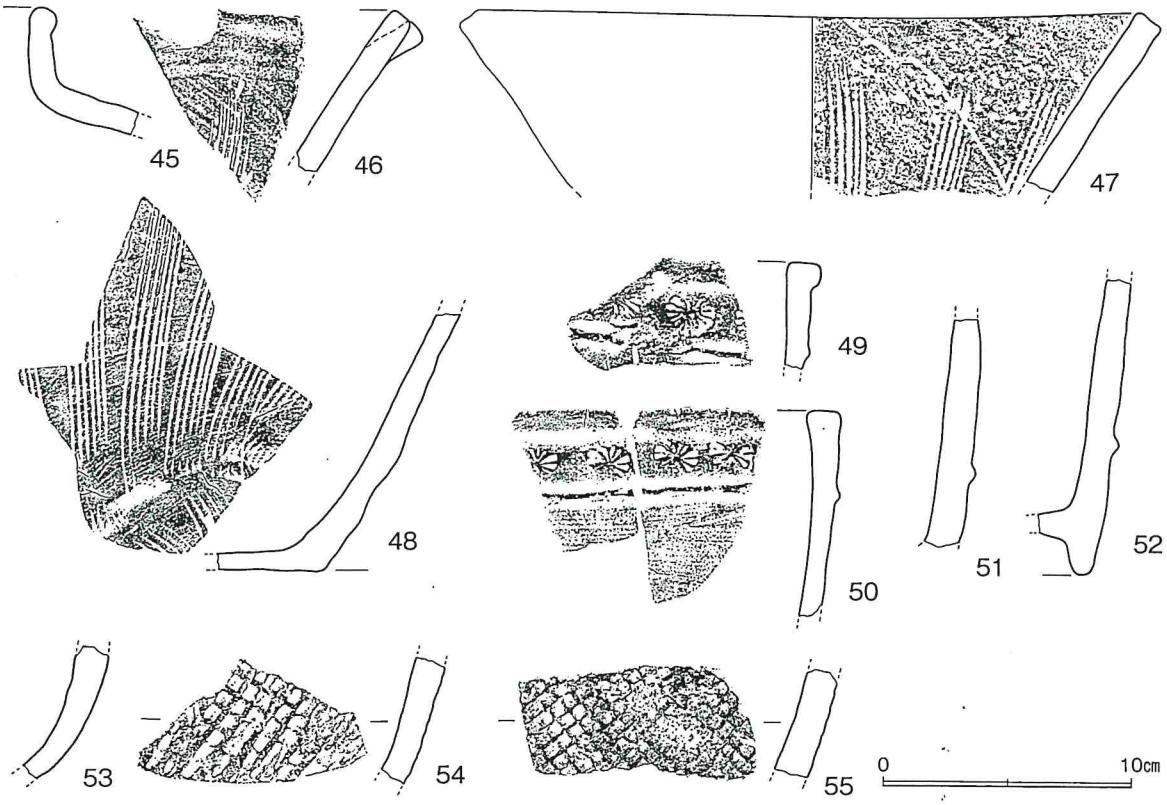
第５表　Ⅱ郭出土遺物観察表②



第24図　Ⅱ郭出土遺物実測図②

No	器　種	器　厚	形　　態	調整・文様	備　　考
34	染付け 碗 16C前半 ～中葉	体部上位　3.0mm 中位　4.0mm 下位　5.0mm	口縁直口。	[外器面] 植物文様。 [内器面] 口縁部に一条の界線。	[産地] 中国・景徳鎮系 [器色] 灰白色 [呉須] 黒青色 [焼成] やや良好 [出土] Ⅱ郭－b
35	染付け 碗 16C後半	体部中位　3.0mm 下位　4.0mm	体部はやや内弯する。	[外器面] 瑶銘文。	[産地] 中国・景徳鎮系 [器色] 灰白青色 [呉須] 青色 [焼成] 良好 [出土] Ⅱ郭－a　P－No.73
36	染付け 皿 16C後半	体部上位　3.0mm 下位　4.0mm	復元口径 11.1cm 口縁部で内弯する。	[外器面] 文様。 [内器面] 見込みに1条の界線。 口縁部に2条の界線。	[産地] 中国・福建省 [器色] 灰白褐色 [呉須] 灰青黒色 [焼成] 良好 [出土] Ⅱ郭
37	染付け 皿 16C後半	体部下位　4.0mm 底部中央　7.0mm 端部　8.0mm	碁笥底皿。 底径　3.8cm	[内器面] 見込みに人形寿字文。	[産地] 中国・福建省 [器色] 灰白褐色 [呉須] 灰青黒色 [焼成] 良好 [出土] Ⅱ郭
38	染付け 碗 16C末	体部中位　3.0mm 下位　4.0mm 底部中央　4.0mm	底径　3.9cm 高台高　7.5mm	[内外器面] 瑶銘文。 [外底面] 高台内「長命富貴」銘。	[産地] 中国・景徳鎮系 [器色] 灰白青色 [呉須] 青色 [焼成] 良好 [出土] Ⅱ郭
39	陶　器 甕 15C～16C	口唇部　31.0mm 体部上位 20.0mm 肩部 12.0mm	復元口径　21.0cm 火膨れがある。	[内外器面] 横位の沈線が廻る。	[産地] 中国 [色調] 暗褐色（褐釉） [焼成] 良好 [出土] Ⅱ郭－a
40	陶　器 灯火具	――――	上位直径　5.4cm 中位直径　2.2cm 復元底径　4.2cm	[内底面] 中央に凸 [外底面] 糸切り痕 ※廃城後の持ち込み。	[産地] 肥前の可能性あり [色調] 黄灰黒褐色（鉄釉） [胎土] 精良 [焼成] 良好 [出土] Ⅱ郭－a
41	土師器 杯	体部下位　5.0mm 底部中央　4.0mm 端部　5.0mm	底径　5.7cm 外底端は肥厚し、角張る。	[内外器面] ロクロ痕 [外底面] 糸切り痕	[色調] 乳白褐色 [胎土] 精良 [焼成] 堅緻 [出土] Ⅱ郭－a
42	土師器 皿	体部下位　6.0mm 底部中央　6.0mm 端部　8.0mm	底径　5.3cm 外底端は肥厚する。 底部中央は凹む。	[外底面] 糸切り痕は摩滅。	[色調] 明褐白色 [胎土] 精良 [焼成] 堅緻 [出土] Ⅱ郭－a
43	土師器 皿	体部上位　4.0mm 中位　4.0mm 下位　5.0mm	体部は直線的。	――――	[色調] 乳白褐色 [胎土] 精良 [焼成] 堅緻 [出土] Ⅱ郭－a
44	土　錘	――――	長さ　4.5cm 幅　1.4cm 重さ　7.08g	表面はやや歪。	[色調] 灰褐色 [胎土] 精良 [焼成] 堅緻 [出土] Ⅱ郭－a
45	甕 （瓦質）	口縁部　12.0mm 体部上位 11.0mm	口縁は直立する。	[内外器面] 丁寧なナデ。	[色調] 乳灰白色 [胎土] 白色粒が混じる [焼成] 堅緻 [出土] Ⅱ郭－a
46	擂　鉢 （須恵質）	体部上位 11.0mm 下位 11.0mm	口縁部に注ぎ口が付く。	[内器面] 条線の一単位は6本。 上位に指ナデ。	[色調] 灰黒色 [胎土] 精良 [焼成] 堅緻 [出土] Ⅱ郭－a
47	擂　鉢 （土師質）	口縁部　11.0mm 体部上位 11.0mm 下位 12.0mm	復元口径　26.6cm 体部は直線的。	[内器面] 条線の一単位は6本。	[色調] 明橙褐色 [胎土] やや粗い [焼成] やや軟 [出土] Ⅱ郭
48	擂　鉢 （瓦質）	体部中位　8.0mm 下位 13.0mm 底部端部　8.0mm	底部は薄い壁。 体部は直線的。	[内器面] 条線の一単位は6本。	[色調] 灰白褐色 [胎土] 精良 [焼成] 堅緻 [出土] Ⅱ郭－b　P－No.74
49	火　舎 （土師質）	口縁部　14.0mm 体部上位 10.0mm 下位　7.0mm	口唇部は偏平。 一条の突帯が廻る。	[外器面] 突帯間に花文印。	[色調] 暗灰茶色 [胎土] 精良 [焼成] 良好 [出土] Ⅱ郭－a

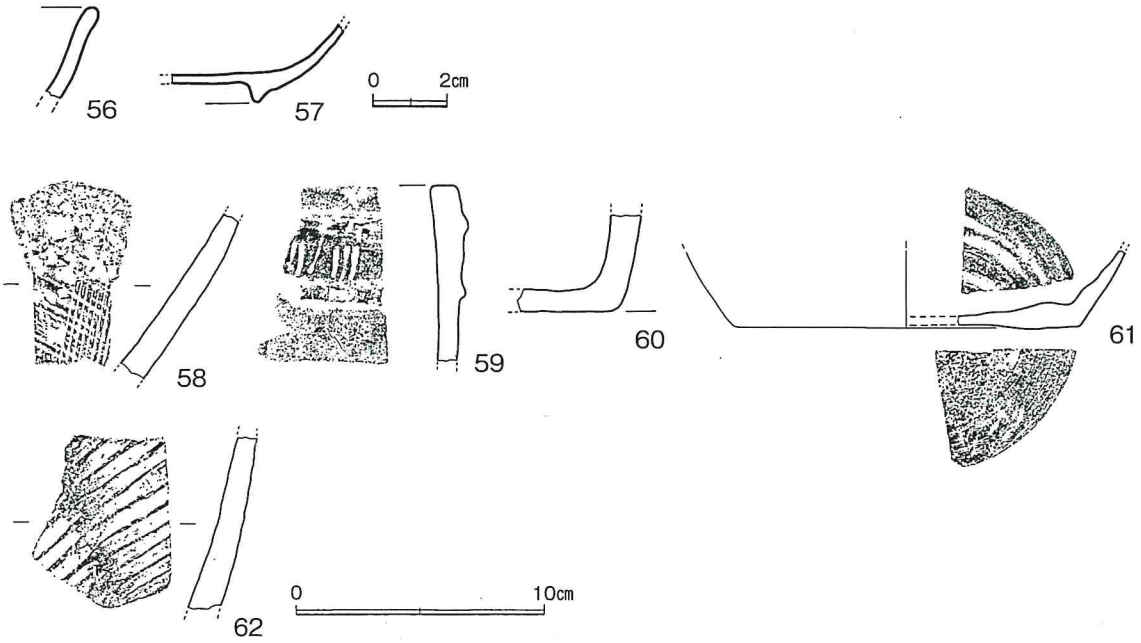
第6表　Ⅱ郭出土遺物観察表③



第25図　Ⅱ郭出土遺物実測図③

No	器　種	器　厚	形　　態	調整・文様	備　　考
50	火　舎 (土師質)	口縁部　14.0mm 体部上位　9.0mm 下位　8.0mm	口唇部は偏平。 一条の突帯が廻る。	[外器面] 横ナデ。 突帯間に花文印。 [内器面] 斜めの刷毛目。	[色調] 茶褐色 [胎土] 精良 [焼成] 良好 [出土] Ⅱ郭－a
51	火　舎 (土師質)	体部上位 11.0mm 下位 14.0mm	一条の突帯が廻る。 突帯間に花文印。	[外器面] 横ナデ。 [内器面] 斜めの刷毛目。	[色調] 外：褐色 内：暗灰褐色 [胎土] やや精良 [焼成] 良好 [出土] Ⅱ郭－a　P－No.42
52	火　舎 (土師質)	体部上位 10.0mm 下位 14.0mm	脚高　1.2cm 体部は直線的。 一条の突帯が廻る。	[外器面] 横ナデ。 [内器面] 櫛形工具で、横、斜めのナデ。	[色調] 灰白褐色 [胎土] 小石が混じる [焼成] 良好 [出土] Ⅱ郭－a　P－No.42
53	土　器 (土師質)	体部上位 12.0mm 下位　9.0mm	体部は内弯する。	[内外器面] 横ナデ。	[色調] 外：灰褐色 内：乳褐色 [胎土] 精良 [焼成] 良好 [出土] Ⅱ郭－a
54	須恵器	体部上位 12.0mm 下位 11.0mm	体部は内弯する。	[外器面] 格子目叩き [内器面] 横ナデ	[色調] 灰黒色 [胎土] 精良 [焼成] 良好 [出土] Ⅱ郭－a
55	須恵器	体部上位 13.0mm 下位 14.0mm	体部は内弯する。	[外器面] 格子目叩き [内器面] 横ナデ	[色調] 灰色 [胎土] 精良 [焼成] 良好 [出土] Ⅱ郭－a

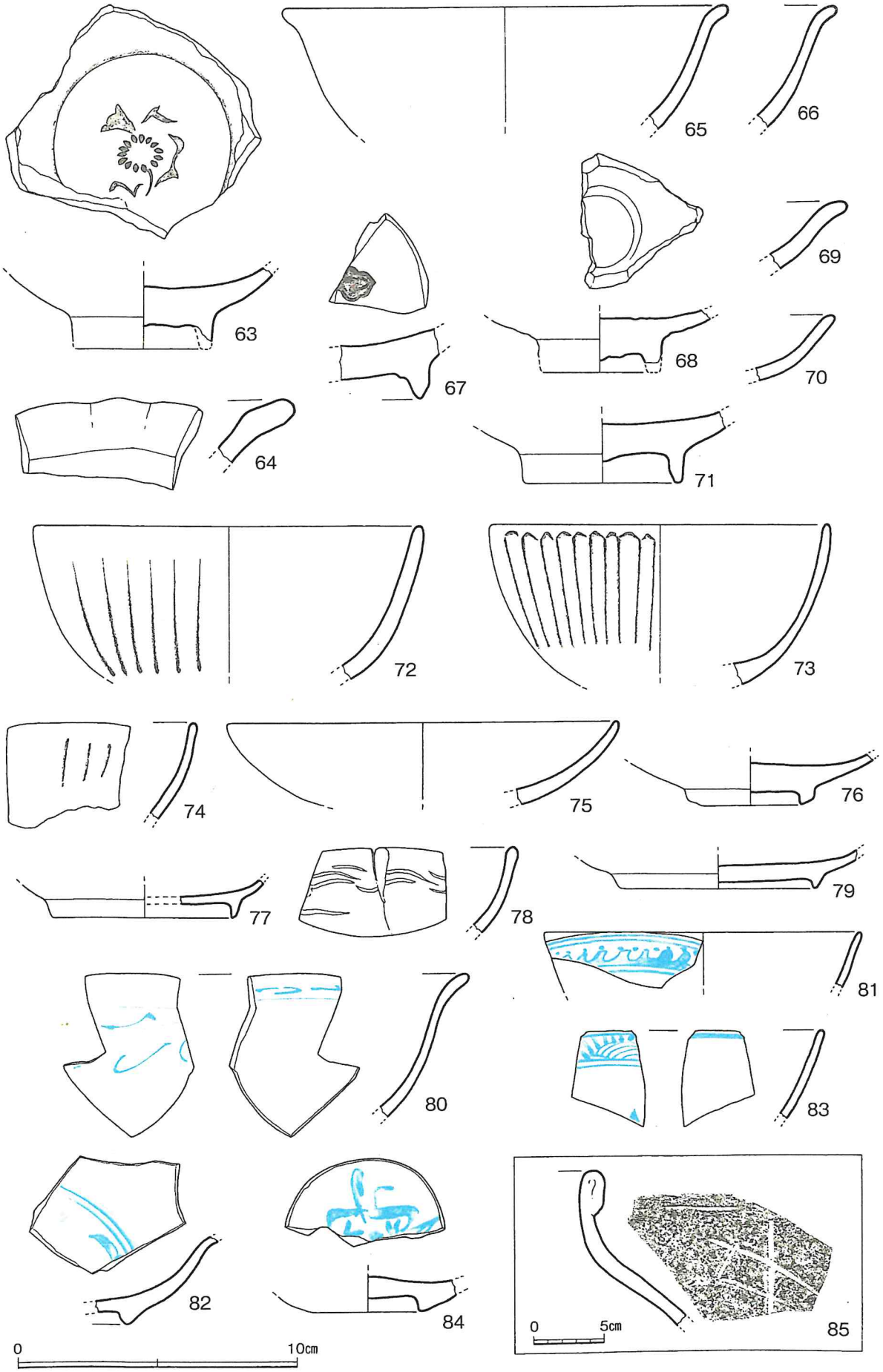
第７表　Ⅱ郭出土遺物観察表④



第26図　Ⅲ郭出土遺物実測図

No	器種	器厚	形態	調整・文様	備考
56	青磁 碗 14C後半～ 15C前半	体部上位　4.0㎜ 下位　4.0㎜	口縁部で やや外弯する。	――――	[産地] 中国 [釉色] 灰白緑色 [焼成] やや良好 [出土] Ⅲ郭3T
57	白磁 皿 16C	体部下位　3.5㎜ 底部中央　3.0㎜ 端部　4.0㎜	体部・底部とも薄壁。	[外底面] 畳付きのみ無釉。	[産地] 中国・景徳鎮 [釉色] 灰白色 [焼成] やや良好 [出土] Ⅲ郭1T
58	擂鉢 (土師質)	体部上位　9.0㎜ 下位　11.0㎜	体部は直線的に伸びる。	[内器面] 条線の一単位は8本。	[色調] 灰黒色 [胎土] やや粗 [焼成] 良好 [出土] Ⅲ郭1T
59	火舎 (土師質)	体部上位　12.0㎜ 中位　10.0㎜ 下位　8.0㎜	2条の突帯が付く。	[外器面] 突帯間「｜」の押型文。 [内器面] 横ナデ	[色調] 灰黒褐色 [胎土] 精良 [焼成] 良好 [出土] Ⅲ郭1T
60	甕	体部下位　12.0㎜ 底部　9.0㎜	体部は直立する。	――――	[色調] 外：灰白橙色 内：灰黒色 [胎土] 精良 [焼成] 良好 [出土] Ⅲ郭1T
61	鉢	体部下位　3.0㎜ 底部中央　4.0㎜ 端部　9.0㎜	外底端は角張る。 内底面端部で肥厚。	[内外器面] 横ナデ	[色調] 明橙色 [胎土] 精良 [良好] 良好 [出土] Ⅲ郭1T
62	須恵器	体部上位　9.0㎜ 下位　12.0㎜	体部は直線的に伸びる。	[外器面] ヘラナデ [内器面] 横ナデ	[色調] 灰白色 [胎土] 精良 [焼成] 良好 [出土] Ⅲ郭2T

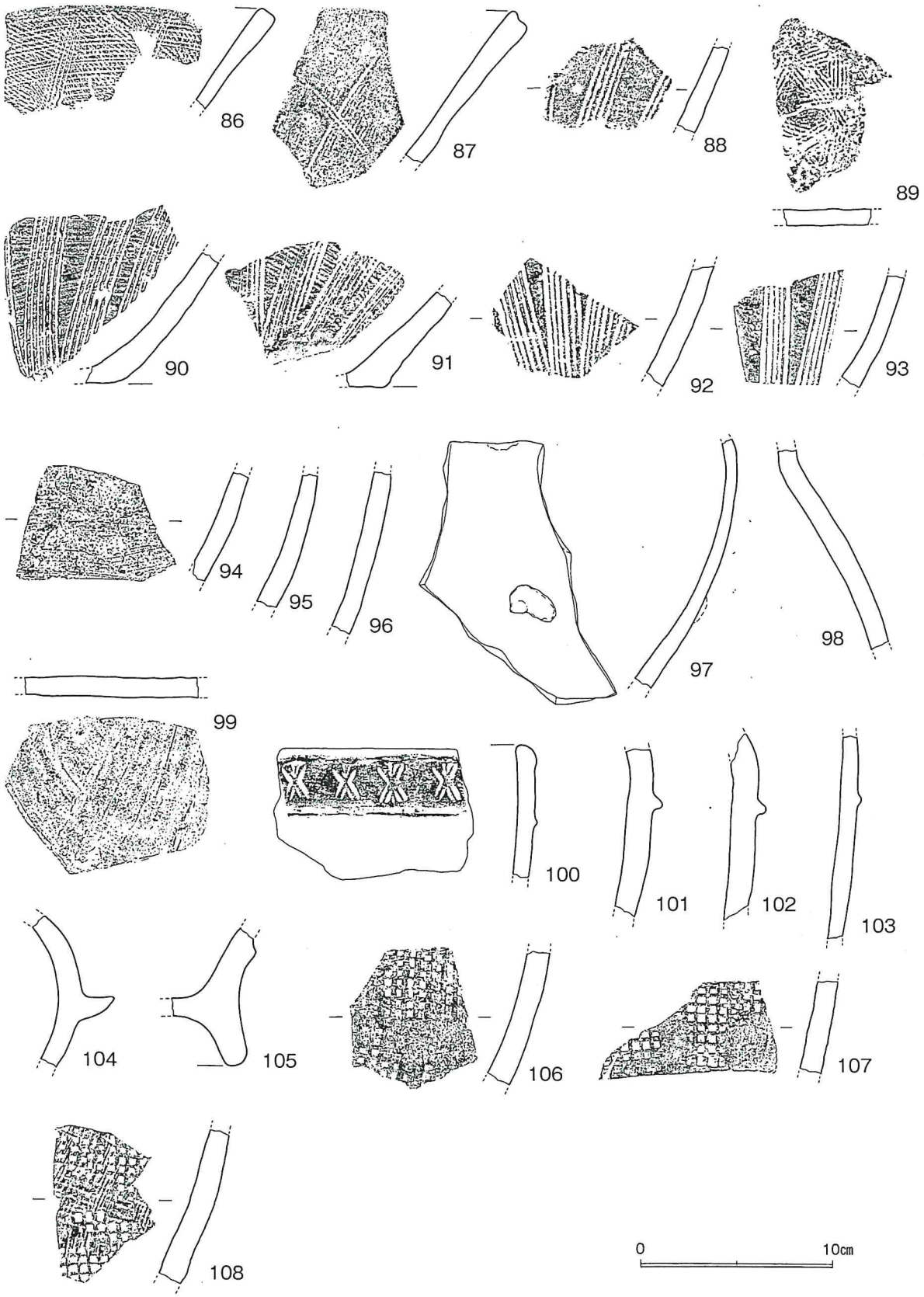
第8表　Ⅲ郭出土遺物観察表



第27図　Ⅳ郭出土遺物実測図①

No	器　種	器　厚	形　　態	文様・手法	備　　考
63	青　磁 碗 14C後半～ 15C前半	体部下位　5.0mm 底部中央 14.0mm 端部　9.0mm	復元底径　4.8cm	[内器面] 見込みに草花の印文。 [外底面] 高台内に溶接物。	[産地] 中国・竜泉系 [釉色] 灰緑色 [焼成] 良好（貫入） [出土] Ⅳ郭
64	青　磁 盤 14C後半～ 15C前半	体部上位　9.0mm 中位　8.0mm	口縁部で、大きく外弯する。	――――	[産地] 中国・竜泉系 [釉色] 緑灰色 [焼成] 被熱している。 [出土] Ⅳ郭７Ｔ　Ｐ－No.5
65	青　磁 碗 14C後半～ 15C中葉	体部上位　4.0mm 中位　5.0mm 下位　5.0mm	復元口径　16.0cm	――――	[産地] 中国・竜泉系 [釉色] 灰白緑色 [焼成] 良好（貫入あり） [出土] Ⅳ郭
66	青　磁 碗 14C後半～ 15C中葉	体部上位　4.0mm 中位　4.5mm 下位　5.0mm	口縁部で、外弯する。	――――	[産地] 中国・竜泉系 [釉色] 灰白緑色 [焼成] 良好（貫入あり） [出土] Ⅳ郭
67	青　磁 碗 14C後半～ 15C中葉	体部下位 10.0mm 底部端部 13.0mm	底部は厚壁。	[外底面] 高台内は無釉。	[産地] 中国・竜泉系 [釉色] 暗緑茶色 [焼成] 良好 [出土] Ⅳ郭
68	青　磁 碗 14C後半～ 15C中葉	体部下位　5.0mm 底部中央 15.0mm	復元底径　4.3cm	[内底面] 見込みに陽刻文様。 [外底面] 高台内は無釉。	[産地] 中国 [釉色] 深緑 [焼成] 良好 [出土] Ⅳ郭
69	青　磁 皿 14C後半～ 15C中葉	体部上位　6.0mm 中位　7.0mm	口縁部で外弯する。	――――	[産地] 中国・竜泉系 [釉色] 灰緑色 [焼成] やや良好 [出土] Ⅳ郭７Ｔ　Ｐ－No.3
70	青　磁 皿 14C～15C	体部上位　4.5mm 中位　4.0mm 下位　5.0mm	体部は内弯する。	――――	[産地] 中国 [釉色] 灰白青色 [焼成] 不良 [出土] Ⅳ郭３Ｔ　Ｐ－No.6
71	青　磁 碗 15C	体部下位　9.0mm 底部中央 14.0mm	底径　5.8cm	[内底面] 見込みに印花文（?） [外底面] 高台内は無釉。	[産地] 中国 [釉色] 灰白緑 [焼成] 良好（貫入） [出土] Ⅳ郭　北斜面
72	青　磁 碗 15C中葉～ 16C前半	体部上位　5.0mm 下位　5.0mm	口径　14.0cm	[外器面] 剣先蓮弁文様。	[産地] 中国・竜泉系 [釉色] [焼成] 被熱している。 [出土] Ⅳ郭１Ｔ　Ｐ－No.1
73	青　磁 碗 15C後半～ 16C前半	体部上位　3.5mm 中位　3.0mm 下位　5.0mm	復元口径　12.3cm	[外器面] 剣先蓮弁文様。	[産地] 中国・福建省系 [釉色] 灰緑色 [焼成] 良好（貫入） [出土] Ⅳ郭４Ｔ　Ｐ－No.2
74	青　磁 碗 15C～16C	体部上位　4.0mm 中位　4.0mm 下位　3.0mm	体部は内弯する。	[外器面] 剣先蓮弁文様（?）	[産地] 中国 [釉色] 灰白褐色 [焼成] 不良 [出土] Ⅳ郭７Ｔ　Ｐ－No.2
75	青磁（?） 碗 16C（?）	体部上位　3.0mm 中位　4.0mm	復元口径　14.1cm	――――	[産地] 中国・福建省系 [釉色] 灰白青緑色 [焼成] 良好 [出土] Ⅳ郭10Ｔ　Ｐ－No.1
76	白　磁 皿 14C後半～ 15C前半	体部中位　3.0mm 下位　7.0mm 底部中央 10.0mm	底径　3.5cm 底部は厚壁。	――――	[産地] 中国 [釉色] 白黄褐色 [焼成] 良好 [出土] Ⅳ郭
77	白　磁 皿 16C	体部下位　3.0mm 底部中央　3.0mm	底径　6.6cm	[外底面] 畳付きのみ無釉。	[産地] 中国・景徳鎮系 [釉色] 灰白色 [焼成] やや良好 [出土] Ⅳ郭２Ｔ　Ｐ－No.2
78	白　磁 皿 16C後半	体部上位　5.0mm 中位　4.0mm 下位　3.5mm	口縁部で、やや丸味を帯びる。	[外器面] 波状の沈線。	[産地] 中国・福建省系 [釉色] 灰白色 [焼成] 良好 [出土] Ⅳ郭　北斜面
79	白　磁 皿 16C後半	体部下位　3.5mm 底部中央　6.0mm	底径　7.0cm	――――	[産地] 中国・景徳鎮系 [釉色] 灰白色 [焼成] ヒビ焼き [出土] Ⅳ郭
80	染付け 碗 14C後半～ 15C	体部上位　4.0mm 中位　3.0mm 下位　4.0mm	体部は内弯した後、口縁部で大きく外弯する。	[外器面] 細沈線の文様。	[産地] ベトナム [器色] 白褐色 [呉須] 薄青黒色 [焼成] 不良 [出土] Ⅳ郭

第９表　Ⅳ郭出土遺物観察表①



第28図　Ⅳ郭出土遺物実測図②

No	器　種	器　厚	形　　態	文様・手法	備　　考
81	染付け 碗 15C後半～ 16C前半	体部上位　3.0mm 下位　3.0mm	復元口径　11.4cm 体部は内弯する。 被熱している。	[外器面] 帯状文様。 [内器面] ２条の界線。	[産地] 中国・景徳鎮系 [器色] 白青色 [呉須] 青色 [焼成] 被熱している。 [出土] Ⅳ郭２T　P－No.2
82	染付け 碗 15C後半～ 16C前半	体部中位　3.0mm 下位　4.0mm 底部端部　4.5mm	体部は内弯した後、口縁部で大きく外弯する。	[内器面] 見込みに界線。 [外底面] 畳付きのみ無釉。	[産地] 中国・景徳鎮系 [器色] 灰白色 [呉須] 薄い青 [焼成] 良好（貫入あり） [出土] Ⅳ郭
83	染付け 碗 16C前半 ～中葉	体部上位　3.0mm 下位　3.0mm	体部は内弯する。	[外器面] 口縁部に帯文様。 [内器面] 口縁部に一条の界線。	[産地] 中国・景徳鎮系 [器色] 灰白青色 [呉須] 青黒色 [焼成] やや良好 [出土] Ⅳ郭　北斜面
84	染付け 皿 16C後半	体部下位　7.0mm 底部中央　8.0mm 端部　5.0mm	碁笥底皿。 復元底径　3.7cm	[内器面] 見込みに人形寿字文。	[産地] 中国・福建省 [器色] 灰白褐色 [呉須] 薄い青黒色 [焼成] 良好 [出土] Ⅳ郭　北斜面
85	甕 （備前） 15C（?）	口縁部　19.0mm 体部上位　10.0mm 中位　10.0mm	口縁部は折り返し成形。	[外器面] 肩部に薄く釉がかかる。	[色調] 内器面：小豆色 外器面：灰白褐色 [胎土] やや粗い [焼成] 良好 [出土] Ⅳ郭３T　P－No.2
86	擂　鉢 （土師質）	体部上位　11.0mm 下位　7.0mm	体部は直線的に延びる。	[内器面] 条線の一単位は５本。 櫛状掻き目で横・斜め方向に器面成形。	[色調] 黒灰色 [胎土] 精良 [焼成] 良好 [出土] Ⅳ郭２T
87	擂　鉢 （土師質）	体部上位　12.0mm 下位　9.0mm	体部は直線的に延びる。	[内器面] 条線は摩耗している。	[色調] 灰白色 [胎土] やや粗い [焼成] やや良好 [出土] Ⅳ郭２T　P－No.2
88	擂　鉢 （土師質）	体部上位　8.0mm 下位　10.0mm	体部は直線的に延びる。	[内器面] 条線の単位は５本。	[色調] 乳灰褐色 [胎土] 精良 [焼成] 良好 [出土] Ⅳ郭11T　P－No.3
89	擂　鉢 （土師質）	底部中央　8.0mm	平底。	[内器面] ６本の条線を確認。	[色調] 内器面：灰黒色 外器面：灰褐色 [胎土] 精良 [焼成] 良好 [出土] Ⅳ郭２T　P－No.3
90	擂　鉢 （須恵質）	体部中位　10.0mm 下位　12.0mm 底部端部　8.0mm	体部は直線的に延びる。	[内器面] 条線の一単位は６本。 器面は横ナデ。	[色調] 灰色 [胎土] 精良 [焼成] 良好 [出土] Ⅳ郭　北斜面
91	擂　鉢 （須恵質）	体部中位　10.0mm 下位　16.0mm 底部端部　9.0mm	体部は直線的に延びる。	[内器面] 条線の一単位は７本。 器面は斜めのナデ。	[色調] 灰黒褐色 [胎土] やや粗い [焼成] 良好 [出土] Ⅳ郭　北斜面
92	擂　鉢 （須恵質）	体部中位　10.0mm	体部は、やや内弯する。	[内器面] 条線の一単位は７本。	[色調] 灰色 [胎土] 精良 [焼成] 良好 [出土] Ⅳ郭　北斜面
93	擂　鉢 （須恵質）	体部中位　9.0mm	体部は、やや内弯する。	[内器面] 条線の一単位は５本。	[色調] 灰色 [胎土] 精良 [焼成] 良好 [出土] Ⅳ郭３T　P－No.3
94	甕	体部中位 10.0mm	体部は直線的に延びる。	[外器面] 縦位のナデ後、横ナデ。 [内器面] 横ナデ。	[色調] 暗小豆色 [胎土] 小礫が混じる [焼成] 良好 [出土] Ⅳ郭　北斜面
95	甕 （須恵質）	体部上位　8.0mm 下位　10.0mm	体部は、やや内弯する。	[内外器面] 横ナデ。	[色調] 内器面：灰白褐色 外器面：灰色 [胎土] 精良 [焼成] 良好 [出土] Ⅳ郭８T　P－No.1
96	甕	体部中位 10.0mm	体部は、やや内弯する。	[外器面] 黒褐色の熔着物。 [内器面] 横ナデ。	[色調] 内器面：灰色 外器面：黒褐色 [胎土] 精良 [焼成] 良好 [出土] Ⅳ郭８T

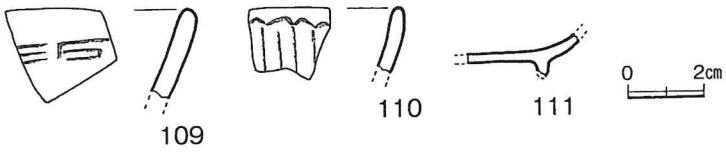
第10表　Ⅳ郭出土遺物観察表②

No	器　種	器　厚	形　　態	文様・手法	備　　考
97	甕 （須恵質）	体部上位　7.0㎜ 下位　10.0㎜	外器面中位に突帯の痕が残る。	[内外器面] 表面に薄く熔着物が付く [内器面] 1㎜程の気泡あり。	[色調] 灰白黄色 [胎土] 精良 [焼成] やや良好 [出土] Ⅳ郭８Ｔ　Ｐ－No.1
98	甕 （備前）	体部上位　9.0㎜ 下位　11.0㎜	――――――	[内外器面] 横ナデ。	[色調] 内：灰白小豆色 外：灰白褐色 [胎土] 精良 [焼成] 良好 [出土] Ⅳ郭３Ｔ　Ｐ－No.2
99	甕 （須恵質）	底部中央　10.0㎜	平底。	[外底面] ナデ。 [内底面] 見込みに1㎜程の気泡あり。	[色調] 内：灰褐白色 外：灰色 [胎土] やや精良 [焼成] 良好 [出土] Ⅳ郭８Ｔ　Ｐ－No.1
100	火　舎 （土師質）	体部上位　9.0㎜ 下位　8.0㎜	1条の突帯が付く。	[外器面] 突帯間に「×」の印刻文様。	[色調] 茶褐色 [胎土] 精良 [焼成] 良好 [出土] Ⅳ郭　北斜面
101	火　舎 （瓦質）	体部上位　12.0㎜ 下位　12.0㎜	1条の突帯が付く。	[外器面] ヘラナデ。	[色調] 灰白褐色 [胎土] 小石が混じる。 [焼成] 良好 [出土] Ⅳ郭　北斜面
102	火　舎 （瓦質）	体部上位　12.0㎜ 下位　12.0㎜	1条の突帯が付く。	[外器面] ヘラナデ。	[色調] 灰白褐色 [胎土] 小石が混じる。 [焼成] 良好 [出土] Ⅳ郭　北斜面
103	火　舎 （土師質）	体部上位　8.0㎜ 下位　9.0㎜	1条の突帯が付く。	[内外器面] 横ナデ。	[色調] 灰褐色 [胎土] 精良 [焼成] やや軟 [出土] Ⅳ郭　北斜面
104	羽　釜 （土師質）	体部上位　10.0㎜ 中位　11.0㎜	羽根が付く。	[内外器面] 横ナデ。	[色調] 明橙色 [胎土] 精良 [焼成] 良好 [出土] Ⅳ郭
105	火　舎 （土師質）	体部下位　14.0㎜ 底部端部　10.0㎜ 脚部　17.0㎜	体部は、外弯気味に伸びる。	[内外器面] 横ナデ。	[色調] 桃灰褐色 [胎土] 精良 [焼成] 良好 [出土] Ⅳ郭
106	須恵器	体部上位　12.0㎜ 下位　13.0㎜	体部は、やや内弯する。	[外器面] 格子目叩き。 [内器面] 横位のハケ目。	[色調] 内：灰色 外：黒灰色 [胎土] 精良 [焼成] 良好 [出土] Ⅳ郭
107	須恵器	体部上位　11.0㎜ 下位　12.0㎜	体部は直線的に伸びる。	[外器面] 格子目叩き。 [内器面] 横ナデ。	[色調] 灰色 [胎土] 精良 [焼成] 良好 [出土] Ⅳ郭３Ｔ　Ｐ－No.2
108	須恵器	体部上位　12.0㎜ 下位　13.0㎜	体部は、やや内弯する。	[外器面] 格子目叩き。 [内器面] 横ナデ。	[色調] 灰色 [胎土] 精良 [焼成] 良好 [出土] Ⅳ郭３Ｔ　Ｐ－No.5

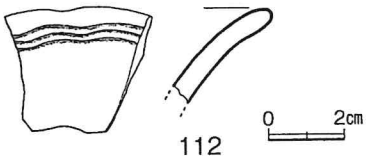
第11表　Ⅳ郭出土遺物観察表③

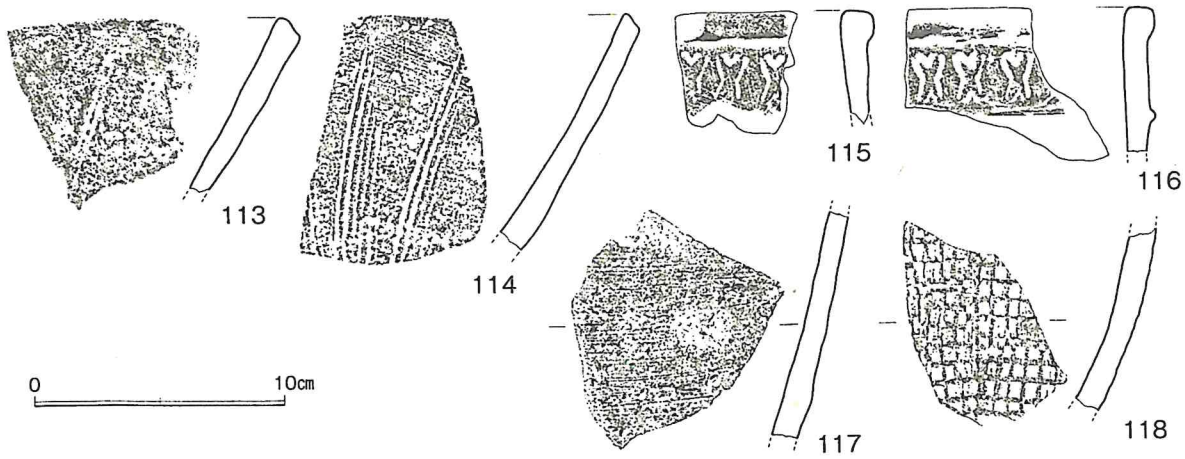
No	器　種	器　厚	形　　態	調整・文様	備　　考
109	青　磁 碗 15C	体部上位　5.0㎜ 中位　5.0㎜	口縁直口。	[外器面] 不明瞭な雷文帯。	[産地] 中国・竜泉系 [釉色] 灰白緑色 [焼成] やや不良 [出土] Ⅴa郭　1Ｔ
110	青　磁 碗 15C	体部上位　4.0㎜ 中位　4.0㎜	体部は、やや内弯する。	[外器面] 剣先蓮弁文。	[産地] 中国 [釉色] 明灰白緑色 [焼成] 良好（貫入あり） [出土] Ⅴa郭　2Ｔ
111	白　磁 皿 16C	体部下位　3.0㎜ 底部中央　3.0㎜	体部・底部とも薄壁。	――――――	[産地] 中国・景徳鎮 [釉色] 白色 [焼成] やや良好 [出土] Ⅴa郭　1Ｔ

第12表　Ⅴ郭出土遺物観察表

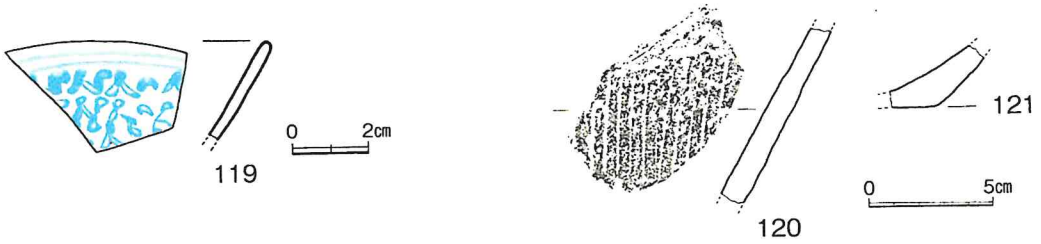


第29図　Ⅴ郭出土遺物実測図





第30図　Ⅵ郭出土遺物実測図



第31図　Ⅶ郭出土遺物実測図

No	器　種	器　厚	形　　態	調整・文様	備　　考
112	青　磁 皿 15C	体部上位　6.0mm 中位　6.0mm	稜花形。	[内器面] 口縁部に沈線の文様。	[産地] 中国・竜泉系 [釉色] 暗緑褐色 [焼成] 良好（貫入あり） [出土] Ⅵ郭
113	擂　鉢 （土師質）	体部上位 11.0mm 下位　8.0mm	口縁直口。	[内器面] 磨滅して条線は確認できない。	[色調] 明橙色 [胎土] やや粗 [焼成] やや軟 [出土] Ⅵ郭
114	擂　鉢 （土師質）	体部上位　8.0mm 下位　8.0mm	体部は、やや内弯する。	[内器面] 条線の一単位は５本。	[色調] 白灰色 [胎土] 精良 [焼成] やや軟 [出土] Ⅵ郭
115	火　舎 （土師質）	体部上位 14.0mm 下位　8.0mm	体部は直線的。	[外器面] 印刻文。	[色調] 橙褐色 [胎土] 精良 [焼成] 良好 [出土] Ⅵ郭
116	火　舎 （土師質）	体部上位 13.0mm 下位　8.0mm	体部は直線的。 一条の突帯。	[外器面] 印刻文（115と同文様）	[色調] 橙褐色 [胎土] 精良 [焼成] 良好 [出土] Ⅵ郭
117	甕 （常滑）	体部上位　8.0mm 下位 10.0mm	体部は、やや内弯する。	[外器面] 横ナデ後、刷毛目。 [内器面] 指押圧痕。	[色調] 暗小豆色 [胎土] やや粗 [焼成] 良好 [出土] Ⅵ郭
118	須恵器	体部上位 11.0mm 下位 10.0mm	体部は、やや内弯する。	[外器面] 格子目叩き。 [内器面] 横ナデ。	[色調] 灰褐色 [胎土] 精良 [焼成] 良好 [出土] Ⅵ郭

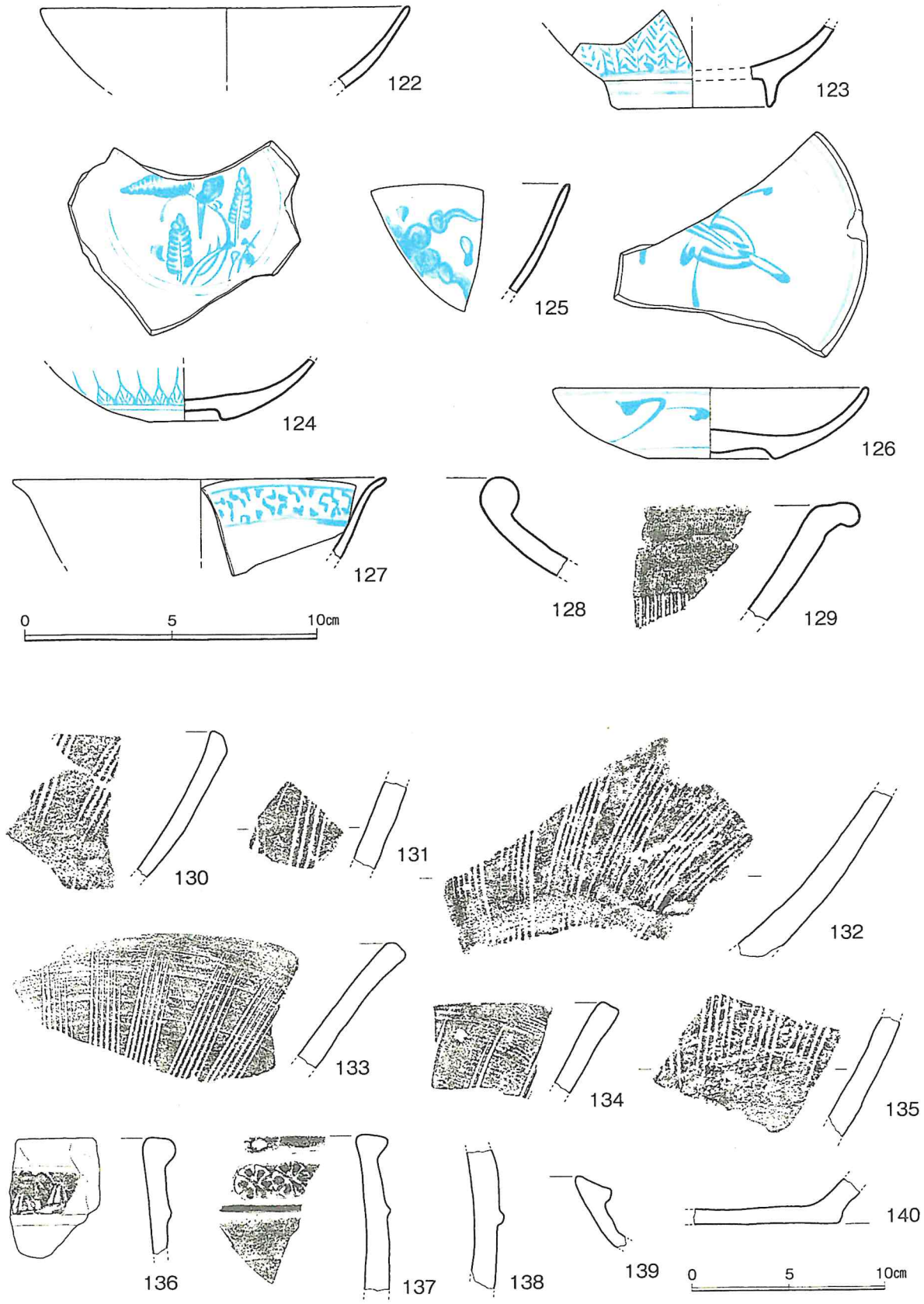
第13表　Ⅵ郭出土遺物観察表

No	器　種	器　厚	形　　態	調整・文様	備　　考
119	染付け 碗 16C前半 ～中葉	体部上位　3.5mm 中位　3.0mm	口縁部で、やや肥厚する	[外器面] 花散らし文様。 [内器面] 口縁部の界線は不明瞭。	[産地] 中国・景徳鎮系 [器色] 灰白青色 [呉須] 青色 [焼成] 良好 [出土] Ⅶ郭１Ｔ
120	擂　鉢 （土師質）	体部上位　9.0mm 下位 10.0mm	体部は直線的。	[内器面] 11本の条線が確認できるが、磨滅しており、不明瞭。	[色調] 乳灰褐色 [胎土] やや粗 [焼成] やや軟 [出土] Ⅶ郭
121	鉢	体部下位　9.0mm 底部端部　9.0mm	体部は、外弯気味に伸びる。	[内外器面] ナデ。	[色調] 乳褐色 [胎土] 精良 [焼成] やや軟 [出土] Ⅶ郭２Ｔ　Ｐ－No.2

第14表　Ⅶ郭出土遺物観察表

No	器　種	器　厚	形　　態	調整・文様	備　　考
122	白　磁 皿 14C～15C	口縁部　3.0mm 体部中位　4.0mm	復元口径　12.6cm 体部は、やや内弯する。	――――	[産地] 中国 [釉色] 灰白褐色 [焼成] 良好（貫入あり） [出土] Ⅷ郭　１Ｔ
123	染付け 碗 16C前半 ～中葉	体部下位　5.0mm 底部端部　4.0mm	復元底径　5.3cm	[外器面] 蕉葉文様。 [内底面] 見込みに文様と界線。 [外底面] 高台に界線。	[産地] 中国・景徳鎮系 [器色] 灰白青色 [呉須] 黒青色 [焼成] 良好 [出土] Ⅷ郭　１Ｔ
124	染付け 皿 16C前半 ～中葉	体部中位　2.5mm 下位　3.0mm 底部中央　4.0mm 端部　6.0mm	碁笥底皿。 底径　2.5cm	[外器面] 蕉葉文様。	[産地] 中国・景徳鎮系 [器色] 灰白褐色 [呉須] 薄黒青色 [焼成] 良好 [出土] Ⅷ郭　１Ｔ
125	染付け 碗 16C後半	口縁部　2.5mm 体部中位　2.0mm 下位　2.0mm	体部は、やや内弯する。	[内外器面] 口縁部に界線。 [外器面] 文様。	[産地] 中国・景徳鎮系 [器色] 灰白青色 [呉須] 黒青色 [焼成] 良好（光沢） [出土] Ⅷ郭　１Ｔ
126	染付け 皿 16C後半	口縁部　3.5mm 体部中位　3.5mm 下位　4.0mm 底部中央　8.0mm 端部　4.0mm	碁笥底皿。 復元口径　10.8cm 底径　4.3cm 器高　2.4cm	[内底面] 見込みに人形寿文字。	[産地] 中国・福建省系 [器色] 灰白褐色 [呉須] 青黒色 [焼成] 良好（貫入あり） [出土] Ⅷ郭１Ｔ　Ｐ－No.2

第15表　Ⅷ郭出土遺物観察表①



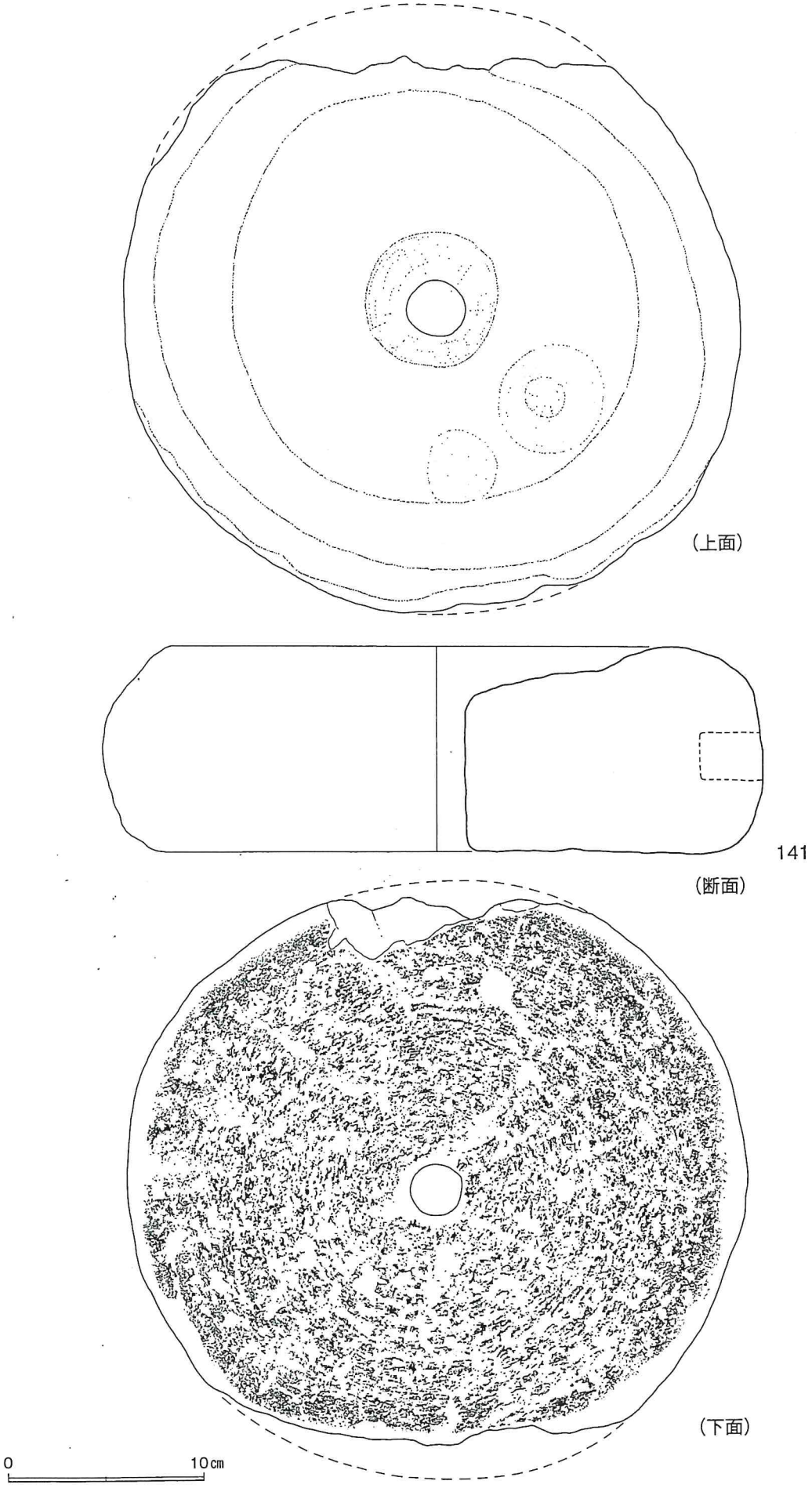
第32図　Ⅷ郭出土遺物実測図

No	器　種	器　厚	形　　態	調整・文様	備　　考
127	染付け 碗 16C後半～ 17C初頭	口縁部　2.0mm 体部中位　3.0mm	復元口径　12.8cm 口縁部で、大きく外弯する。	[内器面] 口縁部に帯状文様。	[産地] 中国・景徳鎮系 [器色] 灰白青色 [呉須] 青色 [焼成] 良好（光沢） [出土] Ⅷ郭１Ｔ
128	陶　器 褐釉甕 明代	口縁部　13.0mm 体部上位　7.0mm	口縁部は、折り返して成形している。	――――	[産地] 中国 [色調] 暗小豆色 [焼成] 良好 [出土] Ⅷ郭２Ｔ
129	陶　器 擂鉢 18C～19C	口縁部　8.0mm 体部上位　9.0mm	口縁部は偏平（16mm幅）	[内器面] ７本の条線を確認。	[産地] 肥前系 [色調] 暗灰黄褐色 [焼成] 堅緻 [出土] Ⅷ郭　１Ｔ
130	擂　鉢 （土師質）	口縁部　10.0mm 体部上位　8.0mm 中位　7.0mm	体部は直線的に延びる。	[内器面] 条線の一単位は５本。 不明瞭。	[色調] 灰橙色 [胎土] 精良 [焼成] やや軟 [出土] Ⅷ郭１Ｔ
131	擂　鉢 （土師質）	体部上位　13.0mm 体部下位　13.0mm	体部は直線的に延びる。	[内器面] 条線の一単位は４本。	[色調] 乳灰橙色 [胎土] 精良 [焼成] やや軟 [出土] Ⅷ郭
132	擂　鉢 （土師質）	体部上位　11.0mm 中位　13.0mm 下位　14.0mm	体部は、やや内弯する。	[内器面] 条線の一単位は６本。 [外器面] 斜め方向のナデ。	[色調] 乳白灰色 [胎土] やや粗い [焼成] やや軟 [出土] Ⅷ郭　１Ｔ
133	擂　鉢 （瓦質）	口縁部　11.0mm 体部中位　11.0mm	口唇部は偏平。 体部は直線的に延びる。	[内器面] 条線の一単位は６本。 ススが付着。 [内外器面] 横ナデ。	[色調] 乳白灰色 [胎土] 精良 [焼成] 良好 [出土] Ⅷ郭　１Ｔ
134	擂　鉢 （瓦質）	口縁部　12.0mm 体部中位　10.0mm	体部は直線的に延びる。	[内器面] 条線の一単位は不明。 [内外器面] 斜め方向のナデ。	[色調] 乳白褐色 [胎土] 精良 [焼成] 良好 [出土] Ⅷ郭　１Ｔ
135	擂　鉢 （瓦質）	体部上位　11.0mm 中位　10.0mm 下位　11.0	体部は、やや内弯する。	[内器面] 条線の一単位は５本。 [外器面] 表面はやや歪。	[色調] 内：灰黒色 外：灰褐色 [胎土] やや粗い [焼成] やや軟 [出土] Ⅷ郭
136	火　舎 （土師質）	口縁部　17.0mm 体部上位　10.0mm 下位　8.0mm	１条の突帯が付く。 口唇部は偏平。	[外器面] 突帯間に印刻文様。	[色調] 暗褐色 [胎土] やや粗い [焼成] やや軟 [出土] Ⅷ郭　１Ｔ
137	火　舎 （瓦質）	口縁部　16.0mm 体部上位　11.0mm 下位　12.0mm	１条の突帯が付く。 口唇部は偏平。	[外器面] 突帯間に花印文様。 [内外器面] 横ナデ。	[色調] 乳灰白色 [胎土] 精良 [焼成] 良好 [出土] Ⅷ郭　１Ｔ
138	火　舎 （土器質）	体部上位　14.0mm 中位　15.0mm 下位　12.0mm	１条の突帯が付く。	[内外器面] 横ナデ。	[色調] 桃褐色 [胎土] 精良 [焼成] やや軟 [出土] Ⅷ郭１Ｔ
139	甕 （土器質）	口縁部　8.0mm 体部上位　7.0mm	口唇部は偏平（21mm幅）	[内外器面] ナデ。	[色調] 橙褐色 [胎土] 小石粒が混じる。 [焼成] 堅緻 [出土] Ⅷ郭　１Ｔ
140	甕 （須恵質）	体部下位　11.0mm 底部中央　8.0mm 端部　9.0mm	平底。	[外底面] 指頭圧痕。	[色調] 灰色 [胎土] やや精良 [焼成] 堅緻 [出土] Ⅷ郭　１Ｔ

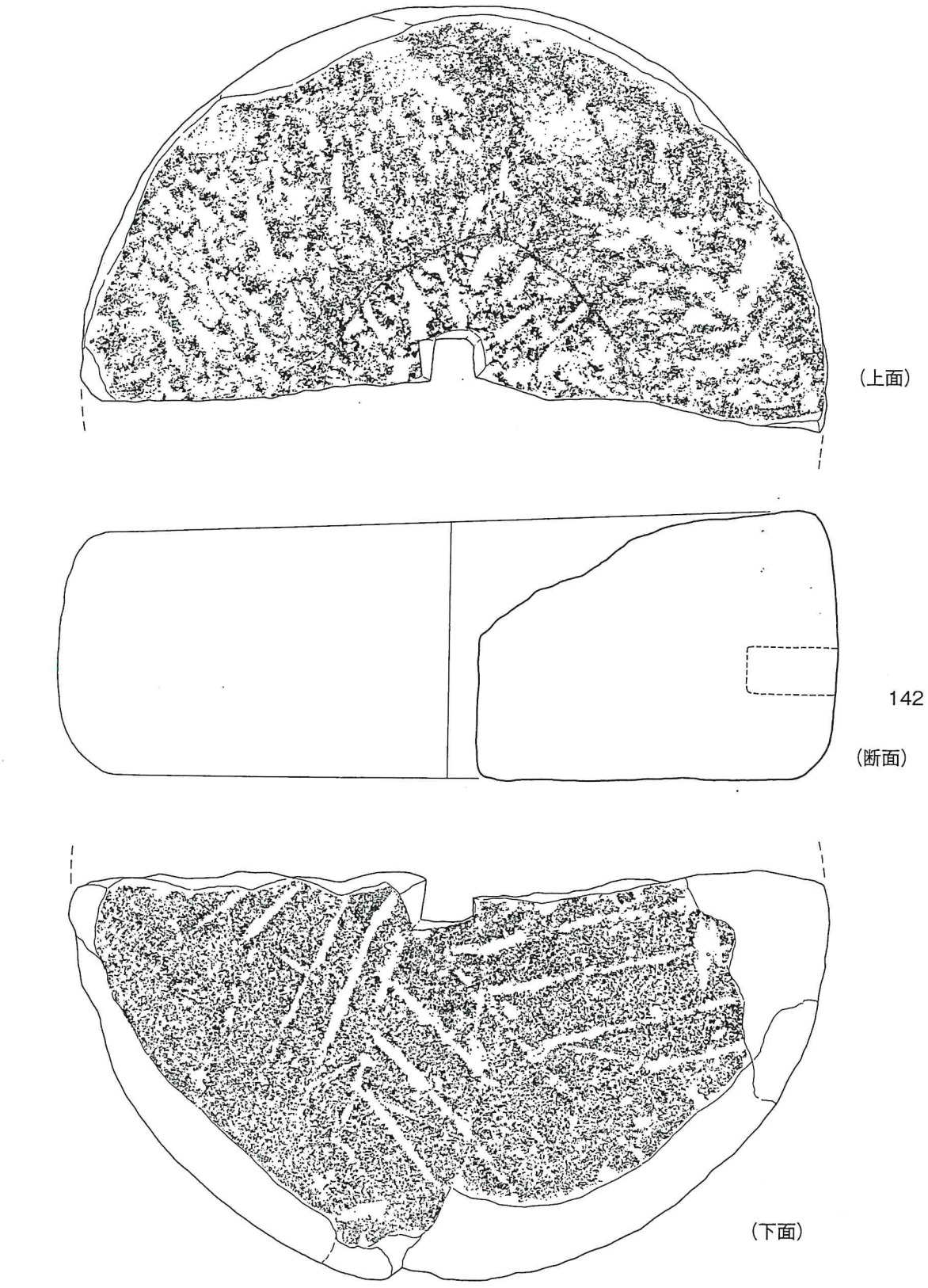
第16表　Ⅷ郭出土遺物観察表②

No	器　種	計　測　値	形　態　の　特　徴	備　　考
141	ひき臼 （上臼）	胴径　33.5cm 上面凹径　21.0cm 高さ　10.2cm 重さ　15.5kg	中央孔径　上面 3.0cm　下面 3.0cm 側面に把手孔　縦 2.5cm　横 3.0cm　奥行 2.5cm 上面に凹み　直径 6.0cm　底径 2.0cm　深さ 2.5cm 下面に小穴　直径 1.5cm　底径 1.5cm　深さ 2.0cm	[石材] 砂岩 [出土] Ⅷ郭
142	ひき臼 （上臼）	胴径　32.5cm 上面凹径　13.2cm 高さ　11.2cm 重さ　8.0kg	中央に方形の孔　一辺 2.5cm 上面中央に ９本のノミ痕。 下面（すり合わせ面）の条線の一単位は５本。	[石材] 砂岩 [出土] Ⅳ郭
143	ひき臼 （上臼）	胴径　34.4cm 上面凹径　25.5cm 高さ端部　10.5cm 中央　5.0cm 重さ　8.0kg	下面中央に凹み　直径 4.5cm　深さ 1.4cm 側面に把手孔　縦 2.0cm　横 4.0cm　奥行 4.2cm 上面口縁幅　3.5cm	[石材] 砂岩 [出土] Ⅳ郭　２Ｔ
144	ひき臼 （上臼）	復元胴径 上位　26.0cm 下位　32.0cm 高さ端部　10.8cm 中央　5.0cm 重さ　4.8kg	下面中央に凹み　直径 3.5cm　深さ 3.1cm 上面口縁幅　4.0cm	[石材] 花崗岩 [出土] Ⅲ郭

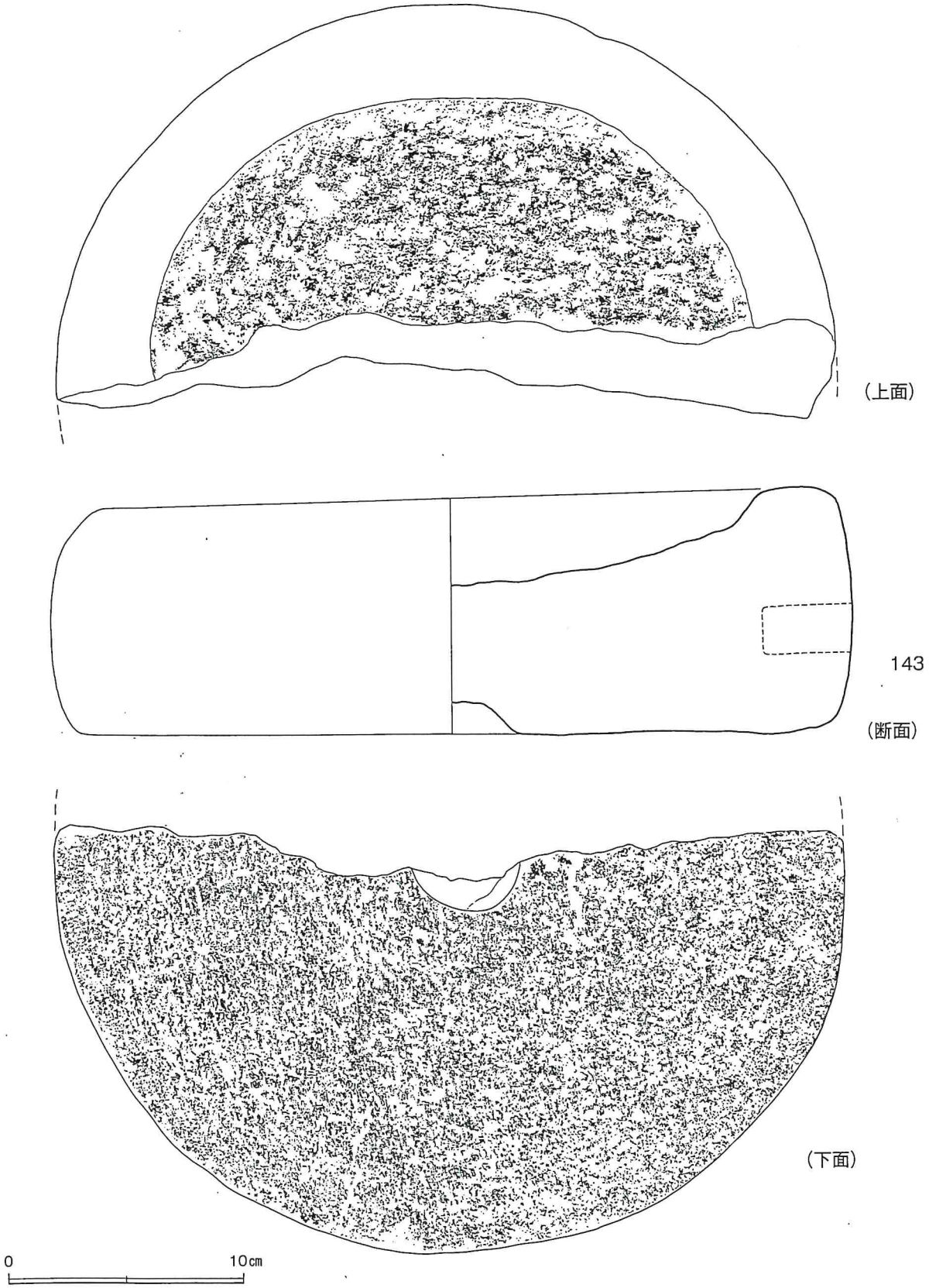
第17表　出土遺物観察表・ひき臼



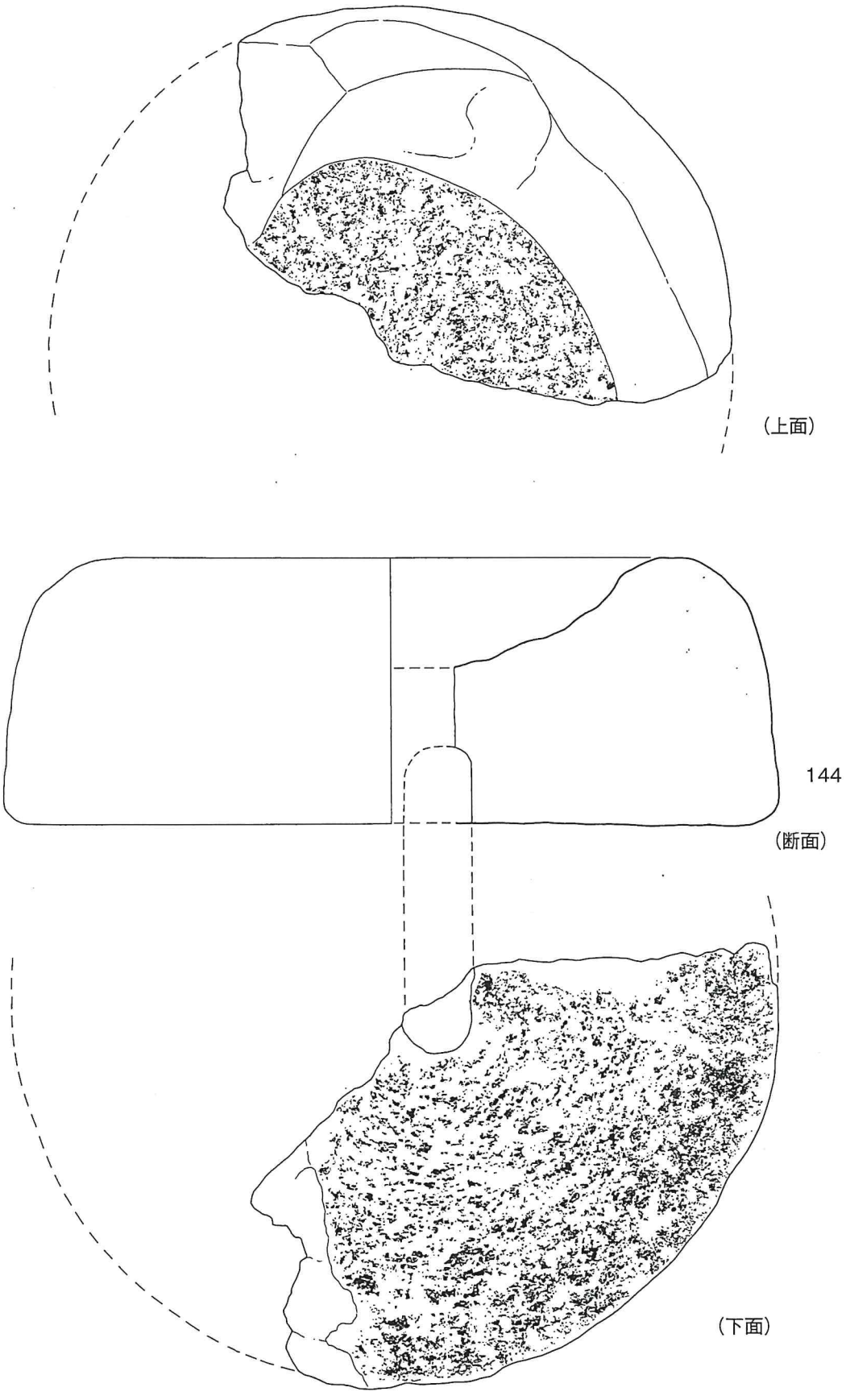
第33図　出土遺物実測図・ひき臼①



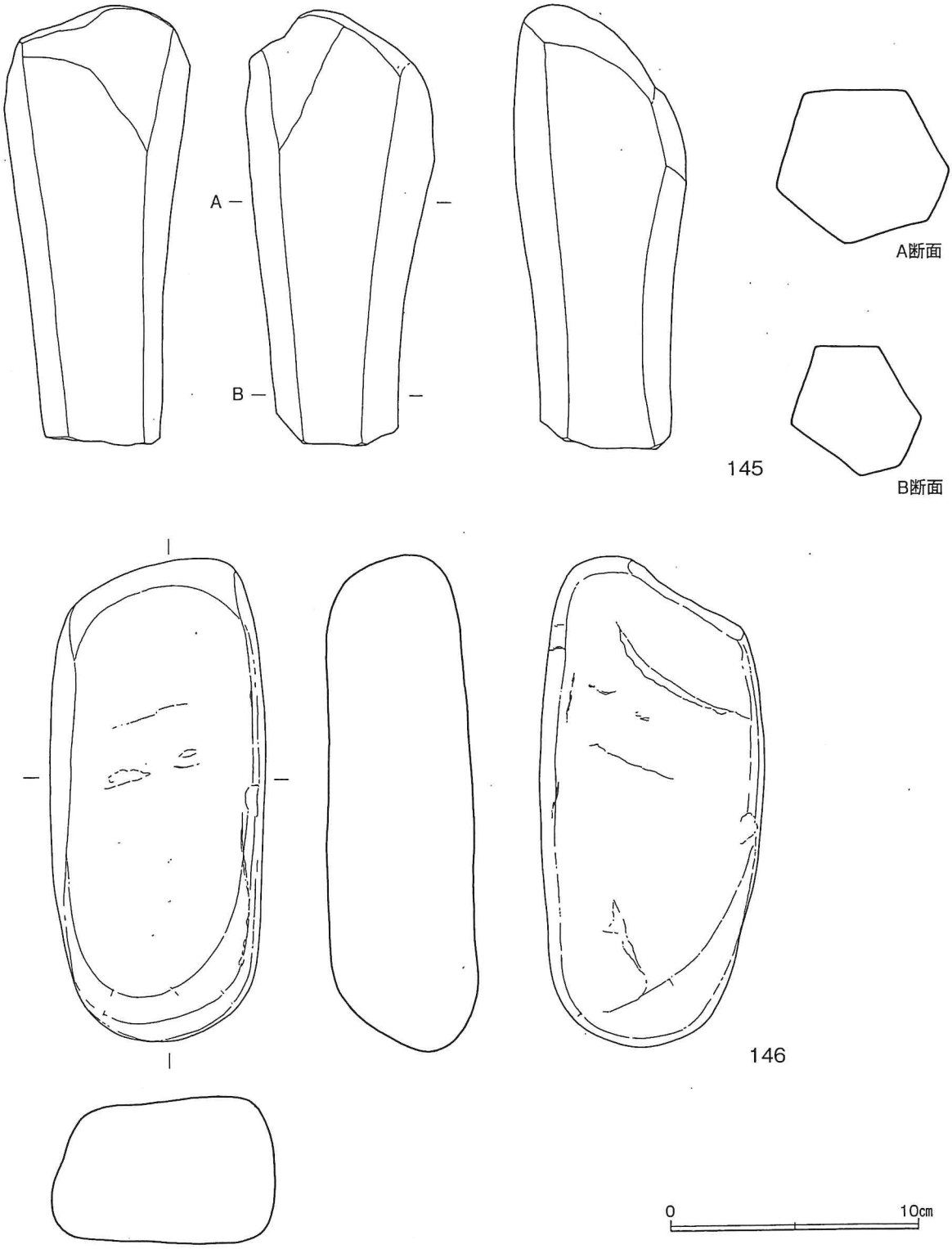
第34図　出土遺物実測図・ひき臼②



第35図　出土遺物実測図・ひき臼③



第36図　出土遺物実測図・ひき臼④



第37図　出土遺物実測図・砥石

No	器　種	計　測　値	形　態　の　特　徴	備　　考
145	砥　石	残存の長さ　17.0cm 幅　A：6.0cm　B：5.1cm 厚さ　最大：7.0cm　最小：4.0cm 重さ　1,079g	天草砥石。 6面に成型。	[石材] 砂岩 [出土] Ⅷ郭1T　P－No.1
146	砥　石	長さ　20.0cm 幅　5.8cm 厚さ　6.0cm 重さ　2,125g	隅丸長方形	[石材] 玄武 [出土] Ⅱ郭－a　P－No.2

第18表　出土遺物観察表・砥石

〔考察２〕棚底城跡出土の陶磁器を見て

佐賀県立九州陶磁文化館　副館長　大橋康二

棚底城跡出土の陶磁器には、鎌倉時代と推定される中国磁器もわずかに見られるが、基本的には室町時代の陶磁器である。この特徴を時期ごとに見る。

第１期：14世紀中葉～15世紀中葉

中国・浙江省の竜泉窯の青磁が多く出土している。器種は碗と皿のほか、盤や小鉢などがある。この時期、日本に多く輸入された青磁類である。これにわずかな中国・白磁皿が加わる。珍しいものでは、ベトナムの染付碗が１点（本書遺物番号 No.80）出土している。

第２期：15世紀後半～16世紀前半

この時期前半では、中国・竜泉窯の青磁碗があるが、次第に江西省の景徳鎮窯の染付碗が中心になる。景徳鎮窯の染付皿もあるが、皿は景徳鎮窯の白磁皿のほうが目立つ。また、景徳鎮窯の碁笥底の染付小皿も出土している。

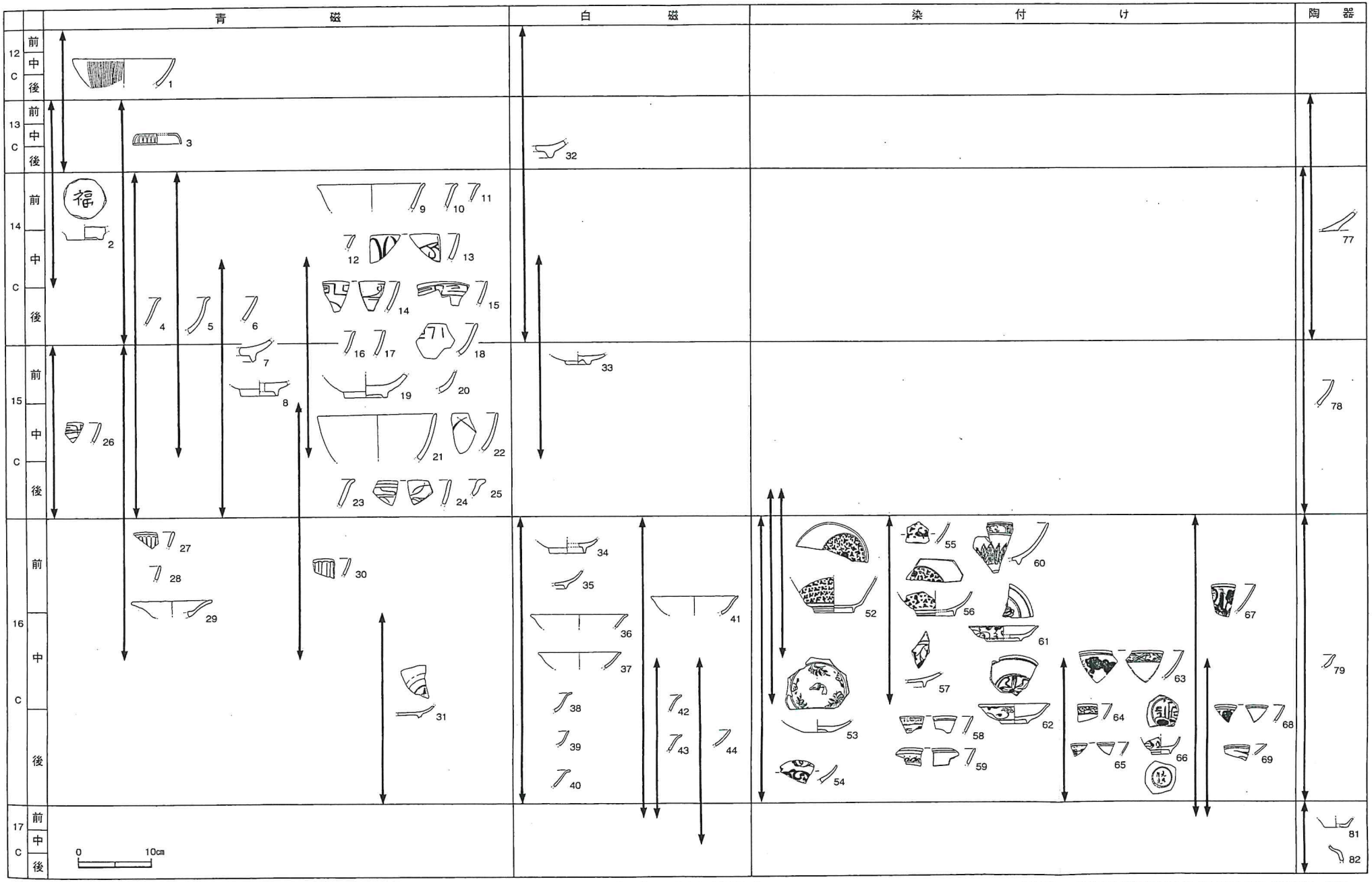
珍しいものでは、景徳鎮窯の菊花形と思われる青磁皿が１点（前年度報告書『棚底城跡』遺物番号 No.31）出土している。この種の景徳鎮の青磁皿は、山口県山口市の大内氏館跡や佐賀県鳥栖市の勝尾城で出土している。この磁器については、天文 8年（1539）、16年（1547）の二度、大内氏が中国に遣明船を派遣した頃に輸入された可能性が高いものであり、なかに「天文年造」の染付銘を伴う白磁木瓜形皿が知られている。当時、花形に成形された磁器が日本好みであることは、『籌海図編』（嘉靖41年(注)（1562）刊）に記されている。筆者は、天文年造銘の白磁皿だけでなく、青磁の菊花形などの皿・碗も「日本好み」として一時期に注文で作られたものと推測した（『海を渡った陶磁器』2004年）。阿蘇品氏の論考（本書巻末『大権寺遺跡と棚底城主試論』）にある、天文頃、棚底城の上津浦氏が南肥後の支配者相良氏と結び付き、相良義武が大内氏と結んでいたという点から、大内船が輸入した可能性の高い青磁が出土していることも理解できる。

第３期：16世紀中葉～16世紀後半

この時期の出土陶磁器は減少する。中国・景徳鎮窯の染付・小坏が少量見られる。碁笥底皿は福建省南部で作られたと推測できる粗製品が少なくない。福建地方産の粗製磁器は、白磁と青磁の中間的な粗製の碗も１点（本書遺物番号 No.78）見られる。

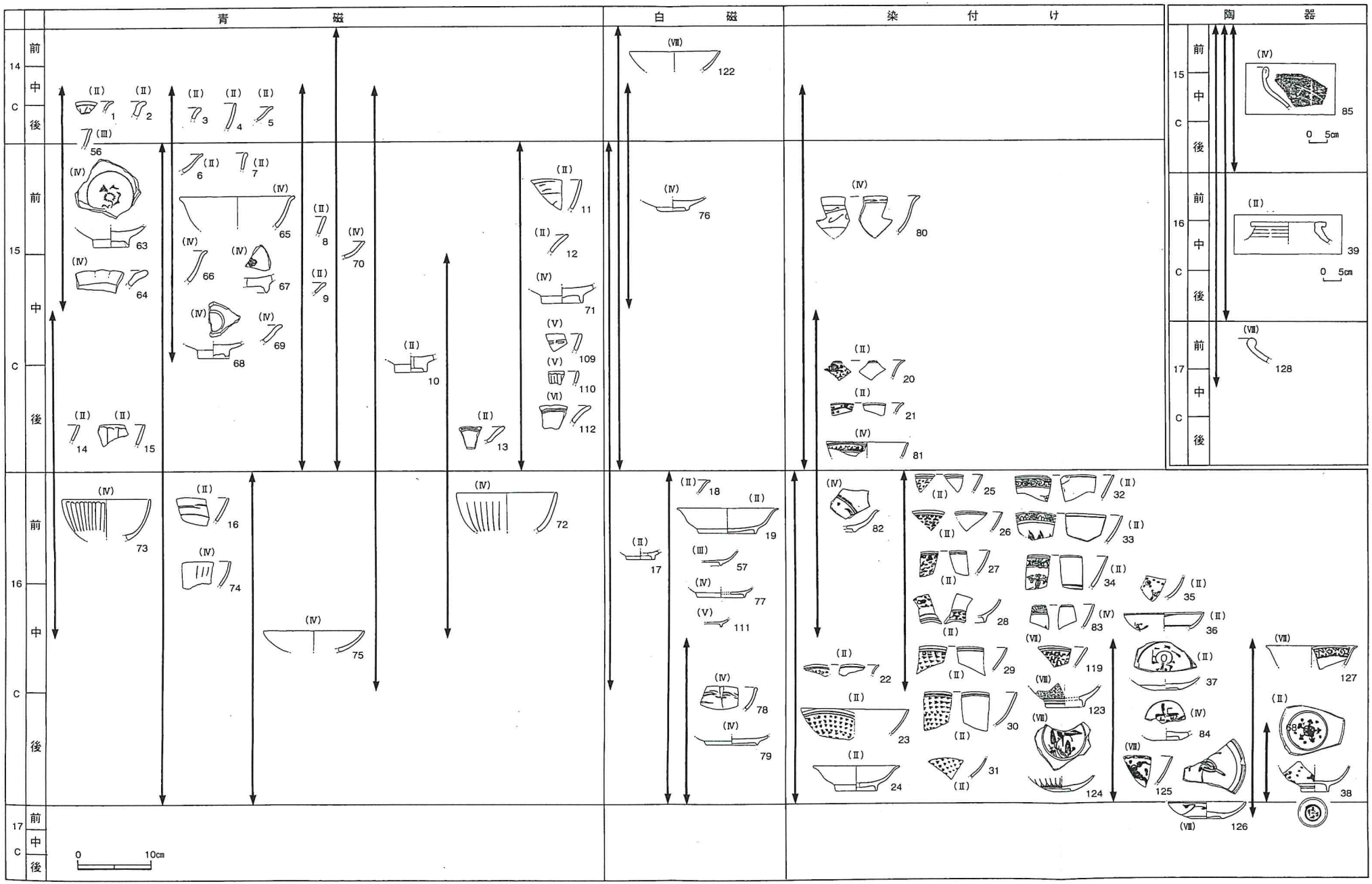
以上のように、棚底城跡出土の陶磁器は、14世紀後半から16世紀前半にかけてのものが主と考えられる。中国磁器は伝世することも多いが、この期間の国産の土器や陶器の出土品があることからも、伝世品と考える必要はないと思われる。

（注）嘉靖：中国・明代の元号



第19表　Ⅰ郭出土遺物編年表

※遺物番号は、倉岳町文化財調査報告第１集『棚底城跡』所収の遺物番号と一致する。



第20表　Ⅱ～Ⅷ郭出土遺物編年表

※遺物番号は、本書25～40頁の遺物番号と一致する。

第Ⅳ章　大権寺比定地の石塔調査

第１節　調査の概要

①小字名で「大権寺」（おおごんじ・地元での発音はううごんじ）の地区がある。面積にして約85,822㎡の広い範囲で、今日、確たる寺跡地は残っていないが、地元では「幻の大権寺」として、さらには「棚底城主の菩提寺」として語り継がれてきた。

寺跡の有力地はある。棚底城跡の西端にあたる堀切から西北西方向へ、地図上の直線距離で約410mの所に、石塔が集められた箇所がある。この地は、城跡南下に展開する鋭角三角形状地形の上位部にあたる。迫地の谷頭で、麓集落の一部をなす山崎地区の最上位でもあり、寺の場所にふさわしい箇所である。棚底城跡の真西にもあたり、仏教界でいう方位との関係からも、高田尊徳氏は「寺地は、この地に間違いない」と断言されている。

②比定地の中心部は、小道の肩部に積まれた「く」の字形の石塁を壁とする一角で、南北の長さ14m、東西幅12mの小区画。現在は、これより南側は水田となっているが、10年位前、この区画と水田をまたぐ民家があった。一帯は迫地を切り開いた階段状地形の耕作地が連なり、近くに30年くらい前に建てられた二軒の民家がある。

③調査前は、敷地の北端に三角形状の微高地があり、五輪塔や宝篋印塔の部材を、個々に積み上げた石塔が並んでいた。昭和50年代初期に本渡市在の鶴田八洲成氏と町教委で調査され、その時、整理されたものである。昭和53年には、鶴田氏が『天草建設文化史』に大権寺の石塔の研究成果を発表されている。

④それ以前の史料紹介としては、竹本勝善氏が『広報くらたけ』に「倉岳昔むかし」として一文を寄せておられる（昭和44年１月５日記）。当時、竹本氏は、町立棚底小学校長であった。以下、要点を記す。

「古老から聞いて大権寺へ出かけた。山崎の山下平助さんの屋敷内の一角であった。こんもり茂った森の中に無数の石塔が、倒れたり重なり合った姿を見せていた。墓石の年号を調べると、延文三年の年号がかすかに見出された。この年号は南北朝時代のものであることが分かった。大権寺そのものの規模や様子は知るよしもないが、寺名はそのまま大権寺の地名として残っている。延文三年の年号によって、私たちの郷土は、北朝方の勢力下にあったことも分かる」。

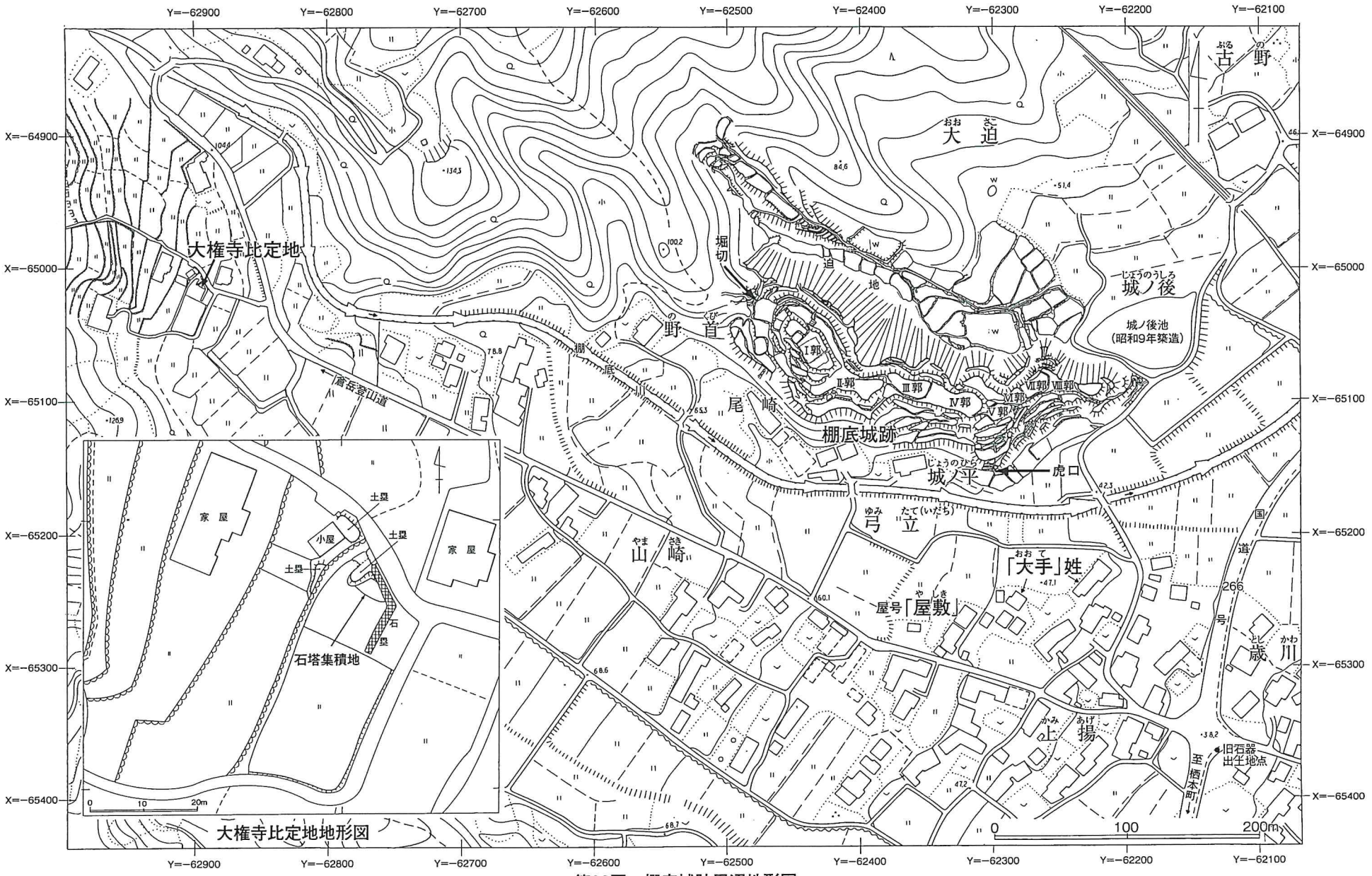
⑤石塔の分類と数の確認から調査を開始した。その結果は第21表に掲げた通りである。このことにより、当地には、かつて少なくとも62基の五輪塔と36基の宝篋印塔が存在した事になる。この数の多さからすれば、巻末の「付論」で阿蘇品保夫氏が指摘されているように「野墓の類を収集して一箇所に集めたものではない」ことが明らかで、この辺りに、中世寺院の存在が確実視される。

⑥銘文入りの13個について触れる。最終的に年号名入りは６個であることが判明。今回の調査によって「嘉慶二年」（1388）銘が新たに発見された。年代的には「延文三年」（1358）を上限として「永享十二年」（1440）を下限とする。従前から知られている様に、下限のものを除き、すべて「北朝年号」が使用されている。さらに今回の調査で、僧名および人名などを刻むものが新たに７個確認された。

⑦第59図の石塔には、前面に「勧請地」とあり、側面に「天保六年　申□月　八兵衛」と刻む。第60図は、無銘の板碑で、現況から、後世に銘文が消滅したとは考え難い。

石塔・板碑の横には地蔵も祀られているので、天保六年（1835）に何らかのお堂が建立された事も考えられる。勿論、その呼び水となったのは、今日に残る石塔群の存在で、これらを供養するためのものであろう。

⑧前回の報告書でも指摘したが、大権寺と棚底城の関連が大いに取り沙汰される。城跡からは14世紀代の遺物も出土しており、早期の段階で、大権寺のものと考えられる年号入りの石塔と時期が重なる。さらには、寺と幻の棚底氏との関係も考えられる。これらの事は、本報告書の「付論」で阿蘇品氏が推論されている。



第38図　棚底城跡周辺地形図

⑨海岸近くに江岸寺(こうがんじ)がある。寺伝によれば正保三年（1646）に創建された寺で、過去帳には、文政年間を初見とするが「故人名の住まいが黄金寺の○○」として記されている。後代になって「横金の○○」としたものもある。大権寺と黄金寺は同じ「おうごんじ」の発音となる。

山下平助氏宅には、寺跡伝説に関連するような「龍の目玉」と呼ばれる金色の石が伝わっていたが、現在は所在不明となっている（高田尊徳氏からの聞き書き）。

第２節　石塔について

石材は大半が凝灰岩で、砂岩製は実測図の右下に注釈を付けている。砂岩製は重量感がある。

①宝篋印塔〔相輪〕　1～36　19・20は15世紀中葉で、26・27・28は南北朝期と推察される。

②宝篋印塔〔蓋石〕37～45　43・44は、南北朝期と推察される。

③宝篋印塔〔塔身〕46～49　46は側面に梵字が刻まれている。47の上面に直径７cm・深さ２cmの穴を穿つ。

④宝篋印塔〔基礎座〕50～68　50～53は、上面に蓮華座、側面には年号と銘文が刻まれている。54～59は、側面に年号や銘文が刻まれている。56・66・67の上面には、直径10cm前後の穴を穿つ。

⑤宝塔　69・70　上位が段切りされている。69は上面に直径７cm・深さ２cmの穴を穿つ。

⑥五輪塔〔空風輪〕71～107　104は、極めて異形である。空輪は石塔の頭で、風輪は顔に該当する。ここでは、風輪に６段の細かい刻みが入れられている。五輪塔の理念からは奇数の刻みが普通である。このように偶数のものは、極めて異例で、県内で類例を見ないとされる。105～107は、最も時代が下がり、16世紀後半頃と推定される。

⑦五輪塔〔火輪〕108～169　側面の中央に縦位の沈線を有するものがある。火輪の製作過程で付いたもので、石材が軟らかい時、石面に線引きが残ることがある。

火輪は、一部を欠くものが多く、人為な破壊とも考えられる。郡内ではキリシタン普及に伴い、数多くの石塔が破壊されたと伝わる。造りから、最も破壊しやすい部材である。

⑧五輪塔〔水輪〕170～221　火輪と同様に側面の中央に、縦位の沈線を有するものがある。170～212は小型で、213～221は大型の分類に入る。形状的に、176・179・190・195・197・203・204・213の様に著しく丈の高いものがある。201は四面に梵字の墨書がある。220は異形で、内部が抉り取られている。221は四側面に梵字が刻まれている。

⑨五輪塔〔地輪〕222～234　230の中央部には直径７cm・深さ５cmの穴がある。232・233・234は側面に銘文が刻まれている。

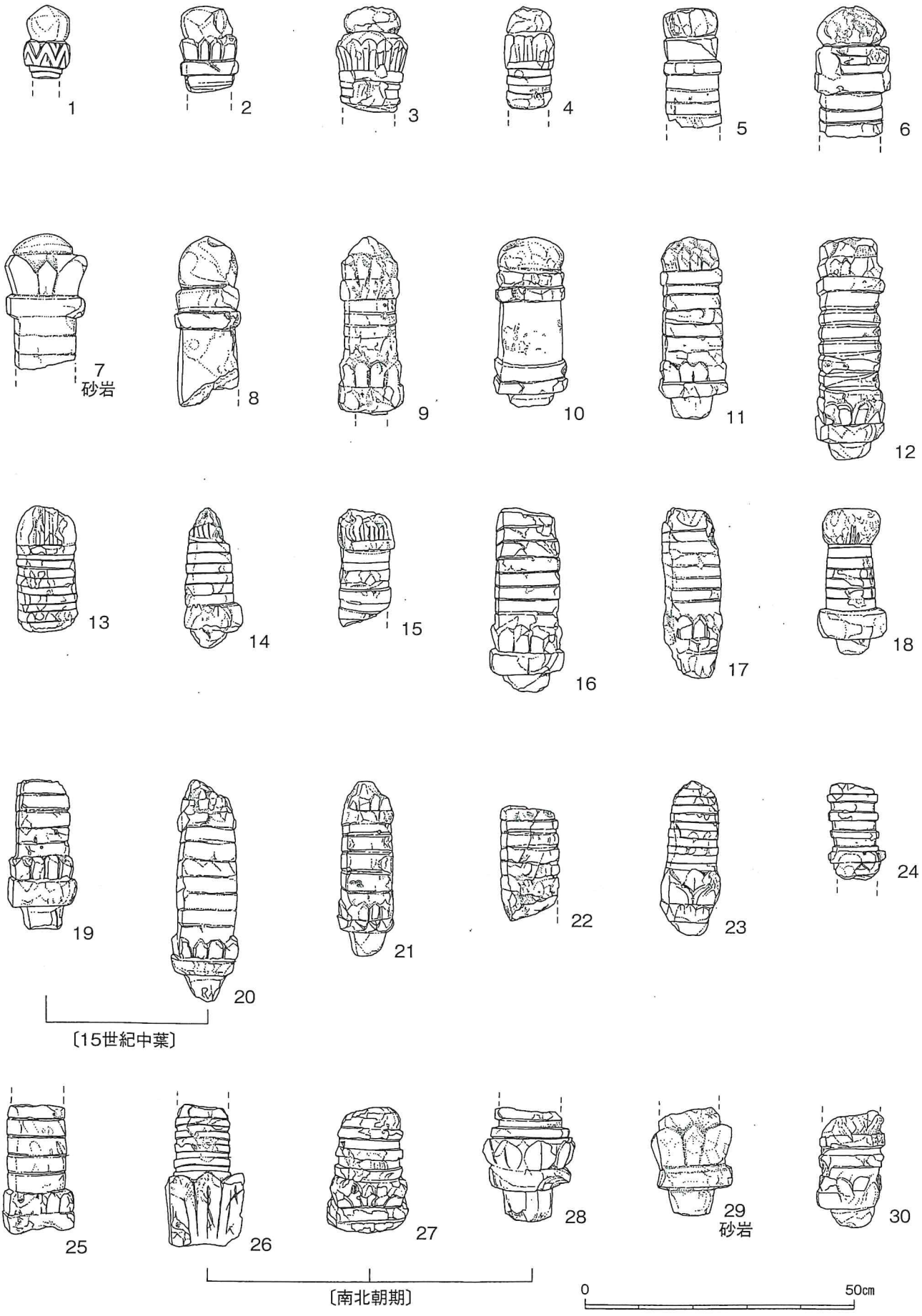
※宝篋印塔と五輪塔の解釈は、主に前川清一氏の御示唆による。

種　別	部	数	備　考
宝篋印塔	相輪	36	――――
	蓋石	9	――――
	塔身	4	梵字入り　１点
	基礎座	19	銘文入り　10点
宝塔		2	――――
五輪塔	空風輪	37	異形　１点
	火輪	62	――――
	水輪	54	梵字入り　２点
	地輪	11	銘文入り　３点

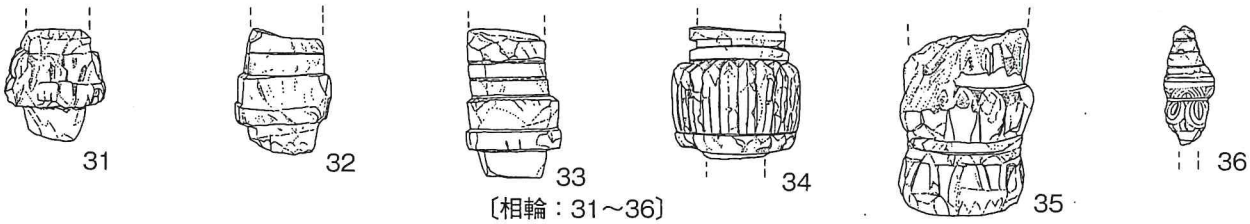
第21表　石塔分類表

No	年　　号	西暦	僧名および人名
50	延文三年	1358	明俊禅尼
51	康安元年六月六日	1361	道宗禅門
52	永徳三年八月	1383	浄薫
53	永徳三年	1383	蓮恵禅門
54	嘉慶二年	1388	宗□
55	永享十二年六月	1440	光妣浄禅定尼
56	五月二日	――	照宝和尚
57	――――	――	浄庵巌居士
58	――――	――	末豊
59	――――	――	文七
232	――――	――	道正禅定門
233	――――	――	昌幸□
234	――――	――	浄金

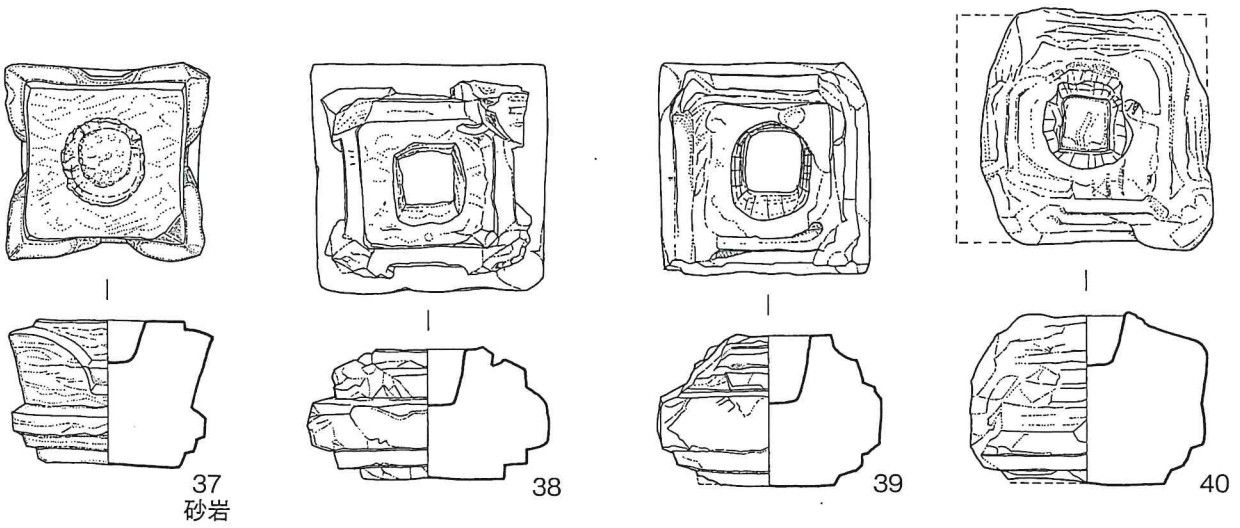
第22表　銘文一覧表

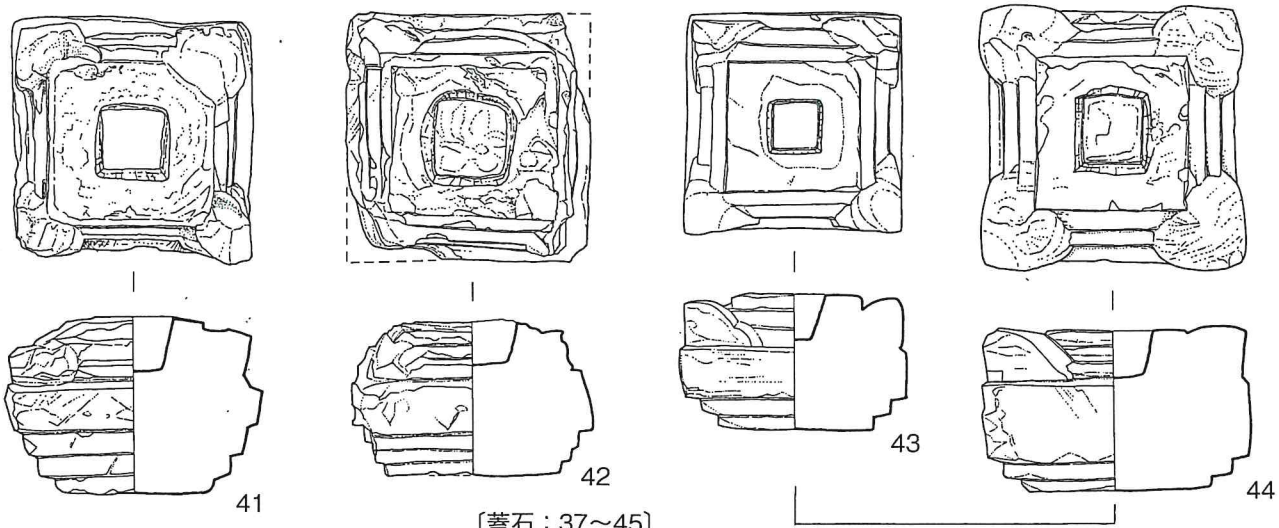


第39図　宝篋印塔〔相輪〕実測図



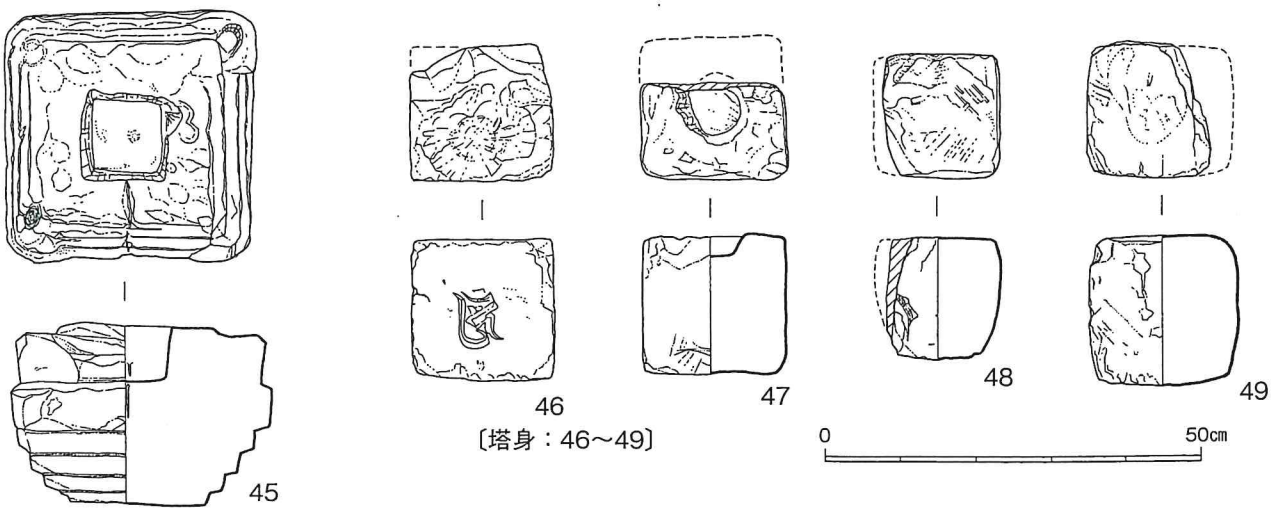
〔相輪：31～36〕





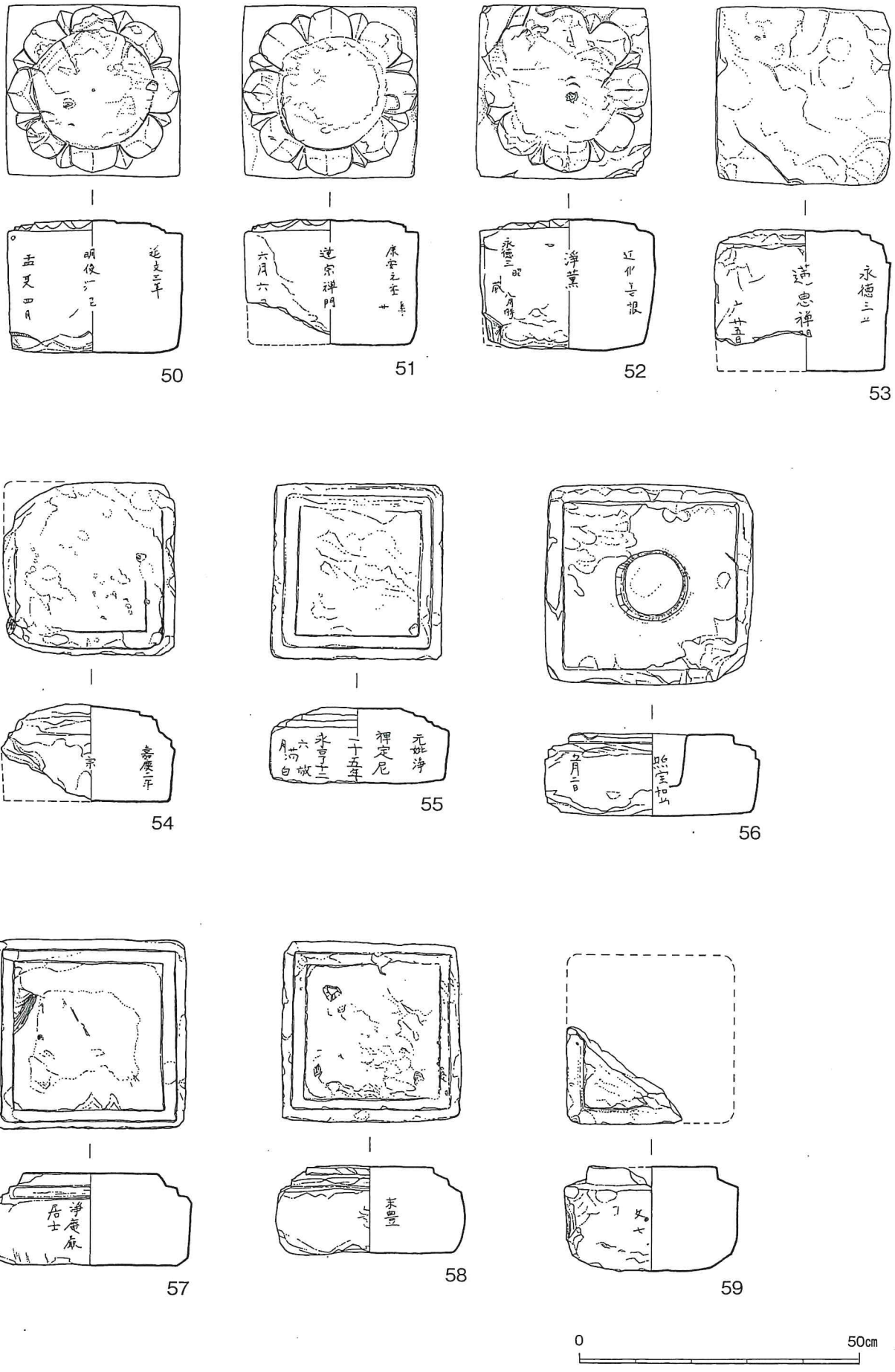
〔蓋石：37～45〕

〔南北朝期〕

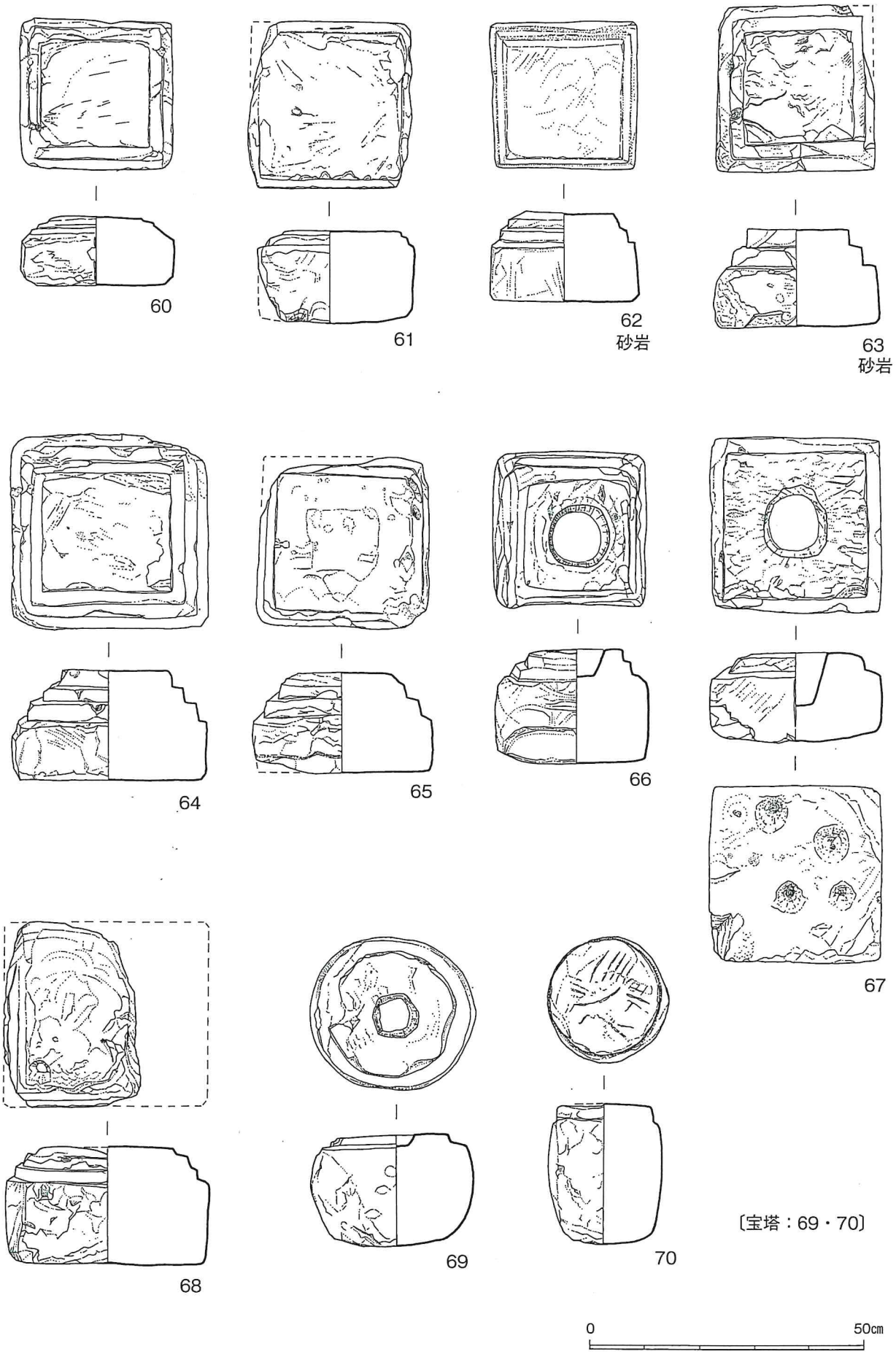


〔塔身：46～49〕

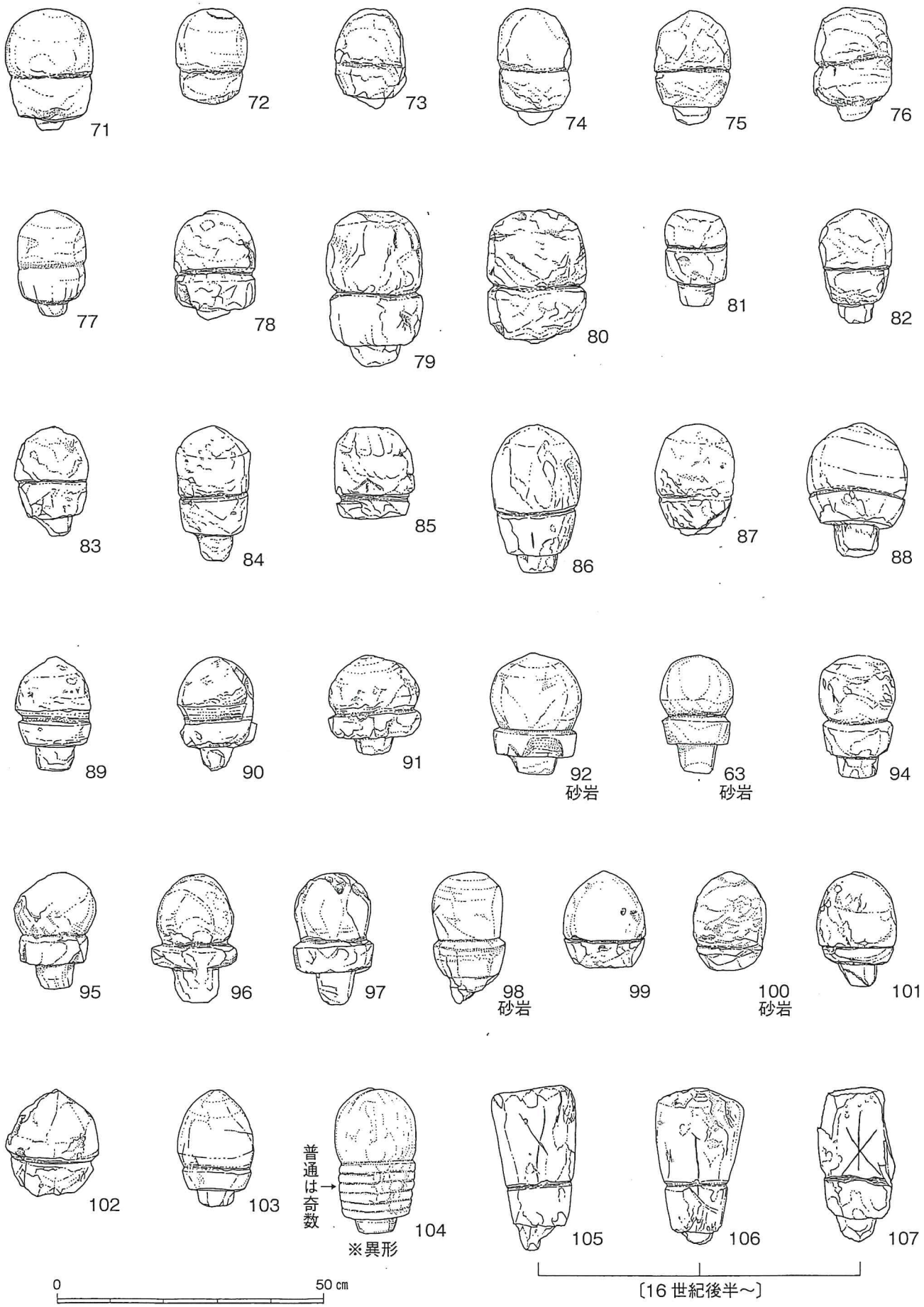
第40図　宝篋印塔〔相輪・蓋石・塔身〕実測図



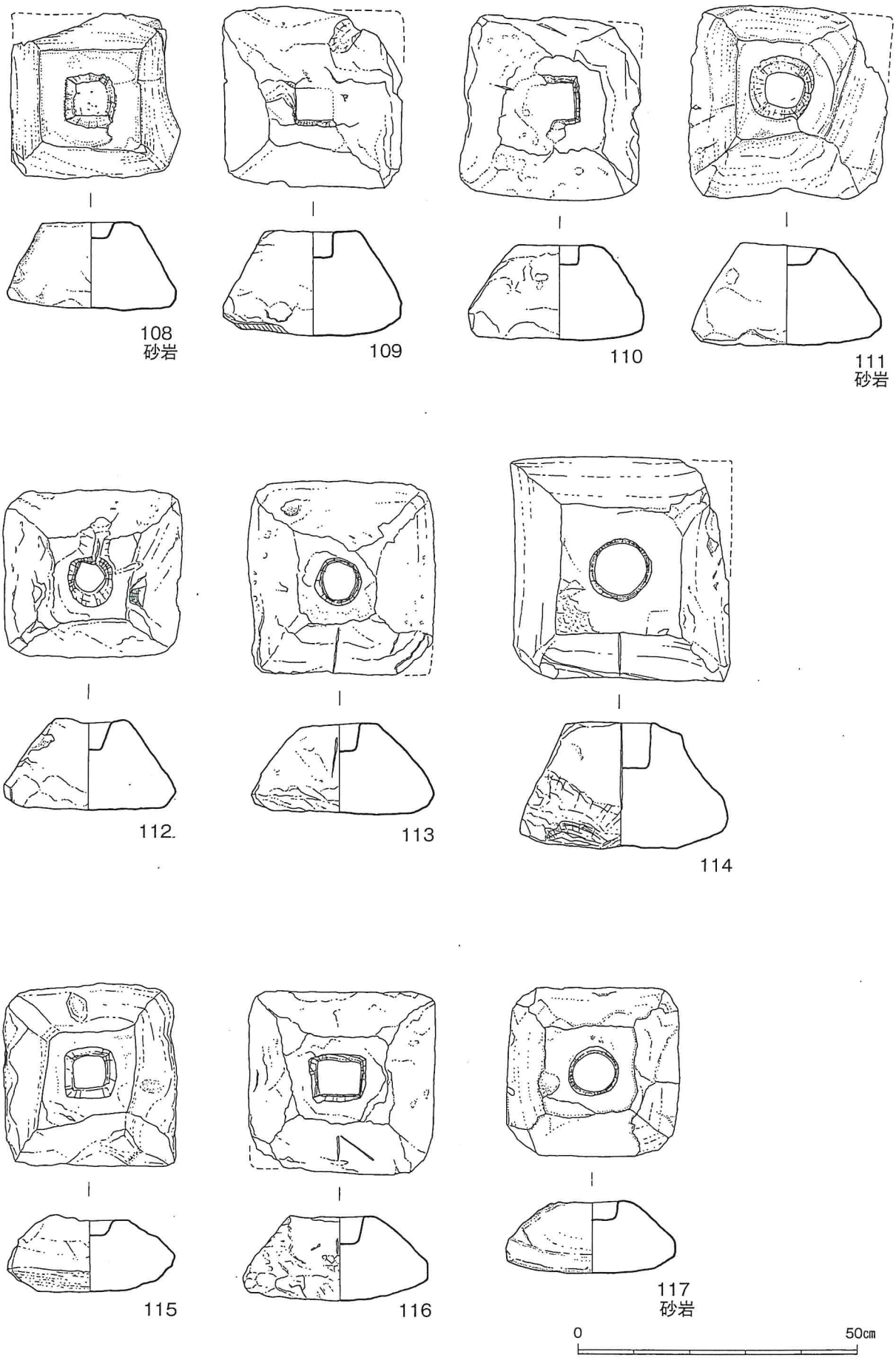
第41図　宝篋印塔〔基礎座・銘文入り〕実測図



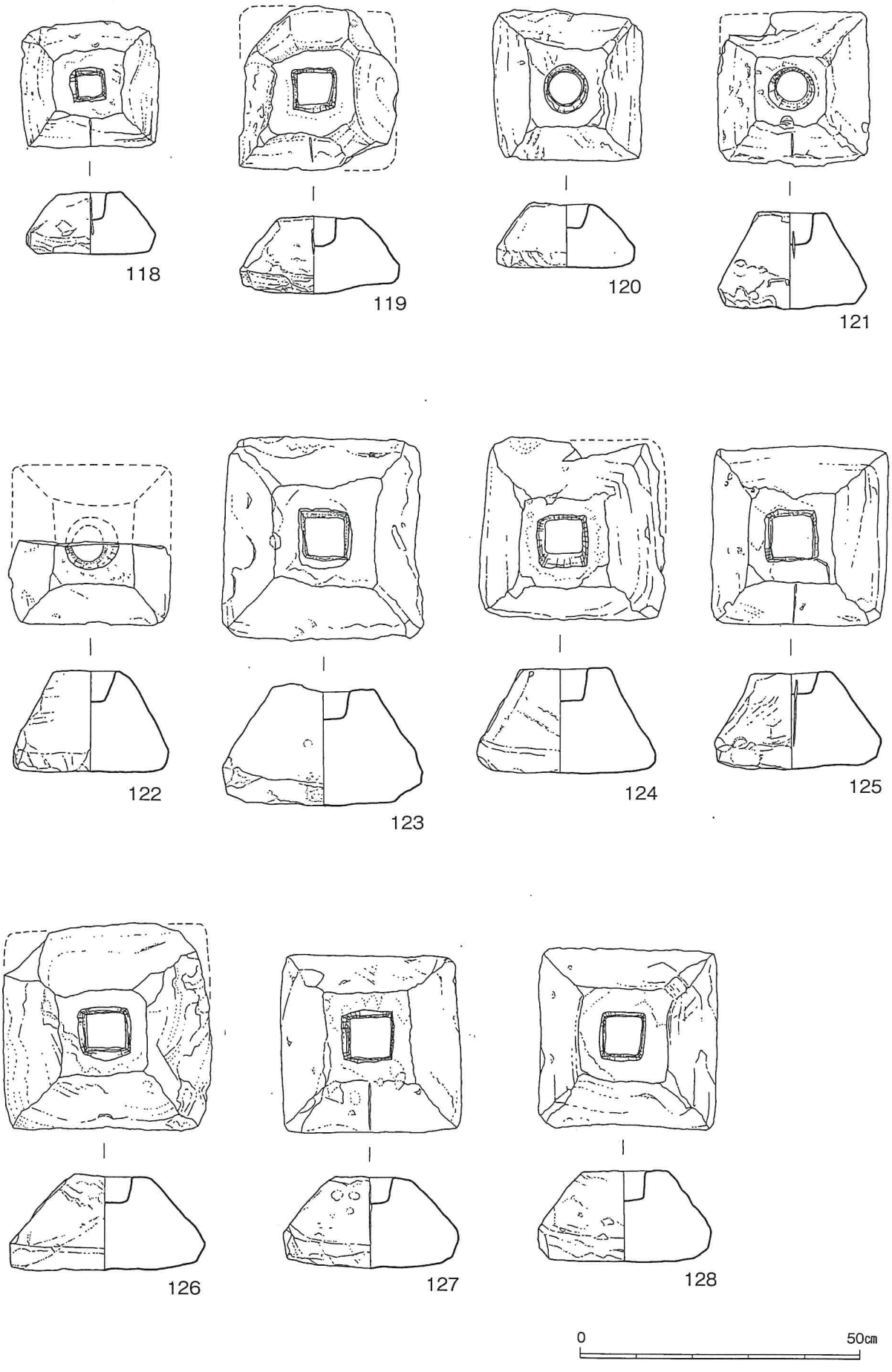
第42図　宝篋印塔〔基礎座〕実測図・宝塔実測図



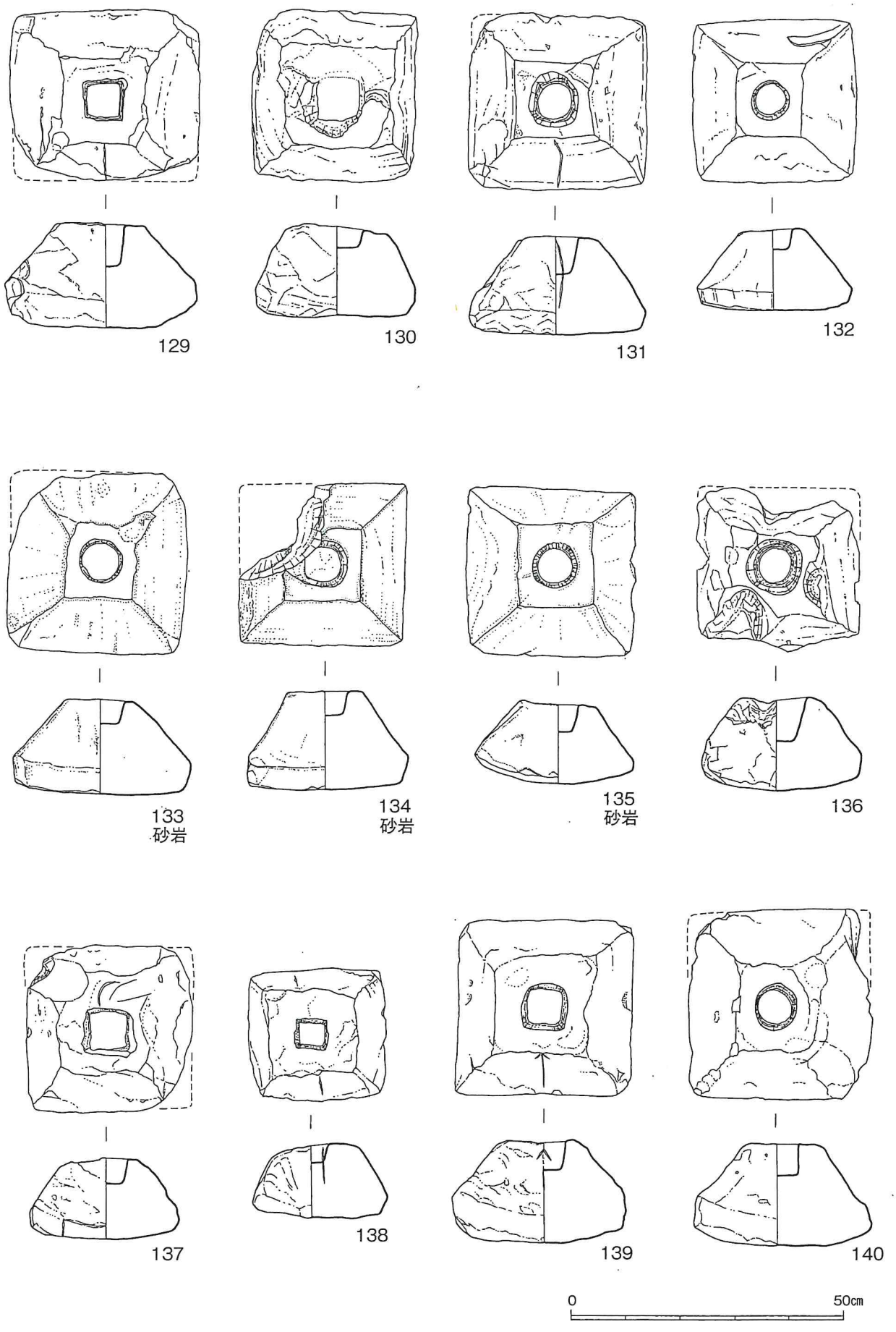
第43図　五輪塔〔空風輪〕実測図



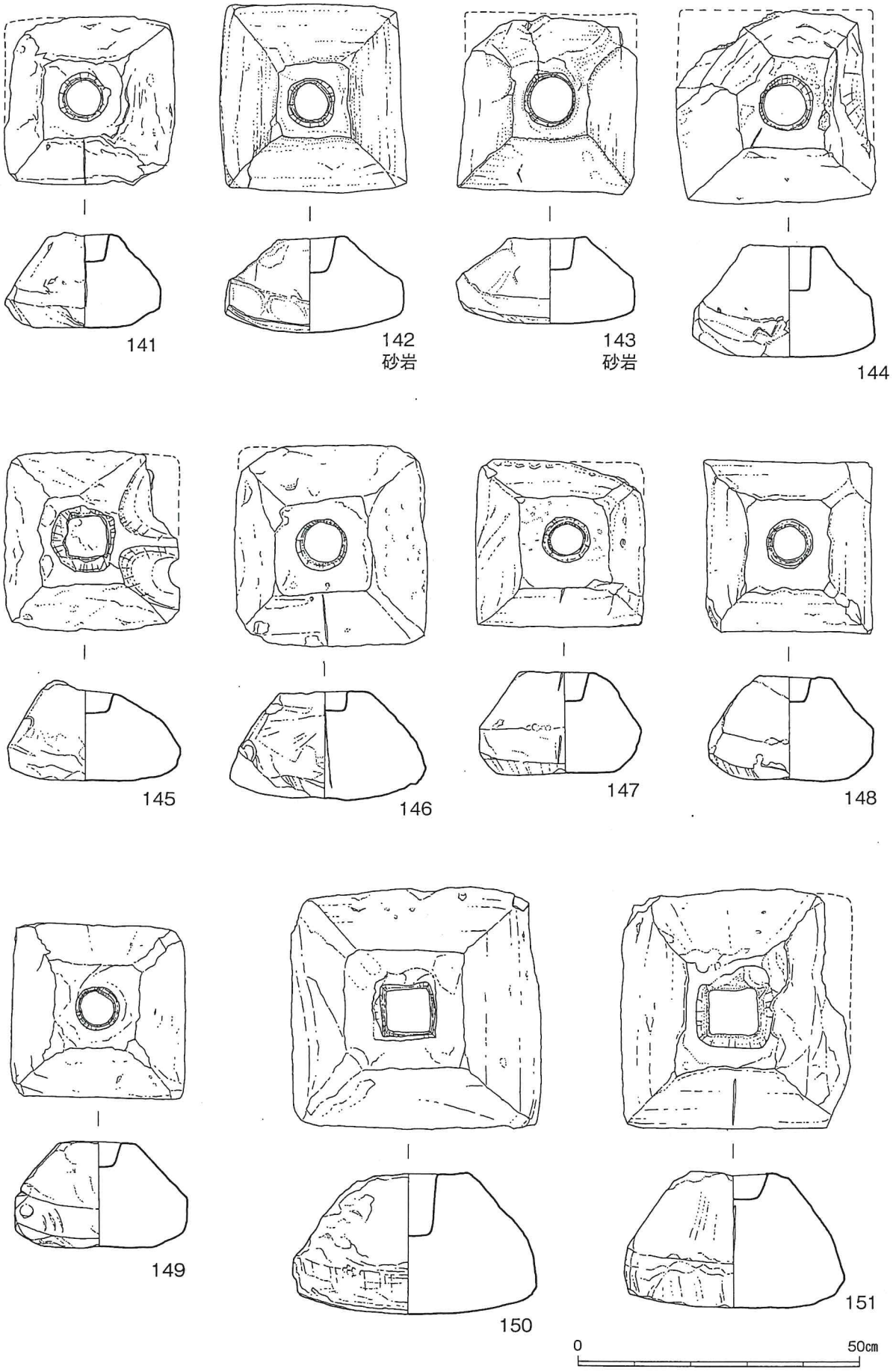
第44図　五輪塔〔火輪〕実測図①



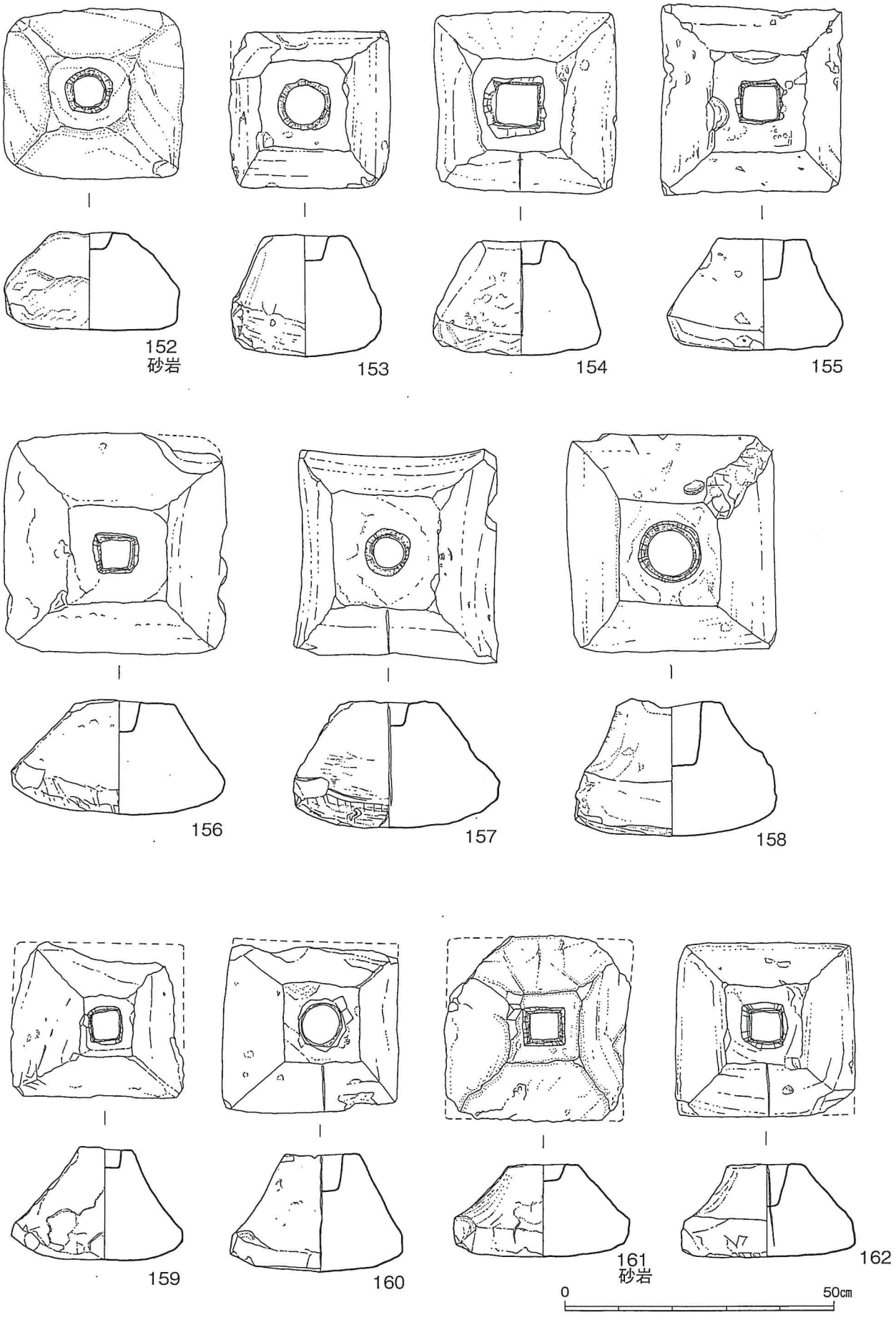
第45図　五輪塔〔火輪〕実測図②



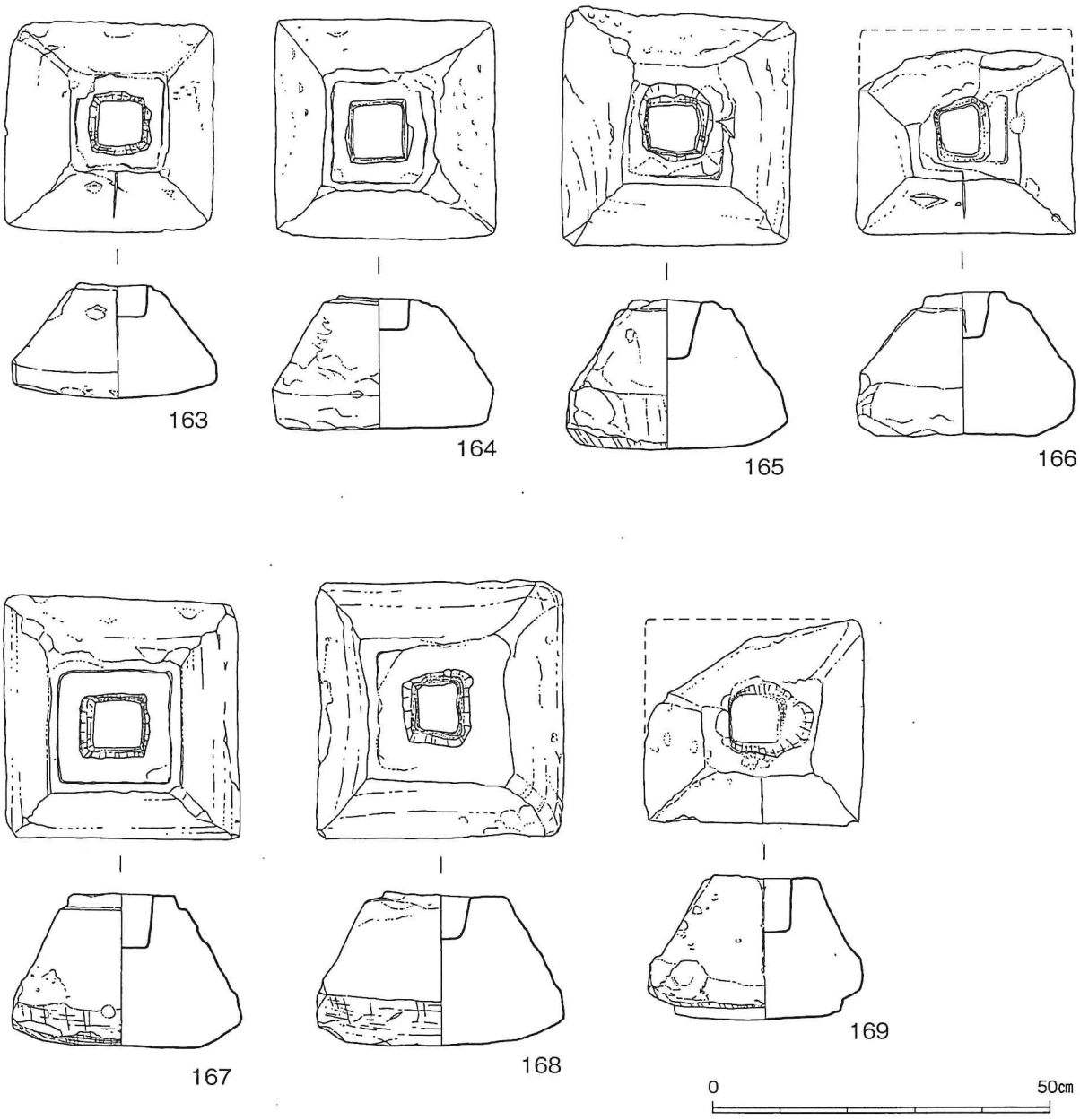
第46図　五輪塔〔火輪〕実測図③



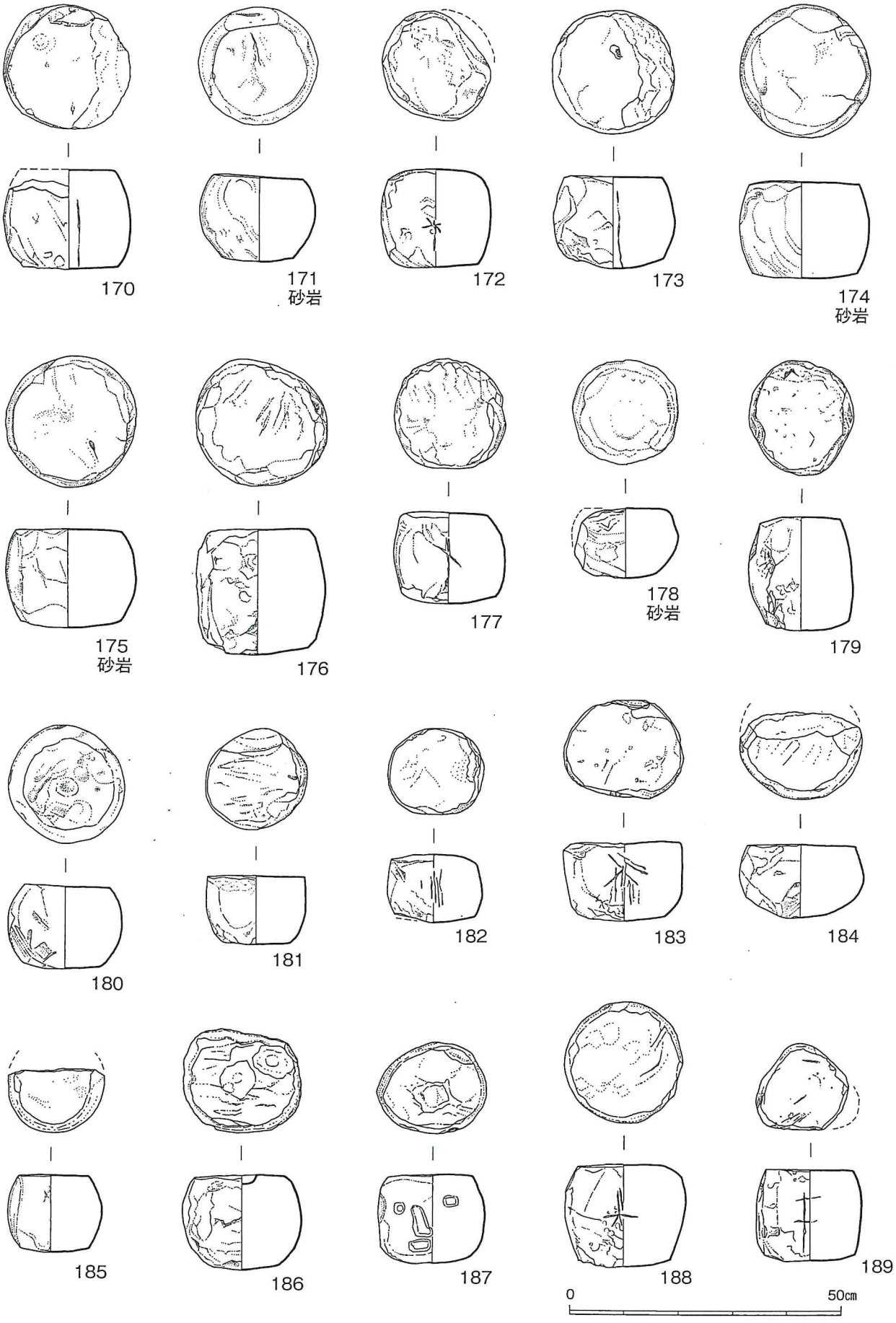
第47図　五輪塔〔火輪〕実測図④



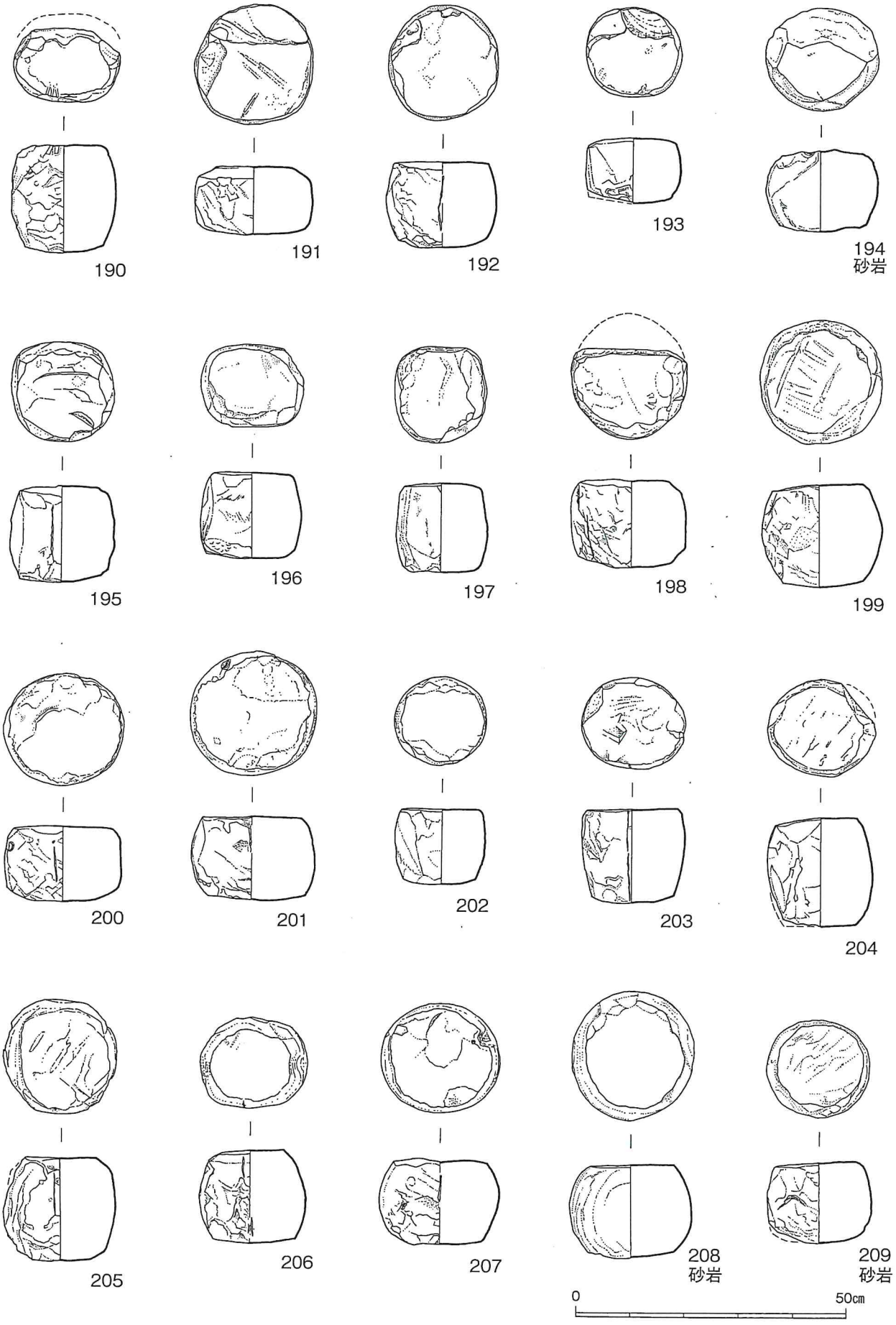
第48図　五輪塔〔火輪〕実測図⑤



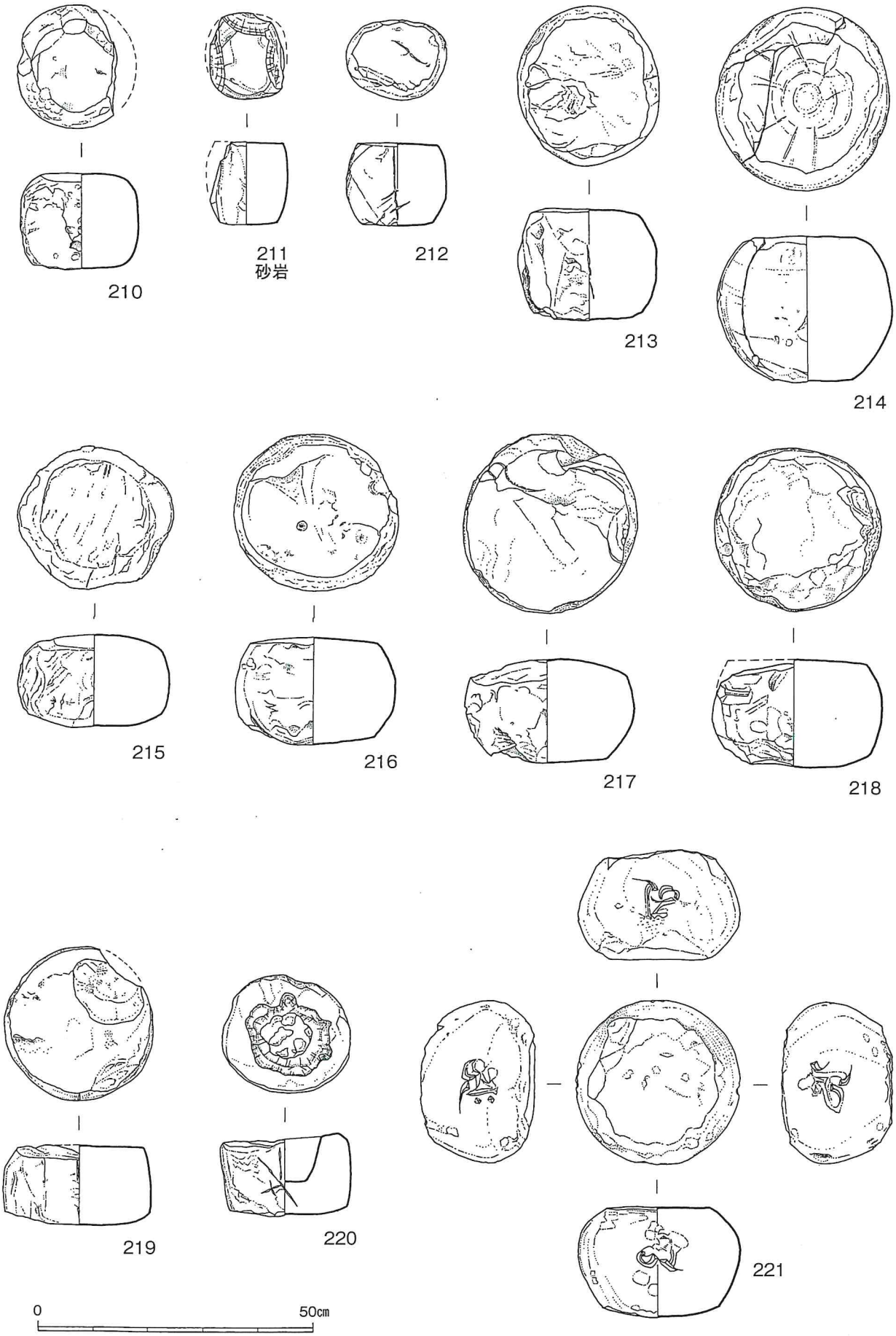
第49図　五輪塔〔火輪〕実測図⑥



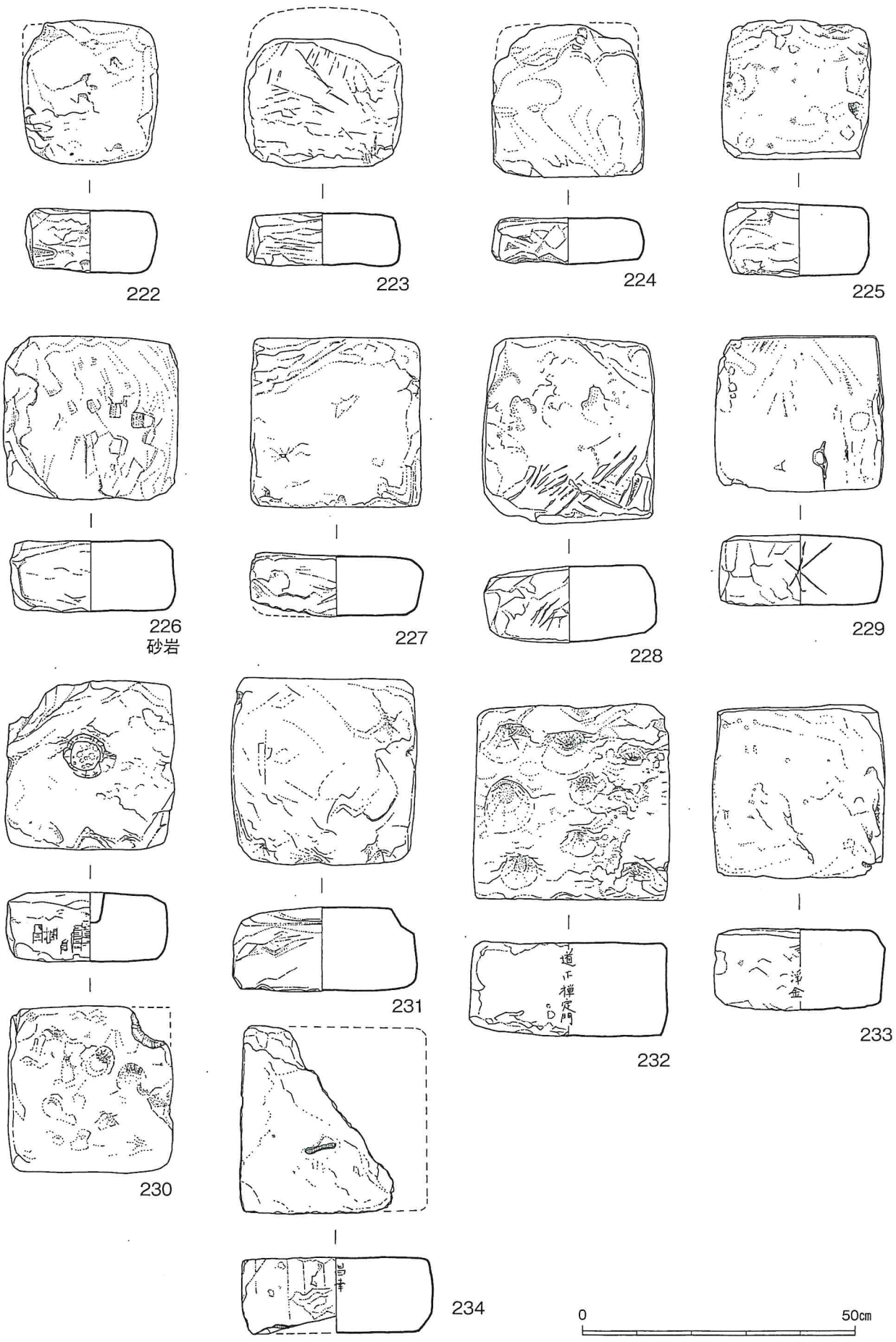
第50図　五輪塔〔水輪〕実測図①



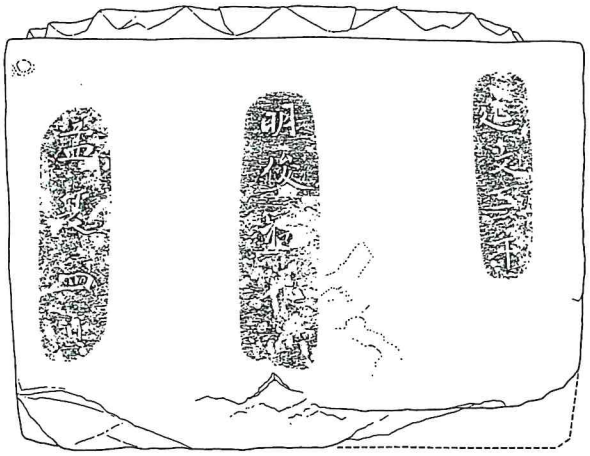
第51図　五輪塔〔水輪〕実測図②



第52図　五輪塔〔水輪〕実測図③

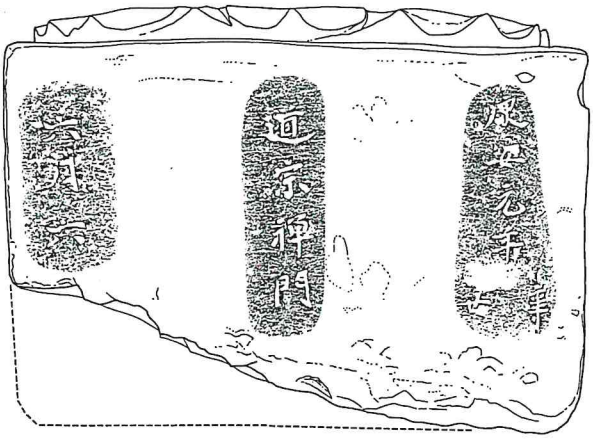


第53図　五輪塔〔地輪〕実測図



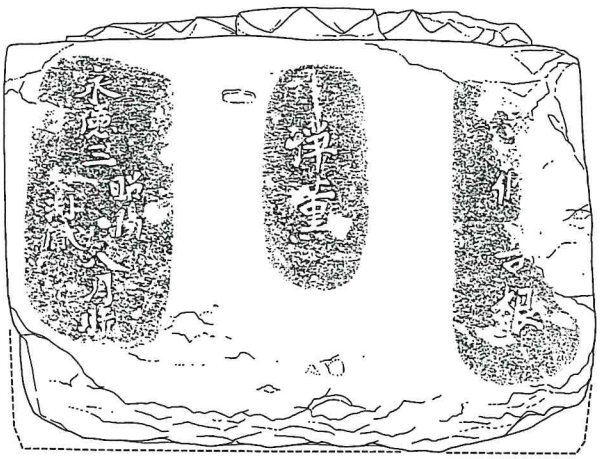
延文三年（一三五八）
明俊禅尼
孟夏四日

50



康安元年辛丑（一三六一）
道宗禅門
六月六□

51



□修善根(?)
淨薫
永徳三昭□
□□八月時（一三八三）

52

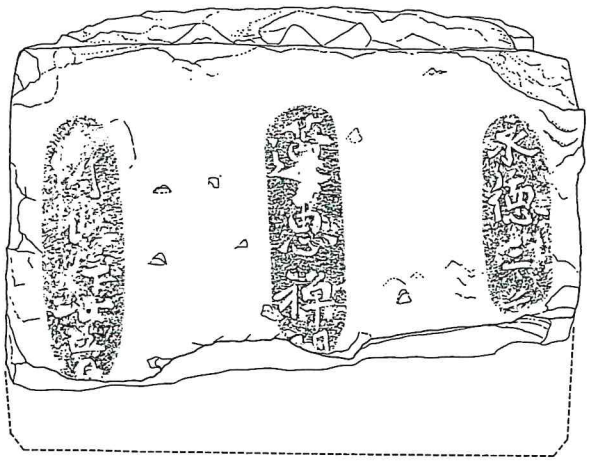
0　10　20cm

第54図　宝篋印塔〔基礎座〕銘文拓本①

永徳三年（一三八三）

蓮恵禅門

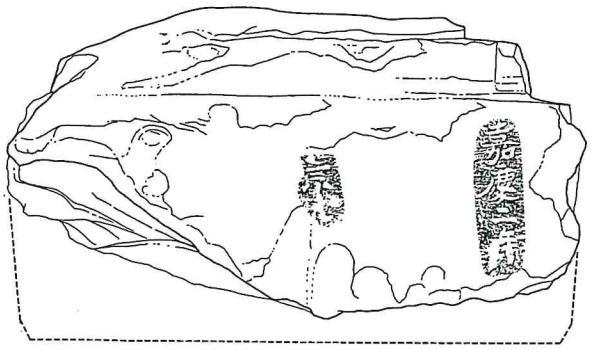
□□禅女□



53

嘉慶二年（一三八八）

宗



54

光妣淨

禅定尼

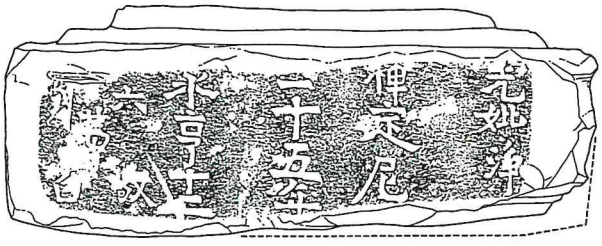
二十五年

永亨十二（一四四〇）

六　敬

満

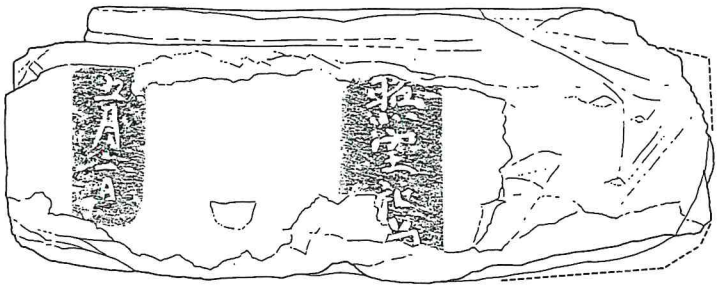
月　白



55

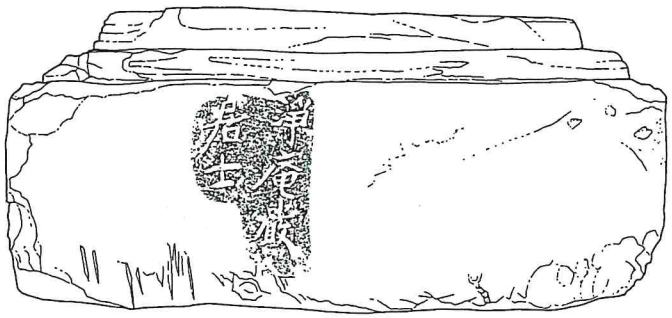
0　10　20cm

第55図　宝篋印塔〔基礎座〕銘文拓本②



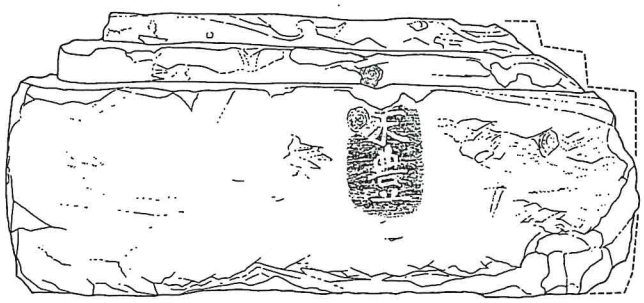
照宝和尚
五月二日□

56



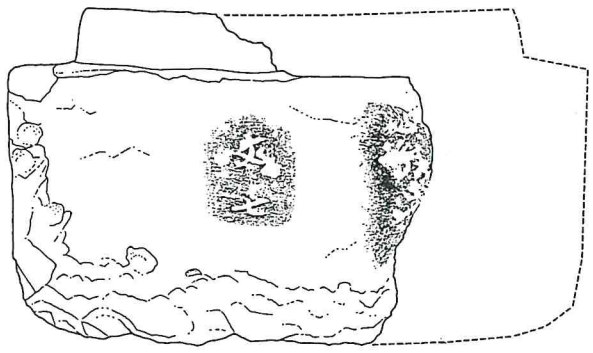
淨庵巌
居士

57



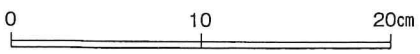
末豊

58

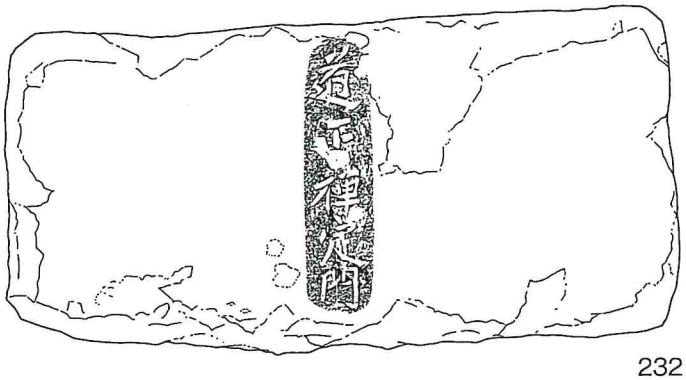


□□□
文七

59

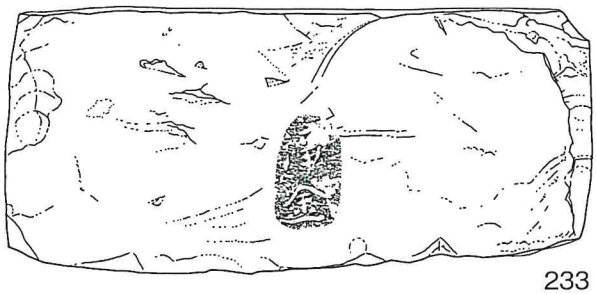


第56図　宝篋印塔〔基礎座〕銘文拓本③



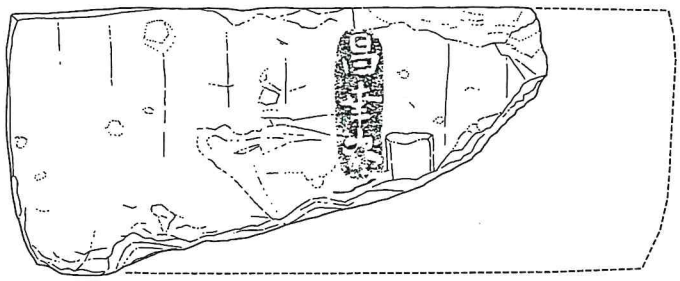
232

道正禅定門



233

淨金



234

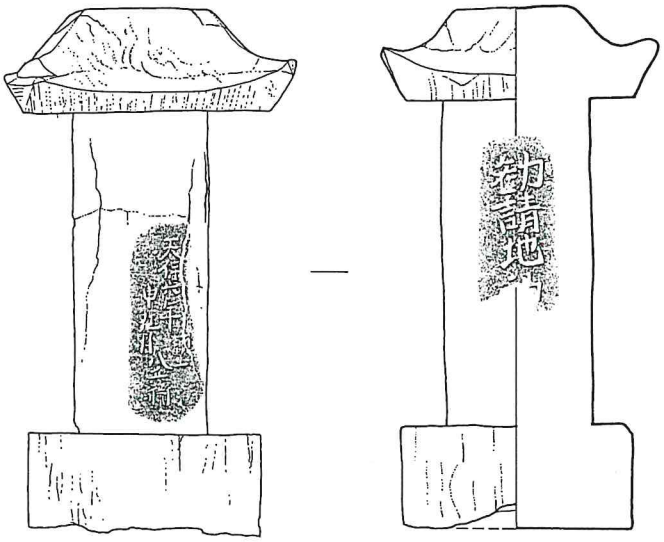
昌幸□

第57図　五輪塔〔地輪〕銘文拓本

46

0　10　20cm

第58図　宝篋印塔〔塔身〕銘文拓本

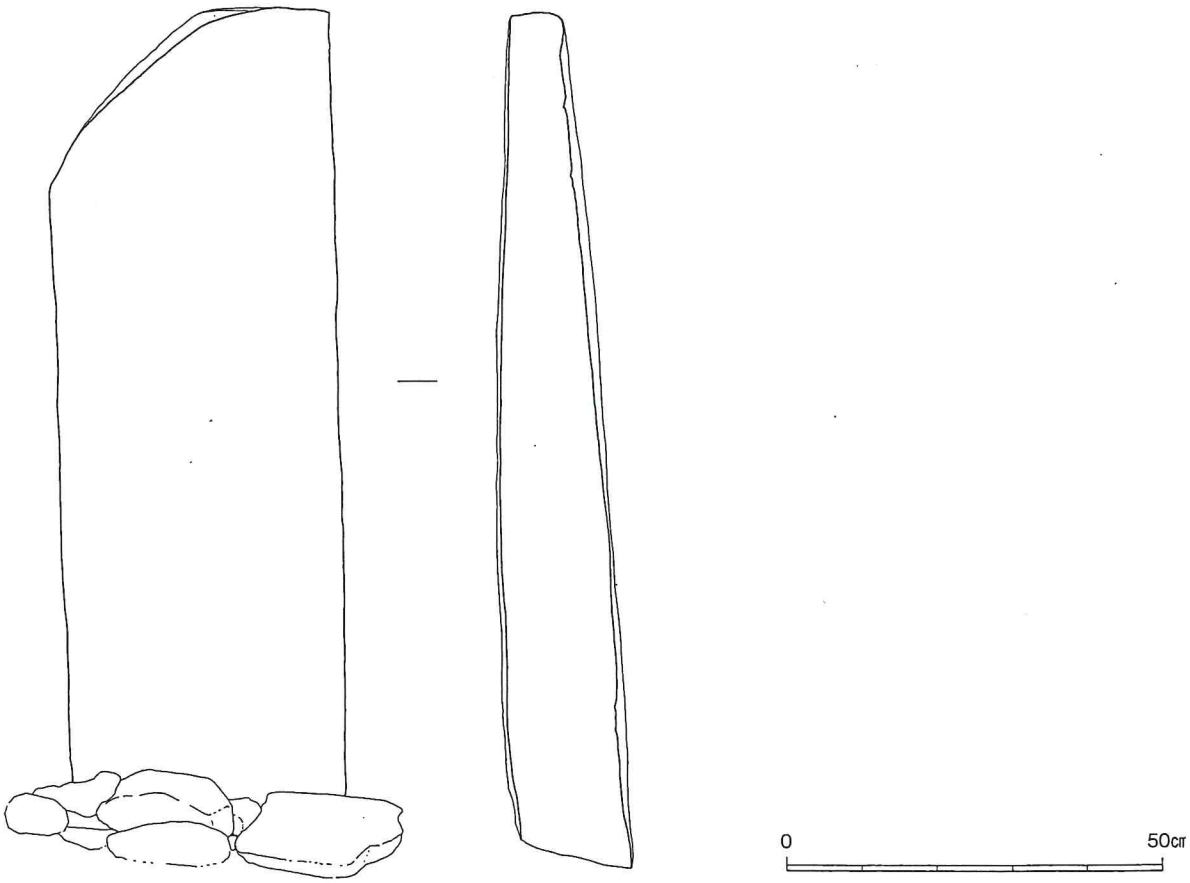


（左側面）　（正面）

勧請地□
天保六年□□
申□月　八兵衛

（※天保六年：1835年）

第59図　石塔実測図



（正面）　（右側面）

第60図　板碑実測図

第Ⅴ章　ま　と　め

1．棚底城跡

①時期

「棚底城跡歴史フォーラム」（平成18年２月19日に倉岳町で実施）で、小野正敏先生からの御示唆があった様に、出土遺物を分類して、第１期～第３期に分けた。

第１期は14世紀中葉～15世紀中葉で、大権寺比定地に残る年号入り石塔群の時期に見合うものである。下限に付いては、幻の棚底氏の滅亡と大権寺の廃寺が重なる時期と推定される。被熱遺物の存在は、この時、城内の建物に火災が発生したことを伝えている。新たな城主は上津浦氏以外に考えられない。上津浦氏は従前の有明海に加えて、新たに八代海の制海権獲得を目論んだものと思われる。そのための棚底城進出であったと考える。

第２期は、15世紀後半～16世紀前半である。この時期、文献に城に関する記載がないので、棚底城の周辺は比較的安定していたと考えられる。下限は、有事の事態となった天文元年（1532）の『八代日記』の記事をあてる。この年、天草氏等の五氏が同心して上津浦を攻めている。城跡からは、この時期に重なる被熱遺物が出土しているので、城も攻撃を受けて城内の建物が炎上した事が予想される。

第３期は、棚底城の争奪戦が繰り広げられた時期である。『八代日記』によれば、上限は上津浦親類が棚底城を下城した天文13年（1544）で、下限は上津浦勢が棚底を攻撃した永禄３年（1560）頃と推察される。城地そのものが争いの場になったと推定される。16世紀後半を廃城期と見る。結局、棚底城は、紆余曲折を繰り返しながら、実質200年程存続したものと思われる。

②検出遺構

城跡の地山は、全域が岩盤（頁岩）であることが判明した。Ⅰ郭～Ⅷ郭の全ての郭から柱穴が検出されたのも驚きであった。最も復元建物として線引きできたのは、Ⅰ郭・Ⅱ郭・Ⅷ郭であったが、柱穴の数の多さから、Ⅳ郭でも何らかの建物が存在したことが確実である。建物の規模は、Ⅰ郭の大型建物が別格で、それに継ぐものがⅡ郭、Ⅷ郭は門番所もしくは見張り台か狼煙台と推察される（西島眞理子氏の示唆）。即ち、棚底城跡ではⅠ郭に中心的な建物、Ⅱ郭にやや小型の建物（これらはグレイドが高く御殿の様な性格を持ったと推測する）、そしてⅣ郭に倉庫や小屋などの実用的な建物、先にも述べたがⅧ郭に門番所か見張り台や狼煙台の配置が考えられる。

一方で、疎の状態にあるものの、トレンチ調査により、その他の郭でも柱穴や杭跡が数多く検出されている。岩盤を人為的に掘り込んでいるために、何らかの構造物の一部である事は疑いない。いずれにせよ、棚底城跡からは、性格が異なる多様な建物跡が、郭ごとに検出された事に意義がある。

2．大権寺比定地

①地元に「大権寺」という字名を冠する地区がある。確たる寺跡は、今日、確認できないが、その一隅には、石塔の集中地点があり、在の郷土史家の高田尊徳氏は「この地が大権寺跡である」との強い認識を持っておられる。この報告書では、念のため、一応、比定地とした。大権寺比定地は、棚底城跡のほぼ真西にあたり、両者間の距離は、地図上での直線距離で約410mとなる。

今回の調査で、かかる石塔群を再整理したところ、この地には、ある時期に少なくとも五輪塔62基、宝篋印塔36基が存在した事が判明した。その数の多さから、大権寺の存在は疑いないところである。

この遺跡については、鶴田八洲成氏が町教委と昭和50年代に調査されており、「北朝年号を有する石塔の存在」を『天草建設文化史』で発表されている。さらに、町立棚底小学校長を勤められた（故）竹本勝善氏

の踏査記録が「広報くらたけ」に掲載された経緯があり、以前から注目されていた場所であった。

②この石塔群は、再調査の結果、北朝年号を持つものが、一基増えて計６基となり、その他、銘文だけのものが７基存在することが分かった。年号の上限は延文３年（1358）、これと同時期のものが４基あり、残り一基が、やや時代が下がって、永享12年（1440）の年号を刻み、これが下限となる。即ち、14世紀中葉～15世紀中葉間での「大権寺」の存在が推察される。

③棚底城の時代区分を考えると第１期～第３期に分けられる中で、大権寺の推定存続期間と棚底城の第１期が一致することが分かる。

④棚底城の第１期と一致する大権寺は、幻の城主とされる棚底氏の菩提寺ではないかとの推論に至る。さらには、石塔が北朝年号である事から、棚底氏の政治背景も垣間みえてくる。この点において、棚底城－棚底氏（城主）－大権寺の図式が形成されることになる。

３．県内の中世城館の実態

①今日、県内の中世城館跡は533城を数える（『熊本県遺跡地図』）。県文化課は、全国に先駆けて、昭和50～52年度に文化庁国庫補助事業により中世城館跡の悉皆調査を実施したが、その後の国指定史跡への取り組みは進展せず近年に至った。もっとも、辛うじて昭和53年度に宇土市の「宇土城跡（西岡台）」が、中学校の移転候補地に上がり、発掘調査が行われた結果、城跡の保存が図られる事になり、国指定史跡となった。

その後、26年の年月を経て、平成13年度に（旧）三加和町（現：和水町）の「田中城跡」が、長年の学術調査の後、指定を受けた。そして最近では（旧）中央町（現：美里町）の「堅志田城跡」が、平成17年度に国指定史跡となった。現時点で、これら城跡を含めて、調査や整備の進んだ中世城館跡は、棚底城跡を含めて下表の通りである。県を四地区に分けて説明を行う。

地区	城跡名	所在地	概要
県北	隈部館跡	山鹿市菊鹿町上永野	・県指定史跡　・学術調査 ・昭和49年に主郭を発掘調査。山中に館跡が残る。 ・検出遺構の礎石建物跡や庭園跡を、史跡公園の中で野外展示。 ・城主は「国衆一揆」の中心人物である隈部親永。 ・県で最高クラスの館跡。
	田中城跡	玉名郡和水町和仁	・国指定史跡　・学術調査　・大規模な平山城 ・肥後の「国衆一揆」の最後の舞台となった城跡。 ・豊臣秀吉軍が田中城跡を包囲した「仕寄り図」（陣取り図）が残ることで知られる。
県央	宇土城跡（西岡台）	宇土市神馬町千畳敷	・国指定史跡　・大規模な平山城　・名和氏の居城 ・長年の調査成果を元に、中心部の千畳敷で整備が行われている。門などを復元。
	堅志田城跡	下益城郡美里町中郡	・国指定史跡　・学術調査　・大規模な山城 ・阿蘇氏の最前線基地。 ・戦国時代後半、薩摩の島津氏の侵攻に対して抵抗し、一年間の籠城の末、落城した。
県西	棚底城跡	天草市倉岳町棚底	・天草地方に特有な海城。 ・北朝年号を有する石塔群の存在により、中世寺院「大権寺」との関連が指摘される。 ・茶の湯道具の石製面取り風炉が出土。 ・岩盤を掘り込んだ大型の建物跡が検出された。
県南	永里城跡	球磨郡あさぎり町上	・学術調査 ・規模山城の全域に小段が築かれ、山裾からは神社跡や寺跡が検出された。 ・城主の交代があり、滅亡した永里氏の墓所（推定）は破壊されている。

第23表　県内中世城館跡の調査・整備状況

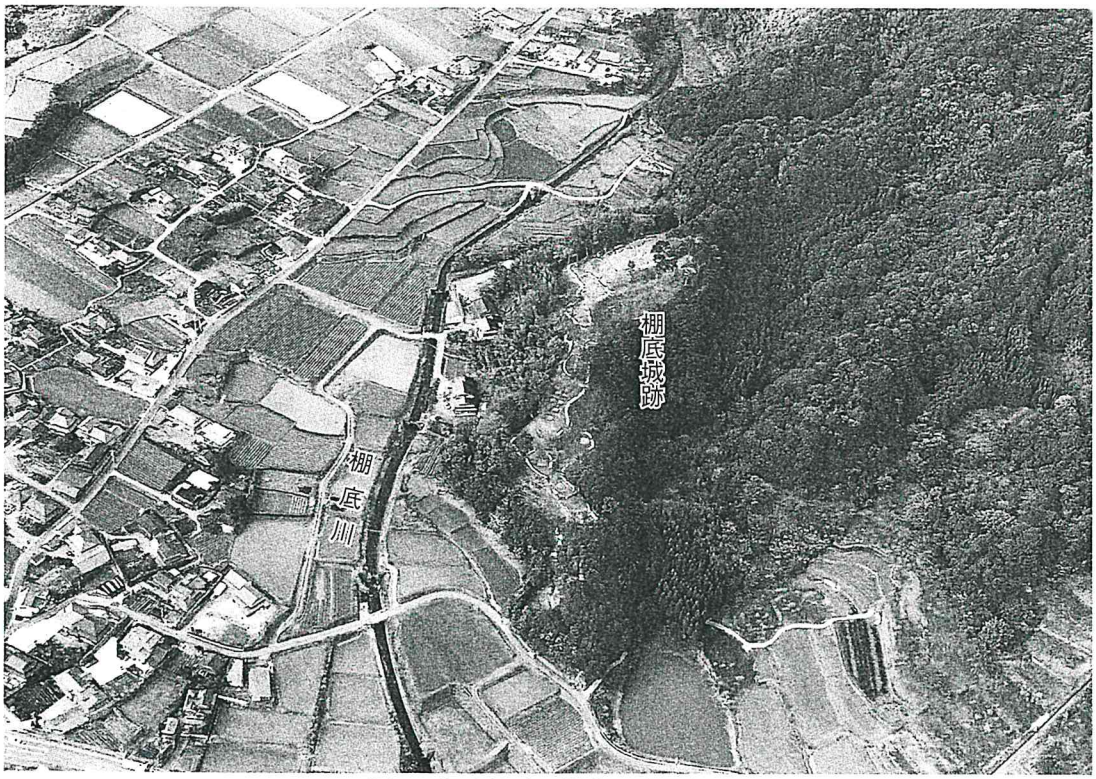
②中世末から近世初頭にかかる「中近世城跡」の発掘調査も進み、文献上でしか知り得なかった破城の実態が解明された。該当するものは、３城跡である。

地区	城跡名	所　在　地	概　　要
県北	鷹ノ原城跡	玉名郡南関町関町	・公園化計画に伴う発掘調査。 ・城跡地は、発掘調査前は更地状態であった。積石（残存石垣）の露呈は無く、瓦片も見当たらなかった。 ・本丸からは、熊本城の天守閣・石垣に見合う程の残存石垣が検出された。 ・丁寧な破城がなされた事も判明。
県央	麦島城跡	八代市古城町	・市道の敷設工事に伴う事前調査。 ・松江城以前の麦島城の実態解明が進んだ。破城された石垣も出土。 ・水濠に倒れ込んだ隅櫓の建築材が、そのままの状態で出土した。
県南	佐敷城跡	葦北郡芦北町佐敷	・城山公園計画に伴う調査。 ・県内で初めて破城の実態を明らかにした。多量の瓦も出土しており、短期間に、荒々しく破城された事が判明。

第24表　県内中近世城跡の調査状況

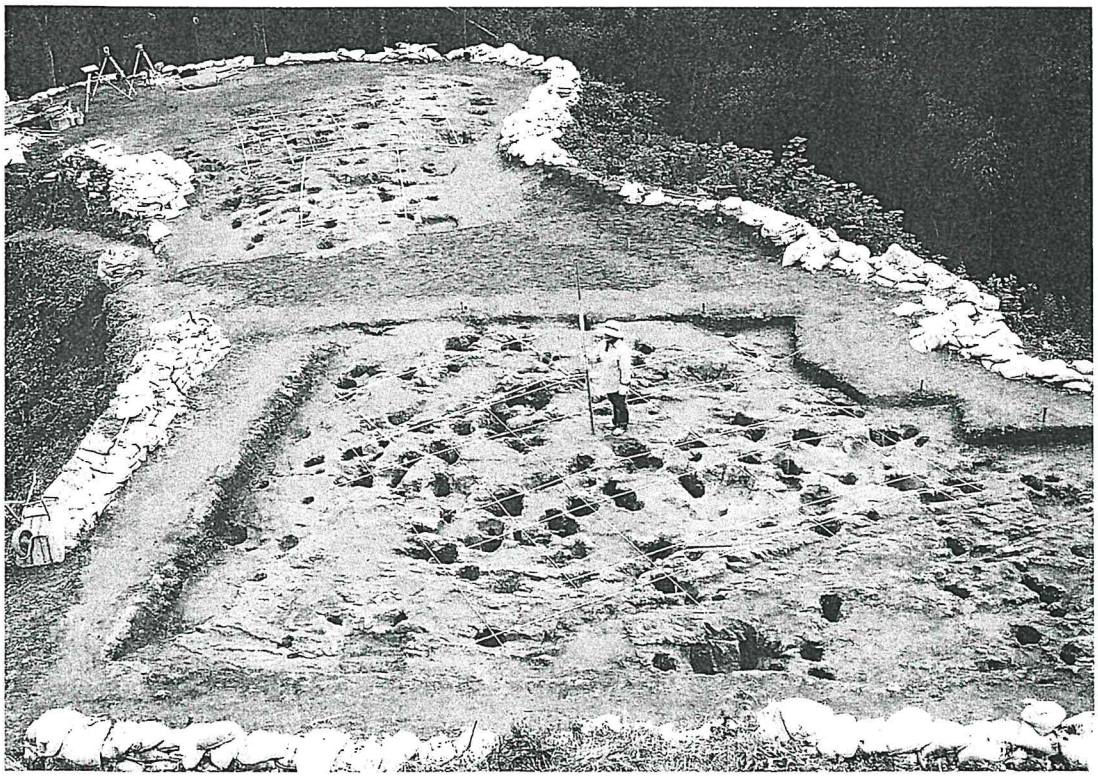
写　真　図　版

図版１　棚底城跡と大権寺比定地　倉岳山頂から望む

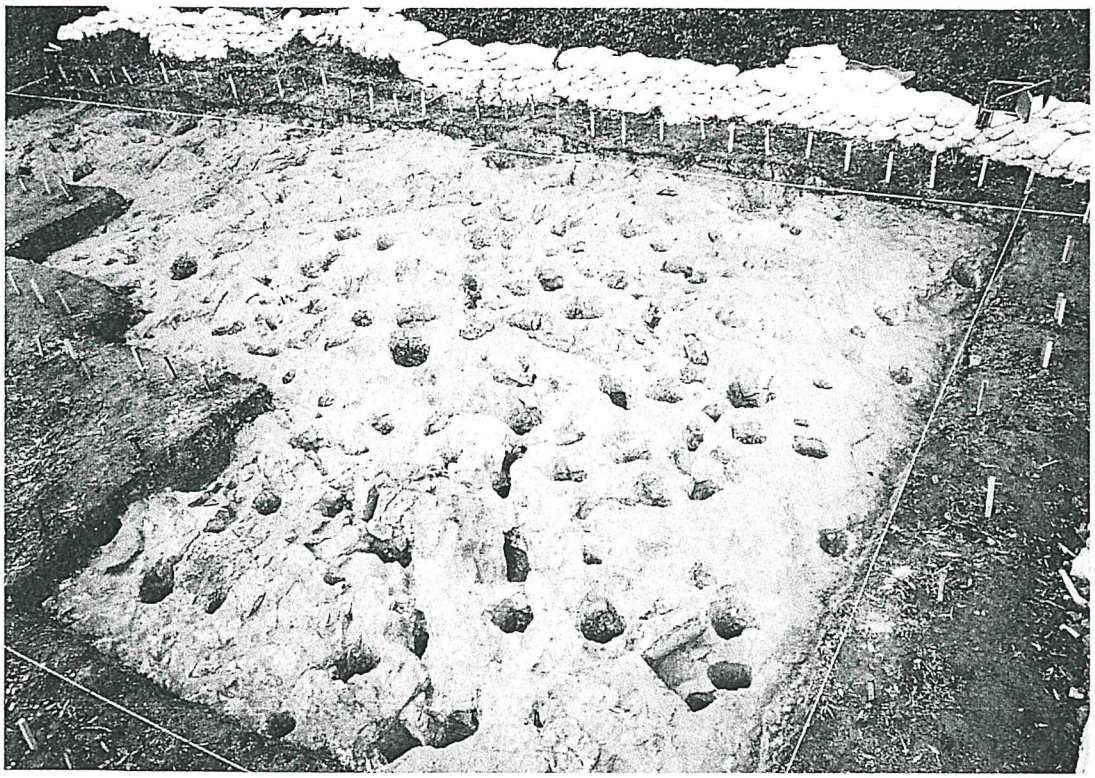


図版２　棚底城跡　航空写真　東→西

図版３　Ⅱ郭（トレンチ設定前）



図版４　Ⅱ郭トレンチ調査（手前：Ⅱ郭－a　奥：Ⅱ郭－b）

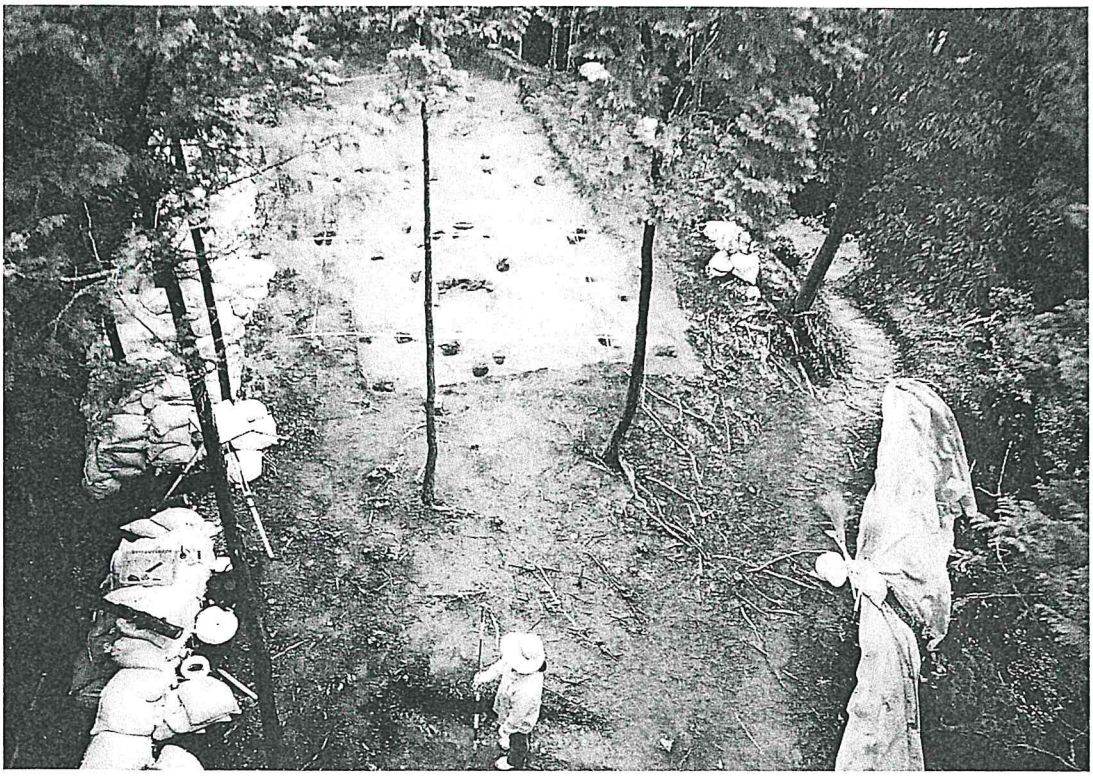


図版５　Ⅱ郭－aトレンチ

図版６　Ⅱ郭－bトレンチ（拡張前）

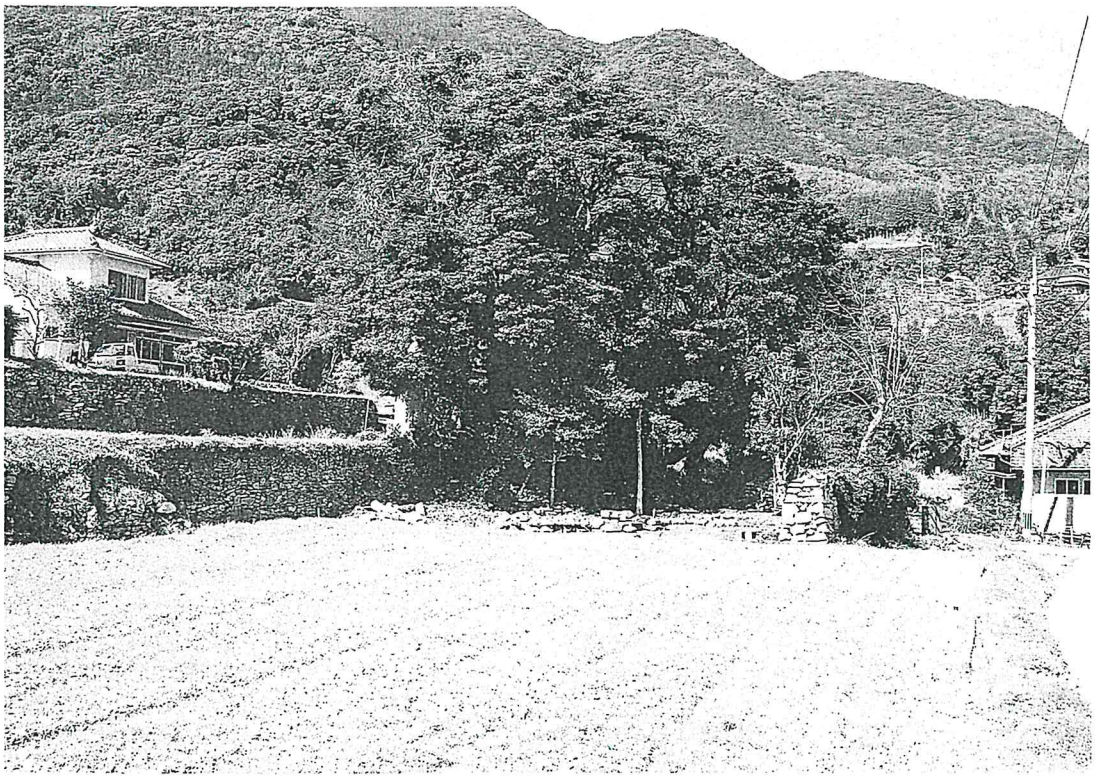
図版７　Ⅳ郭平場からⅠ～Ⅲ郭を望む

図版８　Ⅲ郭石垣　南面



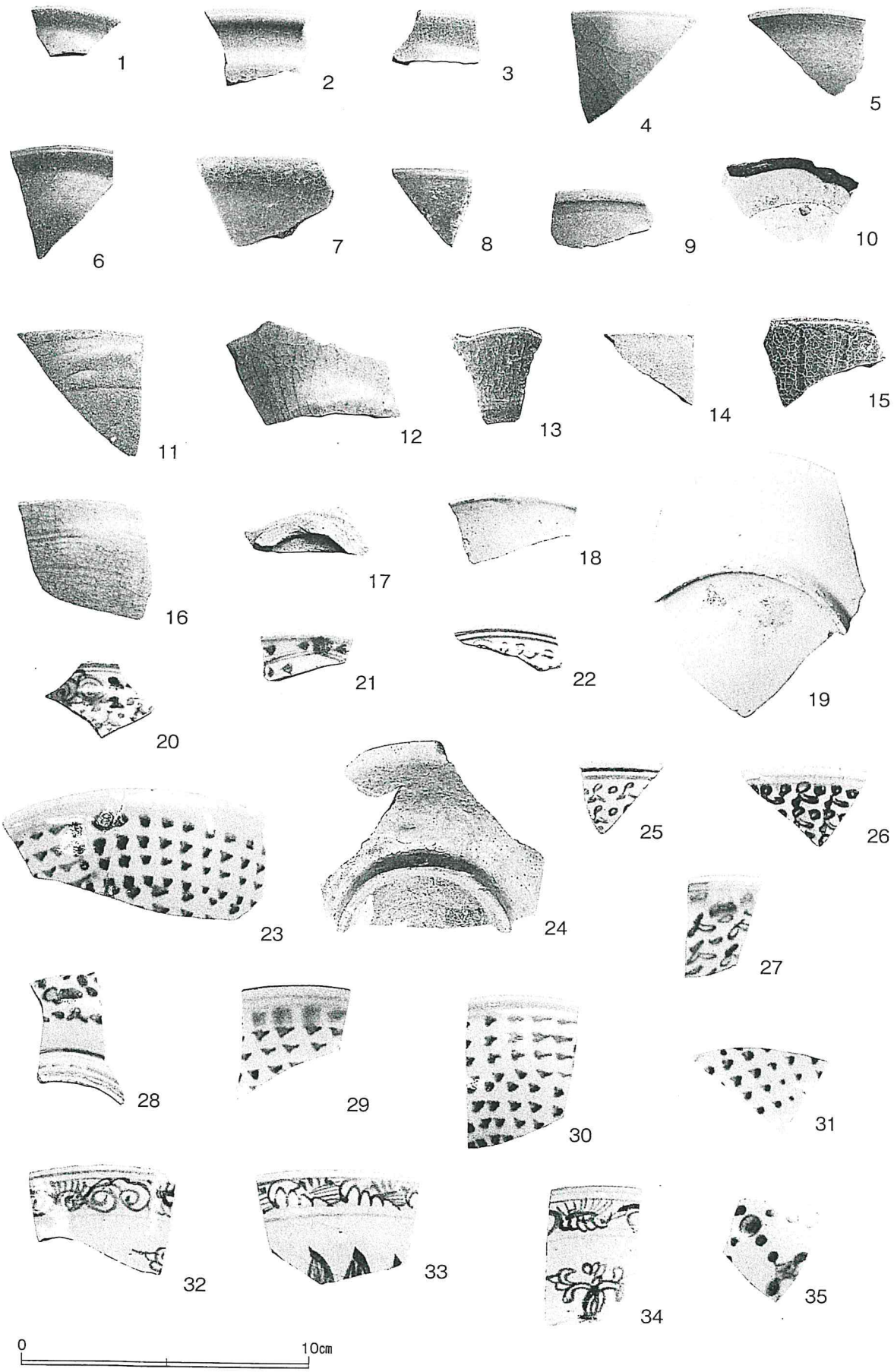
図版９　Ⅷ郭　東端部（１トレンチ）

図版10　Ⅷ郭　南下の帯曲輪

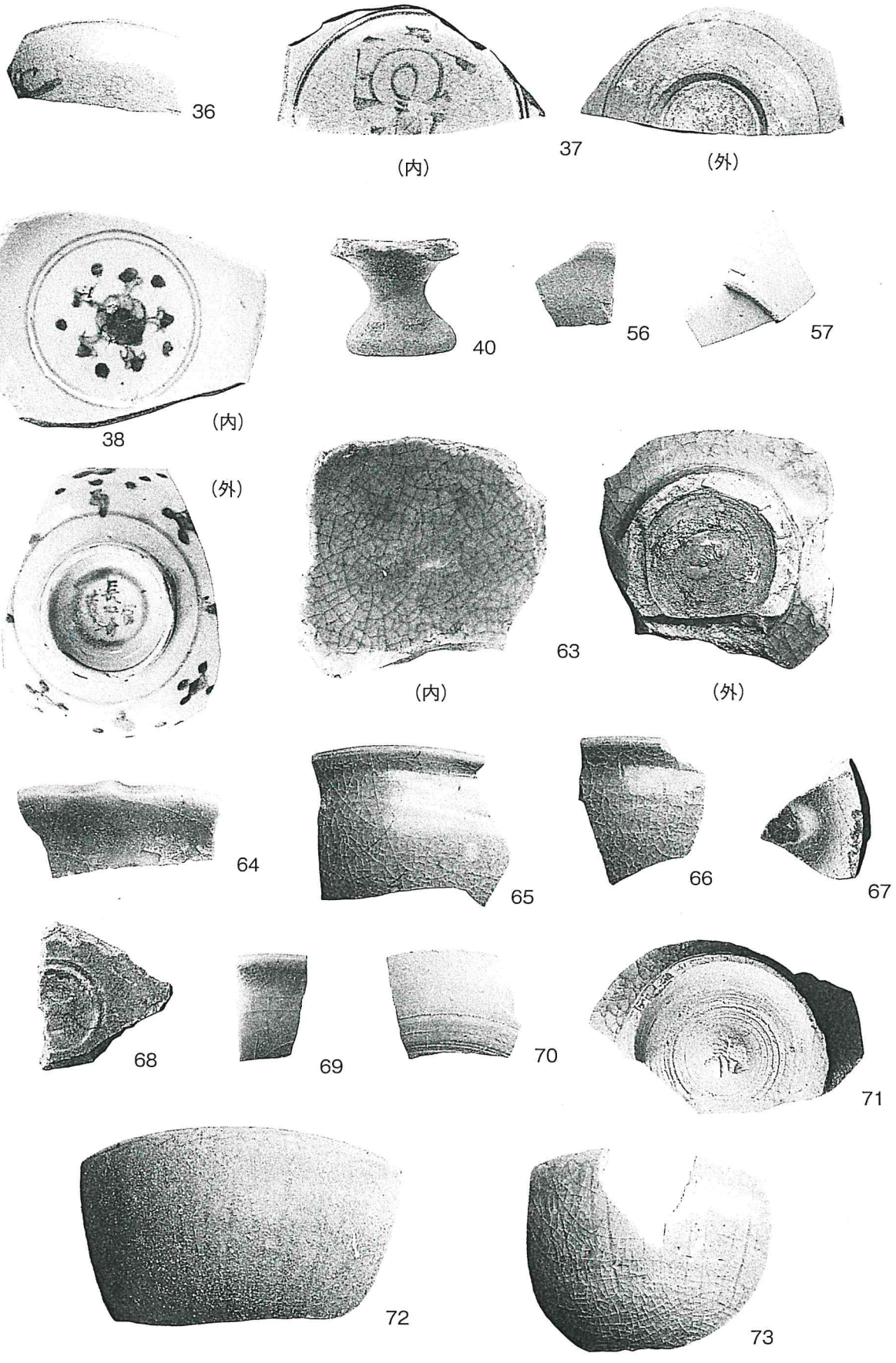


図版11　大権寺比定地（南→北）

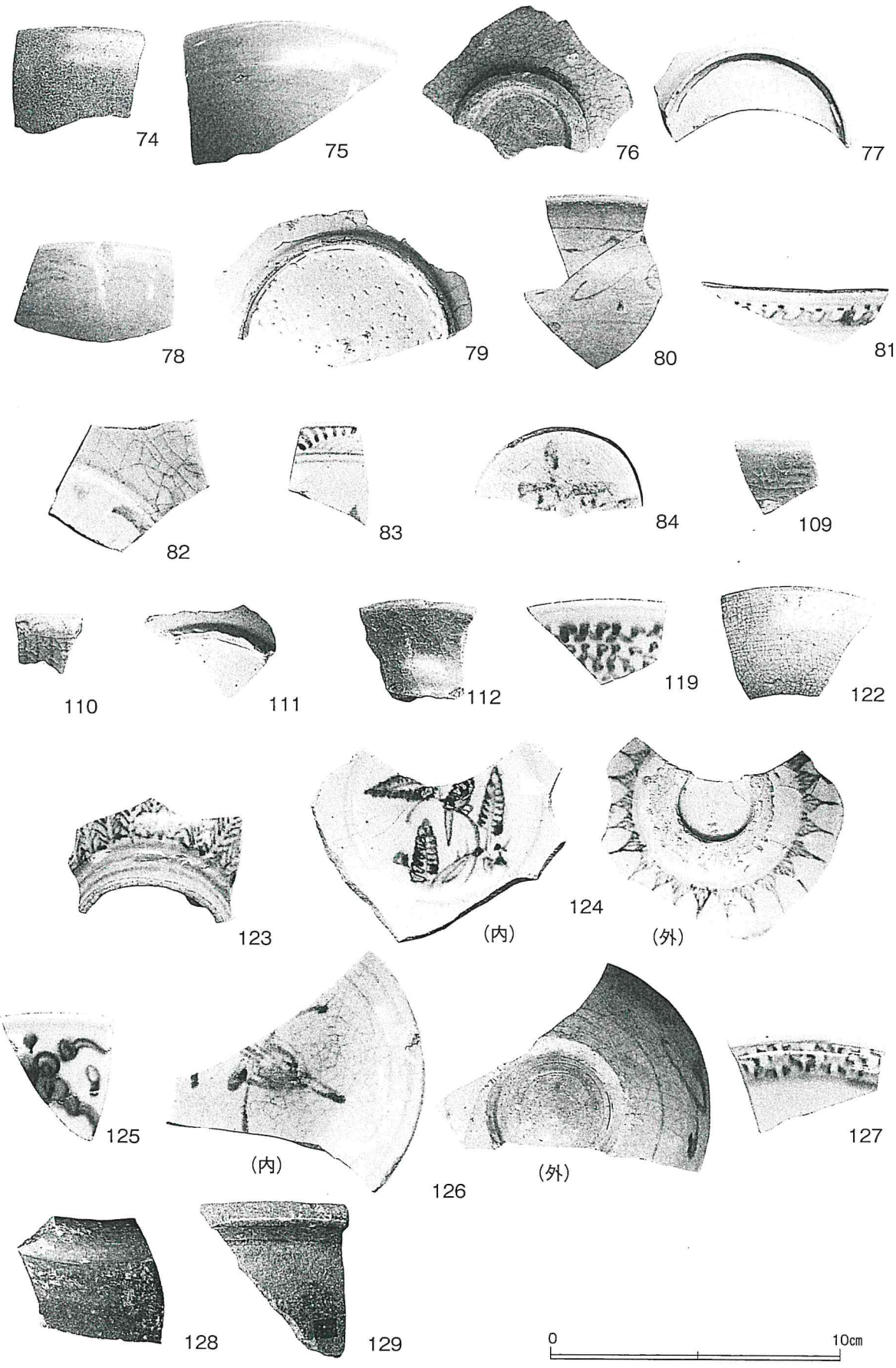
図版12　大権寺比定地の石塔群



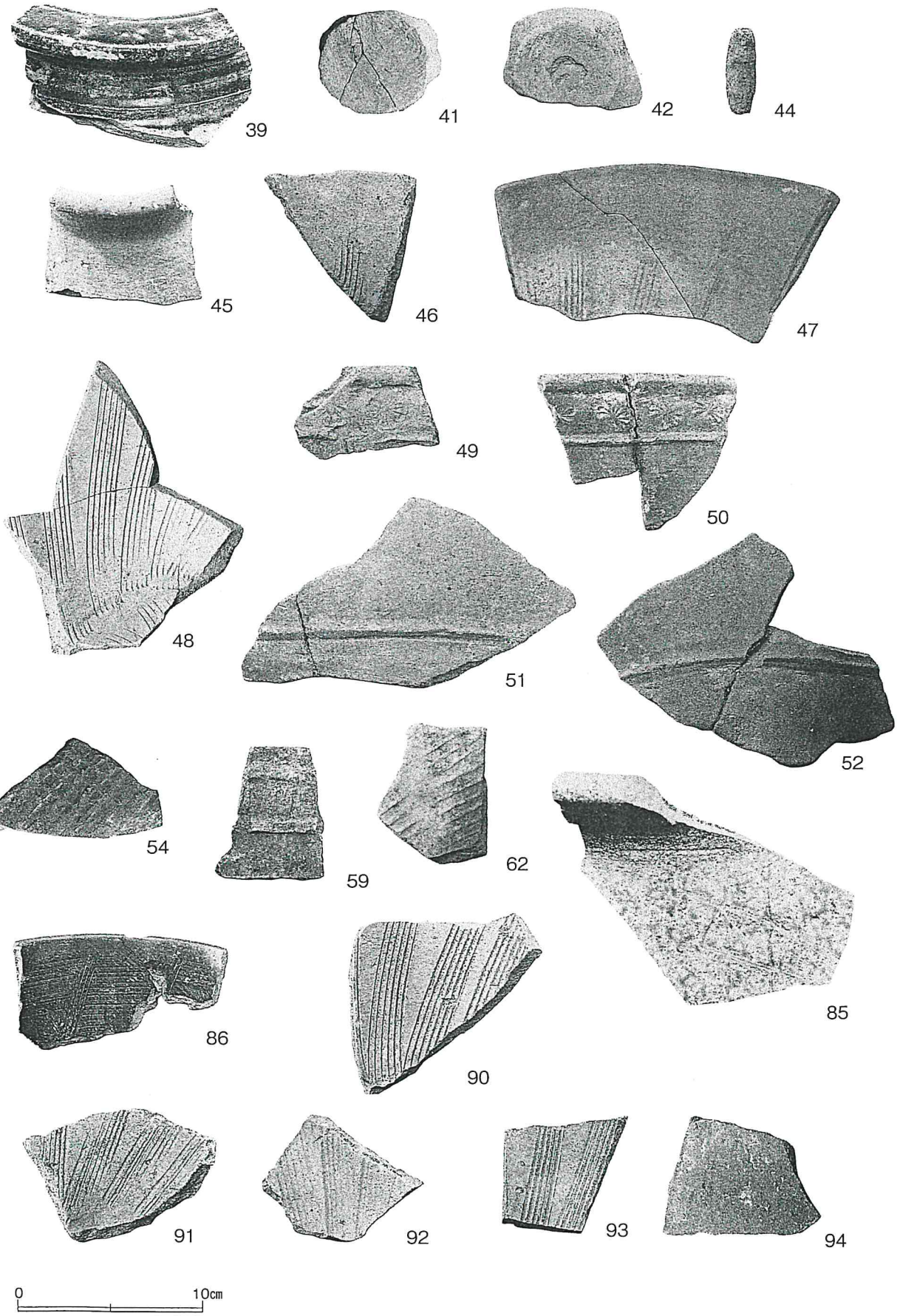
図版13　出土遺物〔磁器〕①　※図版13～19の番号は、本報告書の遺物番号。



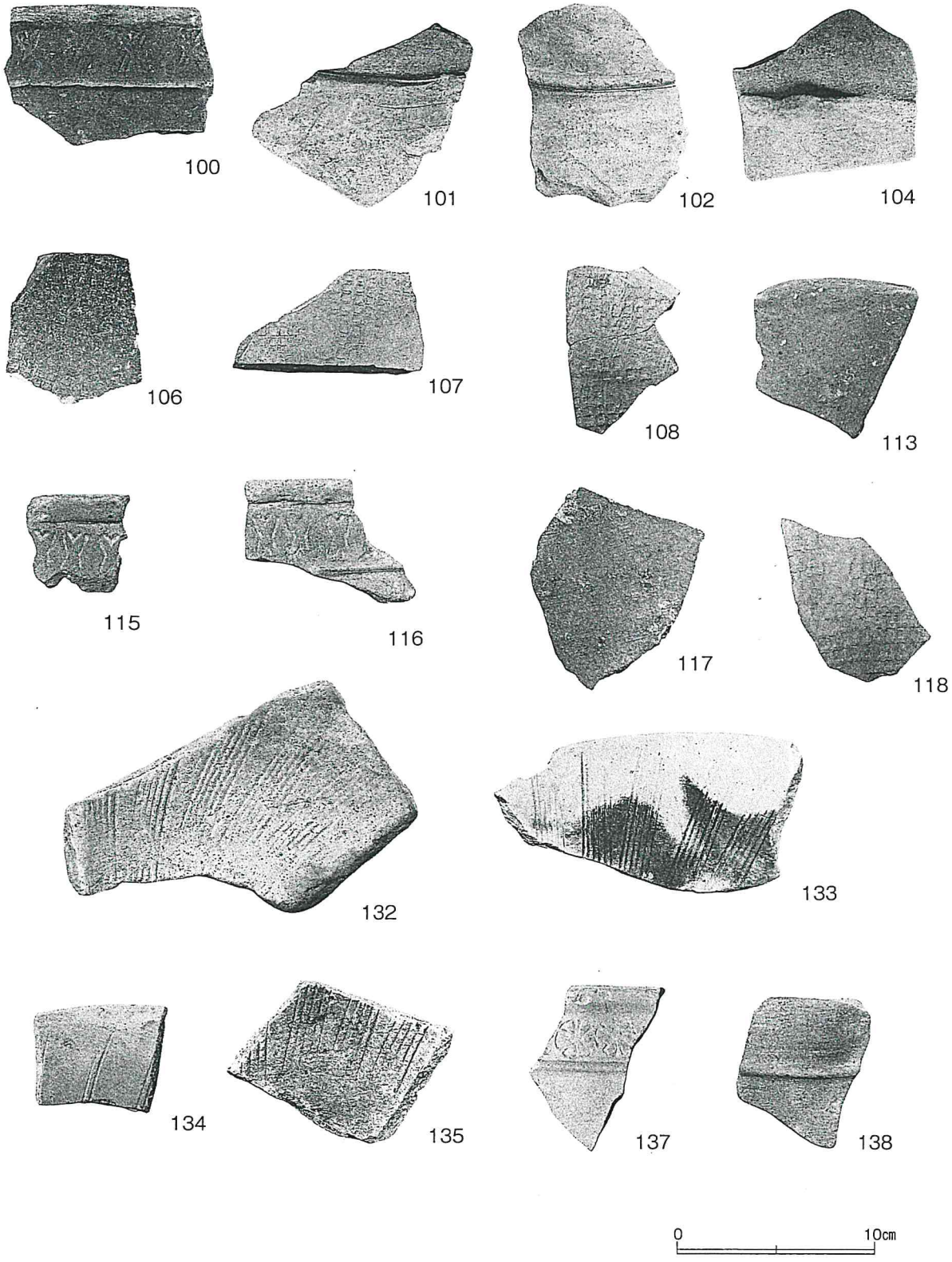
図版14　出土遺物〔磁器〕②



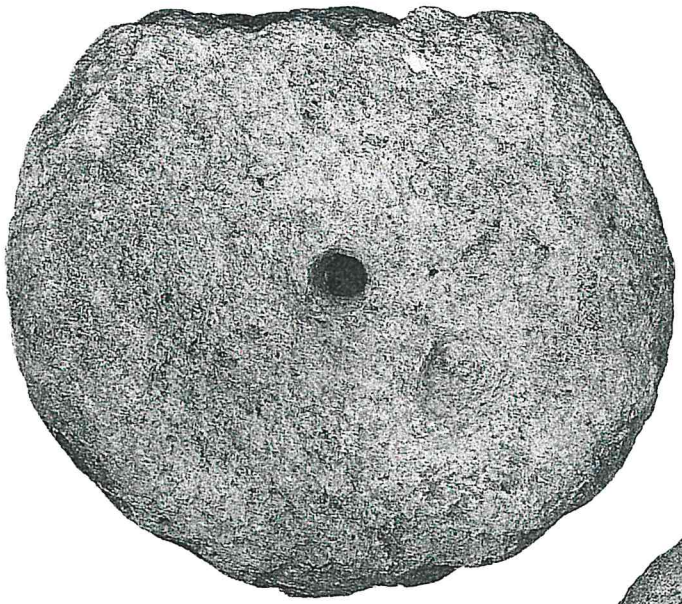
図版15　出土遺物〔磁器〕③



図版16　出土遺物〔日用雑器〕①

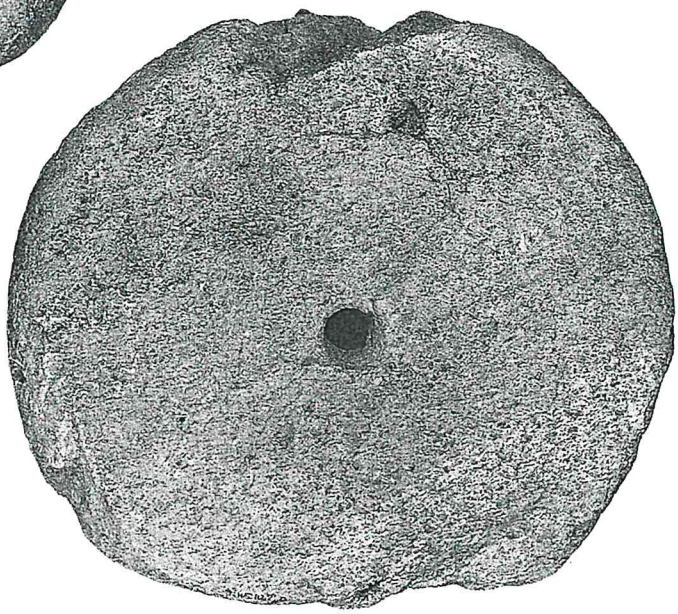


図版17　出土遺物〔日用雑器〕②

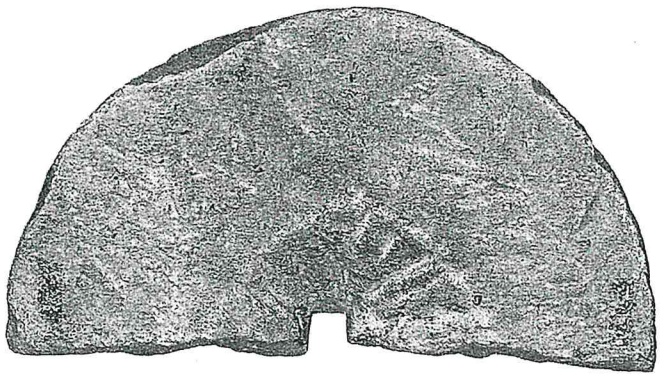


141

（上面）

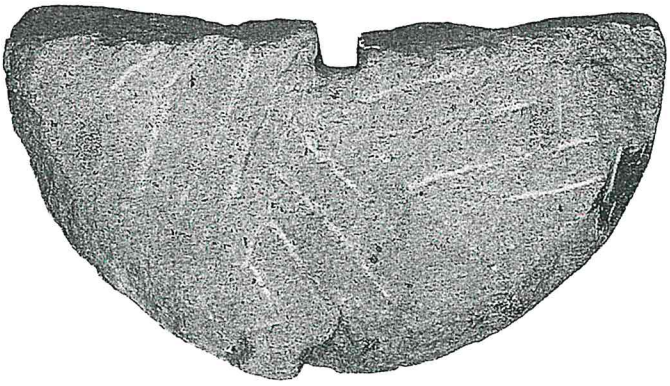


（下面）



142

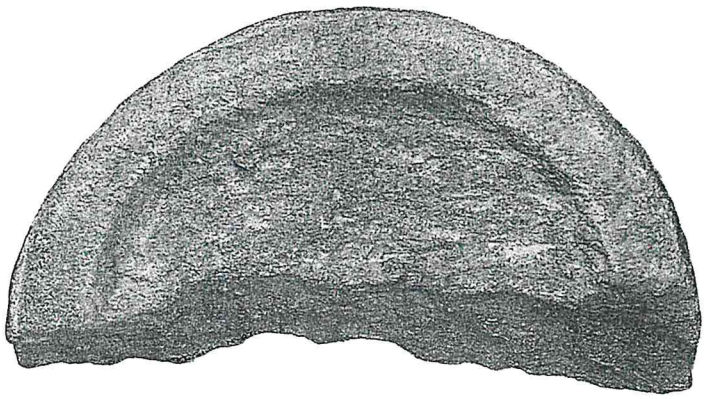
（上面）



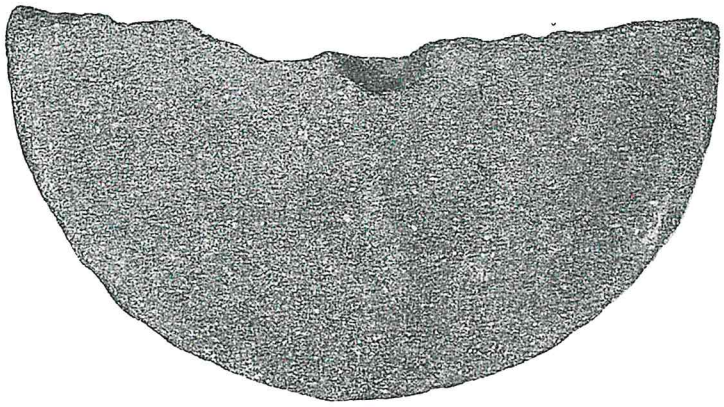
（下面）

0　10　20cm

図版18　出土遺物〔ひき臼〕

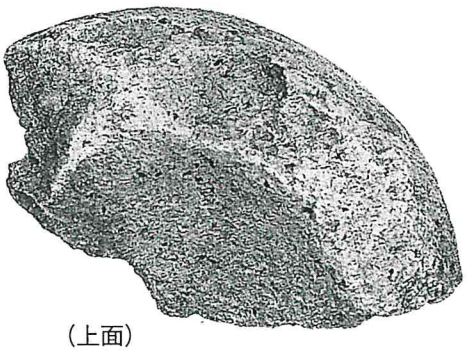


（上面）

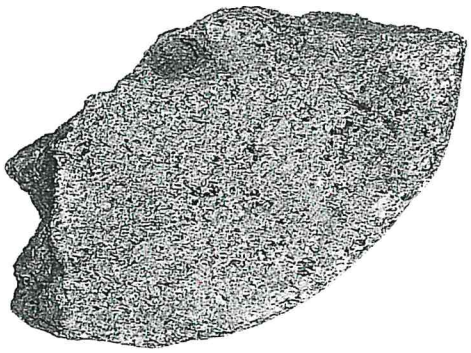


（下面）

143

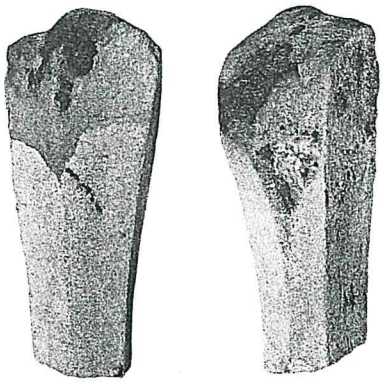


（上面）

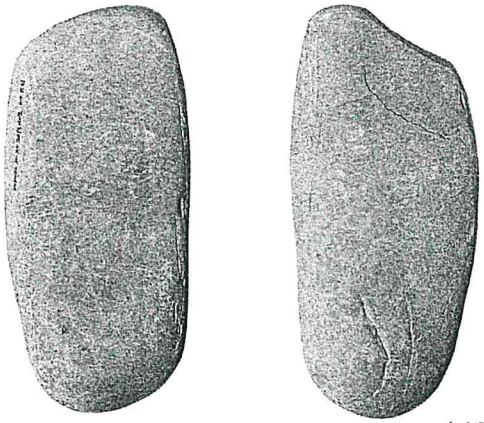


（下面）

144



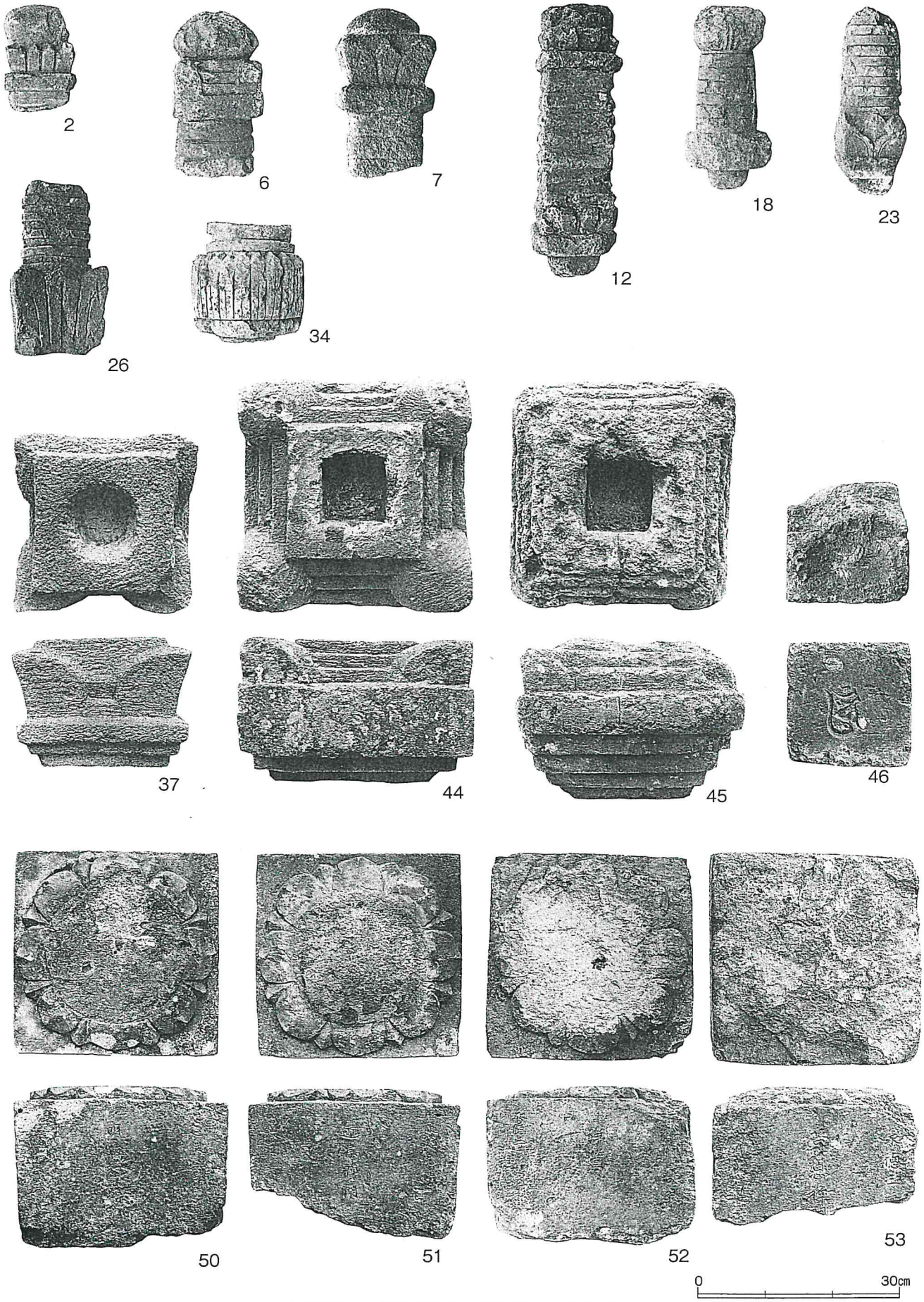
145



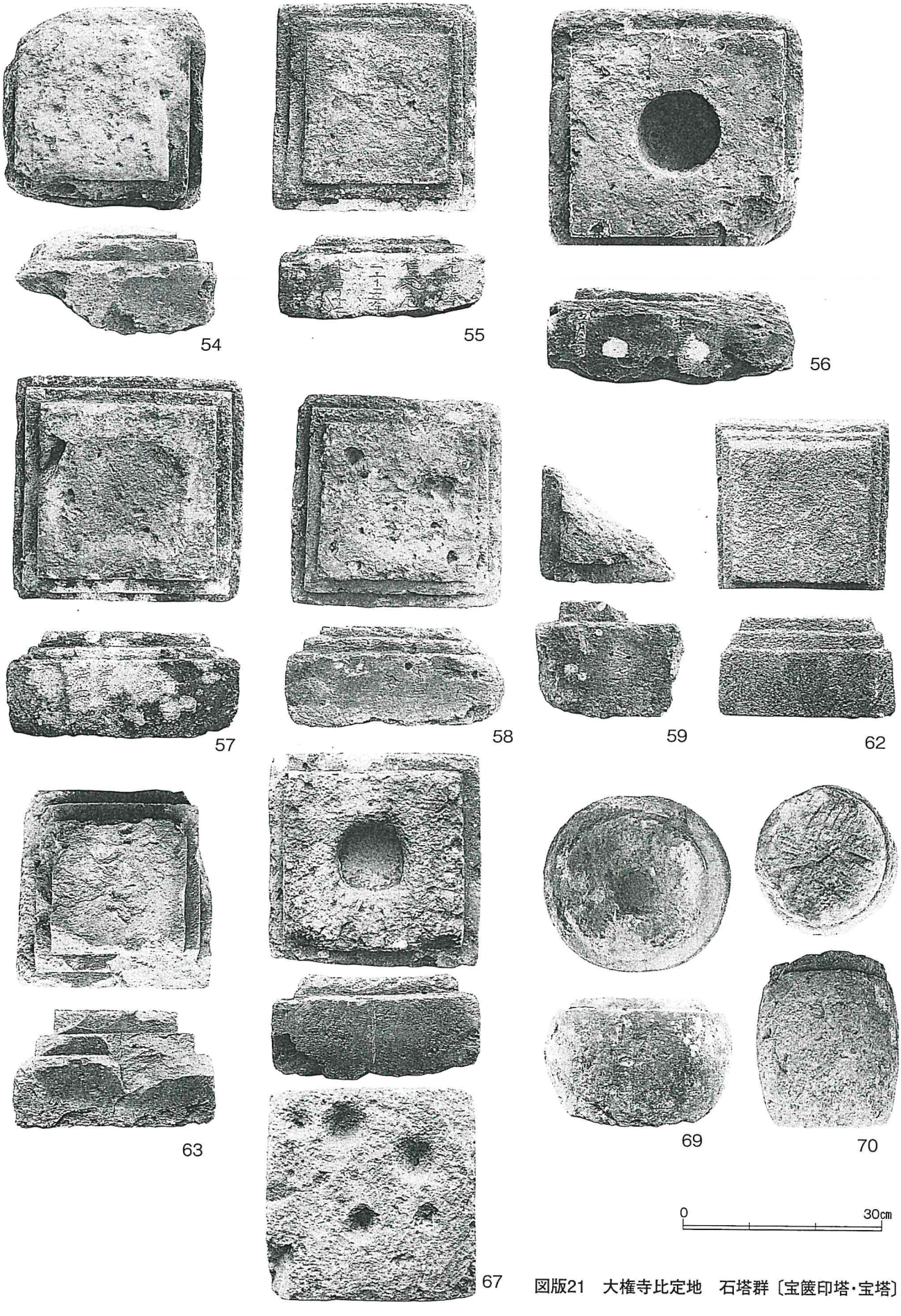
146

0　10　20cm

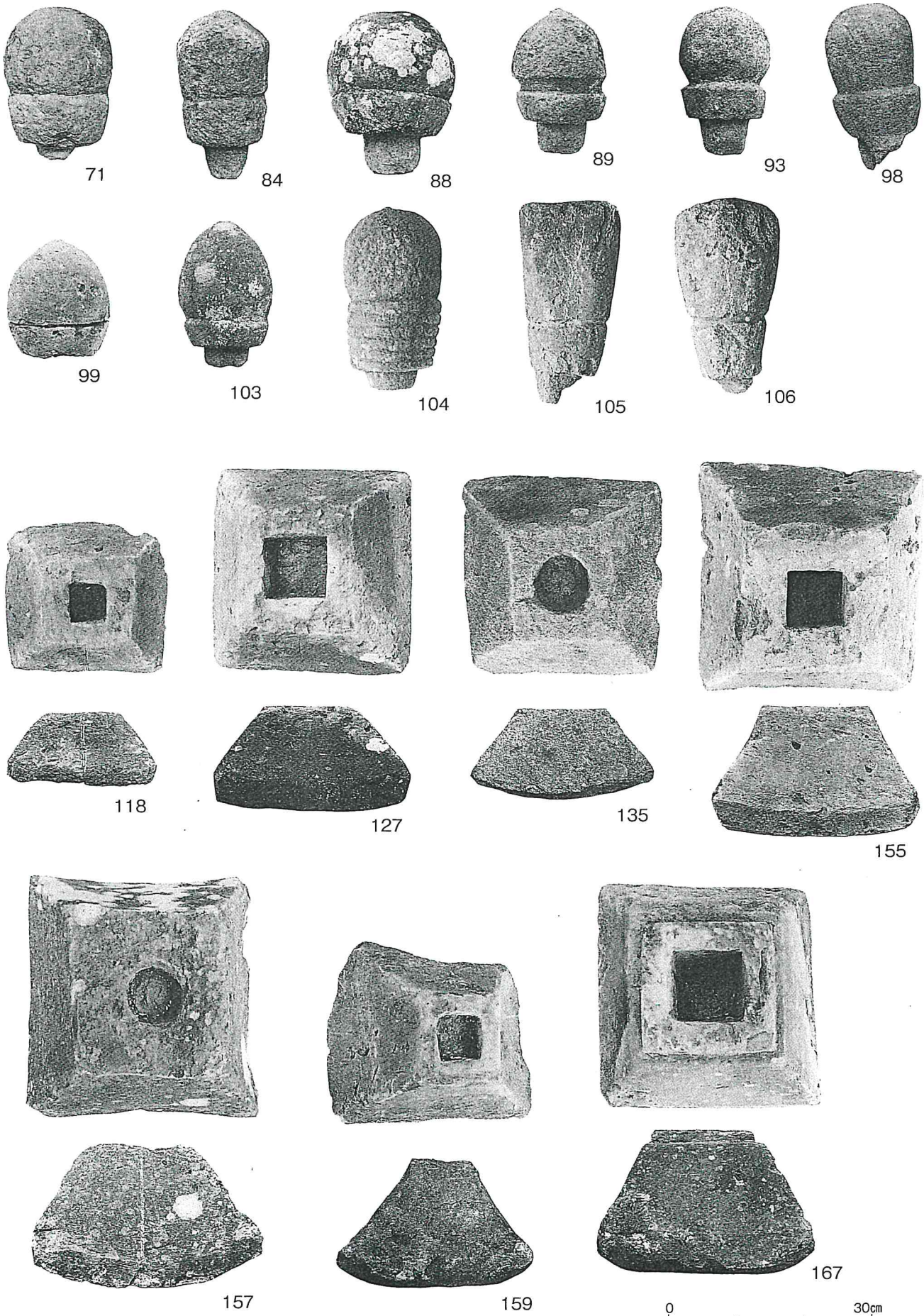
図版19　出土遺物〔ひき臼・砥石〕



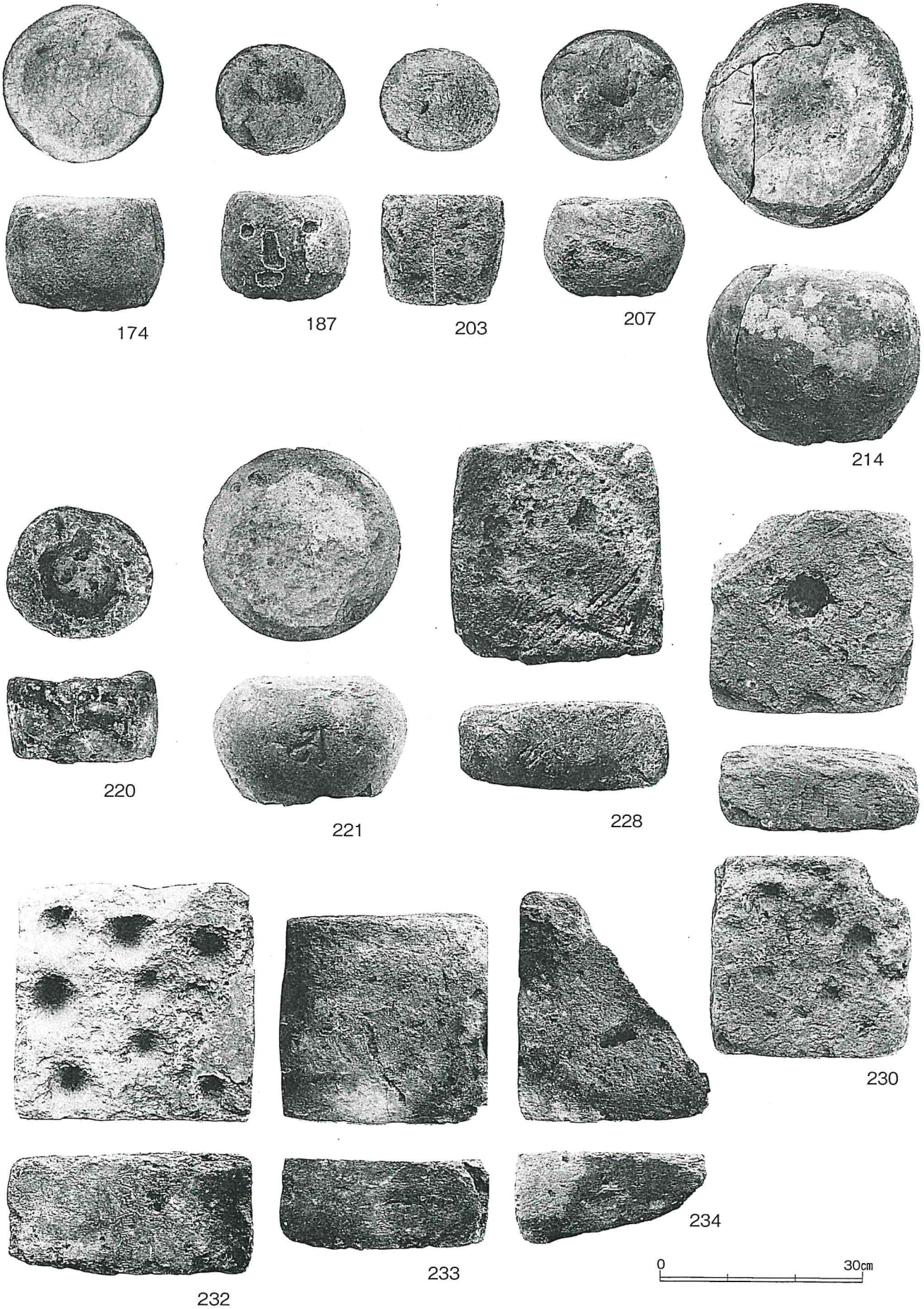
図版20　大権寺比定地　石塔群〔宝篋印塔〕　※図版20～23の番号は、本報告書の石塔番号。



図版21　大権寺比定地　石塔群〔宝篋印塔・宝塔〕



図版22　大権寺比定地　石塔群〔五輪塔〕①



図版23　大権寺比定地　石塔群〔五輪塔〕②

被熱した遺物について

平成14年度の調査報告書『棚底城跡』も含め、被熱した輸入磁器の資料をまとめる。該当する遺物は８点で、青磁５点、染付け３点を数える（この他、日用雑器の中に被熱した擂鉢などがある）。これらは火災によって被熱したものと思われ、器面が変色している。年代と出土地点は下表の通り。

遺物番号	器　種	年　　代	出土地点	調査年度（平成）
10	青　磁	14世紀後半～15世紀中葉	Ⅱ郭	15
64	青　磁	14世紀後半～15世紀前半	Ⅳ郭７T P-No.5	15
72	青　磁	15世紀中葉～16世紀前半	Ⅳ郭７T P-No.2	15
81	染付け	15世紀後半～16世紀前半	Ⅳ郭２T P-No.2	15
15	青　磁	14世紀後半～15世紀中葉	Ⅰ郭 P-No.11	14
（未掲載）	青　磁	14世紀後半～15世紀中葉	Ⅰ郭	14
58	染付け	16世紀前半～中葉	Ⅰ郭	14
61	染付け	16世紀前半～中葉	Ⅰ郭	14

（注）遺物番号は、今年度と前年度の調査報告書の遺物番号と一致する。

これらの事から、棚底城跡においては、２回の火災が発生した事が推定される。城跡の年代は、第１～３期に分類され、これらと照合すると、１回目の火災は第１期の後半、２回目は第２期の後半となる。

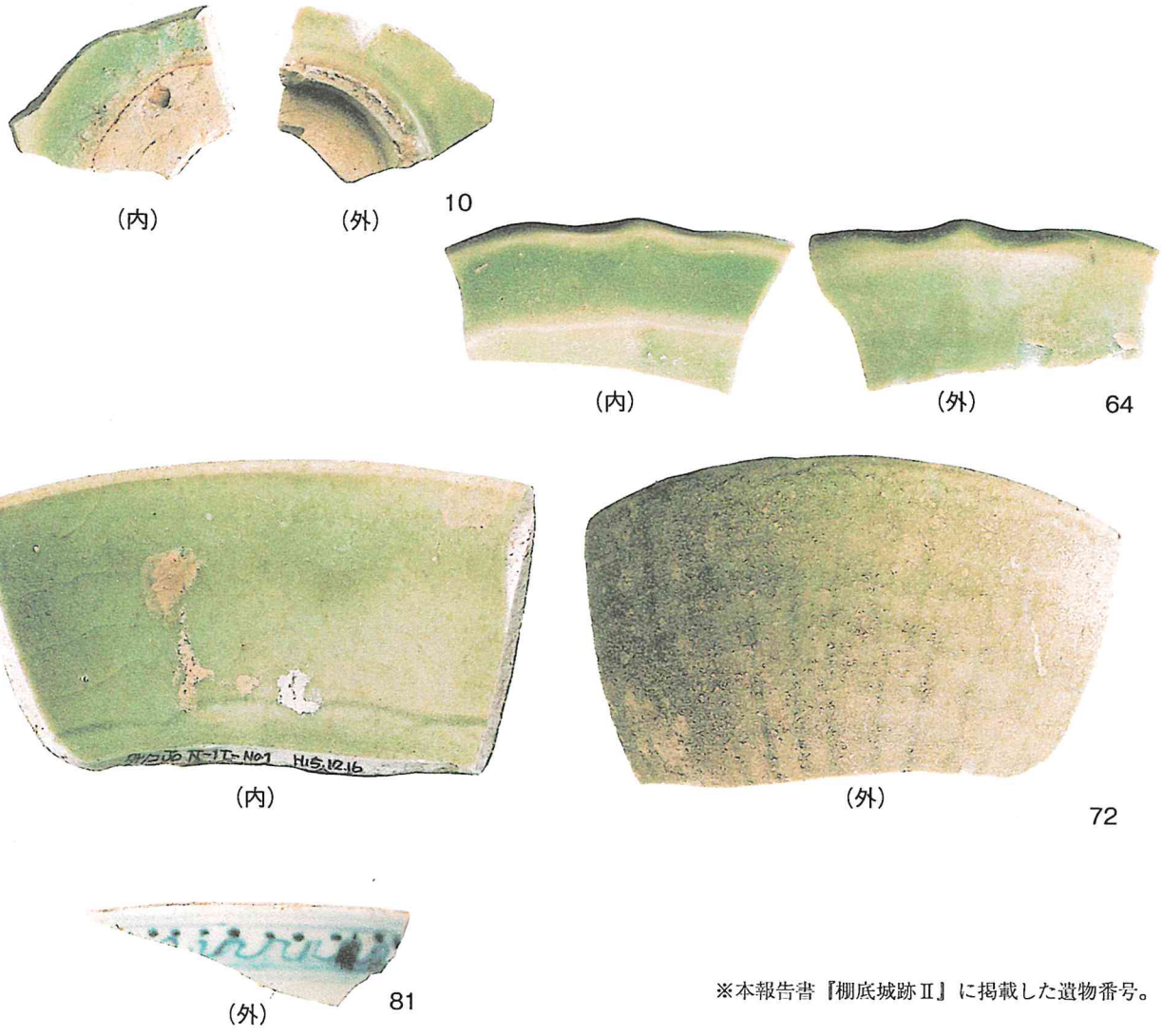
１回目は、大権寺の廃寺時期と重なり、被熱遺物と大権寺比定地の石碑の下限時期が一致する。石碑は15世紀中葉を下限として、永享12年（1440）の年号が最後となる。想像するに、１回目は、棚底城で一大政変が起こり、その結果、城主が交代し、大権寺も廃寺となったものと思われる。幻とされる城主の棚底氏は、上津浦氏に滅ぼされたと考えられ、この時、棚底城の建物が炎上したという見方である。

２回目は、被熱遺物の年代と文献記録に残る城歴の大変革時期とが重なる。被熱遺物は、16世紀前半～中葉を下限とする。この時期、棚底城を含む一帯では、天文元年（1532）の合戦を契機に、天文13年（1544）には上津浦親類が棚底城を下城している。この様に１回目と同様な政変が起きており、この時も、棚底城の建物が炎上したと推定される。

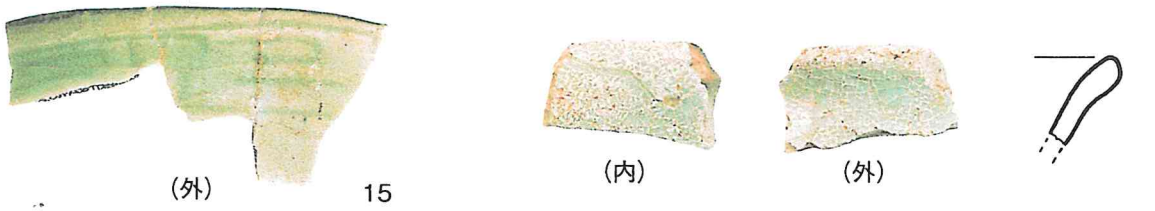
＊小野正敏先生から、被熱遺物を注目するように御指摘いただいた（このことについては、御自身も歴史フォーラムで発表されている）。そこで、資料を再整理したところ、２回の火災を測定できた。

＊Ⅳ郭には、検出された柱穴や出土遺物の多さから、建物が存在した事が確実である。もっとも、この郭は、トレンチ調査であったために、建物の復元に至っていない。

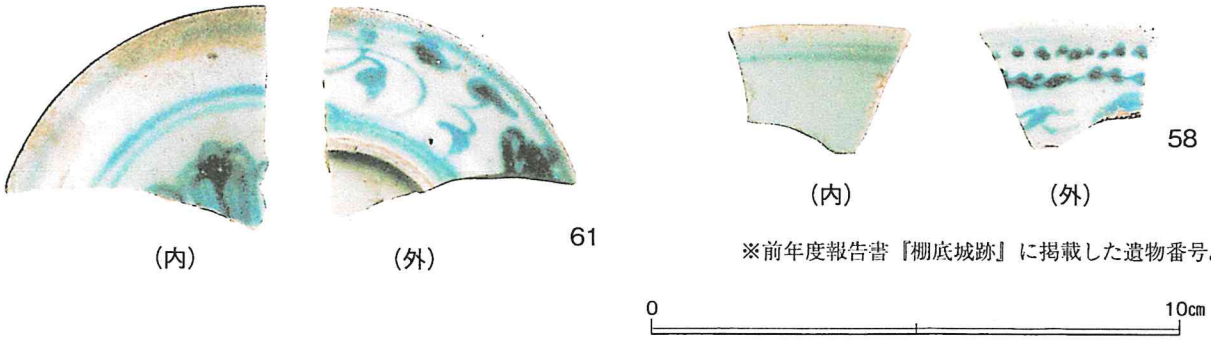
＊ここでは、時代が判別できる輸入磁器に限って被熱状態を調査している。



※本報告書『棚底城跡Ⅱ』に掲載した遺物番号。



（H14年度Ⅰ郭試掘調査による出土遺物・調査報告書に未掲載）



※前年度報告書『棚底城跡』に掲載した遺物番号。

0　10cm

図版24　被熱した輸入磁器

天草の中世を探る

棚底城跡歴史フォーラム　記録集

天草の中世を探る
棚底城跡歴史フォーラム

期　日　平成18年２月19日(日)
場　所　倉岳町多目的研修集会施設
日　程　(9：00) 施設内研修室にて天草中世城跡出土遺物展
13：00　開会行事
13：30　基調講演
小野 正敏 氏（国立歴史民俗博物館助教授）
「棚底城跡出土陶磁器が語ること」
14：10　棚底城跡調査概要報告
倉岳町教育委員会
14：25　休憩
14：35　パネルディスカッション
パネラー
小野　正敏 氏
阿蘇品保夫 氏（熊本県文化財保護審議会委員・前八代市立博物館長）
今村　克彦 氏（熊本県文化財保護審議会委員・熊本城復元専門員）
西島眞理子 氏（熊本県建築士会調査研究委員会副委員長・熊本県景観審議会委員）
出宮　徳尚 氏（岡山市教育委員会文化財専門監・前岡山市教育委員会文化財課長）
大田　幸博 氏（熊本県立鞠智城温故創生館長）
稲津　俊徳（倉岳町長）
コーディネーター
矢加部和幸 氏（熊本日日新聞社編集委員）
16：00　閉会
主　催　倉岳町・倉岳町教育委員会
後　援　熊本県教育委員会・天草市町長会・天草郡町村会・天草市町教育長協議会・熊本日日新聞社

凡　例

1.本編は、平成18年２月19日倉岳町多目的研修集会施設で開催した「天草の中世を考える　棚底城跡歴史フォーラム」の記録集である。
2.上記日程で行われたプログラムの中で、特に基調講演・パネルディスカッションについて活字化した。
3.本編では、編集期間の関係で配布資料及び講演内に投影した画像資料等を掲載していない。
4.発言内容については、３の理由により文章のみで理解できるように一部編集した上で、発言者自身に校正をいただいた。
5.図版・写真また開閉会行事に係る挨拶など本編で盛り込めなかった内容を補完した冊子は合併後の新体制において刊行の予定である。

基調講演

棚底城跡出土の陶磁器から見えること

小野　正敏（国立歴史民俗博物館助教授）

天草に来たのは二度目です。余り土地勘がなく地元の皆さんに話すのは少し恐いですが、これまで各地の遺跡で見てきたものと比較して、棚底城跡がどのように見えるかを、特に焼き物からみた問題点を語りたいと思います。

これは、昨秋に来て、初めて倉岳に登って撮影した写真です。私は最初に、城が海に面しており、それから背後に標高682mの倉岳という天草で最も高い山があることを知りました。ピラミッド状の綺麗な山です。海の方はよく「山当て」という言い方をしますが、船は航海をする時に、山を見て自分の方向を決めると言われます。山と山を見ながら進路を決めていく、その様な山にぴったりの「良い山だ」と思いながら登りました。頂上の倉岳神社には石造りの舟が奉納してあり、信仰の山としても大変面白く勉強させていただきました。

本日は３つのことについてお話します。1)は、豊富な焼き物の出土が示す生活の拠点としての棚底城です。2)は、焼き物の年代的なグループが示す城の変遷の問題です。3)は、幻の棚底城主の性格を推理します。

スライドを用意しました。スライドを使いながらお話します。

1　歴史資料としての焼物

まず焼き物の資料的な特徴ですが、考古学的立場から申しますと、焼き物は特殊な遺物です。刀や漆椀などの遺物と比べますと、産地や年代観がよくわかる資料だということです。通常、焼き物はその特徴から生産名をつけて呼びます。そして遺跡から出土するということは、そこが消費地であるということになります。消費地で出土した遺物が生産も流通も語り、それを結びつけますので、非常に面白い資料と言えます。

さらに、全国の遺跡の発掘調査で、最も多く出土するのが焼き物です。どこの遺跡を掘っても焼き物の出土量が最も多く、普遍的な資料だということもあります。鉄製品などは丈夫にみえますが二～三百年で腐り、土塊に戻ってしまいますし、木の道具、紙の道具、或いは着物、これらはいずれも火災に遭えば燃えてしまうものです。最も丈夫でよく遺跡に残るのが焼き物なのです。さらに焼き物で良いことは、何かの原因で壊れたり、捨てられたりすると基本的に再利用されないことです。そのような焼き物が各地で同じように出土します。したがって、焼き物を材料にして、あの遺跡この遺跡、あの地方この地方、さらに同様に中国産焼き物のようなものを見れば、日本列島だけではなく、アジア各地或いはアフリカの方までそれをもって比べることができる。そういう意味で焼き物は共通言語の役割を果たすのです。

また、なんといっても焼き物が担っていた役割、機能というものが日常生活の中で、一番大きかったことも重要です。会場には私よりお年を召された方がたくさん居られるのでわかると思いますが、私が小さかった頃、昭和三十年代位は、ブリキやプラスチックが一部出始めていましたが、そういったものを除けば、基本的に焼き物と木の文化でありました。私は小さい頃、木の盥で行水した記憶があります。実はあの生活スタイルというのは棚底城跡の時代とほとんど変わっていないと思うのです。ずっとそのままで来ているとさえ思います。ですからご飯を食べる時も、水を溜めておく場所もいろんな意味で同じように焼き物が担っていた機能は大変大きいということがいえるのです。焼き物を通じて当時のいろんな問題がわかって来るのです。

2　生活拠点としての棚底城

第一点は、棚底城跡から、豊富な焼き物が出土し、それが生活の拠点であったことを示すということです。概して、山城を発掘調査しますと、あまり生活の痕跡が残ってないことが多いのです。昨年秋、初めて倉岳町へ来まして、棚底城跡出土の資料を見る機会がありました。その際、実に豊富な焼き物類がたくさん出ているということに驚きました。この山にある城が、そこに住んでいた人たちにとって生活の拠点であった。当たり前のことですが、そこで彼らはずっと生活をしていた、そういうことがわかります。特にⅠ郭やⅣ郭はたくさんの焼き物が出土しています。

棚底城では、中国産の青磁や染付の碗、皿がたくさん出土しているのが特徴です。中世の日本は、中国からの焼き物が大量に流通した時代です。ですから、毎日使う碗・皿・大皿の焼き物はほとんどが中国産でした。また、生活を様々に支えていた日本各地の焼き物があります。一つは大甕で、備前焼という岡山県で作られた焼き物で、瀬戸内海を中心に九州一帯に流通しました。一方、地元で製作された「かわらけ」という土器の皿があります。さらに地方で作られた擂鉢もあります。このようなものがそれぞれの特徴を活かして、この城の生活を支えていました。なかでも中国陶磁は碗や皿の分野を機能分担しています。

皆さんも感じたのではないでしょうか。中世の青磁の多くが中国で作られました。そのため、天草のようなはるか彼方の島で出土すると「良い物がでたな」と思われるかもしれません。実は三十年位前、私たちが遺跡で中国の焼き物を掘り始めた頃はよく言われました。「中国の青磁や染付が出ました」というと「凄い物が出土しましたね」そういう感じだったのです。しかし、そのような考えは今日では違うということになります。実はそれらはみな比較的安い日常生活品だったのです。ですからこうした中国製品を含めて、日常的な生活の道具がたくさんあったことから、ここがごく普通の生活の場であったことがわかるのです。

3　焼物からみる年代と城の変遷

それから第二点は、焼き物からわかる年代と時間的な変化のことです。焼き物は粘土等を捏ねて作ります。中世は商品と流通の時代という風に言ってよいかと思いますが、商人たちは激しく商品開発を行いました。現代と同じで、自動車が次々とモデルチェンジするように、焼き物も次々モデルチェンジしたのです。そうしないとおそらくは買ってもらえないからです。考古学としてはそれが重要なのです。時間とともにどんどん模様やスタイルが変わっていきます。それを見ることで、「あ、これは何時代のいつごろに作られた焼き物だ」ということがわかるのです。

そのように棚底城跡の場合も城内から出土した焼き物の示す年代を軸に、城をいくつかの特徴的な時期に分けることができました。具体的に述べますと、大きく３時期くらいに変遷していると思います。一番古い物は鎌倉時代のものですが、その後、３回の時期的なグループに変化しているのが分かります。

また大変重要なことは、棚底城跡の焼き物を見てその中に、火災に遭ったものを発見した事です。それも一箇所のものが焼けているという状況でなく、複数の曲輪と呼ばれるいくつかの平坦地が火を受けたと思われます。つまり城中が焼けている状況にあるのです。焼き討ちされたということでしょうが、そうするとそれがいつ、何が原因でそういう事件があったのか、そういうことを考えたくなります。後で触れますように、この火事と２期、３期の変遷に関連がありそうです。また焼けた時期を境にして、陶磁器の使われ方、或いは組み合わせが少し違うという様子も分かりました。そうすると、そのような焼き物の組み合わせや量の変遷からどのような焼き物を使っていたか、そしてそれがどう変化し、それによって棚底城の歴史がどの様に変化をしたのか推察します。

焼き物の時代からみてみましょう。配布資料№１の最も左欄に、焼き物の組み合わせから見た城の時期別の表を示しておきました。大きくは、棚底１期、２期、３期と記していますが、３つの時間的グループにわかれます。

ただ、数は少ないのですが、少量だけ鎌倉時代にあたる12、13世紀の中国陶磁があります。Pre１期としました。館、屋敷と城の問題を段階的に追いかけていくと、元々館や屋敷に住んでいた人たちが、山の上に城を造って恒常的に住むようになるという大きな画期があります。それは通常15世紀の中頃というふうに言われ、私もそう思っています。しかし、棚底城跡では合子という白磁の蓋物や青磁碗など、鎌倉時代の焼き物が出ていますし、また球磨郡山江村の山田城とか、いくつかの例を見ますと、どうも南九州の方では古い時代から山の上に生活の拠点がある、そして、後の山城と重複している遺跡があることが分かります。ただし、これがそのまま山城に継続しているのかどうかは問題ですが。

この中の１期、世紀で言うと15世紀前半から後が発掘されたいわゆる棚底城の時代です。この１期には、青磁や白磁の碗や皿が中心に使われています。興味ぶかいのは、城の近くに同じ頃の墓の石塔が70基以上集まっている場所を案内いただきました。城から西へ400mほどのところに、「大権寺」という寺の地名が残っているところがそれです。その中には1358年から1440年の年号をもつ石塔が確認されています。特に14世紀後半が４例もあるということは注目されます。14世紀中葉から15世紀中葉に

かけての年号を持った墓があることは、ちょうど先ほど焼き物の中で１期と位置づけられた15世紀前半の資料がまとまるという、この時代と重なるように、この地に寺や墓が作られた時代があったということがいえます。先に述べたように、15世紀から始まる山城の時代のはじまりを意識すると、おそらく棚底城やあるいはその前身の館・屋敷の時代があって、この寺とセットになっていたらしいと推測できます。この石塔群のある「大権寺」地区の解明は、棚底の始まりを考えるために欠かせない重要な問題です。

次に２期の頃になると、染付が大量に日本の中で使われるようになります。その状況の中で、少しだけ青磁の碗皿が残り、染付や白磁と共に使われる組み合わせです。いわゆる戦国時代の山城のセットです。

次は染付が中心の３期です。碗皿の形や文様が少し変わってきます。私は、この変化は1530年代頃の天文年間に、商人によって大きくモデルチェンジされたと考えています。例えば、わざわざ底面に「天文年造」と書いてある染付が出土していますが、中国の商人たちが日本人向けに日本の年号を書いた皿まで作る、そういう商品生産がなされた時代です。

このように陶磁器から、棚底１、２、３期という城の歴史を年代的に分けることができるのです。そして、この棚底城の一番中心であった時代は、焼き物の出土量と質から棚底２期と言えます。さらに先ほど指摘したように、２期のある段階には城が火災に遭って燃えていることが指摘できます。火事に遭った青磁の写真をみてください。器面はブツブツで痘痕（あばた）のようになっていますが、本来は艶があって綺麗な色をしています。こういう状態の焼き物が数多く出土することによって、火事があったということを知るわけです。ここで重要なのは青磁の大皿のような高級品も一緒に焼けていることです。

陶磁器の組み合わせから、火事は大体1530年頃である可能性が高いと言えるかと思います。この年代は、後ほどフォーラムの時に文献の専門家から詳しい話があるかと思いますが、まさに棚底城を巡ってこの天草周辺が戦乱に巻き込まれた時代といえます。例えば、阿蘇品氏は、『八代日記』の研究から、1532年には上津浦が攻め寄せられ激しい攻防戦があったことを指摘していますが、当然、関係の棚底の城もやられたのではないかという可能性を秘めているのです。その後には1544年、1551年、1560年と戦いの記録が残されます。おそらくその状況を反映して先ほどの焼き物が火を受けたものであろうと思います。

次に注目すべき事は、焼かれた後、1530年代頃を境にして、一番新しい３期に分類される焼物が急に減ることです。また、日常の碗や皿以外の、茶の道具や高級品の青磁大皿などの特別なものが姿を消します。要するに火災を境にして、城主が交代したらしいということが考えられます。もっと言えば、番城、つまり城主はそこには居住せず、城を守る兵士だけがいるような、そういう段階に変わっていくのではないか、ということが示唆されます。これに関連して思い出されるのが、『八代日記』の1544年２月２日の棚底城に在番に来ていた上津浦親類中が下城したという記事です。２期までとは大きくことなる棚底城の機能があったのではないかと想像されます。

4　幻の棚底城主の性格

次に第三点として、２期までの棚底城に住んでいた城主、文献には明らかにされていない幻の城主はどのような性格、どの程度のランクだったのだろうか、棚底城の機能とも関連する、そんな事を焼き物から語ってみましょう。

冒頭の来賓の方々の挨拶で盛んに「棚底城は海城（うみじろ）だ」という言葉がありました。海城とは難しい表現だと思いますが、焼き物からも考えてみたいのです。海城という言葉が適切かどうかは別にして、結論的に申しますと、私は、棚底城は、海の領主、つまり海の権益に生きた人の城、そのように思います。

先ほどの話に戻りますが、日常用の中国産の碗や皿は安物だと述べました。ところが、この城跡には、他ではあまり出土しないような高価なものが少しあります。例えば、先ほどの青磁の大皿、或いは茶の道具などです。これらの一部が火を受けているので２期の道具であったと推定されます。

それからもう一つ、発見して驚いたのですが、１期のグループに属する15世紀ごろのベトナムで焼かれた染付の碗のように稀少なものもあります。この時期のベトナム産の焼き物の出土には特徴があります。例えば、対馬の宗氏の下で貿易に携わった早田という人物がいます。彼は海の領主で、琉球、朝鮮などと盛んに貿易をして、それで稼ぎました。この早田氏の本拠地浅茅湾の入り口に位置する尾崎水崎遺跡で東南アジアの焼き物がたくさん出土しました。調べてみますと、７割方が朝鮮半島の焼き

物です。後の２割が中国の焼き物で、残りの５％かが東南アジアの焼き物です。日本の焼き物は４％と最も少ないのです。ここはまさに朝鮮をはじめとする国際的な交易、海の向こうと流通を積極的にしていた人たちがいた場所ですが、こうした水崎遺跡をはじめ港湾遺跡などでこの時期のベトナム産茶碗が出土する傾向があります。つまり、棚底城でベトナム産の陶磁器が出土したということは、先ほどから強調してきたように城主が「海の交易」を行っている可能性を示唆しているのです。

また、最近の中世考古学では、焼き物だけで流通を語るのではなく、砥石や硯、石塔など石製品も対象にされ、成果をあげてきました。特に、砥石や硯は日本列島の各地から出土していますから有効です。その中に天草砥石があります。天草で採れた砥石が中世の日本列島に広く流通していることを、汐見一夫さんの仕事が明らかにしました。最も北は、北海道上之国町・勝山館という戦国時代にアイヌとの取引をした館跡です。また鎌倉からもたくさん出土します。このように、はるか彼方まで天草の砥石が流通していました。この天草の地に広い海を使って流通させるような広域商品があったということが重要です。勿論、城の領主が自ら船を漕いで北海道まで行ったとは思いませんが、このような品物は商人が来て、そしてさらにそこから次の場所に行き、という形で商業的ネットワークをもつわけです。当然、海全体を相手にした交易の世界がその先に広がっていたということになります。おそらくベトナムの陶磁器の存在などを見ると、棚底城主は単に天草から北の日本列島の方だけを見ていたのではなく、もしかしたら琉球やその先の東南アジアなどのような所までターゲットにするような人だったのかもしれません。そこまでは具体的には証明はできませんが、少なくとも天草に住んでいた人たちがかなり海の流通を意識して、その結節点の湊を含めた権益を背景にこの棚底城も存在したといえます。広い水田や畑がなくても大きな権益をもつ場所であったのです。

もう一つ、ここから出土した茶の道具が紹介され大変有名になったと記憶しています。今回資料を見させていただきましたところ、陶磁器に関しては、茶を飲むために作られた天目茶碗、抹茶を入れておく小壺である茶入、それから茶壺、いずれも中国製がありました。さらに城跡では茶臼も出土しています。茶臼で粉にする前の葉茶を入れておくのが茶壺、粉にしたものを入れるのが茶入、そしてそれをたてて飲むのが天目茶碗ということになり、茶の湯が行われていたわけです。この中国製の茶の道具３点セットは貴重なものです。

15世紀の『福富草子』という大変面白い絵巻物があります。かいつまんで申しますと、ある貧乏な老夫婦が「突然、金持ちになった話」を描いた絵巻です。つまり、当時の人たちにとって金持ちとはどういうことなのか、富の象徴が絵になっているわけです。押板（奥の棚）の赤漆の盆上には黒い茶碗が乗っています。これが唐物の天目茶碗で、先ほどの天目茶碗に該当します。そして、緑色の大皿もあります。これこそが先ほど紹介した棚底城でも出ている青磁大皿です。床の大皿には果物や菓子を盛ってあります。その隣は銚子、酒を注ぐための道具です。火鉢もあります。つまりこの絵をみると、衣食満ち足りた環境、このような唐物を所有しているのが富の象徴だということが、15世紀ごろの認識だということがお分りいただけるのではないかと思います。

ところで、今回、出土資料を見せていただくと茶の道具と青磁の大皿、これのみしかないのです。このことを少し考えてみたいとおもいます。

客を迎えたときの「ハレの接客空間」でいろいろな行事や宴会が行われますが、戦国期になると、その部屋を公式に飾るためのしつらい、座敷飾りの道具が非常に重要になってきます。その中でも一番トップクラスがやはり唐絵をはじめ中国製の唐物の道具でした。茶の三点セット、青磁の花生、香の道具、酒を入れておく梅瓶と呼ぶ特殊な瓶、青磁の大皿、水盤、酒海壺などがあります。酒海壺は文字通り中世の初め頃は、来客があるとなみなみと酒を満たしてもてなしたものでした。

こういう道具を持っているのは、ある階層の人達です。城を持っていたり、館を構えていたり、そうしたクラスの人たちですが、彼らにとっては自分たちのステータスシンボル、身分や社会的な階層を示すための道具として、無くてはならないものでした。例えば、戦国大名の館として有名な越前（福井県）朝倉氏館、山口の大内氏館、伊予（愛媛県）の河野氏の湯築城などをはじめ、大名クラスやそれに準じた城館からは同じようにこれらの道具が出土しています。

なぜ、このような身分の人たちが同じような道具を持ちたがるのか。千葉県佐倉市の国立歴史民俗博物館には『君台観左右帳記』という巻物があります。「偉い人の屋敷を観てメモしたもの」という意味の巻物です。京都の足利義政将軍の東山殿の座敷飾りや中国絵画、茶道具の評価などを具体的に文と絵で解説したものです。押板という床の間のような施設や、違い棚、茶の

湯棚などそういうところに様々な唐物の道具をどのように飾るか、という絵まで描かれています。そのため、地方の館主、権力者は都の将軍と同じような文化を持ち、同じような道具を使って部屋を飾り立て、同じようなやり方で来客をもてなすこと、それが自分たちの身分として大変重要なことだと理解していたのです。逆に言えば、来客の際にこのような準備ができないようでは、いくら戦争が強くても格式を認めてもらえないという世界でした。それゆえに、この手の巻物が方々で写され、いろんなところに残ったのです。だから同じような道具をそろえ、同じ部屋や建物が作られ、それによって城主のような階層の人たちは価値観を共有したのです。

ところで、棚底城跡に立ち戻って考えてみると、みたように茶の道具や青磁の大皿は持っていました。しかし、一番肝心な座敷を飾るための道具がほとんど出土していないという状況があります。実は同じような状況の遺跡に出会ったことがあります。凄く立派な館でたくさんの陶磁器が出土しました。それにも拘らず、日常の碗や皿、或いは壺、甕、擂鉢そのようなものばかりで、先ほどのような茶道具や香炉のようなもの、花生など部屋を飾るための道具はあまり出てきませんでした。

先ほど、天草砥石が出土したと話しました北海道上之国の勝山館、或いは函館の志苔館といったような北海道の和人たちの館がその典型です。館は川が海へ流れ込む湾があるような所、つまり、アイヌとの貿易をする所に多く作られています。彼らはまさに流通で生活していた権力者たちでした。そういう城や館を調査してみますと、日常生活の道具は凄く豊富に持っていました。まさに日本海ルートでの大和とアイヌの交易の先端に位置しており、物流は豊富です。しかし通常の城や館で出土するような武家儀礼の道具や権威を示すための座敷飾りの道具はほとんど持っていなかったのです。要するに金が無くて買えないのではなく、必要がなかったのだと考えられます。

城や館の主にとって社会的に必要な儀礼が、二通りあったようです。主に武家社会では「式三献」と言って、主従関係を契約する盃事が儀礼の中心でした。そして、その後の大宴会を、部屋を変えて行います。結婚式がそうです。第一部は三々九度の神前で行う儀式。第二部は披露宴。つまり無礼講の大宴会です。日本の儀礼は常にそういう形を採ります。儀式と宴会がセットになっているのです。そういう世界では、自分の権威や社会的位置づけを示し、同じような儀礼やもてなしをするための道具が必要だったのです。

しかし、棚底城主はそういう儀礼が必要なかったらしいと推定されるのです。

この城の場合は発掘がそれほど進んでいないため、本当に最終的に断定は言い難いところがあります。ひとまず、棚底城主は海で生活していた領主として、土地に根ざした人間関係や武士同士の主従関係のようなものを、全面に出す形の儀礼に、あまり重点を置いていなかったのではないかといえるでしょう。そういう遺物の出方なのです。今後、この遺跡の調査が継続的に進んで、実態が分かってくる時、今日の発言が正しかったかどうかの答えがでるものと思われます。

本日は焼き物という道具の話を中心にしましたが、先ほど『君台観左右帳記』という巻物にありましたように、実はそうした道具は使われる場とセットをなすものです。道具だけ持って、野原で使っても駄目なわけです。やはりそれに相応しい空間を用意することがその機能を発揮するためには不可欠でした。では、どういう場所で使われたかということを少しだけ紹介します。

越前の戦国大名朝倉氏の館跡は、一町四方の館の中に15～６棟の建物が存在しています。その中に先の第一部の儀式をする建物「主殿」や第二部の宴会や連歌など遊芸をする建物「会所」があります。それは庭とセットになり、さらに茶室がある。まさに建物そのものが、道具を使う場として規範化されていました。このような建物や道具の規範的な持ち方が、都の文化、将軍家の権威に支えられた文化というものを地方の権力者の所へ運ぶエネルギーになっていたのです。

『洛中洛外図屏風』は、16世紀中頃の京都を描いた大きな屏風です。足利将軍の屋敷があり、一軒隔てて細川管領邸が描かれています。将軍は武家のトップで、管領は将軍を補佐する者です。この将軍邸は南半分に庭園が付いています。表門を入りますと、儀式を行う主殿があり、庭に面して会所になります。ここで茶の湯をしたり、花を活けたり、連歌をしたり、和歌の会を催したり、能を舞いました。細川管領邸もほぼ同様です。ここにもまさに画一化された空間が存在していました。朝倉館はこれをモデルにしていたのです。

遺跡から出土する道具が語ってくれることはそれほど多くはありません。しかし、道具がどういう場所で使われたのか、それと結びつけて考えることによって、より多くの、より大きな情報が得られるのです。そしてその城を使用していた人たちや、そ

こで寝起きした人たちがいったいどういう生活を送り、どんな考え方をしたのかが分かってきます。そうした視点から棚底城にはどのような空間があって、どのような構造の建物があったのかが大きな問題になります。特に建物は、形を結ぶだけではなく、どんな機能をもっていたのかを慎重に検討しなくてはなりません。

こういう見方で、これから倉岳町の棚底城跡を見ていただければ様々な検討しなくてはならない疑問点と、逆に日本列島全体に繋がるような大変面白い問題点が出てくると思います。そうした見方によって初めて、天草の中だけでない価値観で、この城がどういう位置づけなのかということを考えていけるのではないかと思います。

最後にまとめをしますと、まず、生活道具が豊かに出土していることから、城がまさに生活の本拠地であったということ。つまり、城主の館や主要な屋敷が城下に付属する可能性は少ないと考えられます。

次に、城が段階的に大きく変質していることです。16世紀の前半代、おそらく1530年代頃に大きな火災に遭ってそれを境にして、遺物の出土量が減ります。城主が自分の権威を示すような高級陶磁器を持っていたのは、どうもこの時期までだったのではないかと思われます。その頃、この辺りで戦乱が多かったということと併せて、その前後で城主の姿が変わったのではないかと推察します。

そして３点目ですが、この城主とこの城がどのような背景で機能していたかですが、その見方の一つが、「海の領主」であったらしいということです。海を使った流通の拠点として、この城が大変重要な位置を占めていて、単に港を守るだけでなく、領主そのものが遥か海の彼方に眼を向けているような性格を持っていたのではなかったか、そういうことも感じさせてくれる資料が出土しています。

今回、この棚底城跡をどう理解するかという大変難しい課題をいただき「わからないけども、今、私が考えているところを話します」というところでお話しましたのが、今日の内容です。

先ほどから繰り返していますように、棚底城跡はまだまだわからないことの方が多いのです。でも、わからないことを解明する。そして、遺跡を通じて、出土した資料を通じてわかったことを後世に残していく、さらには文字に書かれた史料をも立体的に使いながら、次の世代に渡すこと、これが大変重要なことだろうと思います。３月の合併で町の名前が変わるとのことですが、是非、この城を天草地区のシンボルとして、或いは自らのアイデンティティとして大事に育てていただきたいということを祈ってやみません。（了）

棚底城跡歴史フォーラム
パネルディスカッション

矢加部：熊本日日新聞社で編集委員をしている矢加部です。よろしくお願いいたします。三年前から発掘調査と測量調査がなされてきた棚底城跡ですが、これまで取材する機会が中々得られず、先日やっと現地を見ることができました。八つある曲輪の素晴らしさ、岩盤に穿たれた柱穴の凄さなどに驚き、県内各地で数多くの城跡を見てきましたが、その中でも凄い城だというのが第一印象でした。同時に立地、つまり海に面した眺めのよさ、そういう場所に城を造った武将のセンスに感心し、500年前に想いを馳せました。

ともすれば中世城の発掘現場は土がむき出しで、山の中や丘の上にあり、情緒的なものに欠けますが、棚底城跡の場合は地山が岩盤である上に眼前に海が広がり、非常にゆっくりとしてとても居心地のよい所でした。

今日のシンポジウムは棚底城跡について各分野の専門家の方から、色々な角度で切ってもらおうと思っています。県内では、昨年秋に美里町の堅志田城跡が国指定史跡になりました。次は棚底城跡だということで、このシンポジウムを機会に、一人でも多くの町民や町外の皆様に棚底城跡のことを知っていただきたい、そして、その素晴らしさを再確認していただきたいと思います。

棚底城跡の発掘調査に関する詳細な話の前に、城が存在した頃の天草はどうだったのか、これだけの規模の城を造るには当然莫大な経費も掛かるし、労働力も必要ですが、何故この地に城が必要だったのか、色々な疑問が沸いてくるところです。そこで、まず、阿蘇品先生に天草上島の政治情勢、勢力情勢についてお話いただきたいと思います。阿蘇品先生は町教委が刊行した棚底城跡の発掘調査報告書の中で、「戦国期における棚底城抗争とその背景」という論文を著されています。文中、天草五人衆を始めとして、人吉、球磨の相良氏や島原の有馬氏等の武将を巻き込んだ勢力争いの話を取り上げられています。これをふまえて、文献から見た棚底城を巡る争いについて、まずはお話いただきたいと思います。

阿蘇品：阿蘇品です。まず、天草上島の中世、800～400年ほど前の歴史と倉岳地域という関係について申し上げます。この時期、歴史の表舞台にこの地域はほとんど登場していません。中世の後半くらいから上島では栖本氏や上津浦氏など多少の動きは見えるものの、近世の地誌等でも伝承さえ余り無く、中世武士の動きはほとんど触れられていません。

倉岳地域の歴史の掘り起こしは、実は非常に新しく、昭和53年３月に『熊本県の中世城跡』を、当時、県の文化課に居られた大田館長が作られました。その時に、この場所が踏査され、棚底城という名前を活字として初めて公に出しています。それから、同じ年に『天草建設文化史』という本が作られましたが、この中で本渡市の鶴田八洲成氏が「天草中世石造文化」というのをお書きになって、倉岳の大権寺の石塔が天草で最多であると報告されています。さらに昭和55年には『八代日記』という書を、私ども熊本中世史研究会で出版しました。この三つが事始めです。『八代日記』の中で棚底城の話が出てきました。さらに棚底を巡る栖本氏と上津浦氏の争いの記録がその中で見られました。ここで初めて、江戸時代より古い時代の倉岳地域の歴史材料が出てきて、それを元に調査が進んで、現在の調査報告書に至ったことになります。これを前提に理解いただきたいと思います。

『八代日記』は、相良氏の中で戦国時代に記録し続けられた日記風の年代記です。その中での棚底の話をざっと話しますと、天文十三（1544）年、今から460年位前、棚底城は上津浦氏が一族を派遣して守らせていましたが、どういうわけかその一族が棚底城を放棄する事件が起こります。上津浦本城の方でも、当主と非常に近いと思われる一族が一人、城を出てしまうハプニングが起こります。どうも、そのゴタゴタで放棄した所を栖本氏が占領してしまったのではないかと思われます。その翌年すぐに、栖本氏は相良氏の所に出かけて、打ち合わせをし、いろいろと依頼をしますと、相良氏はそれを承知します。そして三年後には、わざわざ船で出かけてきて、大矢野氏や天草氏、そして栖本氏と会って何か話をしています。栖本氏の言い分を認めさせようとしたのではないかと思われるのですが、はっきりとはそこの所はわかりません。ところがやはり、上津浦氏の方は城を取られたという問題もあって、さらに三年後の天文二十年、大矢野氏と天草氏と上津浦氏と連合して栖本城を攻めています。このようなことが起こっているのです。この事件では、栖本城を攻めたのですが、結局攻め落とさないまま解散しています。また八代の相良氏との交渉もあっているのですが、それから後の弘治二（1556）年から永禄三（1560）年にかけての四年の間は、上津浦氏は他の者を頼まず、独力で栖本攻撃をしかけます。この間、小競り合いがずっと続いています。山を越えて攻め寄せたとか、待ち伏せをしたとか色々な記事が見られます。但し、栖本氏は棚底城を握っていたのだろうと思われます。最終的には1560年、

決着が付かないものですから上津浦氏は有馬氏と手を結びました。有馬氏に加勢を頼むのです。一方、ゴタゴタしている間に相良氏はどちらかと言えば、栖本氏に加勢をして援兵を送り続けという状態です。

有馬氏はたくさんの船を持ち出して、二間戸を攻め、さらに栖本まで来て栖本城を取り囲みます。一ヶ月の攻防戦があって結局、講和条約を結びます。その結果、棚底城は上津浦氏に返すということで講和が成立しました。ここまでが主な棚底の事件です。

矢加部：上津浦は天草上島の北の方ですが、今の阿蘇品先生のお話で、上津浦と栖本のいざこざがあったことが分かりました。先ほどの小野先生の陶磁器に焼けた痕があるお話と、なんとなく一致するような感じがしますが、阿蘇品先生、その時の抗争の特徴はどういったものでしょうか。

阿蘇品：基本的には小競り合いの中では上津浦氏がいつも優勢です。どちらかというと栖本氏はいつも守りという形でした。ただ、それでも栖本氏は棚底城自体はずっと抑えています。だから、棚底城は堅固な城なのです。

それから、もう一つは相良氏が一年以上、家臣を栖本に援兵として派遣しています。次々と、半月交代ぐらいで送っています。実際、戦闘にも参加し討ち死にした者も出ています。相良氏がそこまでしている、ということが特色です。

さらに、もう一つは、当地での戦いの中で手火矢という言葉が出てきます。どうも鉄砲を使っているようです。日本に鉄砲が伝来したのは1543年で、それから二十年くらい経ってますから当然、存在しても良いのですが。

矢加部：棚底城というスケールの大きな城がこの地に造られた理由にも係わると思いますが、上津浦氏と栖本氏の抗争の原因は何であったのでしょうか。

阿蘇品：栖本氏と上津浦氏、どちらにとっても棚底は「地の利」がよいわけです。海に出る上で非常に都合がよい場所なのです。それから、いつまでも抗争が続いたのは、戦力に大きな差がないのです。小競り合いにとどまり、相手を圧倒できないわけです。栖本氏が多少、劣勢のように見えますが、相良氏がいつも後押ししています。相良としては現状維持でありたい、そういう側面があるようです。結局、有馬氏が一度に多くの兵を投入して、そこで均衡が崩れて和平になったということがありますので、相良氏だけでは、天草全体を抑える力が足りなかった、そういうことでしょうか。

私はもっと深い隠れた、もう一つの原点があると思っていますが、大権寺の問題もありますので、ここではこの辺で収めておきます。

矢加部：では、もっと隠れた原点というの後ほどお話しいただくとして、平成14年から、棚底城跡の発掘調査に係わってこられた大田先生にお聞きしたいと思います。県内の数多くの中世城跡を測量し、発掘してこられた立場から棚底城の考古学的な話をしていただければと思います。

大田：中世城については、県文化課の遺跡台帳に載っているのが533あります。その内の58城が天草郡内にあるという位置づけです。郡内では、唯一、牛深市の久玉城跡が県指定史跡になっています。県文化課では、昭和50年から53年にかけて三年間、文化庁の補助事業で悉皆調査を致しましたが、その後、天草ではほとんど進展がありませんでした。これに先がけた昭和40年代の後半に久玉城跡が国道改良工事で発掘調査があった程度です。最近になって町史編纂事業を契機に倉岳町の棚底城跡の調査が進みました。

来賓の方々や町教委の歳川喜三生氏からも話がありましたが、再度、棚底城跡につきまして基礎的なことを少し述べたいと思います。天草の上島南側の海岸線沿い中央部にこの棚底城があります。北側背後に天草で最も高い倉岳がそびえていまして、そこから山腹が下り、山裾の突端部に形成された小尾根に城があり、その下位に麓集落が存在している形になります。八代海を挟み佐敷や水俣が眼前にあり、やや斜めの方向に八代市があるという状況です。さきほど阿蘇品先生が仰った相良氏との関係というのはこういう地勢的条件からそうなったのだと思っています。

縄張り図にふれます。本体尾根筋を断ち切る堀切を境に帯状の丘陵地帯が北北西方向から東南東方向へ伸びており、それを段

差をつけて岩山を削平し、累々と８郭の平場が連なっています。その南下にある、谷頭から下る一帯が当時の城下町に位置づけられます。したがって城そのものは南向きで、麓集落の北側壁付きの城塞となります。

縄張りは北斜面が非常に急峻で、絶壁に近い状況を呈します。その絶壁下には谷が入っているので、北側の守りは完全です。但し、なだらかに山が下るので東南端の守りが弱いように思えます。集落の中には「屋敷」の屋号があったり、「大手」姓の方が住んでいたり、「城の平」などの地名も残っています。先ほど阿蘇品先生からお話がありましたが、大権寺という寺跡の推定地は谷頭の一番突端にあります。距離的には棚底城跡と数百ｍほどしか離れていません。このような状況下に城があります。

この城跡を測量して縄張りを確定しながら、トレンチ調査を行いました。その結果、岩盤を加工した大きな柱穴がいくつも出てきました。結果として岩盤を掘り込んでいるため、一つも無駄がないという認識を持ちました。そこで桁・梁の長方形の線引きをして建物の復元を試みましたが、全く手に負えない状況で、従来の方法では建物復元が難しいことが分かりました。そこで、この方面に関しては建築専門の先生方に調査を依頼しました。

遺物に関しては先ほど小野先生より、詳しくお話がありましたが、茶の湯道具・碁石などが出土したことから、城における平時の生活様式が分かるということで非常に注目しています。碁石や茶の湯は文献的な裏付けもありますが、碁石について若干補足しますと、昭和50年代末からの人吉・球磨地方における九州縦貫自動車道建設に伴う発掘調査の頃からですが、いわゆる「おはじき」と私が呼んできた扁平な黒色と灰色の石が幾つか出ており、「何故このような遺物が山城からでるのだろうか」ということで、不思議に感じていました。城内の子供が遊んだのではないかという想いもしながら、これまで報告書で７例ほど紹介しました。しかし、今回の調査で、まとまって出土し、これは違うと従来の見方を変更したのです。また、町教委の歳川氏が精力的に調査した結果、単に近場から拾い集めた物ではなく、遠方から持ち込んでいることも判明した為、碁石ではないかとの推論をしたわけです。

棚底城跡からは日常生活が数多く出土し、遺物からも多くのことが語れます。このことは小野先生からも興味深いことをお聞きし、とても参考になりました。

海城は非常に難しい表現です。江戸時代の初頭、肥後藩は、藩内の古城の規模を江戸幕府へ報告しています。この時は山城、平山城、平城の三種類の区分がなされています。海城という表現はされていません。この表現は昭和50年代頃から「海に面した地方特有の城」ということで、使用されています。つまり、海城は後からの造語と考えてよいのです。小野先生が話されましたように海に生きる領主という観点からすれば、平山城の中の海城という位置づけも可能かと思います。

次に、印象深いものとして、全山が岩山の地形を念入りに加工し、岩盤に穴を掘り、建物を建てているという状況証拠が得られたことです。但し、建物については、先ほど申し上げました様に考古学的見地からは復元が困難な建物が検出されています。出土遺物は、現在、丹念に分類を行っていますが、文献記述に見合うような、先ほど小野先生が語られたように三時期に分けることができます。

大権寺に関して、簡単に説明します。文化庁の磯村調査官から、「大権寺をもう少し調査したらどうか」という御指摘もあり、現在、古塔の調査を進めているところです。五輪塔は火輪が最も多く62個確認されています。また、宝篋印塔の相輪が36個あります。すなわち、少くとも62の五輪塔、36の宝篋印塔があったと考えられます。年号的には北朝年号で、早いものは延文三（1358）年から始まり、下限が永享十二（1440）年で、その間、寺が存在したということが確認できます。しかし、大権寺という特定の場所は確認されておらず、字「大権寺」地内は面積が約86,000㎡もあります。でも、その中の一角に古塔が集中する箇所があります。谷頭で、地形的にも寺跡としての可能性が大きいと思います。阿蘇品先生の解釈では、野墓の類を集めたものではなく確たる寺跡があっただろうとのことです。

矢加部：何度も繰り返しますが、棚底城跡を見て最も驚いたのは岩盤を抉り込んだ穴でした。鑿跡を残す非常に残りのよい穴が幾つもあり、大変な作業であったのではないかと感じました。西島さんは伝統建造物の復元を専門にされていますが、これらの岩盤に掘った柱穴からどのような建物復元、或いは想像ができるかをお話いただきたいと思います。

西島：夥しい数の柱穴を見ますと、大きさ、深さ、鑿痕等の掘り方、根石の有無等々の差異がありました。岩盤層の固さ、状態が一様でないため、時代差の判別が現段階では出来ていませんが、柱穴の一部が重なって掘られている場所もある為、建替えが

行われたのは確実です。建替えの原因としては、掘立建物は根元が腐りやすく耐用年数が短いということ、或いはこの地域特有の倉岳から吹きおろす強風の為に建物が被害を受けたということが考えられます。天災等もあるでしょうが、その他、戦闘や城主の交代も考える必要があります。鉄砲等武器が変わると建物や塀の防備状態もそれに対応したものに建替える必要が出てきます。そういう要因も考えられます。夥しい柱穴の中から、どのような建物が想定できるか。まず、どこから手をつけるかでかなり悩みましたが、南側が海であるので、ロケーションを考慮し、海に面した建物があったのだろうと考えましたところ、一間を六尺五寸と六尺という長さで二通りの、梁間三間×桁行五間の建物跡が確認できました。次には、先ほどと少し柱筋が変わり、六尺五寸の梁間です。六尺五寸が三間に、桁行は六尺五寸の五間という建物が確認されました。三間×五間の建物ですが、当時は三間×三間で床棚付きの床と違い棚で、座敷は対面のための正式な座敷とされていました。三間×五間の建物の中に、三間×三間の座敷がプランとして採れるので、おそらく館のような建物があったものと思われます。さらに対面を行う接客空間のみでなく、城主がくつろぐ空間や、家来が控える空間もあったのではないかと考え、先ほどの建物を延長させたのが、五間×六間の建物です。しかし、柱筋が通ってないという欠点があります。新築の場合、このような柱筋は立てないと思いますが、緊急の場合、以前にあった柱穴を再利用して立てるということが考えられますので、こういう形でもできるのでないかと思います。「可能であろう」という想定の建物です。次に先ほどの五間×六間の建物がどのようなものかを考えてみますと、江戸時代初期、幕府の大棟梁の塀内家に伝わる『匠明』中の「昔主殿之間」というのが、床棚や縁側を全て取り除けば、おおよそ五間×六間の建物となります。先ほど小野先生が仰った、領主が同じような持ち物を持ち、同じような建物を持つことが権威を象徴すると解釈するのであれば、『匠明』の「昔主殿之間」のような規模のものを建てた可能性はあります。もう一つの図面は、熊本城の「加藤平左衛門屋敷広間」です。これは図面しか残っていませんが、寛永十四年に解体された建物です。これも周囲の縁や床棚を取り除けば、凡そ五．五間×七間のような建物となります。

先ほど申し上げましたが、五間×六間というのは柱筋が通ってない建物ですから、これが確かに存在したということは断言はできません。可能性があるというところです。大田館長が仰ったように、柱穴のほとんどは建物や塀を含む何がしかの工作物の痕跡であるはずです。それ故、全て柱穴はなんらかの用途がなければなりませんが、今のところそこまでは分かっていません。今、申し上げたようなことはほんの一部です。更なる研究が必要であると思います。次の図面は、先ほどの建物の南側を少し下がった場所にある、小さな柱穴群です。建物の南に庭園があったと先ほど小野先生も申されましたが、これも庭園であればよい位置ですが、建物の柱としてはやや細すぎると思います。風除けや防御用の塀とも思えますが、五列の並びは列数が多すぎます。しかし、これを束列と考えれば、この上に床を張ることは出来ます。板床を張れば、床は多少高い位置になるため、高い位置からの防御、武器の使用という点で有利と判断されます。しかしながら、私としてはこの場所からして、建物の南側でそれも海に面しているということで、月見の宴や茶会などを催した床でないかと願望も含めて、考えるところです。

矢加部：西島さん、検討した柱穴は、城の本丸に当たるⅠ郭の建物でよろしいのですか。

西島：はい。先ほど大田先生が仰った部分の最も高いⅠ郭の柱穴群から考えた建物の想定です。

矢加部：Ⅰ～Ⅷまでそれぞれに郭があるわけですが、それぞれにやはり建物があり、時期は別にして、段々に建物が並ぶそういう風景であったと考えてよいのでしょうか。

西島：下の段の方では、多少、柱穴跡を見ましたが、まだトレンチ調査でしたので、私には、どの程度存在したかはわかりません。そこでⅠ郭だけの想定をしました。でも、全体を見れば、また変わることもあるかもしれません。

矢加部：通常、中世城では石垣がほとんどなく削平のみで曲輪造りをしているように思えますが、この棚底城跡は小規模ながら、各部で段差面に小石垣が巻くように構築されています。今村さんは熊本城を始めとして、石垣を随分ご覧になったと思いますが、棚底城跡の石垣についてはどうお考えですか。

今村：普通、石垣というと近世城の非常に高い石垣を想像されると思いますが、特にこの天草地域の中で、各段に土留め風タイプの石垣を築くのは、この棚底城と、苓北町の富岡城くらいです。いずれも地山の石を割って積み上げています。曲輪を造る際、通常は土端を削って傾斜を出しますが、それよりも石垣を築いた方が、当然、耐久力が強いのです。そのような意味でこのような石垣を積んだと思われます。図面にありますのはⅢ郭からⅣ郭上の石垣ですが、本来は、より高く存在していたと思われます。それが崩壊して、下部の低い石積み５、６段ほどが残存するだけとなっています。本来の形での石積みは残っていないわけです。帯を腰に巻くような形で石垣が残っていますが、天草の中世城の中では、特徴的なものであると思います。

ところで棚底の町中には見事な石垣が家の周囲に積んであります。このような景観を持つ集落は熊本県内では他にありません。棚底城と同時に、町の景観も非常に貴重なものであると思います。でもこのようなものは、少しずつ失われていきつつあるのが実状です。文化財は地元のアイデンティティです。是非、城と町の景観を残す努力をしていただきたいと思います。

矢加部：今村さんの仰った城の石垣と町に残る石塀、これは防風の為のものだと言われておりますが、その両者に関連性はあるのでしょうか。

今村：両者の積み方は異なります。町の石垣がいつごろから実際に使われたかは現在のところはっきりわかりませんが、石を積む技術は江戸時代、明治時代からずっと続いていたと思われ非常に素晴らしいことと思います。たくさんの割り石を積み、内部に自然の丸石を栗石で入れる。でも、城内の雑石積みとは似ているようでやはり違うものです。県文化課でかつて町内を調査され、棚底地区には99箇所ほどに石垣があるということですが、このような町ぐるみの石の文化というものは城から繋がった一連のものと見ることも出来るのではと思います。

矢加部：ここまでの話で棚底城跡を考古学的にみたアウトラインも大体浮かび上がったわけですが、今日は岡山から出宮さんに参加いただいています。中国地方の中世城研究の第一人者で、数多くの城を見て来られているわけですが、中国地方の城跡専門家として見た天草の中世城というところで類似点、相違点をお話いただければと思います。

出宮：私の住む岡山は今日では備中も一部含みますが、本来は備前国です。

備前国は、守護代や有力な在地勢力が室町幕府から任命された守護大名の権威を蹴落とし、自らが権威者になる「下剋上」の時代を経て、豊臣政権下では親族扱いとなる宇喜多という戦国大名により統一されます。このように戦国時代が教科書的な展開をした地域です。その戦国の状況を反映し、備前国で約300弱の城跡が確認されています。

城跡から物事を考える場合には、一つは規模の問題があります。城の規模とは、兵員をその中に収容して戦争に使用する、その大きさのことを言います。「城の規模観」に掲げている分類は、江戸時代前期に荻生徂徠が決めた城の概念です。「城堅固の城」「所堅固の城」「国堅固の城」と城が領国支配の中で占める役割を分類しています。「城堅固の城」はあくまで地域拠点の城、「所堅固の城」はある一定の領域を支配する城、「国堅固の城」は大名が君臨する城、簡単に言えばこのような図式です。企業であれば本店、支店、営業所もしくは出張所などに例えられます。そのような図式で構成される各支配段階に応じた城の規模があるわけです。備前国での規模観での分類を棚底城に当てはめた場合、どうなるかを後で述べさせていただきます。

ところで、城は戦争の道具です。籠る兵力を反映して城の規模が決まるのが当然です。使用できないのに城を造った時にはどうなるかは、歴史が証明しているところです。武田勝頼が新府城という城を造りました。勝頼の父、信玄は躑躅ヶ崎館という館型の城を居城にしましたが、勝頼は当時、流行の新式の近世的な城を造ったのです。そのため、織田信長に攻められた時、そこに籠る兵力が足りず、遂には奥方と近習を連れて野山で野たれ死ぬという結果を招きました。あくまで城は、自分で使いうる兵力で規模観を決める必要があるという観点を私は持っています。

棚底城跡の場合、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ郭という形で、城の性格を投影しない郭の呼び名がされていますが、城は城としての評価をする必要があるため、本丸、二の丸、三の丸の構成における重要度を、評価していただきたいと思うのです。備前国の城でも主郭が一つの城もあれば、二つや三つの城もあります。城を構成する重要な拠点が一つの場合は、「城堅固の城」となります。二つになると概ね「所堅固の城」です。三つ以上になると「国堅固の城」として大名クラスの城となります。それは城を守る兵力をど

れだけ動員できるかということの反映です。

この観点から見ると、棚底城跡はおそらくⅠ郭が本丸に当たると思われます。そしてⅢ郭とされている場所が二の丸にあたると思われます。Ⅶ郭あたりが三の丸か、出曲輪なのか、ここは評価が分かれる所です。しかし、少なくとも城の要となる曲輪が二箇所にあるということで、構造的には「所堅固の城」の範囲に入ると思います。本来は、天草郡全体の戦国城郭を数多く検証して、縄張りや曲輪の構成を比較した上で、今の話をしなければならないのです。今回は急なお招きであったために、検証ができていません。安直に今日の午前中に、近隣の上津浦城跡と栖本城跡を見学してきました。結果として、両城跡はやはり「城堅固の城」でしかないという感じでした。尤も、今日は雑草の繁った中を見たので一概にそうとは決められませんが。とにかく、栖本氏、或いは上津浦氏にしても本城が「城堅固の城」の構成でしかないのに、この棚底城跡だけは「所堅固の城」、地域支配をフォローする城なのです。この観点が、私が棚底城跡を見て最も感じたことです。

それから、城には有事籠城と平時居住の二つの要素がありますが、この棚底城跡の場合、生活の痕跡があり、確かに日常的に使用されていたと今日、説明がありました。逆に、「いざ鎌倉」ではありませんが、戦争時にどう使用したかについて見ると、戦争の防備施設が見えてこないのです。本丸にこれだけの規模の建物を構えるならば、どこを使用して戦争をするのか、攻めて来た敵をどこで守るのかという防備施設の検証も必要かと思います。

備前国の城の場合は、戦争を行う場としての城構え、敵の勢力を武力で撃退する戦闘施設の意味がありますが、天草の城は、勿論、三城跡のみで結論を出すのは早計ですが、どうも、居館型で日常の生活を行いながら有事には戦争に使用する城のタイプではないかと思います。結局、近世城郭の熊本城や島原城もそうだと思いますが、城の分類で言えば棚底城は平山城ということになります。高い所にある城郭と、山の麓の城下町とが一体的なセット関係を持った城、これが近世の城です。戦国時代の城は麓の根小屋と呼ばれる日常生活空間と戦争する山城とが分離しています。でもこの棚底城跡の場合は、それが分離していないのではないかと思われます。これは天草地方の特徴なのか、あるいは肥後を含めた有明海周辺一帯の構成的な要素なのか、県外の私にはわからないところです。

全体に見て、どちらかといえば天草の城は居館型の構造ではないかと思います。先ほど小野先生も出土品の性格からこの事を証明されています。棚底城跡は「所堅固の城」です。何故そうなったかはこれからいろいろと議論して行かねばならないと思います。再度、申しますが、本城である栖本城あるいは上津浦城は「城堅固の城」でしかないのです。

余談ですが、私が三十年前に発掘調査した岡山平野の「所堅固の城」級の城から出土した遺物と比べた場合、棚底城跡から通貨の出土していないことが、多少気になります。良い流通品は出土しているが、通貨が出土していないし、家具も出土していません。さらに武具も出土していません。ですから、戦争用の城というより地域支配の拠点とした「治所」、江戸時代でいえば「地行所」、つまり地域支配の役所的な、政事を行う城として活用されたのではないかという気もするのです。

矢加部：今まで指摘されなかったような問題提起をしていただきました。これからの発掘調査の課題として、重要なポイントになると思います。さて、小野先生には先ほど陶磁器から見た棚底城跡の話をしていただいたわけですが、私が聞いていて気になりましたのが、砥石の話です。これだけの城をこの地に造るのはそれだけの経済力があったと思いますし、また海の領主という言葉もでましたが、その背景と砥石の話がどう結びつくか、興味をひくところでありますので、一言いただけますか。

小野：私だけではなく、阿蘇品先生もおっしゃいましたが、おそらく海上交易権を舞台にこの城で争いがあり、さらにここだけでなく天草の数ヶ所で争いがあったのだろうと考えています。棚底城を考える時に、天草全体もそうだと思いますが、海を舞台にした交易権とそこから生まれる利益、そうした背景が非常に大きかったのではないかと実感しています。そして、実際ここへ来て見ていると、周辺にさほど水田は広がっていません。では、何を守っていたのだということになるわけです。そうしますと、やはり港とその港の先にある権益だろうということになります。

秋にここに来た時に町教委の歳川氏に「砥石を掘っている所が見たい」とお願いしました。中世の流通研究としては、昔から陶磁器は生産地がわかり、年代もわかるという意味で良い資料として使われてきたわけですが、先程も申しました様に、陶磁器だけではない研究も最近進んでいます。繰り返しますが砥石や硯です。これも石の特徴により、どこで作られたかがよくわかるので、陶磁器とは違う形で中世の流通を見ようという研究が盛んになっているところです。そういうことで、関東に住んでいる

者としては「天草に来たら砥石を見なければ」ということで、どこにあるのですかと尋ねたところ、島中ほとんどに砥石の生産地があるとのことで驚きました。

天草の砥石が中世の鎌倉時代から、広く日本列島に流通していることに、さぞ皆様も驚かれたかと思います。それほど流通するということは逆に言えば、それを求めて商人が天草にやって来たし、また別の品物もここに向かって運ばれてきたということです。そこにはそれを動かすための権益が生じているわけです。砥石問題一つとっても、凄く大きな権益がこの周辺にあったことになります。勿論、それは砥石だけではなく、海を渡るその他の品物も大量にあるわけで、九州の内海世界のような所もありますし、もっと南まで、琉球とかを含めた広い世界もあったのでしょう。そのため砥石はもっと注目されていいのではないかと思い、紹介したわけです。

矢加部：最後に、パネリストとして稲津町長に、いままで専門の方のご意見をいただいての感想を聞かせていただければと思います。

稲津：今までも城主は不明なわけですが、先ほどの小野先生のお話の中で1530年代頃を境に城跡から、新たな調度品が出て来なくなった、そうするとそこに何らかの区切りがあるのか。また、阿蘇品先生のお話では1560年くらいに上津浦氏に有馬氏の援軍が200艘の舟を出したと。結果として、そのことで棚底城跡は栖本氏から上津浦氏のものになったと。棚底城の遺品が無くなりつつある中で城主もかわりましたが、それでも棚底城を確保したい、海の道を見つけたいということで、資金を使っても上津浦氏が棚底城を手に入れたいということが分かりました。改めて、棚底城跡の持つ重要性を再認識しました。

手火矢という言葉について、1560年ということで武田勝頼の騎馬隊と織田信長の鉄砲隊が戦った長篠の戦いの15年前にはこの地に、鉄砲隊がいたという素晴らしいことを知ることができてうれしく思います。

矢加部：これで一通りパネリストの方からご意見をいただきました。ここまで聞いてきて私が最も強く感じましたのは、これだけスケールの大きな棚底城を造った城主、一体誰が築城したのかということです。天草の豪族は「天草五人衆」と呼ばれたりもしますが、「棚底氏」というのは文献には見えないわけです。しかし、このような立派な城が残っています。誰がどういう目的で造ったかが、最も気になります。この辺りを阿蘇品先生にご意見を伺いたいと思います。

阿蘇品：文献の方から言えば、何もないわけですから、非常に語りにくい話です。そこであえて回りくどく状況を考えてみたいと思います。と申しますのは、先ほど大田館長が言われた大権寺の遺跡、それを少し考えてみたいからです。

大権寺の地内にたくさんの五輪塔と宝篋印塔の残欠が集まっている場所があります。これは、完全な形で残っていれば70～80基と非常に多く、かつてはかなり広がっていたと思われます。先にも述べましたが、昭和53年の鶴田八洲成氏の調査によれば、天草の石塔群遺跡の中でこれほど数量があるものは他にないとのことです。上島は勿論、天草全島の中でもこれだけの量のものはありません。上津浦氏や栖本氏のものよりも桁外れに多いということです。そして、もう一点、大権寺の遺跡は、石塔に年代が入っているものが幾つかありますが、その年代が延文三（1358）年、南北朝時代の中期ごろに始まり、永享十二（1440）年、室町時代の前期、要するに14世紀の中ごろから15世紀の中ごろまでのものです。年代入りは6基ほどありますが南北朝時代のものに限っては全て北朝年号を使用しています。大乱の頃、肥後国ではある時期、非常に南朝方が優勢で、特に菊池氏を中心としていたので概ね南朝方に付くのが普通なのです。ところが例外的にこの大権寺の銘文は皆、北朝系になっているというのが大きな特徴です。

ところで栖本氏は、上津浦氏もそうだと私は思っていますが、南北朝内乱末期にあきらかに南朝方に味方している記録があります。それから、この大権寺遺跡は荒廃してしまい残欠石塔群となり、寺の名前として地名が残っているようになるということでしょう。

このように数多くの石塔が集まっているということはどういうことでしょうか。結局、このような五輪塔・宝篋印塔をたくさん製作した訳は供養の対象としてです。供養というのは、墓として作る、或いは祀りをするため、それから「逆修」と言いますが生きてるうちに供養をしておくこと、以上のようなことのために石塔を作るのです。塔を作ると言っても誰しもが作れるわけ

ではないから、誰か資力ある者が作らねばなりません。また、これは当然、石で出来ていますが、石ではどこの石でもよいと言うわけではなく、やはり加工しやすい凝灰岩で主に製作されています。しかし、凝灰岩の採集地は限られます。それを切り出し、加工し、運搬して、設置せねばならないのです。大権寺ではそれらはしていないはずです。だから、加工、運搬、設置の経費が必要となります。これを行うために、資力が必要となります。さらに供養し、銘文を石に刻むためには、銘文を作り法名をつける者もいなければなりません。となれば必然的に寺が絡んでくるわけで、寺とセットになっていなければならないのです。すなわち、この棚底の地にはその条件がそろっているのです。天草上島で第一の経済力を持った者がいたということになります。その中心人物はおそらく棚底城と絡むはずです。それは、内乱の時代には北朝方をずっと通していた、という風に考えられるわけです。

別の話となりますが、いよいよ南朝方が最後に、菊池城も落ちて、残るは八代城のみになった時、北朝方、九州探題側が八代を攻撃しようと軍を八代の二見に集めるのですが、これが失敗します。そのために、集まった北朝方の軍勢の中で相良氏が離脱し、八代の南朝方に付きます。次には相良に唆されて島津氏は引き返してしまいます。八代を攻めるつもりが逆に撤退しなくてならなくなり、佐敷に撤退します。ところが、佐敷に撤退したところで、今度は湯浦氏、津奈木氏が南朝方に付いてしまう。そうなると佐敷にも居られなくなり、天草に撤退しました。6～700人の兵力で天草のいずれかに移動したのです。いずれかとはどこでしょうか。条件として第一に考えられるのは、佐敷から最も近い場所。しかも北朝方を一貫して貫いていた所。となれば棚底の可能性が非常に強いと思われます。そのような勢力ではないかと思うのです。先ほど少し触れましたが、上津浦氏や栖本氏は、ある時期、南朝方なのです。

このような問題がありますが、この勢力は大権寺の銘文を見ると最後は永享十二年ですから、1440年くらいの頃までは間違いなく存在したと思います。明応十（1501）年は文亀元年でもありますが、この段階で菊池氏当主が天草一揆衆にあてて連絡を出しています。その中に出てくる名前には、棚底などは出てきませんが、栖本氏、上津浦氏が出てきます。天草五人衆というのは後世の呼び名で、当時は天草一揆衆としか言ってません。この一揆衆は、天草、宮地、志岐、長島、久玉、大矢野、上津浦、栖本の八氏です。つまり当時は八人衆でした。この中に「棚底」とありたいところですが入っていません。ただし、苗字にその土地の名前を称するようになるのはおおよそ、南北朝時代頃からなのです。天草下島の志岐氏などは、昔は「志岐」とは名乗っておらず、「藤原」と名乗っていたのです。志岐姓は南北朝頃から名乗り始めたわけです。栖本氏にしろ上津浦氏にしろどうもその頃からの名乗りであると思われます。天草氏一族なども元来、大蔵氏の系統です。

続いて、上島の中で上津浦氏と栖本氏、両氏はすでに南北朝時代には存在していました。没落したこの棚底城主は少なくとも1440年くらいまではいただろうと考えられます。とすると大体、栖本氏、上津浦氏を加えた三者が鼎立した時代があったと思われるわけです。

こういうことを考えた場合、『八代日記』に記された状況を整理して見ますと不思議な点が浮かびます。まず、上津浦氏は棚底城を有しており、自分の一族を送り込んでいます。直轄の城としているのです。家臣などに与えずに保有し、あくまで自分の城として抑えています。すなわち、上津浦氏は上津浦本城と第二の直轄城として棚底城を持っている。これによく似たスタイルが相良氏です。相良氏は、人吉城を持っていましたが八代に進出し八代城も持っている、同様のスタイルです。上津浦氏の棚底城に対する執着の度合が想像出来ます。

一方、栖本氏は上津浦氏が起こしたゴタゴタに乗じ、棚底城を奪取します。取った後に八代の相良氏のところに行き、なんらかの協力を願い、認められるようです。余程の説得材料があったのでしょう。今まで上津浦氏が持っていたものを奪って、それをすぐに承認してもらうほどのこととは何か。そして、相良氏は大矢野氏や天草氏にそれを説明に行っているようなのです。結局、合戦になりますが、相良氏は栖本氏に加勢し、栖本氏が負けないようにしているわけです。このような背景から、棚底城にどのような意味があるのか、どういう理屈を通せば話がつくか、という問題が浮かびます。

両者に筋が通る解釈は、上津浦も栖本、両氏とも実は棚底の分家であり、元々棚底から上津浦、栖本に分かれたという解釈です。地域的にも地勢的に見てもそれは妥当です。そのため本家がどういう訳か絶えた。その本家の場所争いに執念をかけているわけです。相良氏に栖本氏が承認を求めたのもその理屈があったからでしょう。ところが上津浦氏の方が強く、上津浦氏が取ってしまった。だから、たまたま上津浦がそこでいさかいを起こした時に、すぐさま奪ったのだと。元々は、栖本氏に理があったということです。そういう潰れた本家の跡目争いをしている、というのが棚底紛争の真の部分ではないでしょうか。この解釈を

すれば全て解けるのです。

郷土史を勉強しておられる方は、「栖本氏は違う。同族ではない」と言われる方も居ろうかと思いますが、それは違います。栖本氏も、上津浦氏も系図は実は新しいものです。南北朝時代の『吉川文書』の中で、天草一族として出てくるのが、栖本、大矢野、久玉、高連の四氏です。この内、高連は「こうつら」と読めるから上津浦だという説もあります。そして、『古城考』の中には、栖本城主は大蔵姓と記されています。『古城考』は江戸時代のものですから、新しいものですが、南北朝の段階でもこのように書かれているわけです。系図とは新しい時代に古い時代のことを書いているわけです。しかも根拠がある場合とない場合があります。その点から言えば、栖本氏も上津浦氏も、天草氏と同じ一族で、この一族は大蔵氏で大宰府の府官の系統です。天草全島では志岐氏だけが別系統です。志岐氏は鎌倉時代に北条の代官となっており、藤原氏系ですが、それ以外の全ては大宰府府官系の大蔵氏が入ってきて一族が大矢野、上島、下島に移り広がったものと思われます。上島で最初に入ってきた場所はこの棚底だったと思われ、棚底から分かれ上津浦に伸び、一方で栖本にも伸びていった。そういうことが想像されるのです。

結局、この地をこのような視点でもう一度見直すと、各先生方がいろいろ仰った要点の中心として結び付くのではないかと思います。史料的に城主の名であるとかは全く分からないわけですが、状況を周りから抑えていき結論を出そうとすれば、棚底に本家があり、そこから分家したが、本家が潰れそれを巡って分家同士が争いをしている、そのような状況として解釈せざるを得ないのです。この様に私としては結論付けるわけですが、さあ皆様、どうでしょうか。

矢加部：日頃、阿蘇品先生は非常に慎重な方であり、石橋を叩いても渡らないイメージがあるのですが、今日は非常に大胆で興味深い新説を発表していただき、大変な意欲を感じました。

予定時間を過ぎておりますのでコーディネーターとして、まとめに入ります。各先生方も意を十分に尽くせない部分もあると思いますが、御了承下さい。最後に、稲津町長から倉岳町として、また平成18年３月27日からは新・天草市となりますが、今後、この棚底城跡をどうしていくか、ビジョンを含めて、決意をお話いただきたいと思います。

稲津：さきほど、開会式の時にもお話しましたが、まず国の史跡指定が目標です。新天草市は全体的にこのような城跡調査が進展していません。だから、この棚底城跡がある程度のラインに到達すれば、他の城跡にも手をかけることができます。それは、天草の中世を紐解く、或いは掘り起こすことになります。ひいては天草市の文化の新たな発展に繋がるのではないかと思います。私たちの倉岳町は天草の東側ですが、道路の最終的な整備が終われば、本渡市まで20分位で行けるようになります。対岸の化石で知られる御所浦町には白亜紀資料館があり、ここでも色々な構想が立てられているところです。これらと倉岳町の棚底城跡をよい塩梅に結び付けたら、観光面での点を線にして、面に発展させることも可能ではないか、そのようなことを考えています。新市長となる方が、このようなことに対してどう興味を持つかということも重要ですが、私としましても、これを繋いでいかなければならないと感じています。

本日、各先生方からいただいた新たな話、また今日までの調査成果。これを十分まとめた上で、「調査の結果としてこうなった、次に進展するためにこうしたい」と言えるような形をもって倉岳町という自治体を卒業させたい。如何にして新市にバトンタッチをするか、を中心に最後の努力をしていきたいと思います。本日はありがとうございました。

矢加部：長時間に亘り、棚底城跡を様々な角度から検証してきました。それぞれの話から浮かび上がったことを端的にまとめますと、棚底城跡は熊本、特に天草地方の歴史を語る上で非常に重要な存在であり、それが発掘調査の結果で明確になりました。この点が、現在の所の結論ではないかと思います。これから先も総合的な調査が進むと思いますが、今後、天草の歴史全体に及ぶような発見が出てくることを期待します。また、国史跡指定が近いという話も聞きますが、国指定になるということは遺跡を未来永劫残していくということであり、研究も続けて、成果を町づくりにも活かす。これが国指定の目標でしょう。とても大きな課題ですが、棚底城跡を地元の共有財産として守り活用することに期待してこのシンポジウムを閉じたいと思います。本日は長時間に亘り、多くの方にご参加をいただき本当にありがとうございました。これをもちましてフォーラムの幕を閉じます。（了）

〔付論〕

大権寺遺跡と棚底城主試論

阿蘇品保夫

一　中世石塔群
〔一〕遺跡遺物の概要
〔二〕遺物の特色
〔三〕石塔集中の意味

二　棚底城主とその周辺
〔一〕内乱末期の天草（二見陣崩れ）
〔二〕戦国期棚底抗争の背景
①棚底抗争
②棚底城主試論

一　中世石塔群

〔一〕遺跡遺物の概要

石塔群の集積地は、倉岳町大字棚底字大権寺にあり、地籍番号大字棚底一四七六番、地目は宅地（二分筆）となっている。

この地は、倉岳（標高六八二・二メートル）の麓の扇状地内では最も高い扇頂部というべき位置にあり、それより上は、すぐ山林となり、東脇の谷は棚底川の上流である。下には棚状に田地が広がり、宅地も点在し、末端部は集落が集中して倉岳町の中心部となる。

大権寺遺跡に集積された石塔群は、第一表の鶴田八洲成「天草の中世石造文化略表（含・近世）」（『天草建設文化史』）によると、五輪塔・宝篋印塔の残欠が主なものであり、石質は凝灰岩とされている。その推定される数量は、昭和四一～五一年段階で、五輪塔火輪が七〇点、宝篋印塔相輪が五九点である（現在確認できる数は、五輪塔・火輪六二点、宝篋印塔・相輪三六点）。したがって、五輪塔七〇基以上、宝篋印塔五九基以上が、この地に造立されていたと推定される。

これらの石塔に残されている銘文は一三点。その内紀年銘は六点。いずれも宝篋印塔の基礎座に刻されている。基礎座部分の上部に階段型と反花型の両様が見られるが、格狭間などは無く、笠石の隅飾は簡略である。

〔二〕遺物の特色

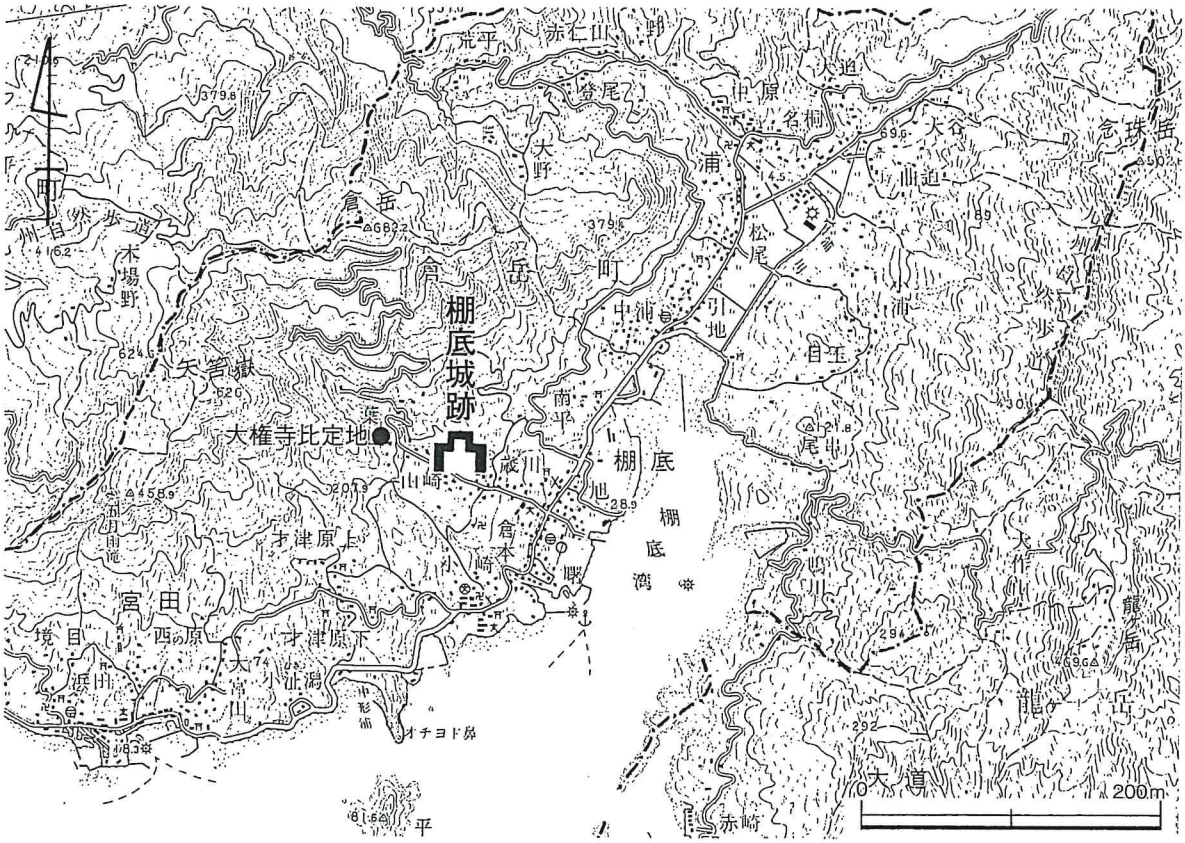
銘文はいずれも宝篋印塔に残るもので、延文三年（一三五八）から永享一二年（一四四〇）までの南北朝から室町前期のものであるが、この内、延文・康安・永徳（二点）の四点は、天草郡内の石塔銘文の中で最古のものであり、また、一四世紀銘の石造物は大権寺遺跡に限られる。

また、「照宝和尚　五月二日□」の銘文から、僧侶の墓碑銘であり、字名大権寺は、本来この地に所在した寺院名によるものと推定して誤りないであろう。

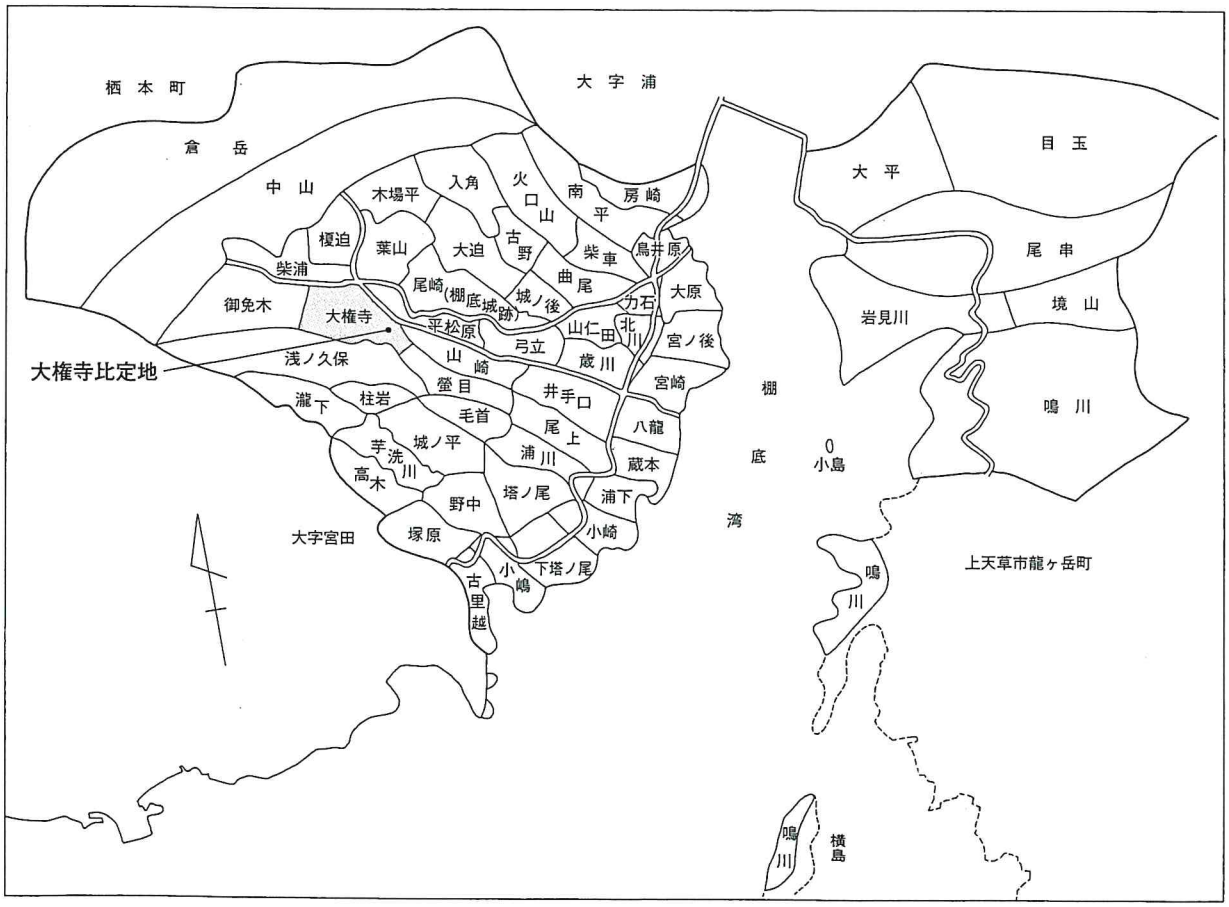
ちなみに、前川清一作成「熊本県下南北朝紀年石造物一覧表」（第二表）において、宝篋印塔は一一基を数えるが、紀年銘の宝篋印塔が一箇所に四点もまとまって存在する例は、大権寺遺跡以外には見られない。近くは、大牟田市（福岡県）普光寺に四基の在銘宝篋印塔があるだけである。

また、石塔の数量についても、一般の中世石塔については、五輪塔が群を抜いて多く、宝篋印塔がこれに次ぐのは全国的傾向である。前述の鶴田氏の調査表を検討するに、第三表の如く、大権寺遺跡の五輪塔・宝篋印塔の数量は、天草郡内の他遺跡に比べ、卓越した数量である。また、五輪塔と宝篋印塔の数量比でも、天草郡は勿論、熊本県下でも、宝篋印塔の多さは群を抜いている。

たとえば、天草上島において、栖本町馬場の平ノ口遺跡は五輪塔二一基・宝篋印塔二基、上津浦で最も多い大円寺跡遺跡は五輪塔五基・宝篋印塔五基、教良木小学校裏遺跡は五輪塔二八基・宝篋印塔一三基であり、大権寺遺跡の七〇基・五九基という数量との差の大きさはどう考えるべきであるか。



第一図　棚底城跡位置図



第二図　倉岳町大字棚底・字図

第一表　天草の中世石造文化略表

鶴田八洲成「天草建設文化史」（1978）所収表より作成

	種別	市町名	大字	小字ほか	記年銘	年代	岩質	規模 単位 cm	銘入ほか
○	宝篋印塔	倉岳町	棚底	大権寺	延文三年	一三五八	凝灰岩	基礎幅31（塔身欠）	明俊（天草石碑年号中最古）
○	宝篋印塔	倉岳町	棚底	大権寺	康安元年六月六日	一三六一	凝灰岩	基礎幅31（塔身欠）	道宗禅門
○	宝篋印塔	倉岳町	棚底	大権寺	永徳三年八月　時	一三八三	凝灰岩	基礎幅31（塔身欠）	浄蕙
○	宝篋印塔	倉岳町	棚底	大権寺	永徳三年□月二十五日	一三八三	凝灰岩	基礎幅31（塔身欠）	蓮恵禅門
○	宝篋印塔	倉岳町	棚底	大権寺	永享十二年□月二十四日	一四四〇	凝灰岩	基礎幅31（塔身欠）	光妙浄禅定尼
	宝篋印塔	本渡市	亀川	古寺	応永十一年	一四〇四	凝灰岩	基礎幅30（完基）	妙永禅門
	宝篋印塔	竜ヶ岳町	大道	東ノ浦	嘉吉二年九月十六日	一四四二	凝灰岩	基礎幅32（塔身欠）	心田了公、座元禅師
※	宝篋印塔	竜ヶ岳町	大道	東ノ浦	享禄三年庚寅三月吉日	一五三〇	凝灰岩	基礎幅38（身笠欠）	□□□方智念、□蔵座元禅師（梵字四面入）
※	宝篋印塔	五和町	御領	塔ノ尾	（無銘）		凝灰岩	笠石幅47 基礎幅56	（無銘）
※	宝篋印塔	松島町	教良木	慈泉寺	（無銘）		凝灰岩	相輪のみ 高80 幅20	（無銘）
※	五輪塔	苓北町	志岐	観音院	（無銘）		凝灰岩	壷型水輪のみ 周230 高60	（梵字四面入）
	五輪塔	本渡市	馬場	（寺称軒跡）	（無銘）		凝灰岩	壷型水輪のみ 周40 周127	（梵字四面入）
※	五輪塔	五和町	御領	松崎	（無銘）		凝灰岩	笠石68（台石異物）	（梵字四面入）
※	五輪塔	大矢野町	上	陣床	（無銘）		凝灰岩	笠石67	（梵字四面入）
※	五輪塔	有明町	上津浦	城下	（無銘）		凝灰岩	笠石63 水輪198	（梵字四面入）
※	五輪塔	新和町	大宮地	薬師堂	（無銘）		凝灰岩	笠石55 水輪185	（梵字四面入）
	宝塔	有明町	楠浦	平内	（無銘）		凝灰岩	塔身 高43 周115	（梵字四面入）
	宝塔（二）	栖本町	馬場	（寺称軒跡）	（無銘）		凝灰岩	塔身のみ 高45（2）	（梵字四面入）
	宝塔	竜ヶ岳町	大道	東ノ浦	（無銘）		凝灰岩	塔身のみ 高30	（梵字四面入）
	層塔	栖本町	馬場	西原	（無銘）		凝灰岩	現在高92（下層欠）	（各層に伝授）
	層塔	本渡市	広瀬	渓林庵	（無銘）		砂岩	高270	
	磨崖仏	栖本町	河内	小ヶ倉	長享元年丁未二月	一四八七		全刻銘長50 幅30	（梵字3とほか彫刻2入）
	板碑	河浦町	益田	観音寺	永正二年乙丑八月吉日	一五〇五	砂岩	高144 幅116 厚58	（観音座像入）
	板碑	本渡市	本渡	舟ノ尾	享禄四年辛卯九月吉日	一五三一	砂岩	高120 幅69 厚12	（阿弥陀立像と梵字2ほか漢文入）
	板碑	本渡市	楠浦	立浦	天文八己亥二月彼岸日	一五三九	砂岩	高88 幅45 厚10	（阿弥陀座像ほか漢文入）
	板碑	栖本町	馬場	（寺称軒跡）	（以下無年号）		砂岩	高120 幅60 厚15	（大円内に3梵字入）

凡例　※は特大　○は大権寺遺跡

第二表－①　熊本県下の南北朝期の年号銘を持つ石造物一覧表

○は大権寺遺跡

	紀年銘	西暦	所在地	種別	備考
1	元徳４年10月15日	1332	荒尾市樺賀庭寺跡	五輪塔	
2	元弘３年３月	1333	菊池市大字亘堂山東福寺	五輪塔	
3	建武元年11月20日	1334	宇城市不知火町長崎堂薬師　法雲寺	五輪塔	
4	建武元年11月23日	1334	熊本市池田町稗田	角柱塔	
5	建武２年８月７日	1335	菊池市大字袈裟尾北福寺	五輪塔	
6	建武３年２月29日	1336	上益城郡益城町赤井　赤井城跡	五輪塔	
7	建武３年３月	1336	菊池市大字亘堂山東福寺	五輪塔	
8	建武３年４月	1336	下益城郡城南町下宮地	五輪塔	
9	建武３年10月日	1336	玉名市伊倉北方本堂山	五輪塔	
10	建武４年４月５日	1337	熊本市池上町平　金子塔	笠塔婆	
11	延元２年11月７日	1337	宇土市椿原町椿原山　宗福寺	宝篋印塔	
12	建武５年７月	1338	球磨郡あさぎり町深田勝福寺跡	五輪塔	
13	建武□□４月28日		玉名市岱明町大字馬場	五輪塔	
14	建武□□９月20日		荒尾市平山小路	五輪塔	南関町地福寺より移設
15	暦応３年10月４日	1340	玉名郡南関町上長田字小次郎丸	供養塔	
16	康永２年２月27日	1343	玉名郡南関町久重字打越	板碑	
17	康永２年８月８日	1343	玉名郡玉東町稲佐馬場	板碑	
18	正平４年２月23日	1349	菊池市隈府正観寺	宝篋印塔	
19	正平４年２月30日	1349	菊池市大字雪野塔の本	五輪塔	
20	貞和５年９月９日	1349	玉名郡菊水町江田熊野神社	宝塔	
21	正平５年８月19日	1350	宇土市西岡　宇土城跡	五輪塔	
22	観応２年８月18日	1351	玉名市高瀬談義所町宝成就寺跡	五輪塔	
23	正平８年２月日	1353	下益城郡城南町隈庄城ノ崎	層塔	
24	正平８年４月17日	1353	荒尾市宮内出目浄業寺	五輪塔	
25	正平８年８月２日	1353	荒尾市宮内出目浄業寺	五輪塔	
26	正平８年11月22日	1353	荒尾市下井手持田丸三ノ宮八幡宮	石塔	
27	正平11年11月21日	1356	玉名郡南関町下坂下字宮島　坂下阿蘇神社	層塔	
28	正平12年５月初日	1357	荒尾市宮内出目浄業寺	五輪塔	
29	正平12年５月19日	1357	荒尾市宮内出目浄業寺	五輪塔	
30	正平12年７月日	1357	熊本市小山町諏訪神社	石塔	
31	正平12年10月27日	1357	荒尾市宮内出目浄業寺	五輪塔	
32	正平13年４月２日	1358	上益城郡松橋町豊福上城長伝寺跡	宝篋印塔	
33	延文３年	1358	球磨郡多良木町大字黒肥地蓮花寺跡	五輪塔	
○ 34	延文３年（欠損）	1358	天草郡倉岳町棚底大権寺	宝篋印塔	
35	延文４年12月17日	1359	上益城郡御船町滝尾横野	板碑	
36	正平15年３月□	1360	八代市興善寺畑中鎮守堂	板碑	
37	正平15年７月３日	1360	荒尾市上井手龍宮祠	五輪塔	
38	正平15年８月６日	1360	荒尾市本村	五輪塔	
○ 39	康安元年６月６日	1361	天草郡倉岳町棚底大権寺	宝篋印塔	
40	正平16年６月29日	1361	八代市袋町三丁目医王寺	石塔	
41	正平16年10月21日	1361	鹿本郡植木町伊知坊	宝篋印塔	
42	貞治２年８月16日彼岸中日	1363	球磨郡あさぎり町深田勝福寺跡	五輪塔	
43	正平18年９月10日	1363	荒尾市宮内出目浄業寺	五輪塔	
44	正平19年８月１日	1364	菊池市大字西寺字中西寺西福寺	石塔	
45	正平19年８月20日	1364	宇城市松橋町大野　妙法寺跡	板碑	
46	正平19年10月18日	1364	熊本市坪井長延寺	五輪塔	『肥後國古塔調査録』より
47	正平20年９月□	1365	玉名市元玉名大神宮裏	五輪塔	
48	正平21年８月21日	1366	玉名市岱明町下村	五輪塔	
49	正平22年６月８日	1367	山鹿市千田中屋敷	五輪塔	
50	正平23年２月１日	1368	玉名市下築地蓮華院（浄光寺跡）	五輪塔	
51	正平23年４月16日	1368	玉名郡南関町細永字厳　厳宮	五輪塔	
52	正平23年	1368	球磨郡山江村山田甲山田大王神社	板碑	
53	正平24年正月（欠損）	1369	山鹿市石字向田　西福寺跡	磨崖仏	
54	正平		玉名市岱明町上村城	五輪塔	
55	建徳３年２月10日	1372	八代郡氷川町今天神社	板碑	
56	文中２年８月中□	1373	玉名郡玉東町山北西安寺跡	五輪塔	
57	文中３年８月23日	1374	玉名市岱明町大字馬場	五輪塔	
58	永和元年７月１日	1375	玉名市下築地蓮華院（浄光寺跡）	五輪塔	
59	天授４年２月14日	1378	八代市千丁町吉王丸菅原	板碑	
60	天授４年４月４日	1378	菊池市大字龍門字寺小野	宝篋印塔	
61	永和４年７月10日	1378	荒尾市宮内出目浄業寺	五輪塔	
62	康暦元年６月26日	1379	荒尾市宮内出目浄業寺	五輪塔	
63	天授５年９月30日	1379	宇城市小川町中小野長谷寺	五輪塔	
64	康暦２年３月５日	1380	荒尾市宮内出目浄業寺	五輪塔	
65	康暦２年11月	1380	玉名郡南関町四ツ原田吹毘沙門	五輪塔	
66	康暦２年３月10日	1380	球磨郡あさぎり町深田勝福寺跡	五輪塔	
67	永徳元年７月25日	1381	玉名郡和水町下岩光行寺	無縫塔	
68	永徳元年11月19日	1381	玉名市下築地蓮華院（浄光寺跡）	五輪塔	
69	天授７年	1381	八代市妙見町懐良親王御陵	宝篋印塔	

平成18年２月12日　前川清一氏作成

第二表－②　熊本県下の南北朝期の年号銘を持つ石造物一覧表

○は大権寺遺跡

	70	弘和元年12月５日	1381	宇城市小川町小川　妙音寺	宝篋印塔	
	71	弘和２年11月27日	1382	八代市千丁町吉王丸北中の丸	板碑	
○	72	永徳３年８月時正	1383	天草郡倉岳町棚底大権寺	宝篋印塔	
○	73	永徳３年□月25日	1383	天草郡倉岳町棚底大権寺	宝篋印塔	
	74	弘和４年10月10日	1384	八代市本町春日神社	板碑	『肥後國古塔調査録』より・未発見
	75	至徳２年２月14日	1385	玉名郡三加和町下岩孫丸小屋敷	無縫塔	
	76	元中２年□□21日	1385	八代市岡町中洪福寺跡	五輪塔	
	77	至徳２年２月日	1385	玉名郡南関町大字下坂下米田竹林寺跡	五輪塔	
	78	至徳２年12月23日	1385	玉名市高瀬大覚寺	五輪塔	
	79	元中４年２月日	1387	阿蘇郡小国町満願寺	宝塔	
	80	至徳４年11月18日	1387	玉名郡三加和町下岩瑞岩寺	無縫塔	
	81	嘉慶２年３月29日	1388	球磨郡錦町木上岩城　岩城跡	板碑	未調査・菖蒲和弘氏紹介
	82	嘉慶２年４月９日	1388	玉名郡南関町長山字徳太天満宮	五輪塔	
	83	嘉慶２年８月20日	1388	山鹿市大字杉　日輪寺	五輪塔	
	84	康応元年４月27日	1389	玉名郡南関町大字下坂下字中ノ瀬　円福寺跡	五輪塔	
	85	康応元年４月27日	1389	玉名郡三加和町下岩瑞岩寺	五輪塔	
	86	元中８年３月時正日	1391	球磨郡あさぎり町深田勝福寺跡	五輪塔	
	87	明徳２年８月遡日	1391	荒尾市宮内出目浄業寺	五輪塔	
	88	明徳２年８月20日	1391	玉名郡長洲町二丁目六地蔵	宝篋印塔	
	89	元中９年２月15日	1392	八代市古麓	五輪塔	

平成18年２月12日　前川清一氏作成

第三表　天草の五輪塔・宝篋印塔の所在数一覧表

鶴田八洲成『天草建設文化史』(1978) 所収表より作成

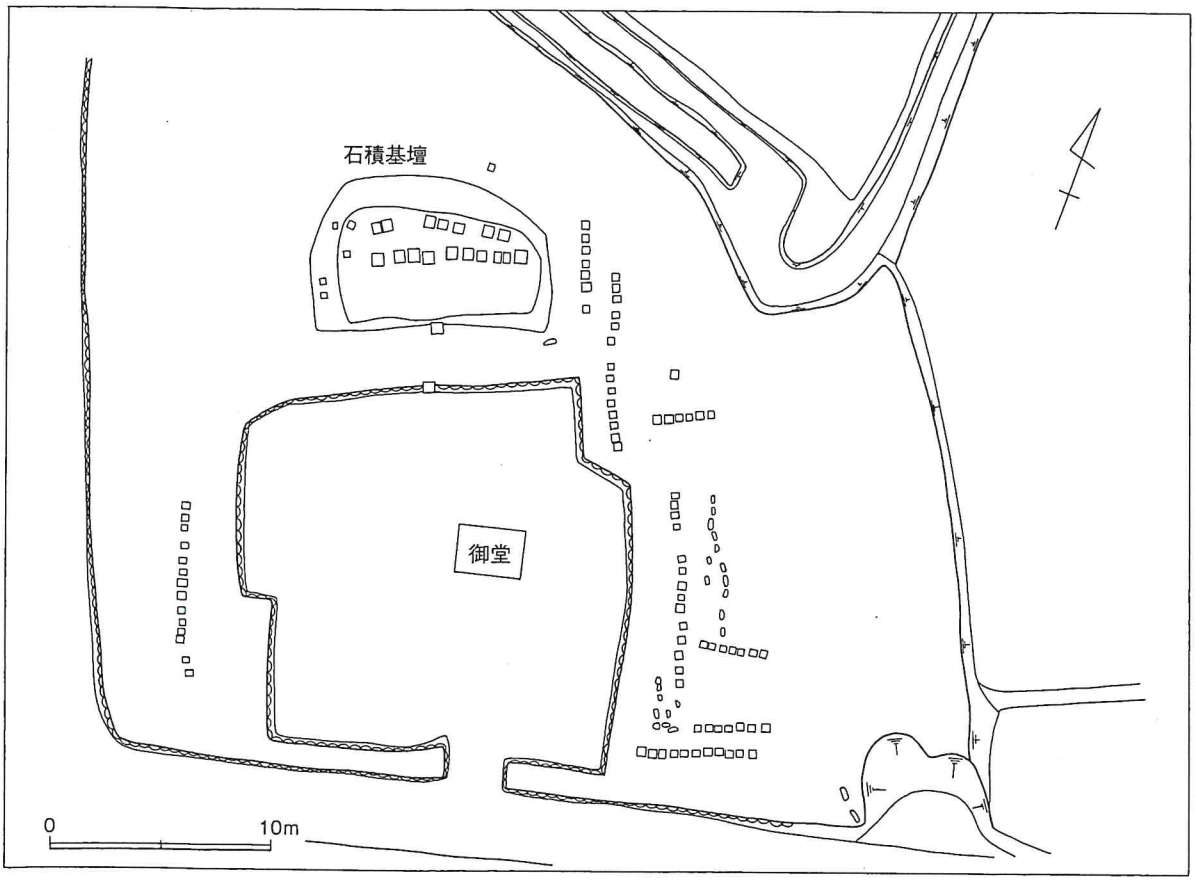
旧市町名	大字	所在地	鶴田八洲成氏確認　昭和41～53年								旧市町名	大字	所在地	鶴田八洲成氏確認　昭和41～53年								
			五輪塔				宝篋印塔							五輪塔				宝篋印塔				
			空風	火	水	地	頭	笠	身	台				空風	火	水	地	頭	笠	身	台	
本渡市	町山口	染岳観音院									五和町	荒河内	墓地内	1	1	1						
本渡市	町山口	塔ノ尾	2	6	3						五和町	荒河内	松森家背面									
本渡市	町山口	毘沙門堂	1				1				五和町	城木場	西光院跡									
本渡市	町山口	延命寺跡									五和町	城木場	旧城跡内地蔵									
本渡市	町山口	天高									栖本町	馬場	専称軒跡	1	1	1		6		1	1	
本渡市	町山口	丸尾ヶ丘									栖本町	馬場		13	21	13	13	1	1	1	1	
本渡市	町山口	北原の御堂	7	1		1	4				栖本町	湯舟原	利明寺		1	5			2		1	
本渡市	町山口	浜崎神社附近	2	2		1	2	2		2	栖本町	湯舟原	下ノ門	16	11	12	14					
本渡市	町山口										栖本町	河内	菅原神社墓地	1								
本渡市	亀川	来迎寺跡亀中西	6	6	8	3	1	1	2	3	栖本町	古江	古江城跡	1	2	3						
本渡市	本										倉岳町	棚底	大権寺跡	40	70	52	18	59	10	3	16	※
本渡市	佐伊津	高城	1								竜ヶ岳町	大道	大道城跡東	7	6	3	1	2			1	
本渡市	楠浦	墓地	34	38	36	11	10	2	6	8	竜ヶ岳町	大道	大道城跡西		8		3	2	2		2	
本渡市	楠浦	阿弥陀堂	3	10	2						竜ヶ岳町	大道	共同墓地内					2	2	1	1	
新和町	大宮地	薬師堂	4	11	10	15					姫戸町	二間戸	二間戸城跡東	1	1	1	1					
新和町	大宮地	西光寺跡	8	22	13	12	1		1	1	姫戸町	二間戸	二間戸城跡西	6	6	5	5					
新和町	大宮地	長嶋家墓地	10	10	10	10					御所浦町	御所浦	飛竜山	2	4	3	5	1				
河浦町	宮野河内	薬師堂附近	10	16	16	6		3	1	1	御所浦町	御所浦	東岸寺	1	6	1	2					
河浦町	宮野河内	保木	1	1	3	1			1		御所浦町	御所浦	古屋敷		2							
河浦町	新合	意水庵跡					1	1	1	1	御所浦町	御所浦	吉永家					1	1	1	1	
河浦町	一町田	八幡宮					1	1	1	1	有明町	上津浦	上津浦城跡	1	1	1	1					
河浦町	下田	河内浦城山城跡	2	1			3	1			有明町	上津浦	妙楽寺跡	1	1	1	1					
牛深市	久玉	久玉城跡				3		1			有明町	上津浦	タッチョン迫	1	1	1	1					
天草町	大江	御堂内	1	2			1				有明町	楠甫	大円寺跡	5	5	5	5					
苓北町	志岐		17		1						有明町	楠甫	田中家	2	3	3	3					
苓北町	志岐	観音院		1							有明町	楠甫		2	2	2	2					
五和町	御領						1	1		1	有明町	楠甫		1		1	1					
五和町	御領	役場裏丘	1	1		1					有明町	楠甫		4	4	4	4					
五和町	御領			1	1	1					松島町	教良木	小学校裏手	25	28	28	28	13	1	2	13	
五和町	御領		1								松島町	教良木	慈泉寺	8	9	9	9	2	1			
五和町	御領	阿蘇神社附近	1	1			1				松島町	教良木	金性寺	1					1			
五和町	御領	大嶋東墓地	1	11	1	3				1	松島町	内野河内	城跡西（岡部家）	2	3	2	2	1		1	1	
五和町	鬼池		10	7	3	4	2	1		1	松島町	内野河内	城跡東（枕流庵）	1	1	1		1	2			
五和町	二江	御堂内					1			1	大矢野町	上	上村城跡		1							
五和町	下内野	御堂内									大矢野町	中	中村城跡	11	9	7	7					
五和町	井手	旧内野中学									大矢野町	登立										
五和町	上野原																					

〔三〕石塔集中の意味

なぜ、石塔がある一ケ所に集中することが生ずるか。県下遺跡において、石塔が集中している意味を説明できる例として、球磨郡の蓮花寺跡遺跡、荒尾市の浄業寺境内を挙げることができる。

球磨郡多良木町大字黒肥地字蓮花寺の球磨川河畔遺跡は、現在改修されているが、熊本県文化財調査報告書『蓮花寺跡・相良頼景館跡』によれば、五輪塔一〇二基、宝塔一基、笠塔婆一基、板碑二三基が確認されている。本来の遺構は、第三図で示されているように、御堂の囲いの背後、及び両側面の三方を囲む形で石塔群が配置されているのである。御堂背後は基壇の上に配置されており、これら石塔群が最も整備されていることを示すかと見られるが、元来、御堂背後が、最初の石塔造立の地であったと考えられる。この寺は、球磨における相良氏の祖である頼景の館跡と伝えられ、相良頼氏によって建立されたと云われるもので、嘉禎元年（一二三五）の笠塔婆には頼氏の法名「上蓮」の名があり、頼氏存命中に嫡子・頼宗の造立したものとされる。この寺は、以後、上相良氏の菩提寺であったが、同氏滅亡後、一時廃寺となっていたものである。したがって、石塔群は、上相良氏供養のために造立された墓碑・逆修碑と見られ、これらは、まず寺の背後に配置されたのであった。

荒尾市宮内出目に所在する浄業寺にも、荒尾市文化財調査報告書『浄業寺と小代氏　浄業寺調査報告』によれば、境内に五輪塔九一基・笠塔婆二基・宝塔三基・宝篋印塔一基があり、他にも追加発見されている。これら石塔群は、鎌倉時代後半一三世紀末から一六世紀にかけて、かなりの紀年銘を持った墓碑・逆修供養のための石塔群で、



第三図　蓮華寺跡・塔碑群配置図（移転前）＊報告書所収図の再トレース：石工みゆき

小代氏および浄業寺僧侶のものである。

小代氏は、本来、武蔵国の武家であるが、蒙古襲来に際して、九州に所領を持つ武士はその地に移住することを命じられて移ったことで知られる。境内には源氏三代塔と呼ばれる大型五輪塔三基を中心に石塔が配置されて、歴代の菩提を弔う場として整備されている小代氏中世以来の菩提寺である（第四図）。

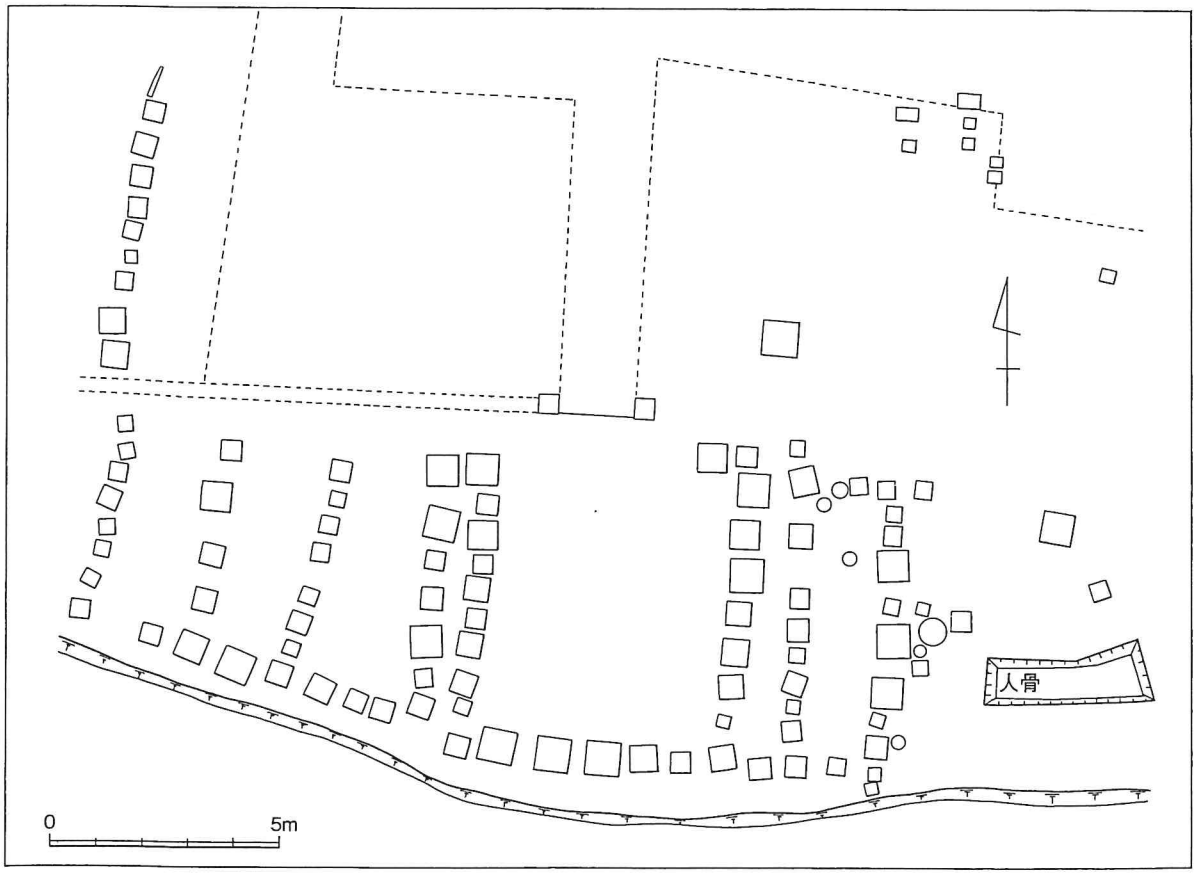
したがって、大権寺の石塔群は、数の上では上相良氏や小代氏に及ばぬまでも、その次に続くような有力な天草郡内の在地領主の菩提寺として存在した可能性を指摘せざるを得ない。

さらに付言するならば、塔碑は石造物である故に、その素材と生産地が限定される上、その重量を念頭におけば、需要供給において無理のない方法が望まれる。即ち、石材移動後の加工より、加工後の移動の方が軽量となり、陸路を少なく、水路を多くする方が運送にも容易である。

ただし、それにしても重量あるものを注文し、運送し、設置し、供養することは、中世当時の地域社会における特定の経済力ある階層においてのみ可能であり、その地における石塔群の存在は、その地を支配している在地領主や一族たちからの需要によったものと推定せざるを得ない。

では、大権寺の壇那である棚底地域の在地領主（支配者）はどこに居住したか。それは大権寺東下の谷を流れる棚底川の左岸にあり、大権寺とは指呼の間にある棚底城主であると見られる。

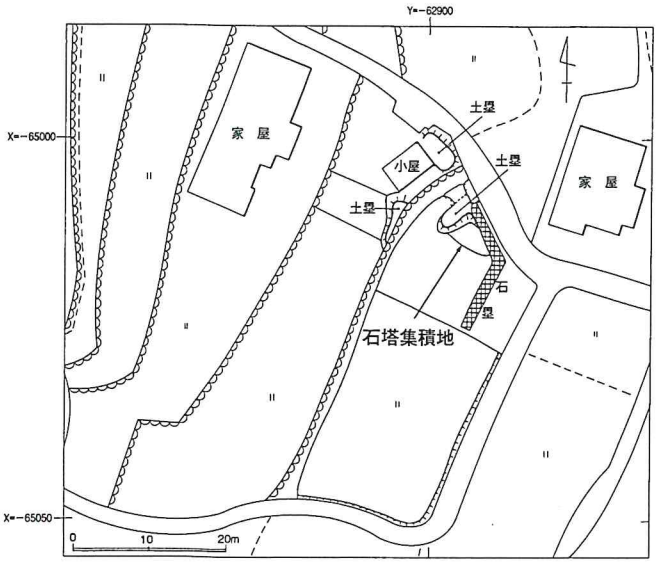
中世城館が、城主の菩提寺（氏寺）とセットになって近隣に存在することは、この時代の社会に広く認められているものであるが、



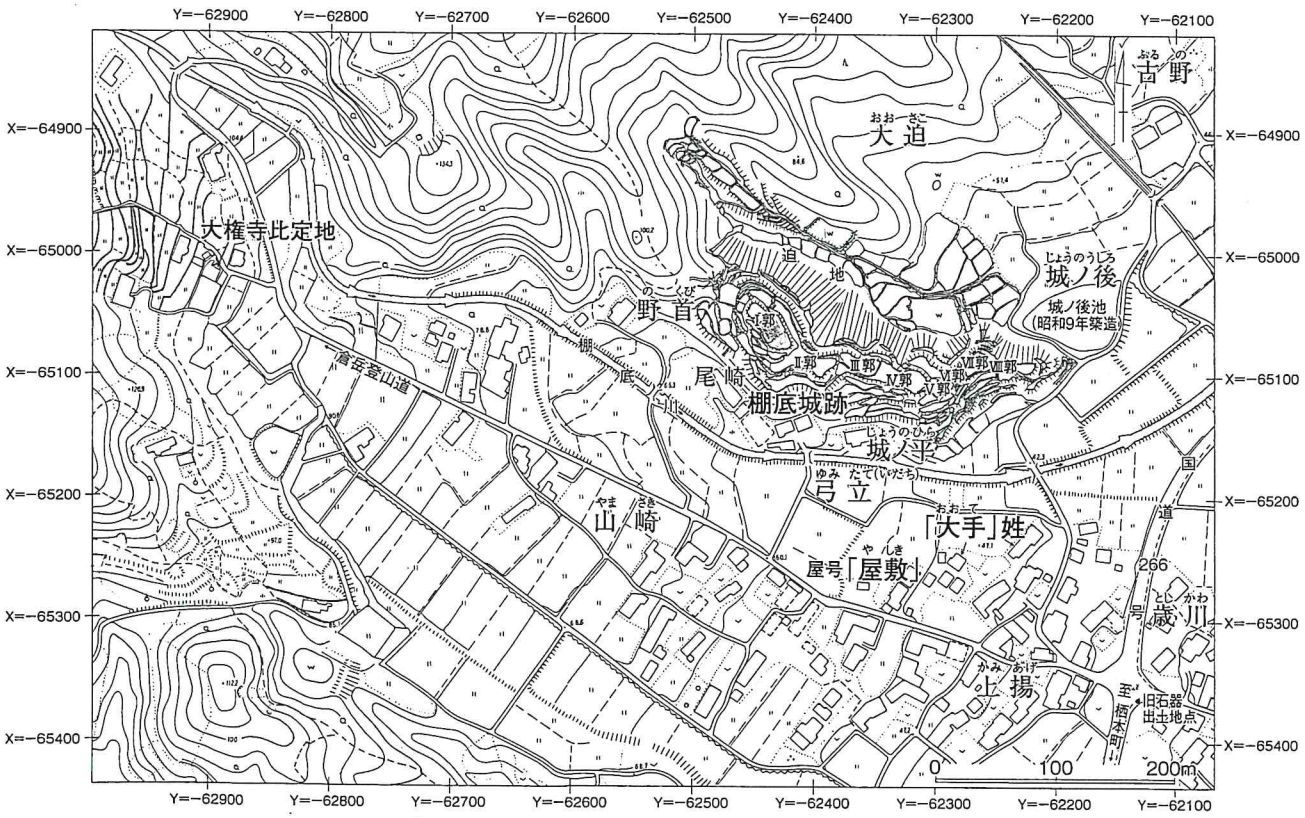
第四図　浄業寺境内石塔群配置図　＊報告書所収図の再トレース：石工みゆき

大権寺遺跡と棚底城は、存在時期において矛盾しないか。

大権寺遺跡の紀年銘は、一四世紀中期から一五世紀前期のものであるが、先年の発掘調査報告書『棚底城跡』（倉岳町文化財調査報告第1集・倉岳町史編纂事業・二〇〇五年）によれば、城跡から出土した陶磁器は、一四世紀から一六世紀にかけてのものである。中世城郭が数多く出現するのも、南北朝内乱期の一四世紀以降のものであることから見て、大権寺と棚底城主は同時代に存在し、その地理的関係と遺物の存在から、棚底城主と大権寺の石塔群の結び付きを否定できる根拠は考えられない。大権寺の宗派を特定することはできないが、城主一族の菩提寺として存在していたことは、確かであろう。



第五図　大権寺比定地周辺図



第六図　棚底城跡と大権寺比定地周辺地形図

二　棚底城主とその周辺

〔一〕内乱末期の天草（二見陣崩れ）

応安四年（一三七一）、九州北朝方勢力回復のため九州探題に派遣された今川了俊は、それまで九州の中枢を抑えていた菊池氏の擁する征西将軍府と合戦を続けていたが、三年に及ぶ筑後高良陣の対戦で、応安七年（文中三年・一三七四）に菊池勢が撤退したことにより、九州における政治情勢は大きく変化し、北朝方優位は決定的となった。

同年一〇月、了俊は、菊池氏の本拠地肥後国に侵入し、翌八年の菊池本城を臨んだ水島陣では、九州における内乱の終結も目前に迫ったと見られたが、情勢は一変した。

一気に形勢の決着を着けようと参陣させた薩摩の島津伊久を介して誘い、ようやく参陣した筑前の小弐冬資を、了俊は招宴に事によせて殺害したのであった。小弐氏と九州探題は、内乱初期から対立・抗争があり、勝利を目前に、この際、早目にその火種を消してしまうための強行策は裏目に出た。その結果、面目を失った島津伊久が怒って水島陣を引き払い、陣中の混乱に乗じた菊池勢の攻撃で、国外までの撤退を余儀なくされるとともに、以後の内乱期を通じて、九州南部の有力武家島津氏と探題方との対立を生じたのであった。

その後、了俊は、永和三年（一三七七）の肥前蜷打合戦の勝利で退勢を立て直し、再び、肥後国に侵入し、翌、永和四年（一三七八）には肥後国中央部の詫磨原合戦が行われ、次いで永和五年（一三七九）八月から四ケ年にわたり、板井原台地を本陣とし、菊池川を境に菊池諸城と向い合い対戦した。

一方、了俊は、肥後北部の菊池本城を攻めるとともに、薩摩・大隅・日向の南九州の武家たちに反島津連合勢力（一揆）を組織させて対抗した。その応援として京都より同行した大友庶家吉弘氏綱に、大友氏一族と四国水軍二〇～三〇艘を率いさせて肥前に回航させ、島原の高来勢と天草勢を加えて、薩摩に向かわせることを企てた。当初は菊池城攻めの折ながら、了俊自身が天草あたりまで出向いて三ケ国の武士を集める予定であったが、代って今川義範を送り出すことになった。

この南九州三国の反島津同盟に、天草の武士たちも誘われていたらしい。了俊は、薩摩の入来院氏（渋谷氏）や出水の武士たちに、天草郡の武士たちは今川了俊の支配下にあり、他国（肥後）の武士は誘わないようにと伝えている。

やや時期の遅い年月不明の「某書状」（日向伊東文書）は、舟で高瀬から天草を経て佐敷に至り、八代攻撃の順路を記しているから、肥後北部在陣の今川了俊が薩摩で連絡をつけようとする時、肥後南部の南朝方勢力を避けるならば、宇土・八代を経由せず連絡できる水路として、天草上島・下島間の本渡ノ瀬戸を通って八代海に入ることが便利であり、そのために天草上島南部は拠点として味方に付けておきたい地理的条件にあったといえよう。そして、至徳元年（一三八四）後半から同二年初めにかけての今川了俊の八代征西府攻略作戦も、天草上島南岸を抜きにしては考えられない。

永徳元年（一三八一）六月、菊池本城は落城し、木野・赤星など北朝方に降参した一族もあったが、武朝は征西将軍宮を擁して、肥

後南部で以後一〇年にわたり抗戦した。この時、征西府の根拠地は八代に移っていたから、肥後の宇土・益城北部での南朝方との対戦の進展に苦労していた了俊は、八代の背後、即ち南側から攻めることを企て、それまで薩摩との連絡ルートの経由地としていた天草・芦北を生かし、さらに芦北郡北端の二見に北朝勢を集めた。至徳元年（一三八四）後半から翌二年初めに至る二見陣である。

探題了俊は、輩下の宮内大輔三雄に手勢を分け与えて二見陣の大将として送り出し、反島津同盟の南三国薩摩・大隅・日向の武家たちを二見に呼び寄せた。この時の足掛かりとしても、宇土・八代を避けて、天草上島・下島間を抜けて佐敷に上陸、陸路二見に北上して兵を集めたと見られる。さらに了俊は、九州における内乱の早期終束をねらい、九州探題方とは対立関係にあり、むしろ征西府側と通じていた相良前頼・島津伊久・氏久父子を二見陣に招く工作を八月頃から初めている。島津氏は初めこの誘いに乗る姿勢をみせなかったが、九月に到り軟化し、氏久参陣の意向が伝えられた。

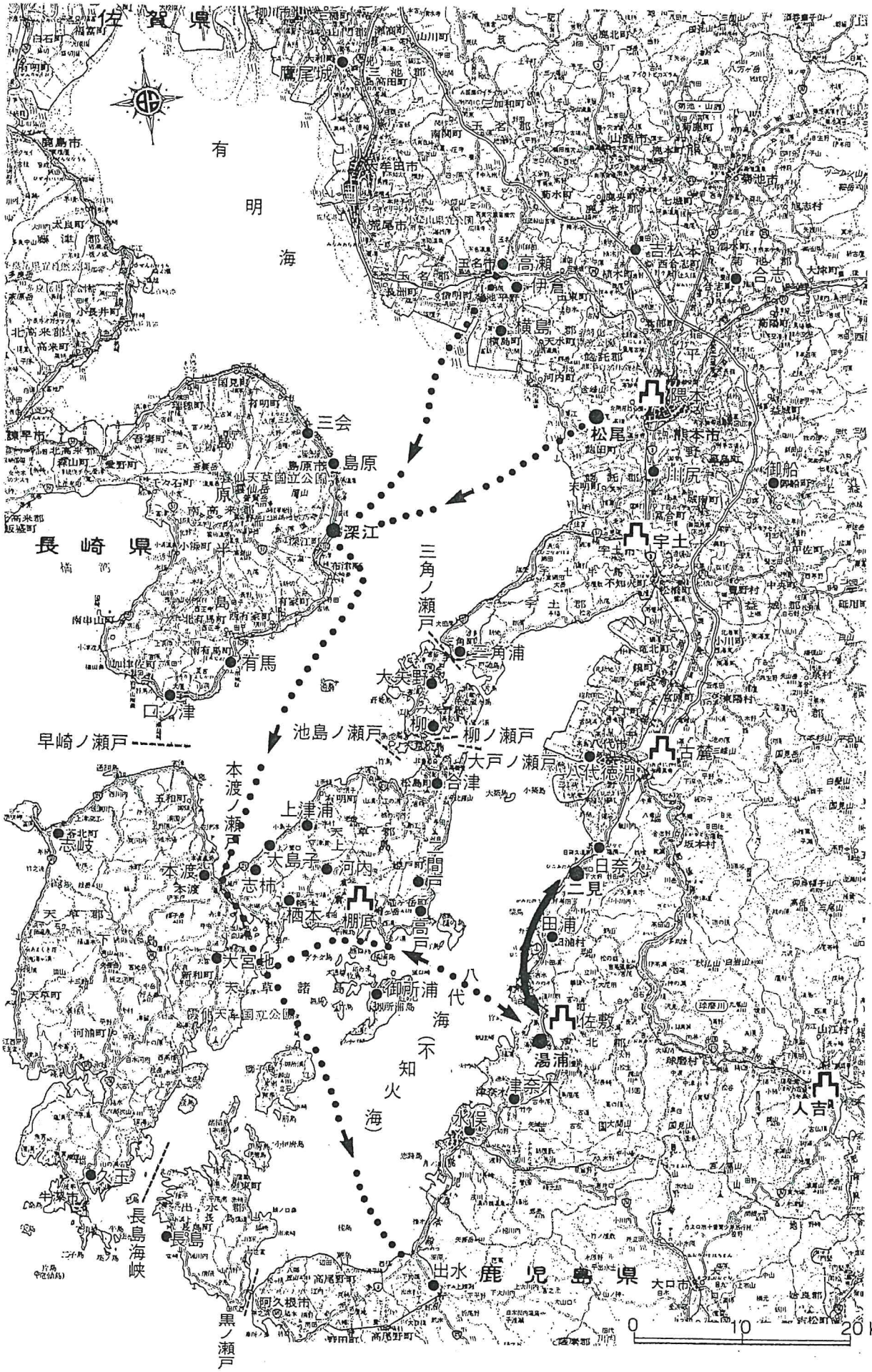
至徳元年（一三八四）閏九月二三日の註記を持つ「犬追物手組覚書」（志岐文書）は、参陣した氏久の歓迎のために、陣の大将宮内大輔が催したものといえよう。その参加者を順に列記すると、

「宮内大輔　島津修理亮(氏久)殿
　伊東薩摩守　伊東伊豆守
　長嶋伊豆守　上津浦上総介
　牛屎采女　佐敷越中守
　渋谷近江守　渋谷豊後介
　検見　喚次
　相良近江守　志岐又次郎　」

となり、島津氏のみ敬称「殿」をつけて歓迎主賓であることを示しているが、参加者の中には、反島津同盟の中心の一人渋谷氏、肥後の佐敷氏、また反島津・征西府方でもあった牛屎氏、相良氏、遠く日向から参陣した伊東氏の外に、天草の武家である志岐氏、上津浦氏、長嶋氏の名が見られ、呉越同舟の感が深いが、天草関係者三人の参加の比重は軽くない。上津浦氏・志岐氏も征西府優勢の時期は、征西府に属していたのであった。

ところが、年の明けた至徳元年（一三八四）早々異変が生じた。相良前頼が二見陣を撤収し、球磨に引き揚げてしまったのである。たちまち陣中に流言・荒説が広がり収束がつかなくなった。八代の征西府側も無為に過ごしていたわけでは無かったのである。後日の二月一七日の「征西将軍宮令旨」（相良家文書）は相良前頼に日向守護職を与えて味方となったことを賞しているが、相良と島津が通じているという陣中の噂は現実のものとなり、島津氏も二見陣から引き揚げてしまった。これによって八代の背後攻撃を企てていた二見陣の圧力は失われ、大将宮内大輔は一月一一日の撤退を決し、一〇日夜に二見から南の佐敷に撤退して体勢を立て直そうとしたことを、反島津方の大隅の武家弥寝氏に伝えているが、弥寝氏も動揺していた。二月一〇日の「征西将軍宮令旨」や「菊池武朝書状」（弥寝文書）は、弥寝氏の征西府参加の意向もあったことを示している。

この二見陣崩れは、佐敷で勢力を立て直す予定であった探題方の思惑を越えていた。佐敷の南側の津奈木・湯浦の武家たちが征西府方となり、佐敷の確保も危うくなった宮内大輔は、さらに天草に退



第七図　至徳元年　二見陣（南北朝末期の肥後情勢）

去しなければならなかった。二月一日の今川了俊書状(深江文書)は、肥前島原の安富氏に対して、佐敷陣に救援のための出兵を一〇日以内に行うように求め、まず天草に立ち寄って佐敷と了俊本陣との状況を確認することを指示している。

ここにも、天草が、佐敷を撤退した探題方の拠点となっていることがうかがわれる。この時、佐敷から海路で最も近く、宮内大輔が率いた今川手勢六〇〇～七〇〇人の受入れ先として、攻守に適し、北朝方として旗幟鮮明な天草の地はどこであるか。

内乱期を通じて、北朝方紀年銘を残す大権寺遺跡を有する棚底城の地は、天草上島南岸における最も有力な候補地であったといえよう。

棚底の地は、内海穏やかな舟溜りとしての良港と、はるか肥後本土まで展望できる郡内最高峰の倉岳(標高六八二・二メートル)に抱かれた地であり、御所浦島を攻防の前線として使用できる点からみても、この時、肥後本土における探題方拠点である芦北の佐敷に最短距離にあるという戦略上の要地である。

さらに付言するならば、この地の支配者棚底城主は、内乱期を通して北朝方であり、菩提寺における石塔群の数量は、天草内でも群を抜いている量であったとすれば、棚底支配を中心としたその経済力は、郡内諸氏の内でも一・二を争う富力の持ち主であり、佐敷撤退の今川勢も安心して後図を計ることのできる環境にあったと推定されるが、具体的な棚底城主に関する文献史料は見出せない。

〔二〕戦国期棚底抗争の背景

①棚底抗争

繰り返すが、大権寺石塔紀年銘の最後の例は、永享一二年(一四四〇)である。一方、志岐文書の明応一〇年(文亀元年・一五〇一)「天草一揆談合覚」は、肥後国守護菊池能運が、天草一揆衆に益城郡小野・豊福の知行を与えるという判物持参の使者が到着した時、丁度参会していた一揆衆を、招集者志岐氏側が記録しておいたもので、天草郡内の諸氏がまとまった政治行動(一揆)を行ったことを示す初例として注目される史料である。各地に割拠して一郡武士を統率するほどの勢力に育つものが現れなかった天草諸氏は、平等な立場で参加し、一つの政治勢力として結集する形で、対外的に有利な政治勢力を形勢していたのであった。

この覚書の中で、一揆衆として参集していた者は、執筆者側の志岐氏の他に「上津浦殿・宮地殿・天草殿・長嶋殿・大矢野氏名代合津方・栖本名代鏡殿・久玉名代広瀬膳左衛門方」とあり、天草一揆衆は八氏によって構成されていたのである。「沙弥洞然長状写」(相良家文書)でも、相良氏が「天草一揆中」に働きかけたとあり、また肥前高来に亡命した菊池能運が、失地を回復して隅府帰還後、かつて反能運方であった名和氏の本拠・八代古麓の城を相良氏と共に攻囲した時、相良氏助勢を命ぜられた一揆衆の八氏は、いずれも当主が出陣したと記している。

したがって、明応・文亀の段階では、天草一揆衆八人の中に棚底の支配者とみられる名は見出せないとすれば、永享から明応の一五世紀後半の間に棚底支配者の家系が絶え、城主の地位も変わったと

推定される。

この点でも、棚底城跡出土の陶磁器について、一五世紀の出土物より一六世紀の出土物の方が質的に低いという小野正敏氏の指摘（棚底城跡歴史フォーラム基調講演）は、支配者が棚底に所在せず、城は本城ではなくなっているということ（天文一三年、一六世紀中期では上津浦氏一族在番の城）とも符合するといえよう。

南北朝内乱期から室町前期の一五世紀前半にかけて、天草上島には有力な政治勢力が棚底にあり、棚底城主であったとみられるが、その後、上島は西北部に天草氏、北東部に大矢野氏の勢力が影響を与えている中で、上島北を本拠とする上津浦氏、西南部を本拠とする栖本氏勢力があり、両氏の対立が天文後半から永禄前半にかけて顕著であった。

天文一三年（一五四四）二月二日、棚底城に詰めていた上津浦親類中が下城したと『八代日記』は記す。在番中の一族が持ち場を放棄したのである。続いて四日には、上津浦本城に詰めていた一族も下城、さらに、六日は一族の有力者と見られる種教が下城した。本城と棚底城に在番中の一族が、その役目を放棄したことは、当主への不満の表明であり、家中内紛の一歩手前の情勢と理解できる。したがって、棚底城に在番衆が置かれていたということは、棚底城の規模から見ても、もともとの棚底城主が没落し、これを入手した上津浦氏が在番衆を送り込んだのである。

ところで、記録には残されていないが、この事件を機に栖本氏が棚底城を入手し、上津浦氏と栖本氏の抗争が始まるのである。

その後、四月には、志岐氏・大矢野氏・天草氏の使者が八代に来航していることは、この上島における情勢の変化について、天草衆それぞれの主張が相良氏の下にもたらされたことを示す。

相良氏は、天文一二年（一五四三）以降、肥後の守護職を得た豊後の大友氏の申次（連絡係兼代理人）として、大友両国の一部である天草の諸氏の要望の伝達と調整役の立場にあったのである。そして、一一月には栖本氏当主が芦北・湯浦を経て八代に来航し、相良氏に官途を所望し、兵部大輔の称号を与えられている。このことは、相良氏からの官職名を受けることで、相良氏の下風に立ち、その保護を求めたのであるが、その保護とは、棚底を得た現況の承認と今後の保障であったといえよう。栖本氏の棚底入手については栖本氏なりの名分があり得た故の相良氏の承認となったのであろうが、他の天草衆にとっては、政治的に大きな現状変更であり、特に当事者である上津浦氏にとっては我慢ならぬ問題であったはずである。

天文一四年（一五四五）以降、上津浦氏による栖本勢力の孤立化、栖本包囲網が進行したようであり、天文一五年（一五四六）、有馬氏との関係が悪化したと栖本氏は伝えている。天文一七年（一五四八）、相良氏も大矢野氏その他に使者を送ると共に、当主晴広自身が船を出して御所浦にて天草氏と面会、次いで、栖本氏と海上で面会し、さらに上島東岸の二間戸まで至り、大矢野氏と面会してその間を調整したと見られるが、解決には至らなかったようである。

天文二〇年（一五五一）、上津浦氏は、大矢野氏、天草氏を誘い、栖本氏を攻めた。有馬氏も間接的に協力し、合戦出兵した上津浦本城の留守を引き受けている。しかし、この合戦は決着に至らず、連合軍は解散したものと思われる。上津浦氏に同調参陣したものの、

天草氏も大矢野氏もそれぞれ内外の懸案を抱えており、栖本対戦も不徹底に終わったのであろう。その後、大矢野氏使者が八代に至り、対大友への要望を含む四ケ条を相良氏に申し入れ、天草氏は長嶋問題の処理に相良氏の協力を望んでいた。さらに大矢野氏は、地勢上、志岐氏や有馬氏が宇土の名和氏と結んで、大矢野島を分割支配することを恐れていた。一方、栖本氏はますます相良氏の保護を求める態度を見せ、天文二四年（一五五五）には、当主の舎弟が八代に来航し、当主の元服を大友氏に取り次いでもらいたいと申し出ている。

弘治二年（一五五六）以降、上津浦氏は、単独で積極的に栖本攻めを繰り返し始め、永禄三年（一五六〇）まで合戦が断続的に行われた。相良氏は弘治二年六月から翌年五月にかけて、領内三郡の所の衆に対し、半月を目安とする栖本への渡海在番を命じている。在番中の相良勢は栖本勢とともに城を守り、城を出て合戦に参加し、弘治二年一〇月二六日には上津浦伏勢のため津奈木衆三人、水俣衆一人が討死している。

これらの合戦は海からの舟による攻撃はほとんどない。もっぱら陸戦の場合が多く、上津浦からの攻撃は一一例、栖本からの攻撃は四例と基本的に上津浦が優勢、積極的で、栖本方は受け身で劣勢と見えるが、この間、棚底城と棚底の支配は栖本方の手にあったといえるようである。

全体的に合戦は小人数の小競り合い、奇襲攻撃のようであり、さほどの数ではなかったと見られる相良在番衆の兵力も、上津浦攻勢をしのぐ上で相応の貢献をしたのではないかと考えられる。しかし、相良領八代・球磨・芦北三郡「所の衆」と呼ばれた相良領在地領主たちの渡海在番の負担は軽いものではなかったはずで、結局、一五回を数え、各衆が在番を果たすと、さらにもう一度ということはなく、相良氏が一応栖本氏への約束を果たした形で在番が絶えると、栖本氏は天草氏と連合して、上津浦氏を上島西側から攻撃・牽制している。

しかし、上津浦氏は有馬氏の本格的な栖本攻撃協力を確保し、永禄三年（一五六〇）九月二三日、上津浦に到着した二〇〇余艘の有馬勢は大戸の瀬戸を経て八代海に入り、二五日に二間戸を攻め、二七日に栖本に着船上陸し、栖本城を包囲した。この栖本攻めに参加したのは、上津浦・有馬・大村・志岐の諸勢であった。この両軍の軍勢の差は大きく、一ケ月の攻防の後、和平となって、一一月一三日、有馬勢は撤兵したが、この時の和平条件として、棚底が一一月一九日に上津浦に引き渡されている。長期に渡る棚底抗争は、島原半島から彼杵まで支配下においていた肥前の有馬勢が加わったことで均衡が破れ、決定的結果をにもたらしたのであった。

その後も、棚底をめぐる上津浦・栖本の対立が無くなったわけではなかったが棚底抗争のヤマ場は終わっていると見られる。

②棚底城主試論

この間の両氏の抗争の中で、違和感を生じさせる部分がある。その一は、なぜ上津浦氏が棚底城を直轄城として、一族を在番衆として送りこんでいるかということ。その二は、なぜ相良氏が栖本氏の棚底領有を認め、相良領三郡の家臣たちを次々と栖本番に渡海派兵させているかということである。

一般に領内の支城は、一族や重臣に与えるか預けるかの形をとり、責任を持たせる支配の方が安定した支配が期待できる。戦国末の強大な兵農分離の領主権の下であれば別であろうが、交替番役による城と支配地の管理体制は、城や地域への愛着や義務感を育てる力は弱い。勤番中は自己の生活と生産の場から離され、無為徒食の生活を強いられる不満も生じ得るであろう。

次いで、栖本氏は上津浦一族の棚底放棄のすきを狙って、棚底と棚底城を入手したことは確かである。この栖本氏側の説明を相良氏は認め、反栖本連合戦略が進行しているにも関わらず、栖本氏の立場を支持しており、上津浦、栖本の合戦がしばしば生じている弘治年間、相良領内から栖本へ援兵まで送り続けた相良氏の政治的立場はどう理解すべきであるか。

一般に政治力学は、利か理によって動くはずである。栖本の利が相良の利となる形は、まず考えられるところであるが、その立場は上津浦を始めとする天草諸氏の利に背くと見らねばならない。大友氏の代理（申次）として天草諸氏をまとめるべき立場の相良氏としては、栖本氏の利に自分の利を重ねては、天草諸氏を抑えることはできない。

このようなことは、戦国時代抗争の極くありふれた情況に過ぎないと突き放してしまえば、それ以上の解釈は不要である。しかし、この状況に何らかの異和感が残るならば、納得できる解釈を用意しなければならないであろう。相良氏が栖本氏の主張する棚底領有権の理（正当性）を認めたのは、天草における政治関係として好ましい形、より本来的在り方であると判断した故であるからに外ならないであろう。

ただ、これを証明する具体的な史料は現在見出されていないとすれば、前述の問題を説明できる仮説を提示することで、今後の展開の糸口とするほかない。

中世社会において、土地所有、土地支配の権利は、相伝の理に勝るものはなかったというべきである。土地継承の基本的正統性は血縁の親疎の由緒と、先代の指名や一族の総意によって保証された。血縁の親疎に差がなかったり、継承の指名や合意が得られない状況では争論や実力行使が生じた。

栖本氏の棚底領有権を相良氏が認めたこと、一方、上津浦氏が棚底城を本城とともに直轄城として保有し、奪われた棚底と執拗に取り戻そうと合戦を続けたことは、この棚底を本来自分が継承・領有すべき土地であるという理に支えられた主張を双方が持っていたと解釈すれば理解できる。

上津浦氏も、栖本氏も、南北朝期以来、本拠地の名字を称している。上津浦氏が本城と直轄城を保有している形は、情況は逆であるが、相良氏の場合と同じである。相良氏は天文初め、八代を本拠地とするようになり、古麓の館の背後に城を構えて本城とするが、旧来の人吉城もそのまま保有している。相良氏にとって旧本城は、一族や家臣に与えることのできない由緒の地であったと見るべきであろうし、相良氏は八代氏と名字を変えたわけでもない。棚底城は、上津浦氏にとっては、直轄城として確保して他には渡したくない由緒の城であり、栖本氏にとっても、相良氏を納得・協力させるだけの由緒の地であったことになる。上津浦氏も栖本氏も、南北朝期以

来の本拠地は既に固まっているが、もともとは棚底城の地に由来する一族であると見れば、棚底の支配に両者が固執した理由の説明となるであろう。ここに大権寺遺跡における最末年の紀年銘が、永享一二年（一四四〇）、一五世紀中期であり、棚底城跡出土遺物陶磁器の内、一五世紀までの物と一六世紀からの物では、質的差があるという報告も情況説明とし生かされるであろう。上津浦氏と栖本氏の棚底抗争は、断絶した宗家の地の継承権の争いが背景として考えられる。

この棚底城主、上津浦氏、栖本氏同族説の可能性について、巷間の系譜では、上津浦氏は大蔵姓天草氏と同族であり、栖本氏は藤原姓の志岐氏と同系であるとされている。

一般に、諸家系図のほとんどは、江戸時代の家格、由緒の必要からの作成にかかるが、中世以来の文書を相伝し、菩提寺が存続しているような諸氏の場合は、古代はともかく、中世に遡る部分の信頼性は高い。中世武家所有文書の多くは、所領の相伝や軍忠等に関わるもので、紀年と当事者名が明らかであるからである。また、菩提寺等の存続は位牌や墓碑等が供養塔によって再確認される機会も多いからである。

近世まで生き残った天草諸氏のうち、中世の文書を多数伝えている志岐氏の場合、戦国末期に戦国大名クラスの肥前有馬氏から養子を迎え、同じく薩摩の島津義弘の娘を妻にしていることから見て、家格への関心は近世以前から強かったようで、菊池系藤原系図に家系を繋いでいる。同氏が相伝する「菊池武朝申状」は近世の写本ではないと見られるが『菊池風土記』や『群書類従所収』の正観寺本と比較する時、志岐氏に結びつく経隆の部分の捜入が認められる。菊池宗家は、能運、政隆、義武と戦国時代に、肥前島原に亡命し、有馬氏の庇護や天草諸氏の協力を受けている。島原と目と鼻の先の志岐氏も同じ藤原姓のゆかりで所縁深く、菊池武朝申状写など入手の機会も生じたと考えられる（ただし、系図資料を入手したからといって、志岐氏が菊池氏とは別な藤原氏であったと云っているわけでもない。同系の藤原氏であったかもしれない。いずれにせよ、家系を補強する資料を入手したであろうと推定するのである）。

これに対し、天草、大矢野、上津浦、栖本の諸氏は、かろうじて肥後細川藩の二〇〇石級の藩士として江戸時代に存続したが、中世に遡る文書は相伝していない（秀吉以降の文書を大矢野氏、天草氏は伝来している）。また、天草諸氏は、いずれも戦国期にキリシタンとなったこともあって、旧領内における菩提寺が失われ、小代氏と浄業寺のような所縁ある寺と塔碑の関係も明らかでない。したがって、江戸時代において由緒と史料を生かした前時代の系譜作りの条件は厳しかったというべきであろう。

彼らの中で、天草氏は大蔵姓であることが、鎌倉期の志岐文書で確認され「種」を名乗りの通字として使用している。大矢野氏、上津浦氏の中世の名乗りにも「種」の例が見られるから同族であろう。

栖本氏については、江戸時代の侍帳に菊池氏と同じ並び鷹羽の家紋を用いていること、中世の文書、記録の中で「種」の名乗りがないので、志岐氏同じ藤原姓であろうとみるのが従来の定説である。ただし、中世史料の上で確認できる天草諸氏の名乗りの例は、極めて限られている。第四表の如く、大蔵姓天草氏系同族が天草に分

第四表　文書にみる天草郡諸氏の名乗り例（法名を除く）

出　典	天　草　郡　諸　氏	年　　代
相良文書	上津浦鎮貞	相良義陽・志岐麟泉と同時代
	栖本親高	大矢野鎮運と同時代
	天草鎮尚	志岐麟泉と同時代
	天草久種	天正９年
	大矢野鎮運	相良義陽と同時代
八代日記	天草尚種	天文16年
	上津浦鎮貞	永禄２年・永禄８年
	上津浦治種	天文元年
	上津浦種教	天文13年
志岐文書	（藤原）光弘	元久２年　建暦２年
	あまくさたねあり（種有）	貞永２年
	藤原家弘	元徳元年　寛喜元年
	宮路種則	元徳元年
	山鹿兵藤太郎高弘	建武４年
	山鹿兵藤太郎高弘	暦応２年　正平８年
	志岐遠治	長享３年
	藤原武遠	明応８年
	（志岐）重遠	永正４年
	（志岐）親弘	天正10年
大矢野文書	大矢野種基	天正17年
	大矢野種方	┐
	上津浦種貞	├天正末・文禄・慶長カ
	栖本武経	┘

れていることは「種」の通字が散見することから推測されるが、戦国当時の政治状勢による偏諱をもらった名乗りも少なくないので、天草鎮尚、大矢野鎮運、上津浦鎮貞と通字と関わらぬ名乗りが生じている。栖本氏については、そのような戦国期の情勢による「親高」という名乗りがあるだけだが、これは「鎮」の大友義鎮の父・義鑑の前名「親敦」にかかる大友歴代の通字によるものと見られる。時代的にも同条件のものである。肥後戦国期には大友のゆかりによる「親」の字を名乗る諸氏の例は、鹿子木親員（寂心）、甲斐親直（宗運）をはじめ、少なくない（栖本氏についてのもう一例は「武経」の名乗りであるが、天正末、文禄、慶長期と見られ、近世の名乗りである）。

したがって、相良文書に見られる戦国後期の偏諱に影響されたと見られる名乗りがあることを念頭におけば、後世作成の系譜によって、上津浦氏、栖本氏同族の可能性を否定してしまえるであろうか。

さらに、同族説の可能性を示唆する史料がないわけではない。永和四年（一三七八）の「甲斐守経房軍忠状」（吉川家文書）と天正末～文禄・慶長期と見られる「大矢野種基覚書写」であるが、いずれも全文を提示しよう。

甲斐守經房軍忠狀　（吉川家文書）

（押紙）
「經房之代」
安藝國大朝庄（山縣郡）地頭一分庶子甲斐守經房申軍忠事、
右、去永和三年八月廿五日、差進肥後國板井原（合志郡）之御陣仁代官彌重孫九郎弘清於、至于目野山（玉名郡）令宿直之處、今年永和四三廿五、當國南郡對隈元敵城仁、藤崎城（飽田郡）一方之城衆天草一族大屋野　河連　須本　久玉等、成合菊池豊前守・同伊与介以下、責彼城藤崎於刻、（今川義範）（今川氏兼）令禮部・霜臺・大內介（義弘）有御發向之間、令供奉、則當城於令警固訖、自其以來迄于今、軍功顯然之上者、賜御證判、爲備龜鏡、粗言上如件、

永和四年八月　日

「承了、（今川貞世・了俊）（花押）」

大矢野種基覺書寫　（大矢野文書）

覺書

一、志岐麟泉

一、天草伊豆守內主水之助種方

一、上津浦上總之助內四郎種貞

一、栖本八郎內六之助武經

一、大矢野民部大輔種基

右者天草五郡之城主也、但五人共親族(マヽ)也、

一、原田六郎太郎種朝

一、沖大源次郎直貞

前にも述べたように、南北朝内乱末期、九州探題今川了俊の軍に属し、肥後隈元の藤崎城に篭る菊池方を攻めた吉川一族の甲斐守経房は、篭城南朝方の敵勢として、「天草一族　大矢野　久玉　河連須本」と記しており、これは同じく提出された「虎熊丸代市原経頼軍忠状」（吉川家文書）でも同様である。この内、「河連」は「河内浦」か「上津浦」か迷うところがあり、上津浦については断定できないが、「須本」が「栖本」であることは動かせないであろう。南北朝内乱期の史料に栖本氏は天草一族と記されているという事実は動かせない。

また、「大矢野種基覚書写」も、志岐、天草、上津浦、栖本、大矢野を挙げ、「右者天草五郡之城主也、但五人共親族也」と記している。この二文書に記されている「天草一族」・「五人共親族」を否定する証拠が見出されない限り、中世における天草諸氏同族説は存続し得る。

鎌倉時代、志岐氏が藤原姓、天草氏が大蔵姓に由来する一族であったことは動かせない。したがって、志岐氏を除く天草諸氏が天草氏と同族である可能性は大きいが、志岐氏を含めて天草諸氏は親族であるとする近世初頭の大矢野種基の理解は、中世の長期間にわたる養子や婚姻関係による同族意識の形成を背景としているということもできよう。このような交流の中にも、土地の支配権の問題が交錯していく余地がある。

上島でもっとも石塔群が多く遺存している棚底の地に、有力な政治勢力が存在していたとみる見解は否定できない。この家系が、一五世紀後半に断絶していると見られることも、まずは認められる。この権利が上津浦、栖本両氏の抗争のこだわりとなっている背景に、上津浦と栖本が棚底継承権者としての由緒をいずれも有していたと理解すれば、上津浦氏、栖本氏が棚底から分流した一族である可能性も生じ得る。

棚底城主と大権寺石塔群の位置付けを説明する試論として提示するものである。

第五表－①　棚底抗争関係年表　－『八代日記』－

年	月　日	記　　事
天文12年 (1543)	9.19 21 12.12	・上津浦氏名代鷹戸氏　八代来航（上津浦千手家督相続） ・相良長唯、上津浦孫太郎に官途授く（右衛門大輔） ・天草氏名代ひわき氏使者　八代来航
天文13年 (1544)	2. 2 4 6 4. 4 8 19 10.18	・上津浦親類　棚底下城 ・上津浦親類　上津浦城下城 ・種教上津浦下城 ・志岐氏使者山河氏　八代来航 ・大矢野氏使者瀬戸氏　八代来航　相良氏面会 ・天草氏使僧、使者　八代来航 ・大矢野氏　白木柱（八代）参詣
天文15年 (1546)	2.17 4.24 9.30 10. 7 15 11. 3 24 12.20	・上津浦氏使者園田氏　来航（上村頼興の子出生祝いに八代来航） ・栖本氏使者　八代来航（有馬氏との不和を伝える） ・栖本氏　八代来航（相良義滋葬儀） ・８月５日有馬氏使者八代来航の件で相良氏使僧有馬に行く （用件は栖本氏の事） ・上津浦氏使者平江氏　八代来航（相良晴広家督相続祝儀） ・大矢野氏使者吉野氏　八代来航（　〃　） ・天草氏使者つちい氏　八代来航（　〃　） ・相良晴広　使僧と面会（天草・和泉・鹿子木・田崎）
天文16年 (1547)	5.14 15 16 20	・天草尚種　佐敷来航 ・晴広、尚種　面会 ・尚種　出航 ・有馬氏使僧　八代来航
天文17年 (1548)	3.11 14 22 24 25 26 11. 3 4	・相良使者桑原　大矢野、上津浦へ ・仝上使者　帰宅 ・天草氏獅子島にて20日まで待機　晴広渡海不能（荒天のため） ・相良晴広　佐敷出航 ・相良晴広　天草尚種に面会 ・晴広　栖本氏と海上で面会 ・晴広　大矢野氏と二間戸で面会 ・晴広　八代に帰港 ・大矢野氏　八代来航 ・大矢野氏　帰港
天文18年 (1549)	正. 9 11.29	・有馬氏使僧　八代来航 ・上津浦氏使者鷹戸氏　八代来航　高塚へ行き相良氏に面会
天文20年 (1551)	7. 8 10. 7 11.17 12.14	・天草、上津浦、大矢野勢　栖本攻撃 ・有馬、上津浦合力のため渡海（栖本攻め留守番） ・天草氏使者　八代来航 ・上津浦氏使者神代美作　八代来航 ・大矢野氏　八代来航　晴広と面会（四件の申し入れ）
天文21年 (1552)	11.12 16 23 24	・大矢野氏使者東氏　八代来航（御曹司下向、祝儀？） ・栖本氏　八代来航（18日に帰宅） ・上津浦氏　八代来航　晴広面会 ・上津浦氏　晴広面会（25日に帰港）
天文22年 (1553)	5. 1 6.29	・相良使僧光勝寺　天草氏の下に出航（長嶋進退の件） ・天草氏使僧　八代来航（長嶋の件返事）

第五表－②　棚底抗争関係年表　－『八代日記』－

年	月　日	記　　事
天文22年	7.24	・天草氏使僧　八代来航（天草氏、長嶋氏に領地を渡す使）
(1553)	25	・相良使僧　水俣の長嶋氏の下に行く（30日帰宅）
天文23年	7.24	・長嶋鎮真　長嶋を捨て和泉（出水）に渡る
(1554)	12.11	・相良使者を大矢野氏に派遣（天草、志岐、上津浦の大矢野攻めの企てを、大矢野氏、二間戸氏使者として相良に同盟を求む　相良承諾）
天文24年	3.29	・栖本氏舎弟使者として八代来航（栖本元服　申次の礼）
(1555)	8.12	・相良晴広葬儀参会者（栖本使僧15人、天草氏使僧、上津浦使僧15人と使者）
	9.26	・天草氏使僧　八代来航（長嶋返還の件）
	11.14	・志岐氏使僧　八代来航（義陽家督相続祝儀カ）
弘治２年	4.29	・天草一揆中に相良氏使僧送る（大友申次の件）５月９日帰航
(1556)	6．1	・上津浦勢　棚底の藤河掃を破る
	6	・上津浦使僧　志岐へ行く
	29	・栖本、上津浦勢　草積峠合戦（上津浦　栖本18人打ち取り？）
		・相良勢　佐敷より栖本に渡海　７月14日帰る
	7．4	・上津浦勢　栖本の浦々を破る
	6	・天草新十郎　八代来航　相良氏と面会
	14	・佐敷衆　栖本から帰宅　田浦衆栖本出兵
	17	・志岐、宇土両氏　大矢野領分割を企てる
	28	・栖本番　二見一瀬衆出兵
	8．1	・天草氏連絡（天草、志岐、上津浦で栖本攻め）
	24	・相良使者桑幡を天草氏に遣す　９月１日帰航
	25	・上津浦勢　栖本馬場を破る
	26	・栖本番出兵　湯浦衆
	10．6	・栖本番出兵　津奈木衆
	7	・天草氏　栖本氏と和平（相良氏仲介）
	26	・栖本番（東、奥野、山井ら）出兵
		・上津浦勢の伏兵で相良勢討死（津奈木３人、水俣１人）
	11．4	・相良氏使僧　上津浦へ（和平交渉）
	7	・上津浦勢　棚底（さかたぬき）破る（生捕53人、打取５人、牛馬30疋）
	12	・栖本番出兵（高橋、稲留、松本、他）
	12．1	・栖本番出兵（宮原、上村、深水、村山、他）
	2	・上津浦氏使僧　八代来航
	11	・栖本氏　八代来航（佐敷→求磨）
	14	・上津浦勢　栖本攻撃
	20	・栖本番出兵（佐牟田、山北、稲留、丸目、上村、他）正月８日帰陣
弘治３年	正．8	・栖本番出兵（園田、蓑田、松本、有瀬、牧、他）
(1557)	16	・在番の相良勢　上津浦に動く（正月28日帰宅）
	26	・栖本番出兵（関衆）
	2．7	・天草氏使者（上津浦攻めの件）
	12	・相良使僧　有馬へ遣す（天草、上津浦、栖本、合戦の件）
	18	・栖本番出兵（高田衆　大牟田衆）
	29	・天草氏より弔問僧（義陽外祖父上村頼興葬儀）
	3.10	・栖本番出兵？（蓑田、一瀬、神瀬）
	29	・栖本番出兵（田浦衆）
	5．2	・相良使僧　天草氏、栖本氏に遣す

第五表－③　棚底抗争関係年表　－『八代日記』－

年	月　日	記　　事
弘治３年	5．4	・上津浦使僧　八代来航
(1557)	22	・相良使僧　天草氏へ遣す（上津浦、栖本和平の件）
	24	・栖本番衆帰宅（二見衆）
	7．9	・上津浦勢　栖本のトマリを破る
	9.19	・上津浦使僧　八代来航
	10.18	・栖本氏　八代来航
	11.18	・天草、栖本勢　上津浦獅子口の伏兵失敗　敗北
	12．3	・上津浦使僧　八代来航
永禄元年	3.16	・上津浦勢　棚底攻め　島子（天草方カ）から下津浦攻め
(1558)	4．2	・天草勢　上津浦攻め
	8．1	・相良使者・使僧　天草氏に遣す
永禄２年	5．6	・相良使者　天草氏に遣す（５月16日帰る）
(1559)	6．3	・天草氏より使者　八代来航
	7.12	・上津浦勢　栖本攻め
	9.13	・天草中務少輔　八代来航　相良氏面会
	10.22	・天草氏領内にて天草、上津浦、志岐の参会（栖本方は遠くから望見）
永禄３年	2.19	・上津浦氏　年頭書信
(1560)	26	・上津浦勢　棚底攻撃（棚底勢３人討死）
	30	・大矢野使僧　八代来航（上津浦の棚底攻撃について）
	5.10	・上津浦氏使僧（義陽への祝儀）
		・志岐氏使僧（水俣の件　天草氏と打ち合せ済と返事）
	18	・志岐氏使僧（水俣の件　返事）
	6.19	・相良使者　天草氏へ派遣（水俣の件）
	7．3	・菱刈氏　天草氏に水俣城と水俣十二屋敷を譲り、天草氏はこれを相良氏に譲る（天草氏、舎弟同道、舟13艘で津奈木に着船）
	22	・相良氏使者　天草氏へ行く（水俣の礼）
	9.11	・有馬氏使僧（相良氏からの挨拶への返礼）
	23	・有馬兵船　上津浦着船200 艘　（栖本攻め）
	25	・有馬勢　兵船二間戸放火
	27	・有馬氏、大村氏、志岐氏、上津浦氏　栖本包囲
	10．4	・相良氏　天草氏へ援兵送る
	10.24	・相良氏使僧　天草氏へ派遣
	11．2	・相良氏　天草氏へ援兵送る（12月６日帰宅）
	13	・有馬勢　栖本から上津浦へ陣を移す
	19	・栖本氏　棚底を上津浦へ渡す
		・有馬勢　上津浦から有馬へ帰る
永禄５年	2.26	・上津浦氏使者　八代来航（年頭挨拶）
(1556)		
永禄６年	5．9	・上津浦氏使僧　八代来航
(1563)	6.26	・上津浦使者鷹戸伊勢守　八代来航（相良氏面会）
	8.16	・相良使者　上津浦氏へ
	9．3	・天草中務少輔　人吉に到る
	13	・長嶋常陸守　天草より八代来航（天草氏より案件）
	10.26	・大矢野氏使者　八代来航（相良氏面会）
	11.27	・大矢野氏使者

報 告 書 抄 録

書　　名	棚底城跡Ⅱ
シリーズ名	倉岳町文化財調査報告　第２集（倉岳町史編纂事業）
編著者名	歳川喜三生
編集機関	倉岳町教育委員会
所　在　地	熊本県天草郡倉岳町棚底1786-4
発行年月日	2006年３月24日

所収遺跡名	棚底城跡
所　在　地	熊本県天草郡倉岳町大字棚底字尾崎
調査期間	2003年４月２日～2006年３月24日
トレンチ調査面積	Ⅱ郭-a：126.5㎡　Ⅱ郭-ｂ：173㎡　Ⅲ郭：121㎡　Ⅳ郭：198㎡　Ⅴ郭：25.5㎡ Ⅵ郭：16㎡　Ⅶ郭：46㎡　Ⅷ郭：80㎡
調査原因	学術調査

遺　跡　名	棚底城跡
主な時代	南北朝時代～戦国時代
主な遺構	Ⅱ～Ⅷ郭トレンチ調査　岩盤を掘り込む多数の柱穴痕 ・堀切　・帯状削平地
主な遺物	Ⅱ～Ⅷ郭 ・青磁（14世紀～16世紀） ・白磁（14世紀～18世紀） ・染付け（15世紀末～19世紀初） ・土師器・壺・甕・擂鉢・火舎・須恵器・羽釜・ひき臼・砥石

倉岳町文化財調査報告　第２集
（倉岳町史編纂事業）

棚底城跡Ⅱ

平成18年３月24日

〔編集発行〕
倉岳町教育委員会
〒861-6402　熊本県天草郡倉岳町棚底1786-4
☎(0969)64-3664

〔印　　刷〕
西本印刷
〒861-2241　熊本県上益城郡益城町宮園564-2
☎(096)286-4151